enterbrain MOOK

「ほらみろ!」ダナ・ホワイト、青木完敗に高笑い!!

MMA & PRO-WRESTLING MAGAZINE

kamipro Special

4.17 Strikeforce
4.25 ASTRA
徹底詳報

2010 JUNE 880yen

大会速報、選手ブログは携帯で!
kamiproMove

メレンデス相手に何もできず……
アメリカに折られた大黒柱!
青木真也

青木敗戦で一番話を聞きたいのは
クラッシャー、おまえだ!
川尻達也

4.17 ストライクフォースを席巻!!
"暴力柔術"シーザー・グレイシー軍団を直撃!
ギルバート・メレンデス
ニック・ディアス

空手幻想ふたたび!!
終わりなき空手最強伝説
特集 菊野克紀



青木、人生の大一番で赤っ恥の超完敗!
日本格闘技界はどこへ行く……!?

それでも生きろ!!

10th ANNIVERSARY thanks! eb!

kamipro Special 2010 JUNE それでも生きろ!!
発売元 株式会社角川グループパブリッシング 〒102-8177 東京都千代田区富士見2-13-3

闘道館 お宝・珍品カタログ 2010年5月号

格闘技・プロレス界の様々なモノ（お宝・珍品・資料など）を、買取・販売という方法で次世代へ残していくことが当館の使命と考えております。
いらなくなったモノをお持ちでしたら、ご一報ください。高価買取いたします。毎日約100点前後の新入荷商品をHPで公開中です。
現在展示販売をしている商品の一部を以下にご紹介します。


INOKIボンバイエ2001でのマイクパフォーマンス時に着ていたレザージャケット ¥294,000


アントニオ猪木直筆サイン&藤原喜明直筆猪木イラスト'83年 年賀状! ¥31,500


金澤弘和 道着 ¥84,000



Sold Out!!
井岡弘樹 世界ストロー級初代王座獲得時の本人使用トランクス


Sold Out!!
力道山 直筆サイン入り厚紙



INOKIボンバイエ2001（猪木軍vsK-1最強軍 12.31）でのエキシビジョンマッチ（最後は紅白仮面に卍固めで勝利）で本人使用コスチューム上下。 ¥525,000


プロレス大賞・特別大衆賞（'76年度）受賞:ジャイアント馬場 ¥315,000


日本プロレス'68バトルロイヤル優勝トロフィー ¥262,500



大仁田厚 本人使用ジャンパー サイン入り ¥63,000


ミル・マスカラス'74年本人使用 ロペス I 世製 ¥840,000


AWA 世界ヘビー級チャンピオンベルト（レプリカ） ¥52,500


獣神サンダーライガーコスチュームフルセット ¥189,000


DVD・VHS ¥525～
雑誌・パンフ・本 ¥210～
フィギュア・ポスター ¥525～
Tシャツ・衣類 ¥735～
その他グッズ盛沢山

テレビ東京系「開運!なんでも鑑定団」に当館長が鑑定士として出演

高価買取・格安販売

マスク,ベルト,Tシャツ,ビデオ,本,雑誌,パンフ,CD,フィギュア他…50,000点!

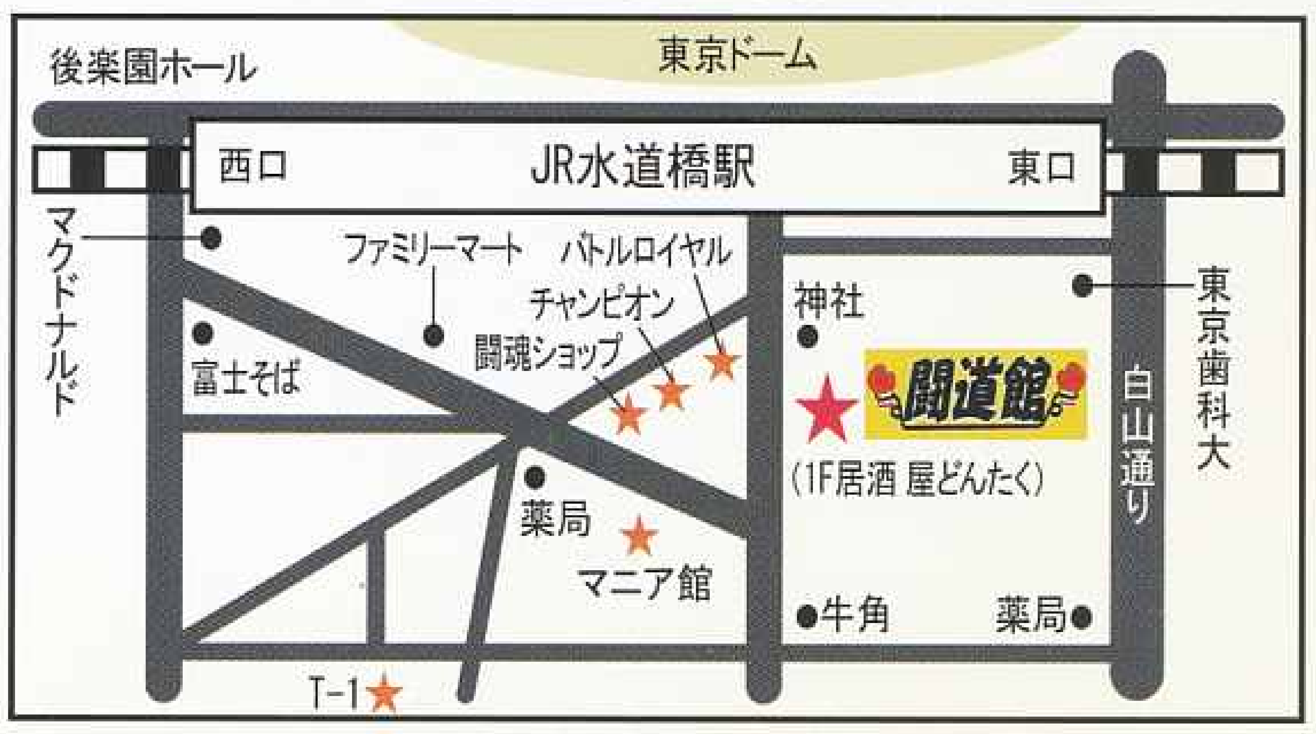
闘道館 検索 詳しくはWebで!

▼携帯からも注文できます!

http://www.toudoukan.com

毎日夜9時、連日約100点新入荷商品を更新しています!!

〒101-0061
東京都千代田区三崎町
2-9-9ナガヤビル5F&6F
（JR水道橋徒歩3分）
03-3512-2080
午前11時～午後9時（年中無休）



格闘技プロレス買取販売!世界最強の品揃え!
闘道館

CONTENTS

よけいな企画はないよね～♪（ASKA調）

SAY YES!

MMA



MMA & PRO-WRESTLING MAGAZINE
kamipro Special

表紙写真／Esthe Lin（STRIKEFORCE）

2010 JUNE

K-1

PRO-WRESTLING

Presents

青木完敗 日本敗戦

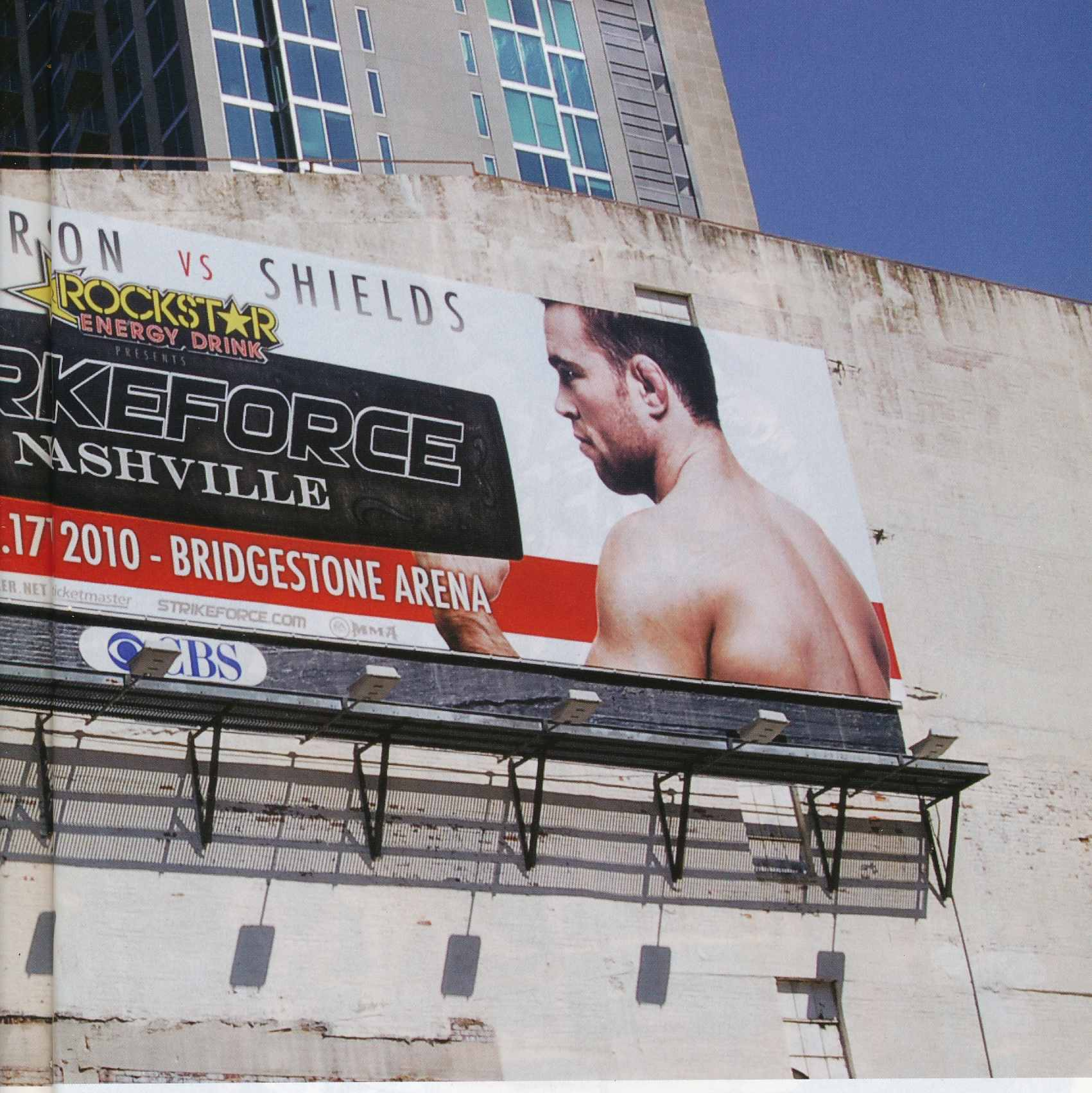
いまこそ馬鹿になれ 恥をかけ

日本格闘技界、元気ですか――っ!?
え〜、唐突ですが、かつて〝燃える闘魂〟アントニオ猪木は、
引退を懸けて小川直也戦に臨み、
敗れ去った橋本真也に以下の詩を詠みました――。

馬鹿になれ とことん馬鹿になれ
恥をかけ とことん恥をかけ
かいてかいて恥かいて 裸になったら見えてくる
本当の自分が見えてくる
本当の自分も笑ってた
それくらい 馬鹿になれ （アントニオ猪木詩集「馬鹿になれ」より）

恥かいて裸になった橋本真也のその後の活躍は皆さんご存知のとおり。
裸になって何が悪い!!（草彅剛調）。
いまこそ！ 我々はこの詩をあの〝真也〟に送りたいと思います。
こんなときだからこそ！ この詩を胸に刻みたいと思います。
そして！ 恥かいて裸になったことで、
日本格闘技界の本当の姿が見えてきましたが、
「どうってことねぇよ！」のアントンスピリットで、シムフフフフ!!
それでは、みんなで北米をブッ倒しにいきますか――!?
〝敗戦記念日〟4月17日／米国テネシー州ナッシュビルのカントリーバーより


TAPOUT
FULL
Tilt
POKER
EA SPORTS
kado beya

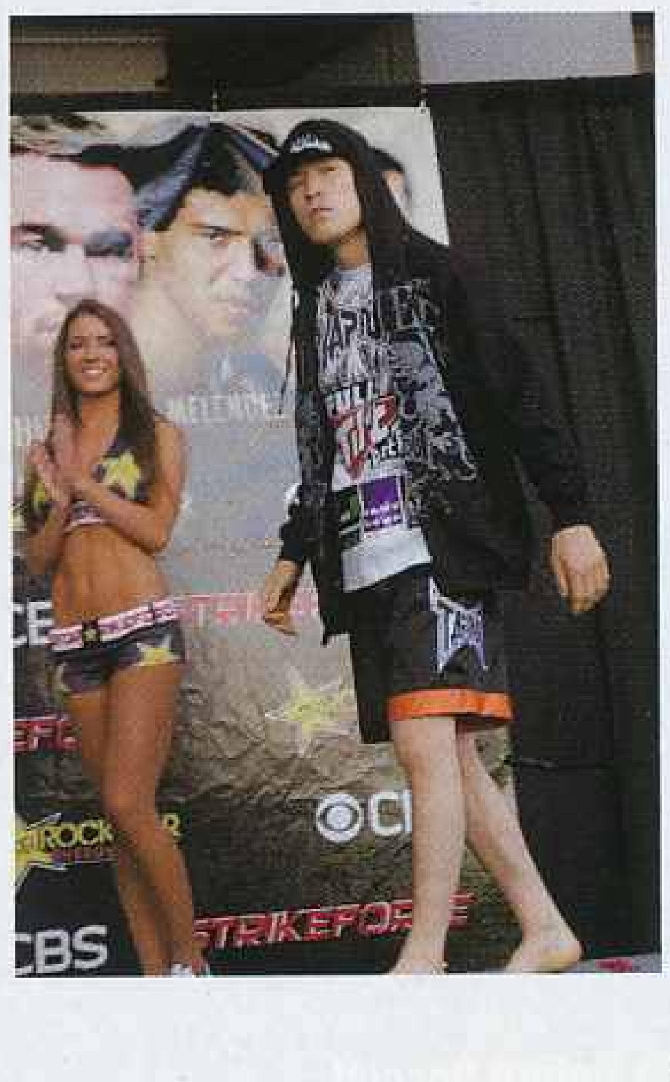


青木の敗戦は日本に何をもたらすのか?

ナッシュビルからの分かれ道

4.17ストライクフォース紀行

文/橋本宗洋





アメリカ、タイはもちろんロシアにアブダビ、リトアニアと、もう覚えてないくらい海外取材を経験しているが、ここまで入れ込んだのは青木真也のストライクフォース参戦が初めてだった。

「僕が負けたらDREAMが終わる」

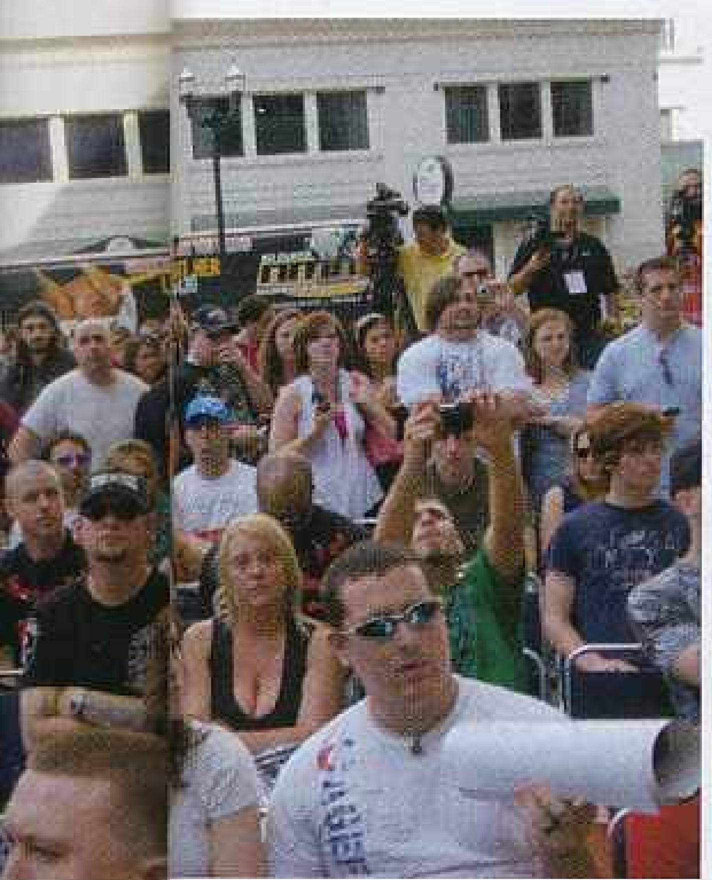
記者会見での青木の言葉で、完全に火がついた。強い決意。深い覚悟。これはとてつもない大一番だ。「取材に行きたい」ではなく「行かなきゃいけない」と思った。

DREAMライト級チャンピオンの青木真也が、ストライクフォースという舞台でギルバート・メレンデスが持つタイトルに挑む。単なる試合じゃない。歴史の分岐点となる決戦だ。

UFCのブレイクとPRIDEの活動休止によって、総合格闘技の〝首都〟はアメリカに移った。日本はMMAビジネスにおける〝敗戦国〟と言わざるをえない状態だ。そういう状況にあって、ほとんど唯一、世界に誇れるのが青木だった。JZカルバンやエディ・アルバレスに勝った実績。ほかの誰にも似ていない独創的なグラウンド・テクニック。青木はサッカーの日本代表以上に〝世界を驚かせる〟ことができる存在だった。そんな青木が、アメリカで闘う。それもUFCに次ぐ団体のタイトルマッチ、全米地上波生中継である。

青木のストライクフォース参戦は、他の選手とはシチュエーションも意味も違った。UFCに出場する選手の場合は、野球でいう〝メジャー移籍〟に近い雰囲気じゃないかという気がする。勝てば嬉しいし、その〝偉業〟を認めないわけはないのだが、そこにあるのは〝世界に挑む日本人〟というロマンであって〝もし負けたら……〟という切実さ

からは遠いのだ。プラスの喜びはあるが、マイナスの恐怖はないと言えば伝わりやすいだろうか。
　しかし、青木の場合は、彼の言葉を借りれば「挑戦じゃなく勝負」なのだ。DREAMの現役チャンピオンが、それも、日本で最も世界的評価を得ている選手が、〝敵地〟でタイトルマッチを行なうのである。
　おそろしくリスクの高い勝負だ。勝てば、日本は再び世界と正面から向き合うことができる。史上最大規模の格闘技ブームとリンクすることができる。だが負ければ、そのショックは計り知れない。
　ビジネス面に続いて実力の面でも〝精神的支柱〟を折られ、〝敗戦〟を喫してしまうことになるのだ。日本は世界と向き合う気概をなくしてしまうんじゃないか。あらゆる意味でアメリカに劣る〝ローカル国〟になってしまうんじゃないか。そんな怖さがあった。
　だからこそ燃えたし、緊張した。『kamipro』の青木インタビューを読んで身が引き締まり、航空券の手配ができただけで胃が痛くなる。出発前日には、「これも必要になるだろう」とウルフルズのベスト盤をiPodにインポートしてみたりもした。ほかに準備することがありそうなもんだが、なぜか欠かせない気がしたんである。どう考えても入れ込みすぎだ。
　出発は4月15日。成田から10時間強のフライトを終えて、まずはシカゴに到着した。が、ここでアクシデント。パスポート・コントロールが異常な大混雑で、列がまったく進まないのである。3時間弱かかって入国した頃には、搭乗する予定だったナッシュビル行きの便はとっくに飛び立っていた。
　次の便のキャンセル待ちにも失敗し、結局この日はシカゴで一泊することに。編集部のジャン斉藤、堀江ガンツとともに三つのホテル巡り、四つめでどうにか寝床を確保する。当然、全員フラフラだ。それでもジャン斉藤が一言、
「今回のアメリカ遠征、負の要素は青木に代わって俺たちが全部引き受けたってことですよ」
　この男も完全に入れ込んでいたのだった。夜更けのスーパーで寂しく晩メシを買いながら、常に頭から青木のことが離れない。
　翌日、早朝の便でやっとナッシュビルに到着し、昼からの『EAスポーツMMA』記者会見へ。16時には、公開形式の計量が始まる。会場には『TAPOUT』をはじめ格闘技ブランドのTシャツを着たファンが続々と詰めかけていた。中にはPRIDEのロゴ入りTシャツを着た〝アメリカの変態〟も。僕のうしろの席には日本人らしき女性がいたので話しかけてみると、青木の試合見たさに初めての一人旅でナッシュビルまで来てしまったのだという。やはりいたか、日本からの〝変態〟も……。
　妙に嬉しくなりながら計量スタートを待っていると、ステージ奥の幕が少しだけ開いた。誰かと思ったら青木だ。笑顔を半分だけ出して、こっちに手を振っていた。ついでに、ちょっとここでは書けないようなこともしてみたりして、どうやらいい感じでリラックスしていたようだ。
　やがてアンダーカードの計量が始まり、トリプルタイトルマッチ第1試合に出場するゲガール・ムサシとキング・モーがライトヘビー級リミットをクリアし、青木の名前がアナウンスされた。これまでの青木の活躍を知るファンからは歓声があがる。同時にブーイングも発生する。やはりここは、まぎれもな









い敵地なのだ。「JAPANESE GO HOME!」。そんな野次もあった。
　ステージに姿を現わした青木は、野次のする方向をジロリ。おそろしく険しい、妖気が漂っているかのような表情だった。しかし体重計に乗ると神妙な表情になり、規定体重をパスすると笑顔も。続いてメレンデスが計量を終え、ステージ上でフェイス・トゥ・フェイスの撮影に。青木は下を向き、視線を合わせようとはしなかった。緊張と落ち着き、怒りとユーモア、それに緻密な計算と狂気。わずか数分のあいだに、青木が持つ様々な側面が垣間見える、密度の濃い時間だった。
　公開計量終了後、選手たちは別室でのルールミーティングへ。ファンもマスコミも徐々に会場をあとにしたが、僕はしつこく残った。青木がどんな雰囲気なのか少しでも長く確かめたいし、直接、声をかけるのはともかく、周囲の人の話は聞いておきたい。
　30分ほど待ったところで、青木たちが室内から出てきた。スタッフと雑談しながら歩く青木は、ときおり笑顔も見せている。それでも青木に話しかけるのは〝試合前の空気感〟に割って入ってしまうような気がして遠慮しておいた。最後尾を歩く笹原EPに、少しだけ話を聞く。
「（ブーイングは）やっぱりアウェーですから。でも、本人はアウェーだってことを充分にわかってますね。とくに入れ込んでるわけでもなく、いつもどおりの青木真也だったと思います。明日も、いつも通りの青木真也の試合を見せてくれるんじゃないですか」
　いつもどおりの青木なら、相当に強い。こりゃあ明日は間違いなく凄い試合になるぞ、この野郎！　……本人とは正反対にますます入れ込み度合いを強くして、僕はホテルに戻った。
　ホテルからは、計量のときに一瞬だけ捕らえた〝青鬼〟の写真をツイッターでアップした。これが予想以上の反響。日本のファンもおもいっきり入れ込んでいるのがわかる。いや、このときだけじゃない。試合が決まってからずっと、僕をフォローしてくれている人たちのほとんどが興奮して、思い詰めて、入れ込んでいた。
「自分のぶんまで応援してきてほしい」
　そんなメッセージをくれた人も一人や二人じゃなかった。ジャンとガンツ、それに僕の『kamipro』取材班は、ツイッターでひんぱんに状況を報告しつつ、UstreamとTwitcasting（映像配信ソフト）で毎晩、座談会を配信した。途中で切れてしまったりとあまり満足のいく出来ではなかったし、そもそも時差の関係で聴きやすい時間帯ではなかったのに、それでも熱心に耳を傾け、コメントしてくれる人たちがいた。数えきれないコメントが、どれだけ取材でヘトヘトになった僕らを鼓舞してくれたかわからない。
　当然、『kamipro』関連アカウントのフォロワー以外にも、数多くの格闘技ファンが青木自身やセコンドの北岡悟、笹原EPらスタッフのアカウントをフォローしている。青木が何をしているか、何を思い、どんな気持ちで試合に臨もうとしているかは、ツイッターを通じてさまざまな角度からほとんどリアルタイムで日本のファンに届いたのだ。
　一方でファンからは激励のメッセージが大量に届けられる。そのコミュニケーションは新聞や雑誌、テレビはもちろん情報サイトの記事やブログよりも速くて濃く、そのぶんだけ〝熱〟が秒

確かに終わった。そう言って極端すぎるなら、何かが決定に変わった

刻みで高まっていくように思えた。

「俺から見て青木は心身最高の状態、期待をきちんと受け止めプレッシャーを力にしようとしてます。俺はそんな青木に最高のサポートします、その為にナッシュビルにやってきました」（北岡）

「何時間後には結果が出てる。俺はやる。覚悟はできてます」（青木）

そんなことつぶやかれて、入れ込むなってほうがどうかしてる。時差も太平洋を隔てた距離も、まったく関係なかったはずだ。大げさでなく、この試合で〝ツイッター格闘技〟とでも呼ぶべきジャンルが確立したんじゃないかと思う。

大会当日。会場へ向かう直前に「ちょっと一服してくる」と言ってホテルの外に出て、ｉＰｏｄで『バカサバイバー』を聴いた。なんだかわからないが、そうしておきたかった。横でタバコ吸ってた観光客に、僕の顔がどんなふうに映ってってたかは知らない。

会場のブリヂストン・アリーナに到着し、自分の記者席を確認し、物販ブースでＴシャツを買い込んでいたら、一息つく暇もなく前倒しでアンダーカードが始まった。メモを取りながら結果をツイートする。第1試合、ＫＯでコーディ・フロイドの勝利。第2試合、バックチョークでダスティン・オーティズの勝利。第3試合、第4試合……。青木の、いや日本格闘技界の命運をかけた第9試合が近づくにつれて、キーボードを叩く手つきが怪しくなってくる。ジェイソン・〝メイヘム〟・ミラーの圧勝を含めたアンダーカードが終わり、テレビ中継が始まり、キング・モーが驚異的な底力でゲガール・ムサシを下した。そして――。

青木vsメレンデスの結果と内容は、この記事を読んでいる方ならご存知だろう。ブーイングを繰り返すナッシュビルの観客の前で、ネット生中継を見つめる何万人という日本の格闘技ファンの前で、青木は敗れた。攻防をほとんど成立させてもらえないままに、すべてのラウンドをメレンデスに奪われた。大会後の記者会見での言葉を引用するまでもなく、完敗だった。

会見場で顔を合わせると、青木は穏やかな口調で僕にこう言った。

「すっきりしてますよ。フルラウンド、投げずに闘って出た結果ですからね」

青木は、劣勢の中で最後まで寝技に引き込もうとし続けた。開き直って打ち合いにいけば見栄えだけはよかったのかもしれないが、それをしなかったのだ。そのことで、自分とメレンデスのあいだにある差を実感できたはずだ。「惜しかった」ではなく「完敗だった」からこそ、試合を終えた青木には自分に足りないものが見えたんだと思う。試合直後の控室で、青木と北岡はさっそく敗因を振り返り、課題を語り合ったそうだ。

自分より間違いなく強いと思える存在と闘えたこと。これからの課題が見えたこと。この敗戦は、青木にとって大きな意味を持つものになったに違いない。付け加えるなら、距離を詰めてくる相手に対するテンカオ（ヒザ蹴り）は的確にヒットしていた。今後、このムエタイスタイルの蹴り技は、ほかに使い手の少ない青木ならではの武器になるような気がする。

試合前の入れ込み度合いから試合後の絶望感、それに青木の成長の可能性。今回の取材は、かつてないほどに強烈な体験だった。そういう取材になったのも、対象が青木だったからだろう。

「（敗北の意味は）青木が一番、受け止めてますよ。この試合は、彼にしかできない挑戦だった」

北岡はそう言った。そのとおりだと思う。

だが、そこで終わらせるわけにはいかない。

日本の総合格闘技界を背負い、「僕が負けたらＤＲＥＡＭが終わる」と言って臨んだ一戦で、日本を代表する最高の実力者が敗れたのだ。日本の格闘技ファンで、無関心でいられる人間がいるはずはなかった。

確かに終わった。そう言って極端すぎるなら、何かが決定的に変わった。2010年4月17日、いや、日本のファンが青木の敗戦を目の当たりにした4月18日を境に、〝元・格闘大国〟は歴史の節目を迎えたのだ。

「かつて、我が国にはＰＲＩＤＥがあった」という〝ＰＲＩＤＥのプライド〟は100パーセント、意味のないものになった。どんな立場から見ても、〝現在の格闘技の首都〟を意識せずにはいられなくなった。ＵＦＣやストライクフォースをはじめとする北米のイベント、ケージで行なわれる闘いは、格闘技ファンの中でもとりわけ〝好きな人〟が見るものではなくなった。もはや誰もが、それ抜きにＭＭＡを考えることができないだろう。

いくらリングがケージより見やすく、4ポイントのヒザ蹴りがスペクタクルな技術でも、「本場じゃ勝てなかったんだよな」という思いは残る。ケージは退屈だと言ったところで、青木が負けたという結果は動かしようがない。仮に青木がＤＲＥＡＭでの再戦で勝ったとしても、「これでホーム＆アウェーで1対1」と思うことができるかどうか、僕には確信がない。今回、ケージの中で青木が勝って初めて、リングでの闘いは〝二大スタンダード〟としての説得力を保てたんじゃないか。

これから、ＤＲＥＡＭが進むべき道は大きく分けて二つだろう。

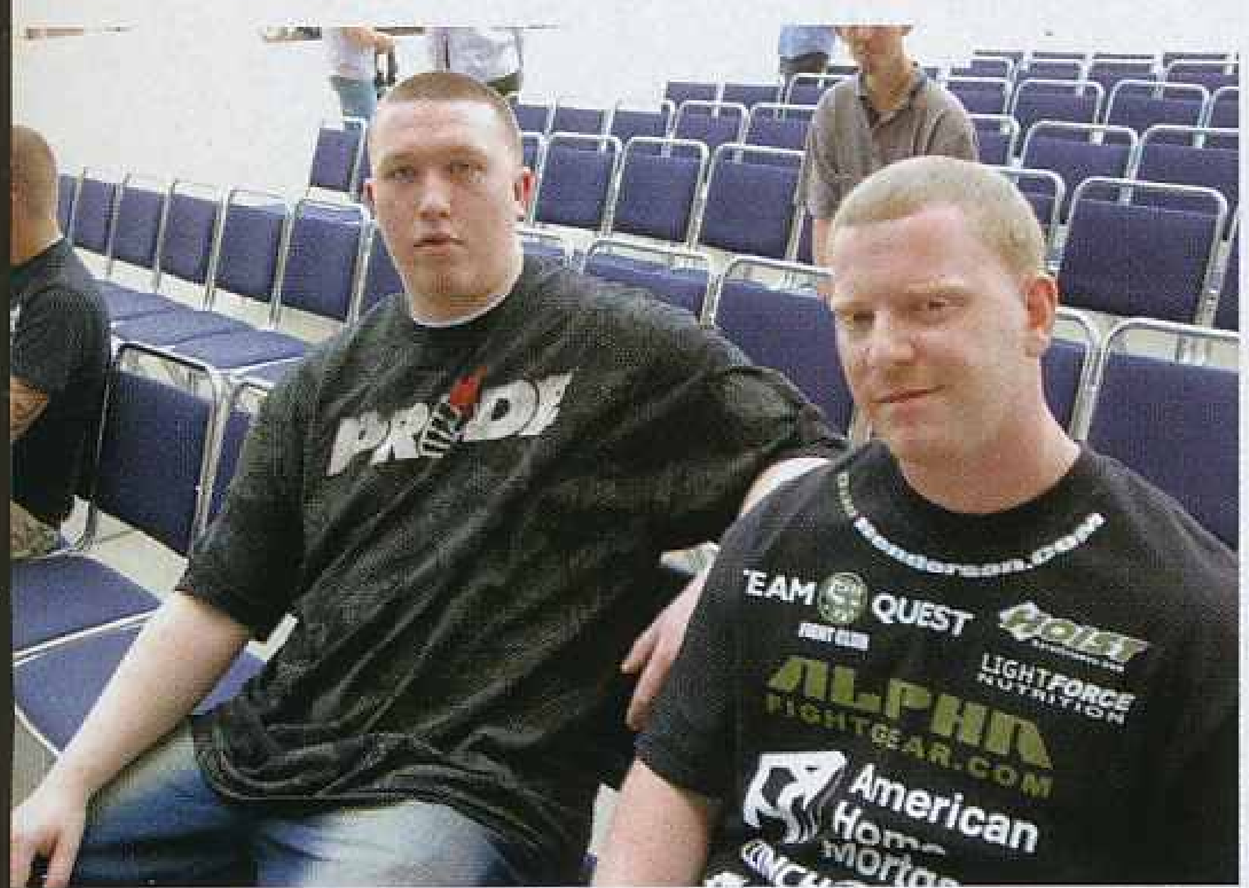
一つは、本格的にケージと北米ルールを導入し、同時にストライクフォースへの選手派遣をいま以上に増やして〝世界基準〟の中で実績を残す（それができる選手の育成を促進する）こと。もう一つは、海外での映像権販売などを強力に推進し、市場での影響力で北米に匹敵する存在になること。

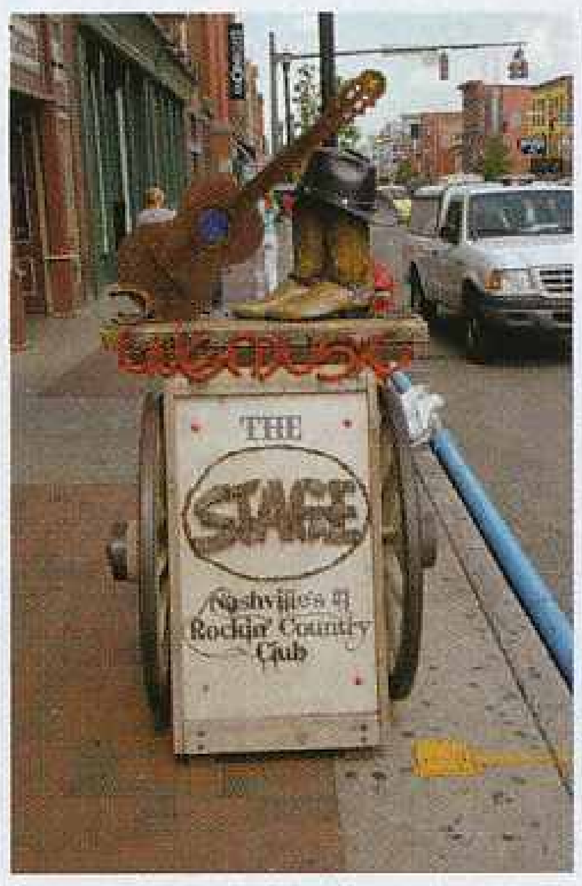
実力か、ビジネスか。いずれかで存在をアピールしない限り、日本は負けっぱなしの〝ローカル国〟だ。僕が現実的だと思い、実際に見てみたいのは前者。試合で勝つこと以上の説得力は、スポーツの世界にはないからだ。

どちらの道へ進むにせよ、これまでどおりというわけにはいかない。ケージ導入はもちろんのこと、海外でのビジネスを推進しても〝日本的文脈〟に則したマッチメイクに影響が出るはずだ。逆に言えば、〝ジャパニーズＭＭＡ〟の真髄であるマッチメイク術を活かすためにも、僕はケージ化を望んでいる。

待っているのは、あくまでも厳しい道のりだ。それでも、前に進むしかない。

我々はもう〝青木vsメレンデス以前〟に戻ることはできないのだ。









もうちょっとだけ
格闘技が
やりたくなった



［10.4.17 STRIKEFORCE -NASHVILLE-］
米国テネシー州ナッシュビル、ブリヂストンアリーナ
［ライト級タイトルマッチ］
○［王者］ギルバート・メレンデス vs 青木真也［挑戦者］×
（5R終了 判定3-0）

青木真也
世紀の敗戦を振り返る

聞き手／ジャン斉藤

――今日はナッシュビル決戦の総括インタビューということで。『ゴング格闘技』は一足先に青木さんのインタビューしてたみたいですが。

青木　クロウトぶったシロウトはタチが悪い！　だって、彼らは格闘技のこと知らなすぎますもん。

――そんなこと言ったらみんな知らないですよ。じゃあ今日はシロウトぶってるシロウトのボクが……。

青木　いや、いいッスよ。シロウトはシロウトぶってもらっていいんですよ。

――そうっすか。じゃあ、お言葉に甘えてシロウトぶろうかな（笑）。

青木　それがクロウトぶって、上から偉そうに言うから、なんかムカつくんですよ。

――よくわかんないですけど、聞き方の問題ですか？

青木　立ち位置の問題ですね。「俺たちが正しくて、おまえ正しくねぇ！」みたいな言い方ですね。

――でも、今回の試合はいろいろ言われてもしょうがないと思うんですよね。まず青木さんが客観的に今回の試合をどう感じているのかが知りたいんですけれど。

青木　単純に言えば、相手が強かった！　で、もっと言えば、ケージのせいでもないし、ボクが初めてアメリカで闘ったせいでもない。

――すると、リングで闘っても結果は変わらない？

青木　仮に日本でやっても、あの結果は変わらない。ボクが弱いから負けた。それを「青木真也の調子が悪かった」とか言われるのがホント腹立ちますね。

――なるほど。それくらい今回に向けて完璧に仕上げてきたんだ、と。

青木　ボクはやれることを全部やってきた。ボクがどんだけこの試合に懸けてきたのか。それを偉そうに、やれ調子が悪い、ケージだのアメリカだのと言うから腹が立つんです。

――メレンデスのプレッシャーって凄かったですか？

青木　うまい。柔らかい。

――柔らかい？

青木　うん。柔らかい。小刻みに先手を取

青木真也 世紀の敗戦を振り返る



青木本人、関係者、セコンドは口を揃えて「いつもどおり」と、日本と変わらぬ姿勢で試合に挑んでいたが……バカサバイバーらしさはつゆほども見えず。メレンデスがそれほど強かったということか。

いままで闘った選手の中で メレンデスのプレッシャーが一番強かった

ってくる。いままでボクってほとんどの選手からテイクダウン取ってますよね。

――青木真也は間合いを取るのがうまいと言われてますね。

青木　で、誰にも倒されてないですよね。タックルを切られてないんですよね。それなのにあれだけやられるんだからメレンデスは相当強いッスよ。もっと言えば、ボクがいままで向かい合った選手の中で、あんだけプレッシャーの強い選手はいなかったし。

――そこは計算外でしたか？

青木　うん。だから、ボクがテイク（ダウン）できなかったことに対してウダウダ言う人に「いままでの試合を観たことあるのか？」って聞きたいですよ。

――メレンデスは予想していたより何枚ぐらい上手でしたか？

青木　いや、予想というか、いつも苦しい試合になるっていうのは、毎回思ってるんですけど。今回はいままで感じたことのない……一番強いプレッシャーがメレンデスにありましたよね。

――それはメレンデスそのものの強さですか？　それとも青木真也攻略が……。

青木　（さえぎって）いや、青木真也攻略の成果じゃないと思います。彼は単純に強いファイターなんです。ジョシュ・トムソンとの試合を観ればわかりますよね。あの試合を、あるクロウトぶったシロウトの記者が「打ち合った」って書いたんですけど、あれはジョシュ・トムソンが打ち合わざるをえなかったんですよ。そのうまさがあるんです。

――なかなか青木さんの前で技術論を語りづらいなぁ（苦笑）。

青木　いや、だから、みんなメレンデスという完成されたファイターの凄さをわかってない。

――というと、青木さんの左ミドルキックがあまり出なかったのも……。

青木　（さえぎって）それだけ蹴らせなかったんです。メレンデスは間合いのコントロールが抜群なんですよね。

――では、1ラウンドの時点で「これはいつもと違うな……」っていう感じでした？

青木　うん。苦しい試合になるなって。

――なるほど。そこで戦術を変えるという手段は取らなかったんですか？

青木　要は打ち合ったりするってことですね。なんで、そこで自分が信じているものを捨てなきゃいけないんですか？　なんで、そこで一気に大博打しなくちゃいけないんですか？　投げ出さずにやることが……うん、逆にボクは一番キツい選択をしました。自分が勝負するところを投げ出さずに最後まで攻め続けました。ボクは勝負をしましたよ。

――自分のスタイルを貫き通したってことですね。

青木　まぁでも、今回の試合をやってみて、思った以上にみんなボクのことわかってねぇやって感じですよね。なんのせいでもない。ボクが弱いだけなのに。

佐伯（繁DEEP代表）（急に割り込んできて）それは違うって。結局、（負けたこと

を）信じたくないの。おまえはそれでよくても、ファンは信じたくないんだって。

青木　ボクの負けを信じないんだったら、このまま格闘技は終わりますよ!!

佐伯　いや、でも、信じたくないんだって。

青木　いや、ボクは違う、違う。そんなのは認めない。だって、このまんま「いや、俺は負けてないよ」って言い張ってたら……。

佐伯　（さえぎって）いやいや、そういうことじゃない。

——青木さんの負けをどう受け止めるかってことですよ。凄く複雑な心境なんですよ、ファンは。

佐伯　そうそうそうそう。

青木　（無視して）「落ち込んでる」とか本当に腹立つ。だから、みんな、結局わかってない、格闘技を。それを一番感じました、ボクは。どんなに高いレベルでやってるのかをわかってくれてない。たとえば「誰々と一緒」とか言われんのが凄くイヤなんですよ。社長（佐伯さんのこと）、「今成（正和）がビアーノに負けたときと一緒だ」って言ったでしょ。

佐伯　うんうん。言った。

青木　あの試合とは違うでしょ。絶対に。

佐伯　そりゃあ技術は違いますよ。でもな、見た目のかたちが一緒なんですよ。

青木　わかる。わかるけど、凄くイヤなんですよ。べつにわかってもらおうと思ってないけどさ……。

——でも、青木さん。プロファイターは誤解も含まれて評論されるところもあるわけだから。

佐伯　そうだよ。おまえのスタンスはそれでいいよ。でも……。

青木　（さえぎって）でも、結局ああだこ

「もし〜だったら」とかないんです。格闘技に「たられば」はないんです



青木の攻撃で有効だったのは、突進してくるメレンデスの顔に突き刺さったテンカオ！　ムエタイ修練に励む青木だが、今後もさらに打撃のスキルアップが求められるだろう。

うだ何言われようと、ボクはもう一回やって勝つしかないんだし。

佐伯　そうそう。それでいいんだよ。それをシロウトに言ってもわからんって言い方しちゃったら、終わっちゃうんだよ、すべてがさぁ（苦笑）。

青木　わかってます。でも、ボクはそういう言い方しかできない。

佐伯　それがおまえの良さだとは思うんだよな。でも、俺にしたって、おまえの負けを複雑に受け止めるのが普通の感情じゃん。

青木　でも、それはもう、信じちゃダメなんです。だって、負けてるのに信じたら……。

佐伯　それはおまえへの愛でしょ。

青木　（聞かずに）違う。それは信じちゃダメなんです、ボクを。

——いや、ファンからすれば、選手って見上げる星のような存在ですから。青木さん、それはプロファイターなんだからしょうがないですよ。期待されるってことに対して、べつに青木さんは何も思わなくていいんですよ。

青木　思ってもないし、とにかくね、ボクのコンディションが悪かったから負けたんじゃないかって言われるのが腹立つんですよ。それはわかるでしょ。それがいちばん腹立つんです。

——でもね、それは青木さんに同情してるんじゃないですよ。何かしら、自分の中で理由を探して……。

青木　ああ、そう思いたいわけですね。でも、それが腹立ってしょうがない。

——どうすればいいんだ（笑）。

青木　いや、ボクは気分が悪くてしょうがないです。

佐伯　でもさ、青木、俺も質問なんだけどさ、ホントにケージの影響は何もなかった？　なあ？

青木　いや、多少はあるかもしれないけど、簡単に言うと、あの負けはそういうレベルの負けじゃない。

——あともう一つ、そこでプロとして、「ケージのせい」とか言い訳めいたものを口にしてしまうのが……。

青木　いや、ボクはプロとしてというか、競技に正面から取り組む人間として、それはカッコ悪いと思う。だから、ボクの周りにも言ってほしくない。

——それはわかります。

青木　それは自分が言ってんのと一緒になるから。

佐伯　……じゃあ俺ヤバいじゃん、言ってるわ!!

——ダハハハハハハ！

佐伯　でも、青木さ、真面目な話、ケージをあと10回ぐらい経験してたら、内容って多少は変わってたんじゃないかな？

青木　いや、「たられば」「もし〜だったら」とかないんです。「たられば」はないんです。だって、試合ってさ、結局、受けた時点で対等じゃないスか。それにボクの周りが「ケージのせいだった」とか言ったら……。メレンデスはボクよりも練習して、強い気持ちで今回の試合に取り組んだわけですから、アイツの仕事を腐すことになるじゃないですか。それが腹立つんですよ。ボクは5分5ラウンドフルに闘って、やり抜いて「ああ、コイツは俺より強かった」って気持ちがあるから。ボクは、ただ単純に負けたから悔しい気持ちはある。でも、いまはもう前を向いてるし。

——青木さんは負けたにせよ、やり遂げたっていう実感あるわけですか？

青木　やり遂げたというか……。

今回の負けって開けてるんです。マッハ戦の負けはボクの中で絶望なんですよ

——精いっぱいの青木真也を出した?

青木　全部出しきった。逃げ出さなかった。

——でも、試合後に泣いたじゃないですか。それはなんの悔しさだったんですか?

青木　自分に対してとか負けたことに対してじゃないし……それはまた違った感情ですね。「ああ、また俺、恩返しできなかったな……」ってことですよね。それで「ああ、申し訳ないな」って涙が出てきたけど。ケージ越しにDREAMのスタッフが座ってたんで。そこに頭を下げたときに、そういう感情が……「あ、俺またできなかったな」っていう。やっと返せるかなって思ってたんですけど、また返せなかったなっていう。それだけは感じましたね。そういう意味の涙でしたね。

——大晦日もそうですけど、その「DREAMのスタッフのため」って、ファンはイマイチわからないと思うんですよね。

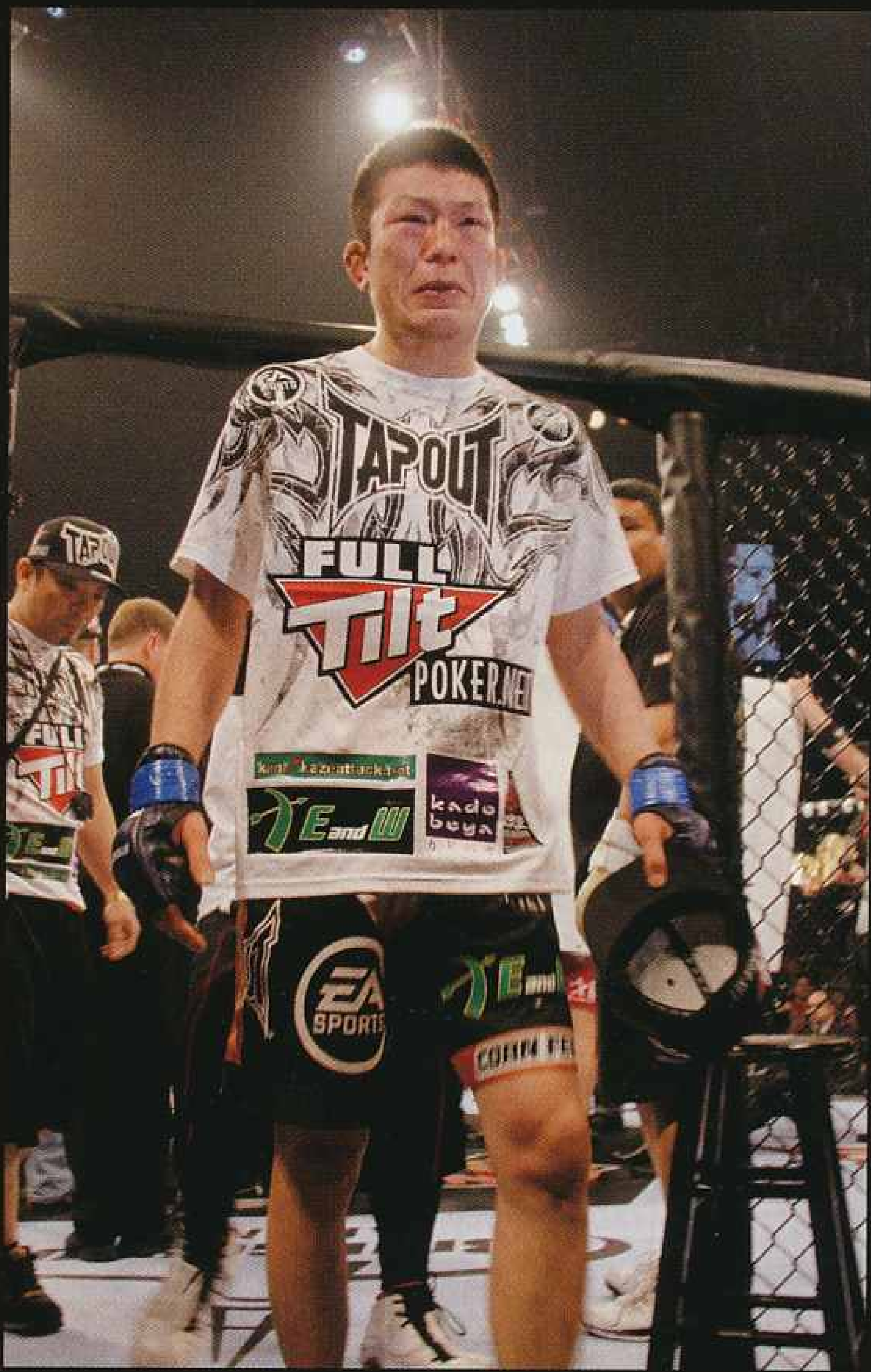
青木　いや、結局自分のためにやってるんですけどね。それが「DREAMのスタッフのため」になる。

——ファンにこんなに期待される試合って、なかなかないわけじゃないですか。そこは選手冥利につきますか?

青木　なんて言うんだろうなぁ。ボクはボクのやりたいことを一生懸命やって、自分のしたいことを自分のためにやって、それに乗っかってくれてる人たちだから、仮に乗っかってくれる人がいなくてもボクは闘い続けるわけで。

——その重さはうれしいことなんですか?

青木　重くねぇし。



——それはうれしいんですか、うれしくないんですか?

青木　力にはなります。あと、結局、くだらねぇこと言うヤツもいっぱいいるけど、くだらねぇこと言うヤツと同じ数か、もしくはそれ以上、応援してくれる人もいるわけだから、うれしいっスよ。だって、ねぇ……。言ってやりたいのは、ボクはべつに折れてねぇし。

——もっと格闘技やりたいですか?

青木　うん。もうちょっとやりたい。もうちょっとだけ、やりたい。正直、ボクの温度のままで格闘技なんてずっとできないだろうし。

——それくらい高温で。青木さん、今回負けたのが初めてじゃないですよね。今回の敗北の質は以前の負けと比べてどうですか?

青木　なんかねぇ、今回の負けって開けてるんですよ。

——開けてる?

青木　うん。マッハ戦の負けってボクの中で絶望なんですよ。

——やりたいことができなかった、自分を出しきってなかったってことですか?

青木　うんうん。もうどうしようもないですよ。

——でも、あのマッハ戦ってアクシデントというか……。

青木　(さえぎって)それは自分に要因があるじゃないですか。自分の自爆じゃないですか。ボクの自爆なんですよ。

——うん。でも、観るほうからすると、あれはアクシデントだから、なんとなく消化しやすかったんですね。

青木　それは観る勝手な人たちでしょ。やるのボクだから(笑)。

——観る人のほうが多いわけじゃないですか。それにプロなんだから。

青木　でも、今回の負けはなんか開けたんです。なんかホントに開けたんです。「あっ!?」って見えたんです。それはボクの凄い力になってくれますよね。

——でも、青木さんの中で「負けたら終わる!」くらいの覚悟はあったわけじゃないですか。

青木　はい。終わりましたね、一回。終わりました。

——でも、また始める?

青木　うん。また始めます。

——『ゴン格』の表紙に「日本最弱」って文字がありましたけど?

青木　ああ、そうなんですか。

——そのコピーに象徴されるように、日本と北米の差ってどのように感じられてますか? 『ゴン格』を読んでないですけど、そういったアプローチはしてますよね、きっと。

青木　なんて言うんだろうな……「日本最弱」?

——それぐらい、青木さんは日本格闘技界の強さの象徴的な存在だったと思うんですよね。

青木　でも、「最弱」って言葉は間違ってますね。それは、当時だったからハマった、天才的なネーミングだったと思うんですよ。だって、あのときは日本のルールで日本が負けたんだもん。でしょ? 日本でやって、日本のルールで負けたんだもん。占領されたんじゃないですか。

——そうやって業界を煽ってんじゃないですか?

青木　そうだとしたらねぇ、彼らのほうが上手かな(笑)。

——煽りたくなるくらい、おもしろかったということですよ。

青木　何がですか?

——いや、戦前から、試合から、試合後の騒ぎから。



青木真也 世紀の敗戦を振り返る

「お疲れさまです!」って言われても「疲れてねぇ、バーカ」って言い続けたい

青木　そうやって言ってもらえるのはうれしいですよ、凄く。

――青木さんから言うと「観るほうが勝手に騒いでるだけ」と思うかもしれないですけど。

青木　いや、それはうれしいですよ。ボクもファンの目は持っているつもりなので、やっぱりボクが一生懸命やったものがそういうかたちで伝わったというか、逆に一生懸命やってなかったら、こんなに伝わんないだろうし。でも、ボクはまだまだ頑張ります。折れてないし。ところで『ｋａｍｉｐｒｏ』のコピーはなんですか？

――青木さんはツンデレだから絶対に文句を言うと思うけど、命令形で「生きろ!!」です（笑）。みんな青木さんには生きてほしいと思ってる。

青木　なんて言うんだろうなぁ……大きなお世話だよって。

――ダハハハハ！　いや、あのね、ホントに大きなお世話を焼きたくなるんですよ。青木さんが「生きる」のはわかるんだけど、「生きろ!!」って言いたくなる負けだった。状況だった。

青木　大きなお世話を言ってもらえるのはうれしいんですけど、ボクは「大きなお世話だよ」って言い続けたいですね。「大きなお世話だ」って言い続けたいですし、「お疲れさまです」って言われても「疲れてねぇ、バーカ」って言い続けたいですね。だから、放っておきながら感情移入してほしいです。

――どんな感情移入ですか（笑）。

青木　いや、違うの。ボクは、なんて言うんだろうな、媚びないから、悪いけど。「関係ねぇよ」って。

――要は「青木真也についてこい」って感じですね。

青木　そうそうそうそう。

――「ついてくるんだったら、ついてきてくれ」ってことですね。

青木　そうですね。「ついてきてください」とは言わないですから。ついてこざるをえない。

――偉そうだな（笑）。まぁ、終わったばっかりで先のことは考えられない？

青木　なんか、先のことというか、とにかく海外に練習に行くことが、まず一つ必要だと思います。ある意味、日本でできる限界はあります。シーザー・グレイシーのところに出稽古したいです。

――ホ、ホントですか⁉

青木　アメリカで練習したい。頭を下げてメレンデスやジェイク・シルーズに教わりたいです。

――おもしろい!!　青木さん、おもしろいこと考えますねぇ！

青木　（怪訝そうな顔をして）え？　おもしろい？　だって強くなりたいんだから、あたりまえの行動でしょ。

――いやあ、意図するところは違うけど、やる側と観る側の歯車がこうやって合致するのはおもしろいですね。青木さん、絶対に行くべきです！

青木　よけいなお世話だ！

【10年4月20日／都内・DEEPジムにて収録】

まだ日本にはこの男がいる!?
クラッシャーが己のプライドのために宣戦布告!

「俺がメレンデスをぶっ倒すしかないでしょ!!」

川尻達也

青木真也がまさかの完敗！　自身とのタイトルマッチを先送りにしてまでアメリカに乗り込んだ男の敗北を、クラッシャー本人はどう受け止めているのか？　その胸中を直撃！

聞き手／鈴木佑　試合写真／乾晋也

川尻　今日はなんの話ですか？

――いやいや、青木さんとメレンデスの試合のことに決まってるじゃないですか！　いま、ファンが一番声を聞きたいのは川尻さんなんですから。

川尻　ああ、そうなんですか。

――あれ、意外と淡々としてますね（汗）。もちろん試合はリアルタイムで？

川尻　はい、ニコニコ動画で観てましたよ。

――ズバリ、どういう心境で観てました？

川尻　どういう心境……まぁ、どっちが勝つのかなって。ハハハ。

――そ、そんな単純な感じで？

川尻　いや、そりゃあ複雑と言ったら複雑ですよ。そもそも去年の年末の段階で、青木くんがアメリカに行くかもしれないって話は聞いてたんですよ。だからホントは僕が大晦日にタイトルマッチで青木くんに勝って、代わりにアメリカに行ってやるって思ってたんで。まぁ、結局は大人の事情っていうか、横ヤリが入って試合は吹っ飛んじゃったわけですけど。

――試合展開はどうでした？

川尻　いやもう、「メレンデスつえーな」って感じですよ。僕もこれから青木くんと闘うかもしれないから、試合内容についてあんまり詳しくは言えないですけど「負けるんだったらこうだろうな」っていうかたちでしたね。ほら、2ラウンドでプレッシャー負けしたのか、金網際でいきなりノーガードで打ち合ったじゃないですか？　普段なら絶対にあんなことするタイプじゃないから、「打つ手がなくなっちゃってんのかな」って思いましたね。

――逆にメレンデスが優れてた点は？

川尻　やっぱり集中力ですよ。5分5ラウンドのなかでワンミスもしないっていうか。それは経験の差も大きいと思いますよ。5分3ラウンドしかやったことない人間と、5分5ラウンドを経験してきた人間とじゃ違いますから。僕もPRIDEに初めて出たとき、1ラウンドで5分超えた瞬間はビックリしましたからね。「えっ？　何、この感覚？」って。

――そんなに違うもんなんですか？

川尻　もちろん練習で対策はしてたんですけど、試合になると全然違いますね。そういえば僕、今回のメレンデス戦の前にほかの会場で青木くんと会ったんですよ。「試合頑張って」って声かけたら、「そんなこと思ってないくせに！」って言われましたけどね（笑）。

――あいかわらずひねくれ者ですね～。青木さんが負けたときの率直な気持ちは？

川尻　……「俺、どうしようかなぁ」って感じですよ。路頭に迷っちゃった（笑）。

――路頭に迷いましたか（笑）。

川尻　もし現地で観てたらイライラして、その場で金網に上がって乱闘になっちゃってたかもしれない、ハハハ。

――宇野さんに対戦を迫ったときみたいに（笑）。メレンデス自体は、試合後のコメントで「カワジリはボクと闘いたいだろう」という発言を残してますが。

川尻　うん、僕も単純に「やりてえな」って思いますよ。

――でも「闘いたいならコッチに来い」とも言ってるんですよね。

川尻　それはそうでしょう。昔は日本がそれを言える立場だったけど、いまはアメリカに逆転されちゃったわけだから。

――青木さんは試合前に「俺が負けたら日本が終わる。〝日本最弱〟となりかねない」っていうぐらい意気込んでましたけど、実際は厳しい現実を突きつけられました。それについてはどう思います？


Santa ana
inspirit
www.pridefc.c

川尻　まぁ、それだけ言ってたんだし、青木くんには「何もできずに帰ってきやがって、ふざけんな！」っていう気持ちもありますよ。だけどその背負い込むことのたいへんさや、青木くんの覚悟も少なからず僕もわかるつもりだし。だからなんとも言えないんですけど……まぁ、とにかく「俺がやりてえな」って気持ちですよ。試合を観終わって最初に思ったのが「俺がメレンデスぶっ倒すしかないだろ！」ってことだったんで。

――前に「メレンデスが勝っても青木さんとタイトルマッチをやりたいか？」って聞いたときに、「そのときにならないとわからない」って言ってましたけど、いまその視線の先はメレンデスだ、と？

川尻　正直な気持ちを言えば、いますぐにでもアメリカに行ってボコボコにしてやりたいです。ただ、ファンや周りから僕と青木くんの試合が観たいって声が上がれば、それはもちろんタイトルマッチに臨むし。だから、どっちでも心の準備はできてるって感じですよ。なんにしろ僕が目指すものは世界最強、ただ一つなんだし。ただ、もしメレンデスに勝つことを考えたら、アメリカで違う相手と金網の試合を一つ挟んで、経験を積んでから闘いたいって気持ちもありますけどね。

――そのへんは慎重なんですね。

川尻　うん。やっぱりもうギャンブルみたいなことをしてる場合じゃないと思うんですよ。勢いやノリだけで行ってやられたら、それこそもう日本も終わりかねないと思うし。やっぱり準備や対策はしっかり立てたいですね。いま、僕も練習内容が凄く充実してるんで。

――ほ～、それは環境に変化が？

川尻　そうそう。でも、『kami-pro』で技術とか練習環境の話をしてもしょうがないでしょ？（笑）。

――失敬だな～。じゃあ『kami-pro』でもわかるように話してください！

川尻　いや、もう今年に入ってからフィジカルトレーニングに関しても僕だけ特別というか、みんなと違う練習メニューなんですよ。専門家の方に身体を科学的に調べてもらって、自分の体質を理解したうえで長所を伸ばして欠点を補うようなメニューを組んで。まだ始めたばっかりですけど、ちょっとずつ手ごたえも感じてるし。

達也



09年8月には石田光洋がメレンデスと暫定世界ライト級タイトルマッチで対戦するも、3RにパウンドでTKO負け。もし川尻がメレンデスと対戦した場合、06年大晦日のリベンジとともに盟友の敵討ちとなる。

――ほかには金網対策とかも？

川尻　そうですね。金網が置いてある秋山（成勲）さんの道場にも出稽古に行ってますし。世界で闘ってる人と一緒に練習することで刺激も受けますしね。……どうせこういう話はカットするんでしょ？

――いやいや、秋山さんと練習してるなんて興味深いですよ。

川尻　また、魔王がどうとか書くんじゃないですか？（笑）。いや、でも凄いですよ、秋山さん。練習方法もアメリカ式で効率がいいっていうか集中できるし、凄くいい環境だなって思います。ほかにも高谷（裕之）さん、この前は長南（亮）さんや光岡（光洋）さんも来てたし。

――vs世界をにらんで、垣根を越えて集まってるわけですね。

川尻　うん、もうホントに日本でどうとか言ってる場合じゃないですよ。僕も世界で闘うことを見据えてずっと練習してきてるし。

――先日、世界1位の呼び声の高いBJペンが負けて、世界2位と言われてた青木さんも負けて、ライト級も混沌としてきたというか。

川尻　そうですね。でも、そのランキングとかよくわかんないですけどね。「誰が決めてんだよ」って。メレンデスはランキングに凄くこだわってたけど、僕としてはベルトのほうが現実的に意味のあるものだと思うし。で、いまは（ゲガール・）ムサシも（マリウス・）ザロムスキーも負けて、DREAMよりもストライクフォースのチャンピオンのほうが強いって風潮になってるから、それを僕が覆してやりたい。

――自分が「日本のライト級最後の砦」みたいな気持ちはあります？

川尻　いや、そういうのはまったくないです（キッパリ）。

――え、ないんですか？

川尻　なんか「青木が負けたから次は俺だ」みたいなのは嫌なんですよ。だってみんなで青木真也に日本の威信を背負わせて「行ってこい！」って送りこんで、青木くんも必死に闘ったのに負けたからって、「青木じゃダメだ、川尻だ」っておかしくないですか？　そんな軽いもんじゃないでしょ。「アイツがダメだからコイツ」みたいな軽いもんだったら、背負う必要も背負わせる必要もないと思うんですよ。だから「青木じゃダメだったから俺が行く」っていうつもりはまったくないです。ただ、自分自身であの結果が悔しかったし、「俺だったらもっとできる」って思ったし。だから、今回は誰かのために闘いたい。それが結果的に日本の格闘技界を盛り上げることにつながれば最高だし。

――メレンデスは川尻さんにとっても凄くストーリー性のある相手ですよね。去年は盟友の石田光洋さんも負けてますし。そのときは川尻さんもセコンドとしてストライクフォースに乗り込みましたけど。

川尻　そうですね。それに、そもそも06年の大晦日に僕が試合したときだって個人的には負けた気がしてないんですよ。「俺のパンチで這いつくばってたじゃん」って気持ちがあるから。メレンデスにそれを思い出させてやりたいですね。

――あのときとは二人とも取り巻く状況も違いますし、闘い方も進化して。

川尻　もっとうまく闘えますよね、お互い

川尻

頭よくなったから（笑）。メレンデスもただ前に出て勢いで潰す感じじゃなく、あの長いリーチをよく活かせるようになりましたね。

――さっきメレンデスの前に試合を挟みたいて言ってましたけど、それなりの相手じゃないとファンも納得しないと思うんですよ。

川尻 もちろん、顔見世みたいな試合じゃ意味ないと思ってますよ。あの、実現するのは難しいですけど、個人的にベストなのは5月のDREAMでジョシュ・トムソンとやることなんですよ。まぁ、絶対無理っていうか、「闘いたいならアメリカへ来い」って言われるのがオチでしょうけど。

――要はナンバー1同士でやる、と。

川尻 そうそう。まぁ、実現しなかったときに自分含めて周りのテンションも下がったらアレなんで、これはあくまで僕の独り言ってことで（笑）。でも、トムソンに勝てば少しは「日本もやるじゃん」って流れになるとは思いますよ。

――専門誌のコピーでも「日本最弱か?」ってありましたけど、気分的にそういう状況はよろしくない、と。

川尻 そうですね、日本人ですからね。日本が弱いとかDREAMが弱いって思われるのは納得いかないですよ。

――あ、そういえば五味さんの試合は観ました?

川尻 テレ東で観ましたよ。（レコーダーに向かって）その試合については『ファイト&ライフ』で語ってるんで、『ファイト&ライフ』を読んでください、『ファイト&ライフ』です!

――何度も連呼しなくてもいいでしょ!（笑）。試合のご感想は?

川尻 まぁ、「ケンフロのジャブっていいなぁ、きれいだなぁ」って感じです。五味くんに対しては……「お疲れさまです」って。

――それだけですか?

川尻 いや、もうとくに言うことないですよ。あれがいまの現実なんだから。というか、もしかしてこれから秋山道場とかで一緒に練習するかもしれないじゃないですか? それは五味くんにかぎらず宇野さんとかも。

――五味さんも宇野さんも秋山さんの道場で練習したことありますからね。どうですか、ウチで五味さんと対談とか?

川尻 いやいや! だって僕と五味くんが仲良かったらファンの夢壊れるでしょ、じつはメル友でしたみたいな（笑）。

――ダハハハ! しかしその五味さん、青木さんと世界の厚い壁に跳ね返されて、けっこうテンションが下がってるファンもいると思うんですよね。そのぶんみんな川尻さんに期待してるというか。

川尻 はい。まぁ、期待されること自体は嫌いじゃないんで。ここにきてようやく僕に「そろそろ天下獲ってもいいんじゃないの?」みたいな風が吹いてるのかもしれないですね（笑）。去年も吹いてたけどそれは止められちゃったから。いや、普段の練習でけっこう「世界にも通用するだろう」って手ごたえは感じてるんですよ。あとはもう金網での経験だと思うんですよね、しっかり対策を立てて。

――ちなみに川尻さんは海外で練習したいって気持ちはあります?

川尻 アメリカは行ってみたいですよ、グレッグ・ジャクソンのところとか興味ありますし。ただ、一人じゃ絶対に行かない!（キッパリ）

――え、なんでですか?

川尻 ……寂しがり屋なんで（ボソッと）。

――あ、そんな理由（笑）。

川尻 でも、やっぱり現地でしか得られないものって技術的にも精神的にもありますからね。いろんなものを身につけていかないと。いや、もうホント必死ですよ。日本のMMAがこういう厳しい現実を突きつけられて、凄く考えるところがあるっていうか。前も言いましたけど、ホントDREAMがなくなったら僕なんか生きていけなくなっちゃいますからね。1敗すれば路頭に迷って食っていけないとも思ってるし、地上波がなくなったらいままでと同じような生活はできないだろうし。もう、これからの一戦一戦が勝負だから必死ですよ。『kamipro』だって生き残るのに必死でしょ?

――首の皮一枚つながりました（笑）。

川尻 ハハハハ。まぁ、あと青木くんに関して言いたいのは、メレンデス戦を抜きにして考えたら、早く僕と決着をつけて「vs世界に向けて一緒に練習しようよ」ってことですね。もう、日本のMMAがこういう状況になってるのに、そこで遠慮とかしてる場合じゃないって思うし。青木くんにかぎらず秋山さんとか宇野さん、世界を意識するんだったら、みんなで練習するのが一番いいと思いますよ。お互いが「負けらんねえ」って気持ちになって凄く質のいい練習ができるだろうし。

――いまこそ「日本最弱」なんて言われないように一丸になるってことですね。

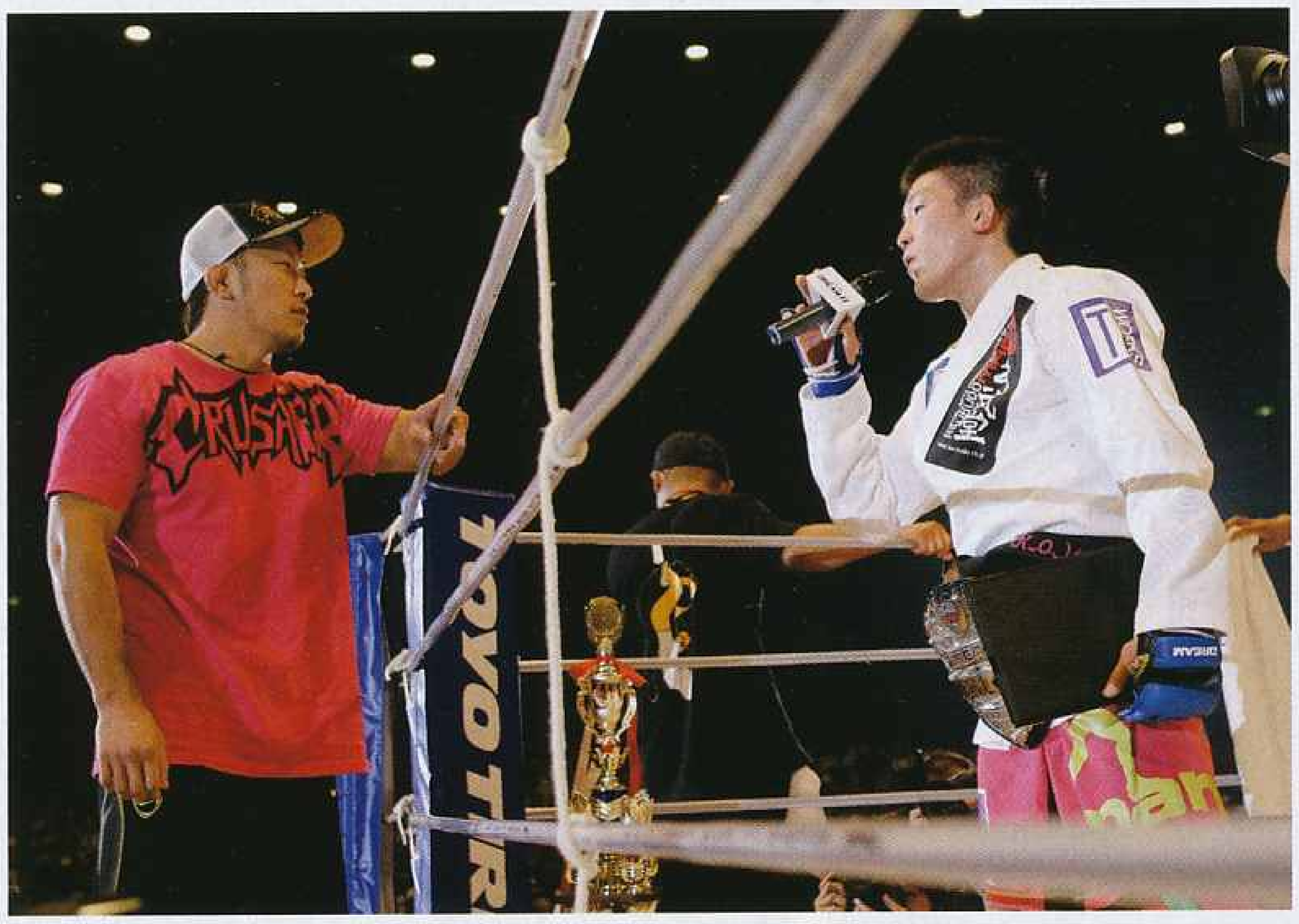
川尻 それって昔の『格闘技通信』のコピーですよね? でも、あれから日本の格闘技も立ち上がってきたんだから、またここから立ち上がればいいんですよ。『kamipro』だって立ち上がったんだし（笑）。

――ウチのことはさておき（笑）、とにかく川尻さんの視野がvsメンデス、そして世界に向いてるのを知って安心しました!

川尻 とにかくこのままDREAMがストライクフォースの二軍みたいな雰囲気になるのだけは僕が食い止めますから!

【10年4月21日/都内・某所にて収録】

青木くんには「早く決着つけてvs世界に向けて一緒に練習しよう」って言いたい



かわじり・たつや■1978年5月8日、茨城県出身。04年修斗ウェルター級王座に君臨。PRIDEを経て08年からはDREAMを主戦場とする。09年7月には魔裟斗のK-1 MAX最終試合の相手を務める。昨年大晦日のSRCとの対抗戦では横田一則に完勝。格闘技以外の趣味を探している31歳。171cm、69.9kg。

——青木真也選手を完封してのストライクフォース世界ライト級王座防衛、おめでとうございます！

メレンデス　サンキュー！　世界2位のシンヤに勝てて、最高の気分だよ！　ただ、最初にメインイベント後に起こったこと（メイヘム・ミラーとメレンデス、ニックディアスの乱闘）についてお詫びさせてほしい。興奮していて、全米放送で恥ずかしい姿を見せてしまった。俺たちみんな、心から反省しているし、全世界のファン、そして放映してくれたCBSが許してくれることを祈っているよ。

——ジェイク・シールズvsダン・ヘンダーソンの試合後に起こった、シーザー・グレイシー軍団とメイヘム・ミラーの大乱闘のことですね。あれはいったい何があったんですか？

メレンデス　あの瞬間は、ダン・ヘンダーソンとのタフな5ラウンドマッチを制したばかりのジェイク・シールズのためにあったものだったんだ。彼が今夜の〝王様〟として、その場に君臨するというね。そこにまったく関係ないヤツ（メイヘム）が邪魔に入ってきたんだよ。それであんなことになってしまった。乱闘のきっかけを作ったメイヘムのことを非難はしないけど、すべて終わったこととなってくれることを祈っている。

——では、あらためて青木戦の感想を聞かせてください。

メレンデス　アオキは想像していたとおりタフなファイターで、5ラウンドの25分間、一時も気を抜けない試合だったよ。ちょうどチェスマッチをしているような気分だったね。（昨年12月に行なった）ジョシュ・トムソンとの試合は、〝WAR〟と表現するにふさわしい、お互いが破壊し合っ



た試合だったけど、シンヤの場合はたった一つの技で試合が終わってしまう危険性がある。だから、そのきっかけを作らせないように、常に注意しなければいけない相手だったんだ。

——では、一度もテイクダウンさせませんでしたけど、予想どおりのゲームプランで動けたということですか？

メレンデス　まさにゲームプランどおりだったよ。この試合で一番大事なことは、俺がシンヤの顔面にパンチを叩き込むということ以上に、とにかくクリンチされないことだったんだ。シンヤが一番得意とする「クリンチのポジションを絶対に取らせない」というところから、すべてのプランはスタートしていたんだよ。

——自分から勝ちにいくというより、「青木に勝たせない」ということに重点を置いた、と。

メレンデス　シンヤが俺をテイクダウンできないということは、少なくとも彼の勝ちはないということだからね。だから、ちょうどチェスマッチのようなスローなペースの試合になったんだよ。ただ、それだけ俺がクリンチとタックルを警戒していても、シンヤがスマートで常に攻めるタイミングを計っていたから本当に気が抜けなかったし、3ラウンドのシングルレッグ（片足タックル）は素晴らしかった。でも、そのポジションからスプロール（タックルを切る）しながらパンチを落として逃げきったとき、俺は勝利を確信したし、逆にシンヤは自分のゲームができないと感じたターニングポイントになったんじゃないかな。彼が〝ハッ〜〟って溜息をつくのを感じたからね。

——そういえば昨日、JZカルバンをインタビューしたとき「明日のアオキvsメレン



青木を完封したストライクフォース王者
“エルニーニョ”が日本上陸宣言!!

Gilbert Melendez
ギルバート・メレンデス

ズバ抜けた武器が一つだけじゃここアメリカで王者にはなれない！

青木真也のテイクダウンを5ラウンド、25分間にわたり完封して、世紀の一戦を制したメレンデス。PRIDE時代の荒い試合ぶりからは、ガラリと変貌した裏にどんな考えがあったのか？青木を下した夜、独占インタビューに答えてもらった。

聞き手／堀江ガンツ　通訳／石井史彦　試合写真／Esther Lin（STRIKEFORCE）、乾晋也

デスはチェスゲームになる」って予想していたんですよ。

メレンデス　彼もアオキと二度も闘っているから、アオキと試合をするということがどういうことか、わかっていたんだろうね。JZほどのファイターでも、一瞬の隙を見せたらバックにくっつかれて、試合の主導権を握られてしまったんだからね。

――青木選手のタックルは成功しませんでしたけど、1ラウンドにはグリップをつかまれてグラウンドに引き込まれましたよね？　それも含めてテイクダウンの強さは感じましたか？

メレンデス　確かにシンヤのグリップする力は強かったよ。でも、俺は普段からニック・ディアス、ジエイク・シールズ、ネイト・ディアスをはじめ、多くの練習パートナーと練習しているし、技術的にも十二分に研究しているんだ。それにハードな練習により強靭な身体も作っているから、あせることはまったくなかったよ。

――スタンドでは、何度か青木選手のヒザ蹴りがボディに入ってましたけど、あれは効いてなかったんですか？

メレンデス　もちろん効いてたよ（笑）。痛いに決まってるだろ？　彼は背が高いからヒザが有効だし、クリンチされた際にもヒザを入れられているからね。あれは効いたけど、そこでひるむわけにいかなかった。じつは一度、左のいいパンチももらっているんだよ。誤解しないでほしいのは、シンヤはスタンドアップだって素晴らしいんだよ。ただ、彼のグラップリングの技術と比べると、強力な武器とは言えないだけでね。

――そういえば、左手をずっと氷で冷やしてますけど、どこかでケガをしたんですか？

メレンデス　ハッキリとは覚えてないけど、おそらく3ラウンドにパンチを出したときに痛めたようなんだ。いまは親指を動かすこともできないけど、試合中は痛みを感じなくてよかったよ。

――試合前から有名MMAサイトで発表されるランキングの話をよくしていましたけど、いまご自分はライト級のトップにランクされたと思いますか？



常に青木にプレッシャーをかけて、金網を背負わせることで自分の距離を作っていたメレンデス。ケージの使い方を含めたゲームプラン、試合の組み立てでも、一日の長があった。

アオキをKOすることより、クリンチを防ぐことのほうが重要だったんだ

Melendez

メレンデス　ちょっと前までは「BJペンとアオキどっちが1位か？」ということが常に話題にされていたけど、その話題を吹っ飛ばしてしまったし、少なくとも俺はトップ5にランクされるべきだと思っているよ。なぜかUFCファイターたちは、勝てば自動的にその選手より上にランクされているけど、俺はシンヤに勝ったから1位だ、2位だとは言いたくない。正直、ランキングに関しては、UFCファイターにちょっと嫉妬してるけどね。たとえばジョシュ・トムソンがトップ10にランクされていないのはどうかと思うし、カワジリ（川尻達也）が俺より上だった理由も明確ではない。とにかく、俺はトップを目指しているし、現時点でも間違いなくトップ5にランクされていると信じているよ。

――では、青木選手がこれまでランキング2位と言われていたのは、過大評価されていたと思いますか？

メレンデス　ノー。彼のランキングがあそこまで上がったのは、この2年間、タフな相手を次々と倒してきた結果だからね。ハードな試合数の多さでは、BJを上回っているとさえ思っている。ただ、そのシンヤに俺が勝てたのは、自分がスタンドアップ、レスリング、スプロール、グラウンドゲーム等、MMAに必要なすべての要素を持ったコンプリートなミックスド・マーシャルアーティストだからなんだ。でも一般的にファイターAがBに、BはCに勝てても、AがCに勝てるという保証はないんだよ。ここがボクシングやレスリングと違っていろんなスタイルが存在するMMAというスポーツの興味深いところなんだ。

――MMAはとくに相性が勝敗に深く関係しますよね。

メレンデス　でも、相性の悪いファイターがいたんじゃ、勝ち続けることはできない。だから俺はオールラウンドなファイターとなるため、MMAで必要となるすべての要素を強化するトレーニングをしてきたし、だからこそシンヤ・アオキに勝つことができたと思っている。シンヤが得意とするポジションを取らせないようにして、自分が優位な体勢ならグラウンドゲームにも付き合った。でも、ほかのファイターはそれができなかったんだ。とにかく、シンヤは世界第2位にランクされていただけあって本当にタフなファイターだし、その実力をちゃんと評価してほしい。

――でも、やはり青木選手のようにいくら寝技が強くても、打撃で主導権を握れないとアメリカでチャンピオンになるのは難しいのでしょうか？

メレンデス　もちろん、それは大きなハンデとなる。打撃が得意でなく、パンチで攻めてこない選手が相手だと、ある程度パンチをもらいながらでもテイクダウンを狙いにいけるからね。何かにズバ抜けた武器があっても、それだけでチャンピオンを狙うのはご指摘どおり難しいと思う。だ

アメリカに来るならカワジリの挑戦を受けるし、アルバレス戦にも興味がある

から、俺はシンヤとの試合でミスを犯さないことだけを考えて闘っていた。エディ・アルバレスとの試合を覚えているだろう？　彼はキックをミスしたためにテイクダウンされてしまい、足を極められてしまった。だからシンヤの場合は、もっとスタンドアップを強化すれば、テイクダウン技術も活きてくるし、得意のグラウンドゲームに持ち込める危険なファイターに変貌するはずだよ。ま、いまはシンヤがそこまで危険なファイターとなる前に〝世界第2位〟に勝てたことで、とてもハッピーな気分だ（笑）。

——青木選手との再戦は考えていますか？

メレンデス　今回、シンヤが俺のホームであるアメリカに来て、ケージの中で闘ってくれたんで、今度は俺が日本のリングで闘う番だと思っている。そのときは、シンヤの持っているDREAMのベルトに挑戦したいね。

——ただ、青木選手自身は「すぐに再戦を申し込む権利は自分にはない」と言っているんですよ。「再戦してもいいと思われる実績を作ってからだ」と。

メレンデス　彼がそう思うのであれば、その意見を尊重するよ。でも俺はストライクフォースの契約選手なので、代表のスコット・コーカーに再戦するように言われたらいつでも受けて立つし、同じようにアオキもボスに言われたとおりの試合を受けなくてはいけないんじゃないかな？

——青木選手以外の日本人だったら、誰の挑戦を受けてもいいですか？

メレンデス　DREAMが送り込んでくる選手で、スコットが「闘え」というなら誰とでも闘うけど、ここアメリカでならカワジリの挑戦を受けてみたいと思う。一度、彼とは日本で試合をしているので、今度やるなら、ここアメリカでやるのがフェアだと思うからね。



06年大晦日の『PRIDE男祭り』で、川尻達也と壮絶なド突き合いを展開し、僅差の判定勝ちを奪ったメレンデス。ストライクフォースのケージでの再戦は実現するか？

——日本のリングで闘いたい選手はいますか？

メレンデス　エディ・アルバレスには興味があるね。そのほかにもJZをはじめ、いい選手が多いよね。ライト級というのは、世界的規模で強豪がひしめき合っているんだ。UFCにもたくさんタフなファイターがいるしね。でも、日本にはいまだタフで素晴らしいMMAが存在していると思う。日本はルールが異なるし、ケージではなくリングになるから、そういった面でもチャレンジのしがいがあるよ。日本は自分のキャリアが本当の意味でスタートした場所だし、俺は修斗、PRIDE武士道、そしてPRIDEで育ったファイターだからね。日本のことがファンも含めて大好きなんだ。

——では、なんとかスコット・コーカーにギルバート・メレンデスのDREAMへの貸し出しを決めてほしいですね（笑）。

メレンデス　スコットはこれまでイシダ（石田光洋）やジョシュ・トムソンとの再戦を、また今回は世界第2位のシンヤとの対戦を実現させてくれたんで、次も素晴らしいマッチメイキングをしてくれるって信じているよ。

——それにしても、あなたを含めて、現在ストライクフォースの3階級王座をシーザー・グレイシーのチームが独占している理由はどこにあると思いますか？

メレンデス　とにかくチーム全員でハードなトレーニングをしているんだ。みんな泣き言も言わず、個人のエゴも捨てているし、また結束力もほかのチームより上回っていると思う。

——それは今夜のメイン終了後を見ればよくわかりますね（笑）。

メレンデス　ハハハハハ！　まあ、ときにはあんなことにもなってしまうけど、みんないつでもチームのために闘う準備ができてるってことだよ。もちろん試合が終わったあとのファイトは控えなきゃダメだけどね（笑）。

——とにかく今後も、メレンデス選手とシーザー・グレイシーチームの活躍に期待してます！


メレンデス　ありがとう。俺自身、チームのみんなには本当に感謝しているんだ。今回の戦術だってスタンドのコーチ、グラウンドのコーチであるシーザー、それにジェイクやニックたちみんなでアオキのビデオを観て、意見を出し合いながら最終的なものにしたんだよ。試合で勝つためにチームの存在はとても大きいんだよ。今度はニックが日本に行くし、そのときには俺も日本に行こうと思っているから、また日本で会おう！

【10年4月17日／米国テネシー州ナッシュビル、ブリヂストンアリーナにて収録】

Gilbert



GILBERT MELENDEZ■1982年4月12日、米国カリフォルニア州出身。修斗、PRIDE武士道で頭角を現わし、08年にストライクフォース世界ライト級王座奪取。一度王座から転落するが、昨年12月にジョシュ・トムソンを破り王座を奪回した。175センチ、70キロ。



White

ダナ・ホワイト

青木真也の完敗に“ジャイアン”が高笑い!
“ダナ・ホワイト公式ランキング”も発表!!

誰が世界2位だって!?
本来ならベスト10圏外だ!

青木真也がアメリカで完敗し、やはり誰の声が聞きたいかといえば、このダナ・ホワイトだ!
MMAサイトでのランキングに常に神経を尖らせるダナに、これを樹に“ダナ・ホワイト公式ランキング”を発表してもらった。
ラスベガスでの独占インタビューをお届けしよう!

聞き手&撮影/堀江ガンツ　通訳/石井史彦　試合写真/Josh Hedges (UFC)

UFC PRESIDENT
Dana

ダナ (2時間遅れで登場して) 長い時間待たせちゃってすまなかった。元気にしてたかい?

――MMA界で最も忙しい男に時間を割いていただいてるので、まったく問題ありませんよ。

ダナ ところで今回は何が目的でラスベガスに来たんだい?

――もちろんダナ・ホワイト様のインタビューのために決まってるじゃないですか。

ダナ 俺のインタビューのためにわざわざ日本から? いい心がけだ (笑)。

――その前にナッシュビルなんていう田舎町にもちょっと寄ってきましたけどね (笑)。

ダナ それはあまりオススメできないスポットだな (笑)。

――〝田舎町〟についてはあとで聞くことにしまして、UFC初の屋外イベントとなったアブダビ大会はいかがでしたか?

ダナ 初めてのミドルイースト圏での開催が、天気にも恵まれ最高のものになったよ。ただ、メインイベントは最悪なものになってしまったけどね。

――アンデウソン・シウバの挑発行為が問題になったデミアン・マイア戦ですね。

ダナ いろんな面で失望させてくれた内容だった。ただ一つ言っておきたいのは、あれは〝アンデウソン・シウバ〟ではないんだ。あの夜は、本来のアンデウソンではまったくなかった。

――なぜ、いつもの〝アンデウソン・シウバ〟ではなかったのだと思いますか?

ダナ なぜだかまったくわからない。試合後、彼と二人で話したけれど、なぜだったのか理由は言わなかったんだ。ただし、もう二度と同じことはしないと約束してくれたけどな。



――これによってアンデウソンvsGSPという夢のチャンピオン対決はなくなりましたか?

ダナ　俺自身はアンデウソンvsGSPにそれほど興味を持っていないんだよ。まずアンデウソンには最強のチャレンジャーであるチェール・ソネンと闘ってもらう。その後のことは、ソネン戦の内容を見てからということになるだろう。それでもファンのみんながアンデウソンvsGSPの対戦を観たいというのであれば、実現させるよ。

――アンデウソンはいまでもパウンド・フォー・パウンドだと思いますか?　それとも今回の件で、ヒョードルが1位になりましたか?(笑)。

ダナ　ヒョードルが1位になるわけがないだろ!(笑)。アンデウソンはいまでもパウンド・フォー・パウンドだよ。あの夜は別人だっただけさ。それ以外にもGSPやジョセ・アルドといったファイターがパウンド・フォー・パウンド候補だ。断じてヒョードルではない!

――そうですか(笑)。同じアブダビで行なわれたBJペンvsフランキー・エドガー戦の判定についてはどう思いますか?

ダナ　公平な判定だったと思うよ。確かに接戦だったから、仮にBJの手が挙げられたとしても、ショックは覚えなかっただろうけどね。あの試合は先日のマチダvsショーグンより僅差の試合になったと自分では思っているんだ。

――では、マチダvsショーグン同様、再戦が組まれそうですか?

ダナ　おそらくそうなるだろう。決着をつける必要があるだろうからね。

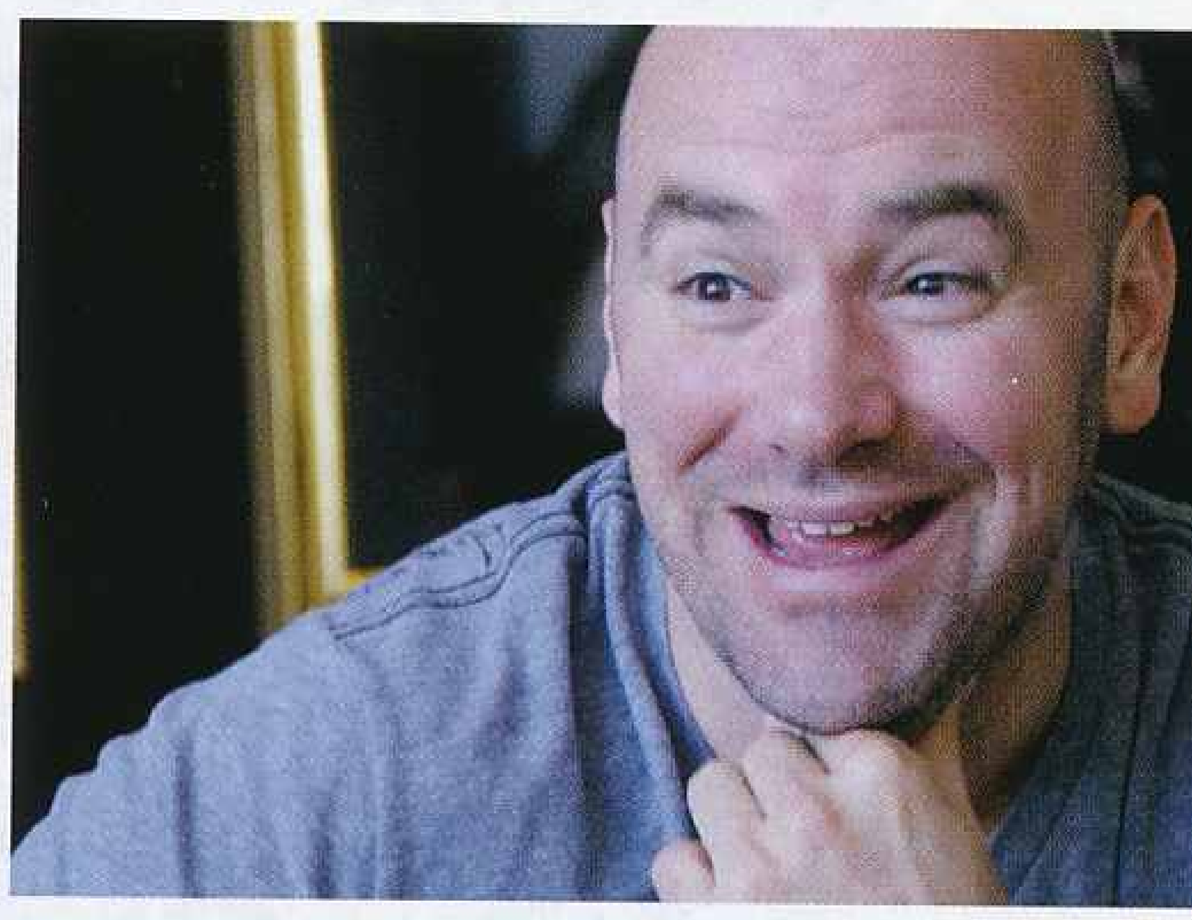
――BJはいまでもライト級ランキング1位だと思いますか?

アオキは本来ランク外だが、特別サービスで10位に入れてやる。残念ながらゴミは圏外だ









Dana White

ダナ　いや、BJはフランキーに負けたんだから、1位はフランキー。BJは2位だ。

――〝世界2位〟といわれた青木真也は何位ですか?

ダナ　おいおい、誰が「世界2位だ」なんて言ってるんだ?　ナッシュビルに行ったなら、キミたちもアオキの姿をその目で見ただろう?　どこが世界2位なんだよ。ちょっと待ってろよ。いまアオキが何位と言われているか、インターネットサイトで見てきてやる!(と言って、部屋の奥にあるパソコンに向かい検索を始める)。

――お手数かけます(笑)。

ダナ　(部屋の奥からデカい声で)ファ○ク!　まだ4位にランクされていやがる。ケニー・フロリアンやショーン・シャークより上だと言うのか?　これだからMMAのウェブサイトはクソだと言うんだ!(ソファに戻る)。

――〝ダナ・ホワイト公式ランキング〟では青木選手は何位にランクされていますか?

ダナ　ベスト10圏外だ!(キッパリ)。彼はここアメリカで実力を証明してないからね。まあ、俺の知らないところで連勝していたらしいから、どうしてもと言うなら10位に入れておいてやってもいい。大サービスだ!

――お気使いありがとうございます(笑)。では、青木vsメレンデス戦の感想を聞かせてもらえますか?

ダナ　1秒たりとも観てないから何もコメントできないな。

――でもストライクフォースのメイン終了後の乱闘については、ずいぶんいろいろと語ってるじゃないですか(笑)。

ダナ　メインのあとの醜いドタバタ劇だけ『YouTube』で見たんだよ(笑)。実際、先週末はメキシコに行ってたんで、観ることはできなかったんだ。

――でも、結果ぐらいはご存知ですよね?　メレンデスが終始主導権を握って判定勝ちしました。この結果は予想してましたか?

ダナ　そんなこと考えたこともないよ。

――では、一人のMMA愛好家として、青木選手の敗因はルールや環境の違いだと思いますか。それともあれが実力だと思いますか?

ダナ　試合は結果がすべてだ。アオキが負けたのなら、それがいまのアオキの実力ということだろう。世界2位の実力が本当にあるなら、リングでもケージでも問題なく試合をコントロールしているはずだからな。

――この敗戦で青木選手を獲得したい意思はなくなりましたか?

ダナ　試合に負けたばかりのアオキを獲得したいかって?　もちろんすぐに契約したいよ!　って言わせたいのかい?(笑)。何度も言ってるけど、彼は素晴らしい才能を持っているよ。でも同時に過大評価されすぎていたんだ。とくにファンボーイたちが集まるウェブサイトでね。アオキがその才能を磨いて、試合に勝つことで証明してくれたら、獲得を検討すると思うよ。

――青木選手が世界に通用するだけの才能を持っていることだけは、認めているわけですね。

ダナ　アオキの才能を疑う余地はこれぽっちもないよ。ただ、その才能を磨き、証明しないことにはトップファイターとは呼べないということだ。

――対戦相手がメレンデスではなく、フロリアンだったら青木が勝っていたという

意見もありますけど、どう思いますか？

ダナ　馬鹿げた話だ！　いいか？　アオキはメレンデスに負けたんだ。対するケニーはゴミ（五味隆典）を絞め落としたんだ。それなのになぜケニーがアオキより下にランキングされているんだ？　馬鹿げてるとしか言いようがないよ。

――アンデウソンvsマイア、BJvsエドガー、そして青木vsメレンデスと、コンタクトが少ないビッグファイトが続いているMMAの状況をどう思いますか？　このままでは、ますますMMAがボクシング中心の競技になってしまう懸念があるんですが。

ダナ　俺はそんなふうには全然思わない。キミはこの1年のUFCの試合を観ているだろう？　エキサイティングな試合が数えきれないほどあっただろう。そのなかでポイント主体の試合がいくつかあるのは、しょうがないことさ。ただ、それがトレンドだなんて、まったく思っていない。エドガーと対戦したBJは別人だったんだ。

――アンデウソンだけでなく、BJも別人ですか（笑）。

ダナ　もちろんエドガーの素晴らしさも評価しているけど、あの夜のBJはシ○トそのものだった。あんなのはBJじゃないよ。

――BJは自分の本（『WHY I FIGHT』、ダナに対して辛辣な記述があることで話題になっている）を書き上げるのに忙しかったんですかね？（笑）

ダナ　ハッハッハ、そうかもな（笑）。でも、BJは自分で本を書いていないだけじゃなく、読んでもいないって聞いてるけどな。これはBJ本人が言ってたことだ。

――BJ本人が関わったわけじゃない、インチキ本だと。そのわりには昨日、ロサンゼルスの書店で出版記念サイン会をやってましたけどね（笑）。ダナ代表はBJの本を読みましたか？

ダナ　全部じゃないけど、数カ所は目を通したよ。

――その読まれた部分に関しての感想は？

ダナ　感想を正直に言うと、ファッ○ンワードばかりになってしまうな。とにかく嘘ばかり書かれている内容になっているよ。たとえば、以前BJがUFCを離れてK―1に行ったときの話なんてデタラメばかりだ。実際は俺が「UFCと契約したままK―1と契約はできない」って言っているのに、BJと彼の兄が日本のK―1のオフィスから電話してきて「いまからK―1と契約するところだ」って言ってきたんだ。マット・ヒューズからタイトルを奪ってすぐのときだぞ？　頭に血がのぼるのも当然だろう。

――確かにそれはそうですね。

ダナ　でも結局、BJはK―1と契約したんで、UFCとの契約を破棄してあげたんだ。その直後に『ジ・アルティメット・ファイター（TUF）』のシリーズが始まったんだが、BJは次第にK―1を嫌いはじめ、「UFCに戻りたい」と懇願してきたんだよ。BJの本のなかでの訴訟問題に関しては、ファ○キン・クラウディ（曖昧）なものとなっているんだが、BJはUFCに戻るためにお金を払ったんだよ、それが事実さ。

――BJはいくら払ってUFCに戻ったんですか？

ダナ　充分な金額をね、それに弁護士費用の請求額すべてだよ。本の記述では、ここも曖昧になっているけどね。まあ、エドガー戦の試合内容を観てしまうと、確かにBJ本人が書いたんじゃないかと思ってしまうのも仕方がない。本を書いていてトレーニングの時間がなかったんじゃないかって思うような試合内容だったからな（笑）。

――エドガー戦のBJは、途中でスタミナが切れた感じもあり、本調子じゃないように見えましたからね。

ダナ　BJは普段、試合前になるとカリフォルニアに来て出稽古をして回るんだけど、今回はハワイにある自分のジムでしか練習をしなかったとも聞いている。まあ、今回のBJはいいパフォーマンスではなかったけど、アンデウソンのようなふざけた態度じゃなかっただけいいがね（笑）。

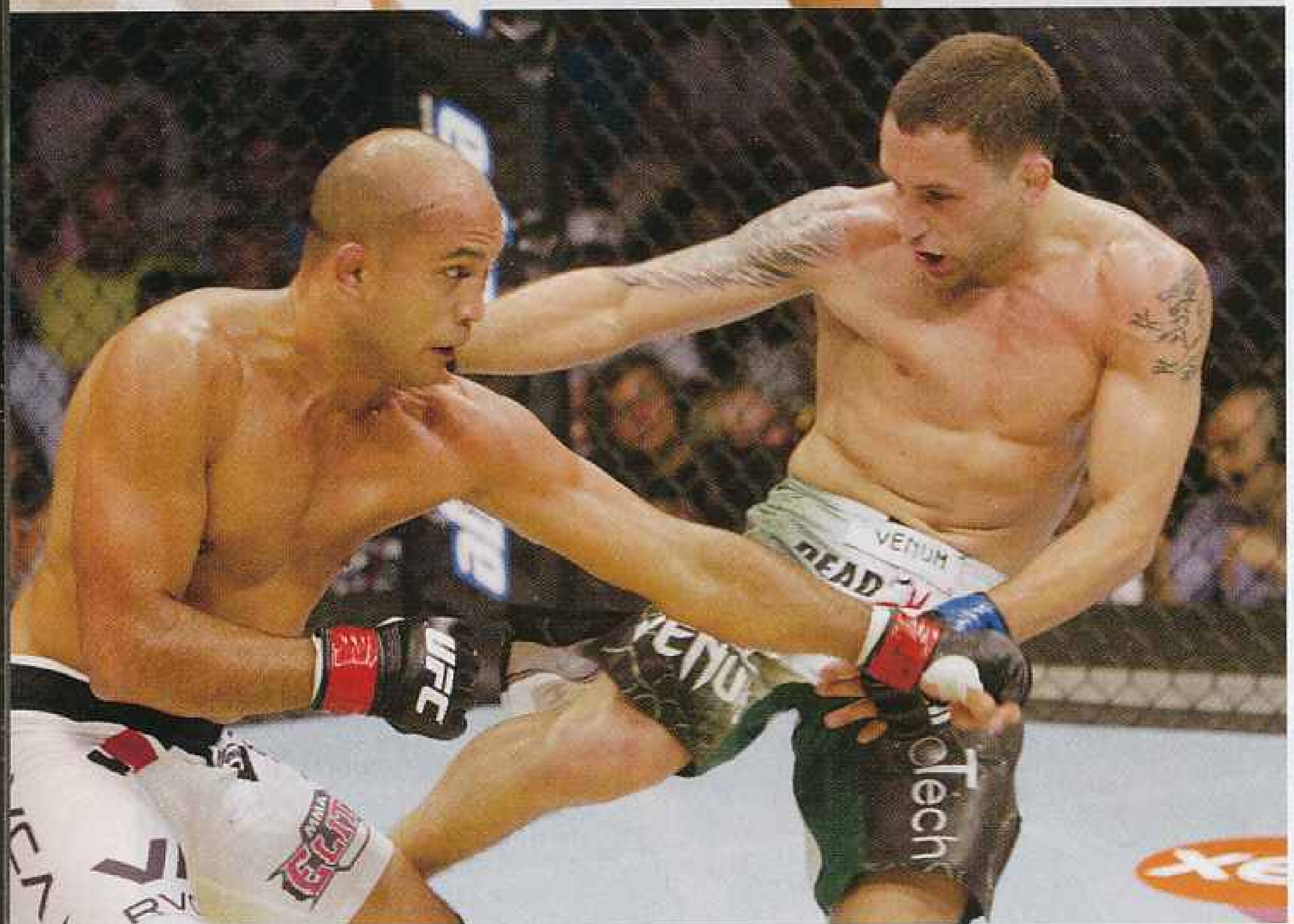
――アンデウソンの態度とストライクフォースの乱闘は、どっちがひどいですかね？（笑）

ダナ　両方ともほめられることではないね。どっちも絶対に見たくないことだよ。とくにストライクフォースはCBSの電波を使って、全米のお茶の間にクソを届けたわけだからね。

――嫌なものが届きますね（笑）。

ダナ　ただ、ファイターを責めることはできないよ。あれは間違いなくイベントを運営している側の問題なんだ。なぜなら





アブダビ初進出となった4.10『UFC112』では、ミドル級とライト級の二大タイトルマッチが組まれたが、ライト級は絶対王者BJが僅差の判定で敗れ、ミドル級は王者アンデウソンの態度が問題になるなど、どちらも物議を醸すこととなった。

BJペンの本は嘘ばかり書かれている。あれはBJが読んでもいない本なんだ

彼らがそのような乱闘が起こる状況を作ってしまったということだからね。ここUFCであのような乱闘が起こると思うかい？

―UFCはオクタゴンの中に入るファイターやコーチをちゃんと制限しているので、少なくともメイヘムが乱入するようなことはありませんよね。

ダナ　そのとおりだ。メイヘムをケージに入れてしまったことも含めて、ストライクフォースは完全にジェイク・シールズに対して、ファ○クな対応をしているんだよ。ジェイクはミドル級のチャンピオンなんだろ？　それなのに試合前に再契約の提示もしないで、CBSの大会コマーシャルでも、チャンピオンであるジェイクは一度も紹介されずに、ダン・ヘンダーソンばかりがフィーチャーされていたんだよ。信じられるかい？

―それはまたあからさまですね。

ダナ　そんな状況のなか、ジェイクが勝利者インタビューを受けている最中にアタマがイカれたメイヘム・ミラーが割り込んできて、いきなりシ○ト・トークを始めたんだよ。何を言っているのかわかるかい？　すべてはプロモーターの責任だっていうことさ。

―そのジェイクをUFCが獲得するという噂がありますが？

ダナ　（ニヤリとして）ジェイクとストライクフォースの契約はもうすぐ切れるんだよ。これが何を意味するかわかるだろう？　UFCファイターになるということだよ！

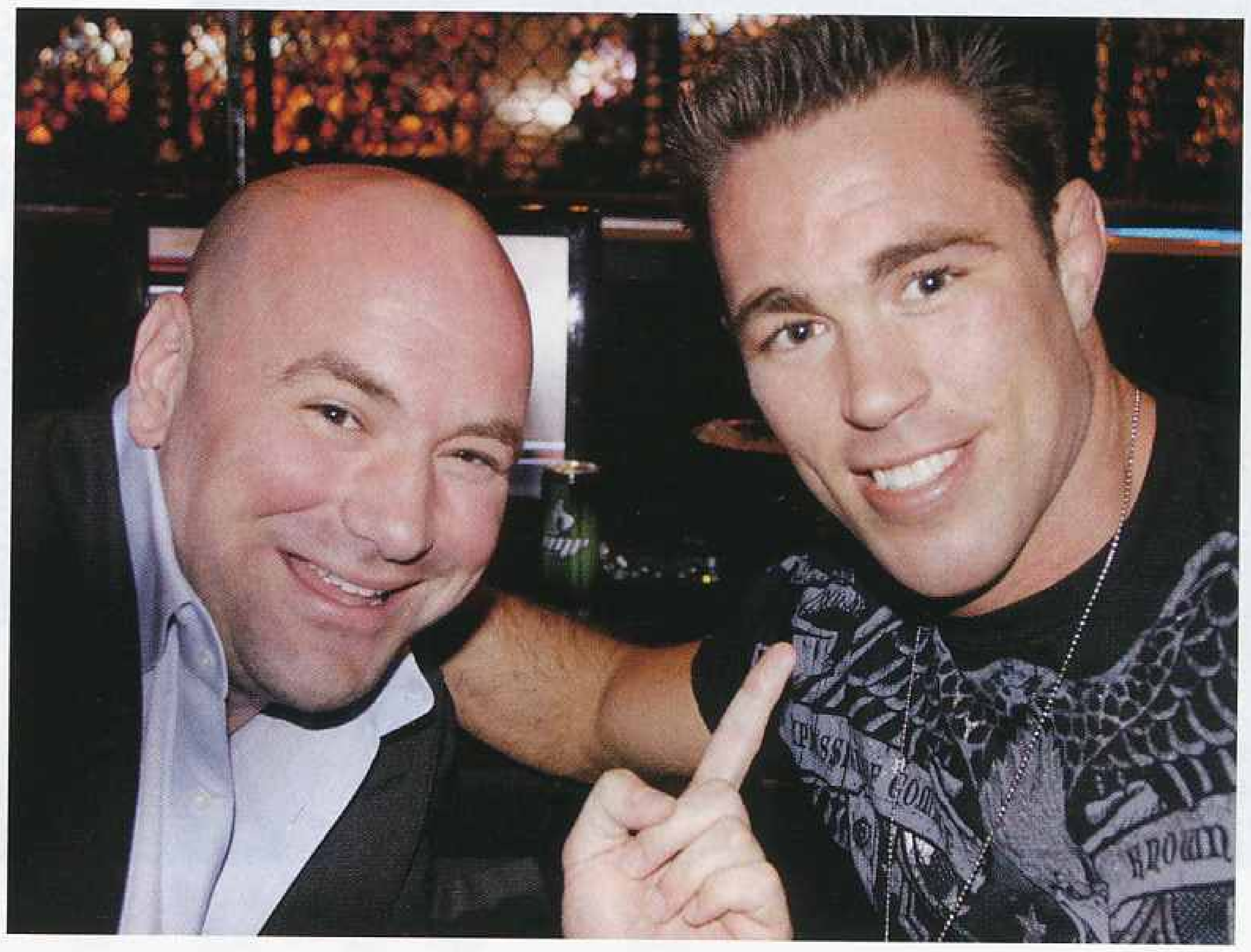
―現役王者を奪いますか！

ダナ　まあ、しばらく経ったらわかるだろう。またミドル級、ウェルター級のタイトル戦が楽しみなものになるな。

―あなたは〝乱闘事件〟のあとストライクフォースを「来月潰れるプロモーション」と言っていましたが、潰れるなら、ヒョードルの獲得も近いですか？

ダナ　秘密にすることじゃなく、もちろんヒョードルを獲得したいよ。あのクレイジーロシアンが話に応じればすぐにでも契約を締結する準備はできているよ。ここで一つ重要なことは、ストライクフォースとの契約書は存在するのかっていうことなんだ。ヒョードル側は、そんな契約書は存在していないって思っているようなんだ。我々の情報でもストライクフォースとの契約書なんて存在しないって聞いてるしな。

―へえ、そんなことがあるんですかね。



4.24WECサクラメント大会に渦中のジェイク・シールズが現われ、ダナと仲良く観戦。本誌の直撃にダナは「He is mine!!（こいつは俺のものだ）」とジャイアン節で獲得宣言。それにしても、じつに最高の表情だ。



シールズはUFCに来るだろう。ヒョードルも楽しみにしていてくれ

ダナ　まあ、今後何が起こるか楽しみにしていてくれ（ニヤリ）。

―では話題を変えて、五味隆典のUFCデビュー戦の感想を聞かせてください。

ダナ　デビュー戦は負けてしまったね。これは誰にでも言えることなんだけど、長いあいだ試合をしているとリング・ラスト（錆）にかかってしまうこともあるからね。とにかく、次の試合に期待したいよ。

―正直、UFCに来るのが2年遅かったようにも感じるのですが、どう思いますか？

ダナ　なんとも言えないよ。ただ、UFCで勝つというのは簡単じゃないということだ。

―五味選手の次の対戦相手は誰が候補になってきますか？

ダナ　まだ発表はできないが、絞り込まれているよ（米国の有力サイトでは、〝アメリカの北岡悟〟ことジョー・スティーブンソンの名前が挙がっている）。

―2連敗ならリリースもありえますか？

ダナ　ゴミとの契約内容がどうなっているなんて覚えてないからコメントできないよ。ただ、結果を残さなければいけない立場にいることは確かだ。

―日本の市場にUFCを売り込むためには、五味選手に勝ってほしいという気持ちは強いですか？

ダナ　いや、正直に言うと、いま日本人ファイターで一番期待をしているのはゴミじゃない。ユーシン・オカミなんだ。

―あ、そうなんですか。

ダナ　俺はユーシン・オカミのことが大好きだからな。

―それは初耳ですねえ（笑）。

ダナ　何を言ってるんだ！　俺はいつでも「オカミは好きなファイターだ」って答えているだろう！　これまでのインタビューを丹念に読み直して、テープを聞き直せば出てくるはずだ。

―では、時間があるときに聞き直してみます（笑）。

ダナ　オカミは185ポンドで世界のベストファイターの一人であると同時に、現時点での日本人ベストファイターだとも思っているからね。ちょっと待ってろ。オカミがウェブサイトで何位にランキングされてるか確認してきてやる（と言って再び席を立ち、部屋の奥のパソコンへ）。

―お手数かけます（笑）。

ダナ　（戻ってきて）知能の低い『シャードッグ』のヤツらのサイトだと、ユーシン・オカミはミドル級8位になっていたが、もっと上位にランクされるべきだよ。

―〝ダナ・ホワイト公式ランキング〟では何位ですか？

ダナ　俺のランキングでは4位といったところだな。

―ちなみにライト級はどうなっていますか？

ダナ　ライト級はさっきも言ったとおり、フランキーが1位でBJが2位。3位はケニー・フロリアンだろう。トップ5にギルバート・メレンデスが入るのは認めるけ



突如、ダナ・ホワイトお気に入りファイターに昇格した"日本の金網エース"岡見勇信。これまでUFCで8勝2敗の好成績を残しながら、なかなか王座挑戦のチャンスが与えられなかったが、いよいよビッグチャンス到来か？

日本での地上波放送は続けていく。日本の格闘技熱を盛り返してやるよ

Dana White

ど、ショーン・シャークも入れておくべきだ。アオキは特別サービスで10位。ゴミは残念ながらランク外だ。

——その五味選手や岡見選手が出場した『UFN21』を日本の地上波放送局であるテレビ東京で放映した意図は？

ダナ　前から言っているとおり日本市場はUFCにとって非常に大切なマーケットなんだ。今回はその市場に入り込むための具体的な第一歩ととってもらってもいいだろう。

——今回の視聴率や反響は、UFCとしてはマーケティング的にどう評価していますか？

ダナ　申し訳ないが、俺自身は日本のマーケットに関してあまり知識がないからハッキリしたことは言えないんだ。ただ、評価がどうかではなくて、まずはTVネットワークでUFCを放映し、時期が来たら日本に乗り込んでライブで日本大会を開催することを実践し続けていくことが重要なんだよ。

——五味選手の敗戦で、正直言って日本進出は遠のきましたか？

ダナ　そんなことはまったくないよ。MMAのファンはファイターの国籍を気にしていると思うかい？　アメリカ人の俺が日本のPRIDEに参戦してたサクラバの大ファンなんだよ。わかるだろう？　もちろん日本の市場に入り込むのであれば日本人のファイターの活躍というのも重要になるだろうけど、日本のファンはそれ以外のいろんな国のファイターのファンになってくれると信じているよ。

——7月にラスベガスで行なわれるビッグイベントでは、ヴァンダレイ・シウバvs秋山成勲戦が組まれていますが、アメリカで無名の秋山にチャンスが与えられた理由はなんですか？

ダナ　このカードはアキヤマのためのカードと言っても過言じゃないんだ。アキヤマたってのお願いで組まれたカードだからね。彼は「このカードのためだったらなんでもする」「ヴァンダレイ以外とは試合をしたくない」とまで言っていたんだよ。

——そんなことまで言ってましたか！

ダナ　おそらくこのカードはヴァンダレイにとっても、いいカードになるだろう。アキヤマはヴァンダレイの望むスタンドアップでの試合を挑んでくるだろうからね。ファンにとってもエキサイティングな見応えのある試合になることは間違いないから、俺たちも自信を持って提供できるカードなんだ。

——そんな秋山選手に比べ、〝あなたの大好きな〟岡見選手にはなかなかタイトル挑戦のチャンスが与えられないのはなぜでしょうか？

ダナ　俺はオカミに対してあせってはいないよ。彼はいま実績を積み上げているところなんだ。そのうち〝彼の日〟が来るんだよ。試合内容も徐々に良くなってきている。とくに先日の試合のKOは目を見張るものがあったよ。

——岡見選手のファイトスタイルはどう評価していますか？　以前はあまり高い評価ではなかったと思いますが。

ダナ　これまでのオカミはアメリカでの試合に慣れるための時間を要していたんだ。確かに、これまでのオカミの試合ビデオだけを観るとつまらない時間をすごすことになるだろうけど、最近は内容もよくなってきているから、おそらく日本人ファイターとしてUFCで一番成功を収めることができると期待しているんだ。

——では、いつ頃そのビッグデーは訪れますか？

ダナ　ハッキリとはわからないさ。でも、近くに来ていることだけは確かだよ。近い将来、ビッグカードが組まれると思うから楽しみにしててほしいね。だからちゃんと誌面でもオカミのことを宣伝しておいてくれよ。俺はこれからも日本のファンにUFCを理解してもらうために、衛星放送だけでなく地上波放送も続けていこうと思っているし、ゆっくりでもいいから日本の格闘技熱をもう一度盛り返してやろうと思っているからね。そのためにもまたラスベガスまで、ぜひ取材に来てくれ。今日はここまでだ！

【10年4月21日／米国ネバダ州ラスベガス、ズッファ社長室にて収録】



DANA WHITE■1969年7月28日、米国コネチカット州マンチェスター出身。プロボクサー、MMAファイターのマネージメント業を経て、ズッファ社の社長に就任。数々の過激発言で代表自らがUFCのスポークスマンも務める。



青木完敗

我々はこの現実にどう向き合えばいいのか？

青木にとって「こうなったらヤバイよな」ということが次々と起きた

——え〜、本日のナッシュビル決戦総括座談会は、ツイッターの映像配信アプリTwitCastingによりリアルタイムで日本の皆さんにもお伝えしております。この模様を再構成したテキストが速報号に載る予定です。

ガンツ ただいまナッシュビルは深夜の3時5分です!!

——何から語りますか、堀江さん?

ガンツ そうだねぇ。今回ばかりは「負けたーーーーっ!!」ってアニマル浜口ばりに叫びたい気分だなあ。それほど青木は完敗も完敗だったよね。

橋本 うん。もう完敗としか言いようがない、この内容は。

ガンツ まず試合前から振り返ると、今回はみんなでツイッターで現地の模様を報道しながら決戦のときを待ってたわけだよね。ツイッターを通してファンのみんなと一緒に気持ちを共有して。

橋本 海外の試合なのにツイッターでつながってる感が凄くあった試合だったよね。新しいよね、格闘技の伝え方のかたちとして。

ガンツ で、俺がツイッターで「青木に元気玉を送ってくれ」って書いたら、なんか文字を通して元気玉が本当に集まっている感じがして（笑）。

——日本ハムファイターズのダルビッシュ有までもが「私も微力ながら日本からパワーを送ります」って。

一同 えーっ!!（笑）。

——青木とダルビッシュは一緒にメシ食ったりしたんですよ。

松林 つまり、時速150キロの元気玉が日本から送られてきたってことか（笑）。

——で、自分は今回のストライクフォース（以下SF）が初めてのアメリカ取材だったんですけど、アメリカのイベントって大会進行が日本とはまるで違うんですよね。

橋本 進行が日本とだいぶ違うよね。

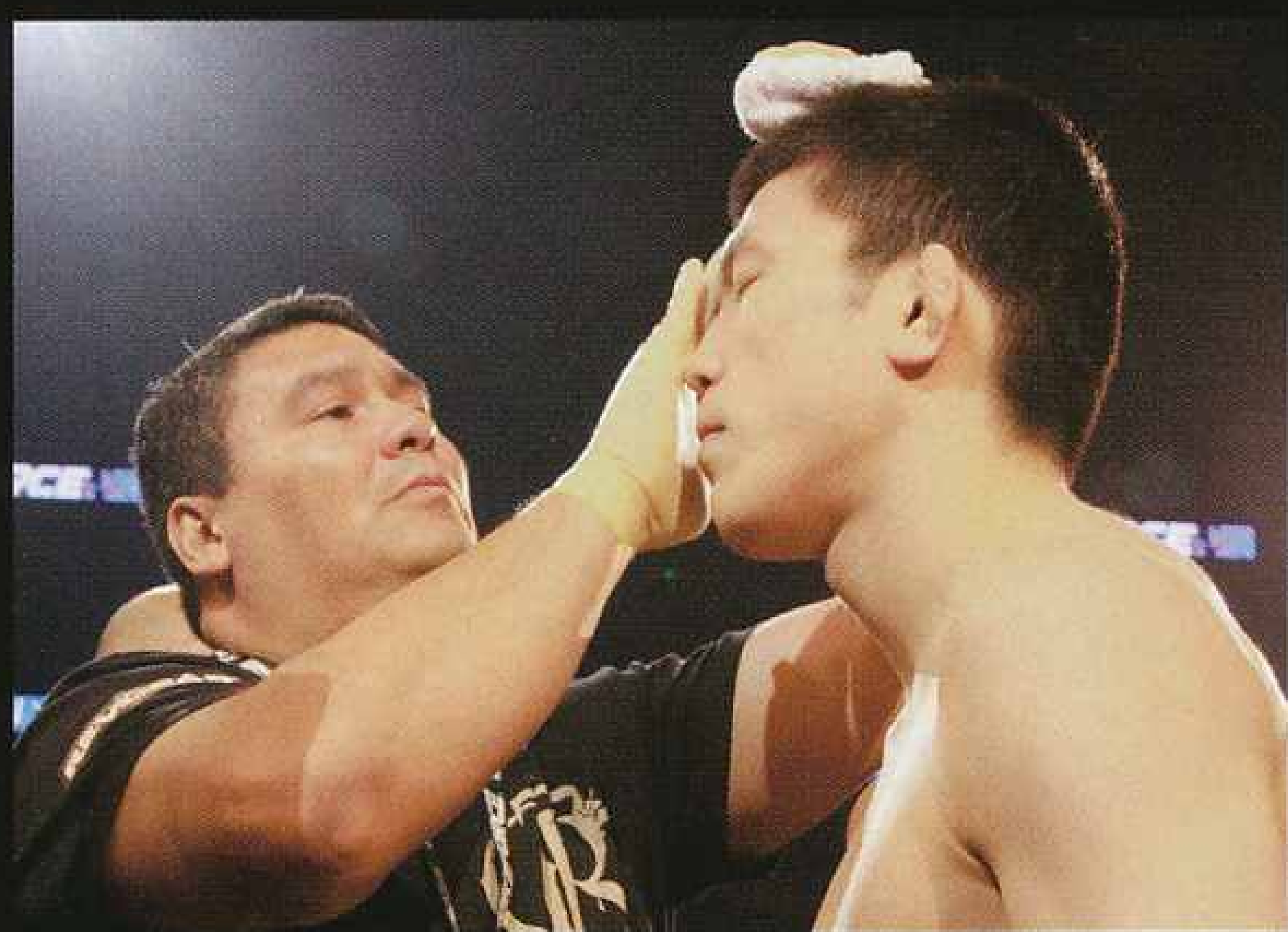
——日本みたいにオープニングイベントがあって「さあ始まるぞ！」っていう仕切りじゃなくて。今回は「17時開場、18時試合開始」のはずだったのに、何気なくプレス席の場所を確認しにいったら、とっくに試合が始まってるんですよ（笑）。

橋本 PPVマッチ以外は、日本で言うところのフューチャーファイトやオープニングファイト以下の扱いなんだよね。メイヘム（ジェイソン・ミラー）も前座だったけど、彼は知名度があるでしょ。メインカードの進み方次第ではテレビの電波に乗る可能性があるから、地上波放送用の演出をしてたけど。

——で、PPVマッチの青木が『バカサバイバー』で入場してきましたけど、その途中で音楽が切られてメレンデスの入場が始まって（苦笑）。

橋本 あれってテレビの進行のせい。青木がケージ外でボディチェックされてる段階で音楽を切られて。

ガンツ 要はアメリカって、顔にワセリンを塗ったりとかボディチェックが長いんだよね。それを待ってたら進行的にグダグダになっちゃう。花道の入場は見せたから「はい、オシマイ！」という感じで。



ケージ外でボディチェック等を受ける青木真也。この時点でメレンデスの入場は始まっていた。これぞアメリカ流!!

——TBSよりヒドいCBS（笑）。

ガンツ 鈴木みのるのテーマ曲『風になれ』がサビにいく前に対戦相手の船木のテーマに変わっちゃうようなもんだから（笑）。

橋本 それでも青木は緊張感のあるいい顔してたよね。「さすがだな」って感じがした。

ガンツ ギルバートもそれこそいつもは観客とタッチしながら「イエーイ！」とかはしゃぎながら入場しているのに、今回は大股でノッシノッシと脇目も振らずにケージに向かっていく感じ。あの気合いの入り方も凄かったなあ。

松林 ちょっとうろ覚えなんだけど、メレンデスって顔にワセリンを塗られる前に、セコンドが頭からおもいっきり水をドボドボドボかけてたんだよ（笑）。

一同 ダハハハハ（笑）。

松林 驚いたよ、アレには。アメリカのいろんな大会を観てきたけど、あんな光景は初めてという（笑）。

橋本 水をかぶることによって、何かが溶け出すってことがあるんですかね。あのモジャモジャ頭から何かが染み出してくるとか（笑）。

松林 ヌルヌルになるかどうかはわからないけど、ビショビショにはなってると思う（笑）。「アスレチック・コミッションの人間が注意しないのか？」と一瞬思ったんだけどね。

——なんとも言えないなあ……。というわけで試合が始まったわけですけど。1ラウンドの後半から「これはちょっとマズイんじゃないかな……」という展開になって。

橋本 青木にとって「こうなったらヤバイよな」ということが次々と起こっていくんだよね。タックルを切られる、相手がパウンドにきて、じゃあ下から攻めようかと思うと金網に押しつけられる。なおかつ、いいところでメレンデスに立たれてポイントだけが奪われていく。

ガンツ 青木が最初のタックルを切られて、そのまんまグリップをつかんでメレンデスを引き込んだじゃない。で、そこから腕を取るなり、ラバーガードでいくなりしたかったんだけど、メレンデスが寝技でまったく深追いしようとしないから、そこから何もできなかったというね。

橋本 青木に無理矢理グラウンドに引きずり込まれないくらい、メレンデスは寝技ができるってことでもあるけど。

ガンツ だからメレンデスの作戦が完璧だったんだよね。青木をKOするためというより「青木に何もさせないためにはどうしたらいいのか？」ってことを徹底的に完遂したという。

橋本 青木も試合後に「メレンデスのゲームだった」と言ってたね。

松林 シロウトみたいな物言いで申しわけないけど、倒しにくる距離で闘ってないよね、ギルバートは。

橋本 来てないですね。

松林 タックルに対処できる距離までしか踏み込んでない、と。

橋本 と思いますね。

ガンツ メレンデスが凄いのはあれだけ懐を深くして腰を低くして「タックル切りますよ〜！」という一見へ

座談会出席者

橋本宗洋
格闘技フリーライター。『PRIDEはもう忘れろ!!』の著者。青木真也ウオッチャーの一人。

堀江ガンツ
本誌編集部員。変態座談会主宰者であり、その変態道は海外イベントにまで通じている。

松林貴
本誌編集次長。おもしろいものとうまいものがある場所にフラリと現われる謎のヒゲ男。

ジャン斉藤［司会］
本誌編集長。本誌の青木真也番。ツイッターをやりだしてから、敵をたくさん増やしている。

青木完敗

っぴり腰ふうなのに、強い打撃を打てることなんだよ。例に出してはいけませんけれども、ヒクソン・グレイシー戦の髙田延彦さんとは、見た目は似てるのにちょっと違う(笑)。

——進化した髙田延彦、それがメレンデス(笑)。

ガンツ しかも胴タックルでクリンチさせないように上のジャブとボディを打ち分けて。あの戦法を切り崩すには、闘い方を完全に変えないと無理でしょうっていう。

——(iPhoneを見ながら)え〜っと、TwitCastingでずっと「ロングスパッツに甘えていたからだ!」みたいなことをツイートしている人がいるんですが……(笑)。どうなんですか? スパッツは。

ガンツ 今回はスパッツ穿いていようが、スパッツのなかに磁石が入っていようが、マジックテープがついていようが、鳥もちがついていようが青木の完敗でしょ。そこまでの攻防にいけなかったわけだから。

橋本 実力で負けたという。どれくらいスパッツが有効なのかはわからないけど、充分な寝技の攻防にまで至らなかったし、ラバーガードも途中までしかセットできなかったわけだからね。俺はスパッツうんぬん以上に、青木はメレンデスのあの戦術を切り崩す何かを持っているはずだと思っていたけど、それが出なかったことにビックリした。

松林 青木真也なら、打ち破れるはずだという幻想はあったよね。

橋本 セコンドについた北岡悟とちょっと話したけど、「これが総合的な実力ということでしょう」と。あと青木はもっと前に出たかったらしいんだけど、1ラウンドは下がっちゃったじゃない、メレンデスの圧力で。で、俺が思ってたのは、青木は左ミドルも蹴ってたんだけど、左ミドルってオーソドックスのメレンデスには凄く有効な攻撃なんだよね。右のパンチも殺せるし、前に出てくるのも抑えることができるから。

ガンツ 要は左ミドルをガードすると腕が殺される。逆に空けると脇腹を蹴られるというね。

橋本 でも、メレンデスの圧力が凄かったから、きれいにヒットしてないんだよね。ということは、前に出て圧力をかけながらミドルだったらよかったんだけど、下がりながらだからどうしても威力もそがれちゃうだろうし。そこで下がってしまったということは、つまりメレンデスの圧力が想像以上だったということだろうね。

——だから敗因は一つじゃなくて、ケージ対策うんぬんとかさっそく騒がれてるけど、総合的にやられた。

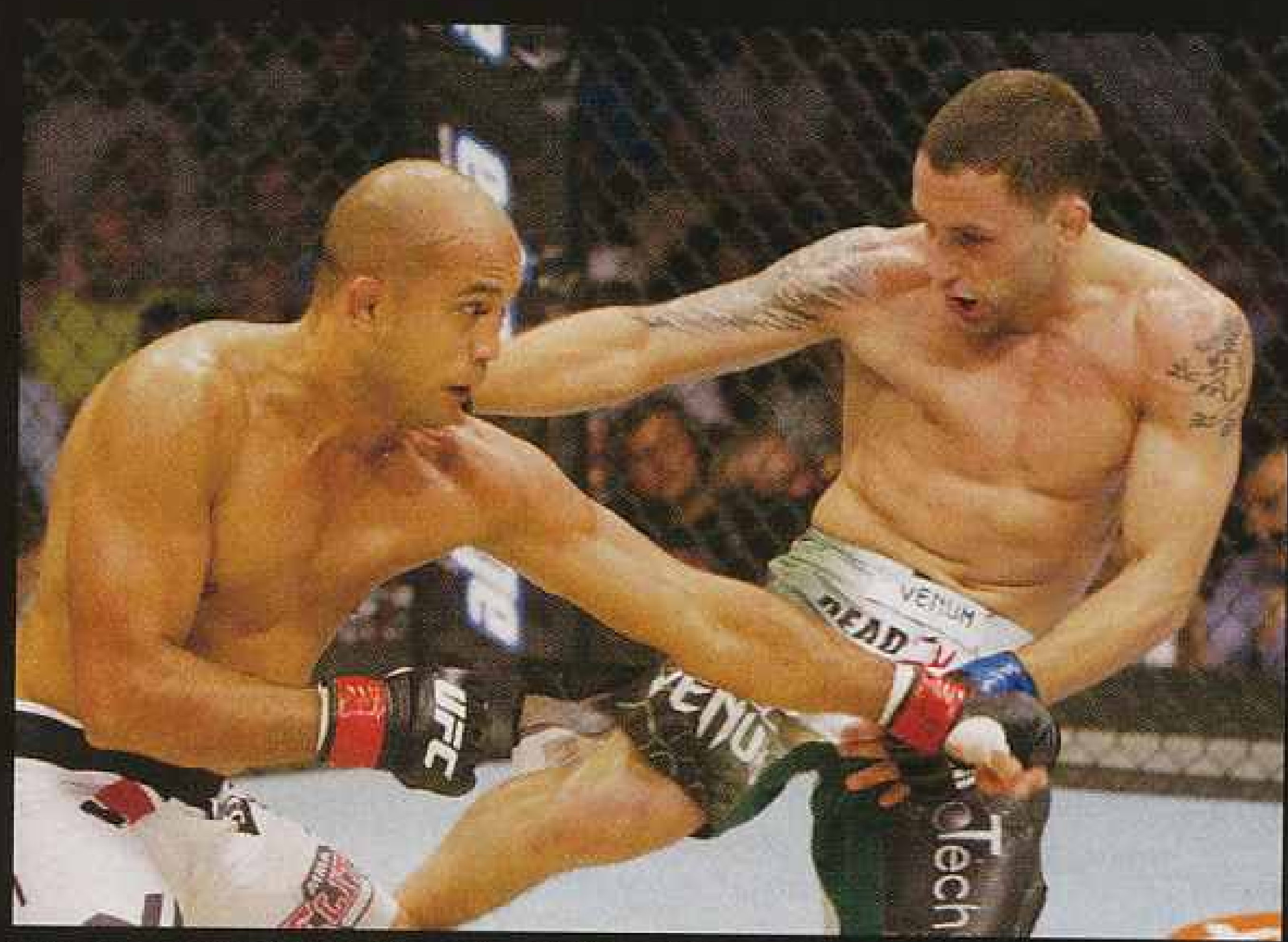
橋本 で、ここで肝心なのは、青木は格闘技にいろんな罠があることを知ってる人間なんだってこと。彼ほど北米とか世界の格闘技に詳しい人間はいないわけだから、金網だったり、メレンデスの個性も全部わかって研究してるし、そのつもりで練習してる。気楽なチャレンジじゃないわけだから。その青木がやってもダメだっだことがショックだったんだよね。

ガンツ 思ったのはさ、青木は一人の研究者として徹底的にメレンデスの研究をしたんだけど、メレンデスのほうは〝青木真也研究チーム〟が立ち上がっていたから。「個」対「集団」になっていた。

橋本 暴力柔術ことシーザー・グレイシー軍団が寄ってたかって!!

ガンツ 青木は日本でいちばん優秀な研究者だけど、メレンデス陣営はニック・ディアスにジェイク・シルーズ……。チーム戦できてるからね。しかも一人の勝利をバックアップすれば、チームに転がり組んでくるお金も半端じゃない。

——なんかさ、日本の科学と同じだよね。日本の場合、予算が出ないから次々と外国に優秀な研究者が出ていってしまうという(笑)。



UFCライト級不動の王者BJペンも"ゲーム"という名の闘いに敗れた。しかし、この価値観こそが現代MMAを支配しているのである。

橋本 まさに「世界2位じゃダメなんですか?」と。

——そうそうそう。事業仕分けと同じ。2位じゃ意味がない世界。

ガンツ そして、青木は勝つための研究をしてきたけど、メレンデス陣営は負けない研究をちゃんとしてきた。完勝なんだけれどもメレンデスが勝ちきったわけじゃないんだ。でも青木は「1点」も取れなかったから、青木の完敗なんだよね。青木は0点だった。

橋本 ガンツ先生が「0点」と言うと説得力あるね(笑)。

——青木はロボコンだったのか(笑)。

橋本 俺が観てて思ったのは、メレンデスもビビリながら闘ってたよね。細心の注意を怠らずに。

——カルバンやアルバレスは、一瞬だけど青木に隙を見せてしまってつけ込まれたと思うんですよ。

橋本 だからメレンデスは「とにかく青木に対しては一回でもミスしたらヤバイぞ」という戦術だったよね。

——(iPhoneを見ながら)TwitCastingへの書き込みで「DREAMだと積極性が強制されるけど、UFCなどではそれがないから、その差を感じた」ってあるんだけど、青木はいままでUFCとか競技的な闘い方を〝是〟としてきた人間だから、そこの壁を突破しなきゃいけない義務があったんですよね。アグレッシブ論はあんまりテーマにならないと思う。

橋本 それに青木本人も試合後のコメントで言ってたけど、どんな理由があろうと「負けた」んです。その結果がすべて。で、青木真也というのはファンタジスタ的な変幻自在の寝技の使い手として知られてるけど、そういう寝技をなんのために使うかといったら、とにかく勝ちたいからなんだよね。勝つために必要だからやってる。でも今回、結果を出せなかったということは、いろんな細かい要因をもって総括できる感じではないよね。

——相手に積極性があるかどうかじゃなくて、それを突き破らなきゃならないし、試合後に佐藤大輔が「確実にポイントを取るUFCファイティングみたいな試合ってどうなんだろうね?」って言ってたんだけど、確かに嫌いな人もいるのはわかる。でも、今回はそこを打ち破んなきゃいけない試合だったですよね。

ガンツ つまりそれはさ、青木が「60億分の1を取り戻す」というのは、いまのMMAの主導権をアメリカから取り戻すって意味でしょう。アメリカルールなら積極的に攻めなくてもいいし、イエロー(カードを)出されることもないし。でも、そのMMAのスタンダートを変えるためには、まず本場で向こうのルールで倒すしかないんですよ。

——いまはアメリカが上位概念ですからね。

橋本 もっと言えば、青木だって北米的な価値観のなかでやってると思うし。ルールのなかで勝つってことをやってるわけだから、それはもう日本だったらとか、アグレッシブじゃないとかは……。

——全然関係ない!

橋本 確かにね、俺もゲーム的価値観は嫌いだけど、そもそもスポーツ

我々はこの現実にどう向き合えばいいのか？

ってそういう勝負だからね。メレンデスの戦術が是か非かが問題じゃなくて、青木が負けたことが大問題。

ガンツ そのアメリカンルールのなかで、アメリカンな闘い方をやったメレンデスには、いまの青木真也のスタイルじゃ敵わなかった。

——でもね、4ラウンドまで完全に取られてたじゃないですか、メレンデスに。逆に「青木らしいな」って思ったのは、普通のファイターなら最終ラウンドにギャンブルするんですけどね。

橋本 まぁイチかバチかでギャンブルするよね。殴り合いという選択を選ぶとか。でも、青木はギャンブルをしないというか、「自分の勝ち方はこれなんだ」という信念がある。ギャンブルってへんな話フィフティ・フィフティ、五分五分の確率じゃん。だけど、青木にとってはあの作戦を取り続けることが五分五分よりはるかにいいと思ってるんであって。つまり青木は勝負を投げなかったわけだよ。

ガンツ でも、観てるかぎり策はなかったよね。あそこまでタックルにこだわって「どうやって勝とうとしてたの?」って言われてもおかしくない。

——だから今回の負けの何がキツいって、そこに絶望を感じてしまったことなんですよねぇ。

橋本 でもさ、青木って日本で一番技術的にも戦術的にも優れてるわけでしょ。その青木に対して「ほかに何かできなかったのか?」と思ってしまうこと自体が、俺は意外だった。

——「あの青木ですら、何も策がなかったのか?」と見えてしまう。

橋本 あのタックルにいって、仰向けになるっていう方法を貫いたとも言えるし、あれしかなかったという無策にも見えた。要するにチェンジ・オブ・ペースの術がまったくなかったのか? もしくは、あったのに使わせてもらえなかったのか。それはわからないけど、とにかく「青木、それしかないのかよ……」って思ったこと自体に俺はビックリしたというか。青木っていつも観ててストレスがないというか、俺らが分析不能なところで闘ってたわけじゃない。そういう青木が今回みたいな負け方をしたことにホントにビックリ。

松林 青木くんがそうなら、日本の格闘技界はマズいよなあ。

ガンツ そこで問われてくるのは、ぶっちゃけ「今後リングの試合って意味あんのか?」ってことになるよね。「60億分の1を取り戻す」っていうことは何かと言ったら、さっきも言ったとおり、格闘技の主導権自体を日本に取り戻すってことでもあるわけで。それができるのは日本を主戦場にしていて、世界一になるかもしれないって言われていた青木真也しかいないわけで。でも、その青木が負けてしまったんだから、これから日本のルールで日本の選手と闘っても、これを観ちゃったファンは、もう何も感じないよね。残念ながら。

問われるのは「今後リングの試合って意味あんのか」ってこと 少なくとも〝ジャパニーズMMA〟はローカルでしかない

——北米とどう向き合うのかっていう姿勢を見せてくれないと、今後の日本格闘技界は見づらいですよね。

ガンツ だって、この敗戦で日本格闘技界の使命はもう決まったんだから。「打倒アメリカ」。いまのテーマはこれしかないよ!! だからね、もう青木は次からロングスパッツを穿いてこなくていいと思う。スパッツが有効かうんぬんじゃなくて、アメリカのルールで勝つためにそうしなくちゃいけないんだから。男はパンツ一丁で出直しですよ!

——要は見え方の問題ですよね。スパッツがどうこうじゃなくて、どうやってファンに日本格闘技界の存在意義を見せていくかという。このまま話を進めてもいいけど、俺は今回メチャクチャおもしろかったですよ。青木が負けたけど、ここまでファン、アンチ、関係者、選手を含めて注目したお祭りってなかったと思うし。

ガンツ ここ何年かでは一番大きなお祭りだったよね。やっぱり最終戦争だもん。それはおもしろいに決まってるんだよね。これがおもしろくない人は、最終戦争なのにその場にいない人なんですよ。その場にいなかったら、当事者じゃないんだから。こういうふうに言うとターザン山本的になっちゃうけど、青木は完敗だけどさ、これに乗っかって応援したり泣いたり文句を言ったり落ち込んだりとかした人は、「勝利宣言」したほうがいい!

一同 ダハハハハハ(笑)。

ガンツ みんなが一番楽しんだんですよぉぉぉぉぉぉ!!

橋本 どれだけおもしろかったかといえば、ナッシュビルの深夜3時45分に、日本人の男4人が語り合っちゃってるくらい。ただ、楽しかったことを充分に認めたうえで、やっぱり言っておかなきゃいけないのは、負けちゃダメなんだよ。

松林 酷な話といえば、酷な話だと思うよ。相手のホームリングで、しかも慣れないケージに入って絶対に勝たなくちゃいけないというところまで課せられて。でも、それでも勝たなくちゃいけなかったのが今回の青木真也の試合だよね。

橋本 それをやるのが青木真也の生き方というか、選手としてのスタイルだったわけじゃないですか。

——確かに青木真也のファイター人生を考えると、この負けというのは大きな財産になると思うんですよね。ただ、日本格闘技界には相当痛い敗北だったっていう。

ガンツ 痛いというか、ホントね、終わりました。

——もちろん興行は続いていくんだろうけど、文化面精神面は完全に終わったよね。

橋本 少なくとも〝ジャパニーズMMA〟はローカルなものでしかありません、と。

ガンツ かつて髙田延彦がヒクソンに敗北した時点で、最強を目指すプロレスは終わっちゃったじゃないですか。いくらプロレスのなかで闘っても幻想が与えられることはなくなった。

橋本 それには説得力はないよって話だよね。

ガンツ はい、そうです。そのときに何が追い込まれたかといったら、もうプロレスラーでも強さを求める選手はバーリ・トゥードで勝つしかなくなった。U系も掌底、ロープエスケープありで勝つことになんの意味も感じなくなった。そういう時代だったんだよ。

橋本 はいはい。プロレスで、たとえば格闘技的な感じでというか、強さが結果によって輝くということはありえないことになってしまって。「あなたが強いと言うんだったら、じゃあバーリ・トゥードで「どうぞ」っていう時代に完全になったよね。

ガンツ そのときと今回は似てるんですよ。だから日本にアメリカに合わせなきゃなんないですよね。それはケージがいいとかどうとかじゃなくて。あのときは〝グレイシールール〟でグレイシーに勝たなきゃしょうが

ないっていう流れになったわけでしょ。で、そのルールで桜庭がグレイシーに勝つことで、新しい世界がまた日本に生まれたわけ。今回そうするためには、もう向こうのルールで、アメリカのチャンピオンに勝つしかないんだよ。

橋本 それしかないよね。それをやらずに日本独自の格闘技を主張しても、こんな言い方しちゃ悪いけど、武藤敬司vsペドロ・オタービオに見えちゃうよね。

ガンツ リングはもう思い出にするしかない。これから先はもう違う価値観なんだから。PRIDE最高だった、DREAMもおもしろかった。でも、それはもうかつての価値観。それが大好きだったのは変わらないけれども、いまの時代はそうじゃない。アメリカに勝たないと認められない時代に入った。

橋本 もう結果が出ちゃったんだからね。やるしかない、勝つしかない。

松林 TBS的に言うと、「青木真也には勝たなくちゃいけないものができた」という。

ガンツ この闘いを間近で観ていた北岡はどう思ったんだろうとかね。もう日本ではやってらんないでしょう、正直このままじゃ。

——川尻も「それでも青木くんのベルトが……」とか言わないでしょう。

ガンツ だから、川尻も即行でストライクフォース参戦を立候補してほしい。それか、すぐじゃなくても「時間をかけてケージ用に完璧に作り上げます」と言うかね。DREAMも普通の大会を開いてないで、次からは……。

橋本 （さえぎって）ホワイトケージあるんだから！

松林 そういうふうに考えたときに、今回の敗戦をまったくなかったことにして、日本流を続けていけるのかね？

橋本 「ポイントでセコセコセコセコやって、勝ってチャンピオンですか？」とか「やっぱりジャパニーズMMAでしょ。観ておもしろくてホントにロマンがあるのは」とかさ、言ってほしくないですよね。

ガンツ ジャパニーズMMA、日本のMMAが大好きでしたよ。でも、負けちゃったんだもんな。どっちがいいか悪いかじゃなくて、負けちゃったんだよ！ こんな勝負事でさ、勝負事なんだから、負けたまんまでいらんないよね。普通に考えて。

橋本 この状態でジャパニーズMMAと言っても、説得力ないね。勝って言わなきゃダメだし。

——だって背負う人は誰かいます？ ジャパニーズMMAの幻想を。青木しかいなかったですよね。

青木が勝っても日本格闘技界の抜本的な問題は変わらなかった

橋本 「俺が負けたらDREAMが終わる」って青木が言ってたのは、そういう意味で「あとに続く人間もいないんです」ってことだったかもしれないしね。

松林 ということは、DREAMを再生させるのも青木しかいないということでしょ。

——本場アメリカで勝ってる岡見が無視されてるのはかわいそうだ」っていう書き込みがありますね。

ガンツ これはね、ホントに感覚的な問題であって。残念ながら岡見選手は日本のMMA界で我々と一緒に物語を共有してなかった。だから、これからでしょう。

——まあ、現時点で「岡見勇信しかいない！」と言えるのは曙さんだけでしょう。ずいぶん前から「なんで格闘技雑誌は岡見さんを表紙にしないの？」って札を置いてるわけだから。



DREAMはいかにして北米と向き合うのか。ポイントの一つはケージにあるが、DREAMは昨年10月の『DREAM.12』でホワイトケージを導入している。

青木完敗

我々はこの現実にどう向き合えばいいのか？

橋本 岡見がやってきたことに関しては、凄いことだと心の底から編集部全員、フリーのライターも含めて思ってるんだけど。でも、それと誌面になるかならないかというのは、まったく別だし。日本人だからいいのかって問題でもある。たとえば、ヴァンダレイとかヒョードルとかノゲイラとかはPRIDEを体現してたわけでしょ。そこは〝ナニジン〟でもよかったわけでしょ。日本人だからいいってわけでもないということなんだよね。

——今回、青木を応援してたのは日本人だからじゃないからね。そこは勘違いしないで。

橋本 日本を背負ってるからなんだけど、日本人としてではないよね。日本の格闘技界、日本の格闘技人というか。

——これはヴァンダレイが日本を背負う話だったら乗れるでしょ。

橋本 乗れるんだよね！ 「ニッポンのファンのためにオレは秋山に勝つ」って言ったら、なんかうなずけるものがある（笑）。

ガンツ 簡単に言うと、「俺たちの青木」として出たんだよね。まだ岡見選手は「俺たちの岡見」になってないという（笑）。その思い入れというのがね。

——話は変わりますけど、じつは試合前日に、とある人と電話で深夜に話しまして。橋本さんには言ってたと思うんですけど、「青木が明日勝っても負けても、日本格闘技界の本質はあまり変わらない気がする」って。

橋本 言ってたね。

——「抜本的には何も変わらない気がする」って。青木が仮に勝ったとしても、その勝利はジャパニーズMMAにとって〝一時の快楽〟だったんじゃないかな。もちろん、一時の快楽はほしかった気持ちはあるんですけど……。

橋本 青木が勝てば、その場はムチャクチャ喜んでたかもしれないけど、そこで停滞してしまうことも出てくるんじゃないか、勝ったことで逆に〝鎖国〟が進むんじゃないかっていう。


——それは五味隆典のときもそうなんだよ。五味があのとき勝ってても、〝五味サイド〟への不安は変わらなかった。

松林 たとえて言うと、あれほど勝ちを望んでて実際に勝ったのに、期待していたほどグラフの数字が上がんないみたいな意味合い？（笑）。

——青木には絶対に勝ってほしかった。でも、日本格闘技界にとってはどうだったのか。それはこの敗戦をどう受け止めて考えるのか。

ガンツ 俺はね、絶対に向き合ってほしい。髙田が敗れたことで強さを売りにしていたプロレスラーが続々とバーリ・トゥードに挑んだように、いまこそ北米という価値観に挑んでほしいよ。あと俺さ、前田日明にホントの意味で最後に乗れたのって、髙田がヒクソンに負けたときなんだよね。あのときの前田は「髙田負けたよ！ どうすんの!!」って、業界全体に対して危機感を口にしてた。今回も同じだよ。「青木負けたよ！ どうすんの!!」って、いまこそ業界全体に危機感を訴えたいね！

【10年4月18日／テネシー州ナッシュビルにて収録】



魔裟斗後の新しい世界を創るのは“崖っぷち世代”だ!

K－1 MAX 63キロ級トーナメントもスタート

これまでK－1 MAXを支えてきた魔裟斗が引退してから早5カ月あまり。選手からは「MAXは潰さない」と、その存続に危機感を募らせる声も上がっている。ここではそんな覚悟を背負った〝崖っぷち世代〟を大特集！ K－1次世代の声に耳を傾けろ‼

70キロは“vs世界”へ、63キロは舞台構築へ!

K-1新世代は正念場の2010年を乗り越えるべきか

2010年、新たな顔ぶれも多いなかでスタートしたK-1MAX。大盛り上がりの末に終わった70キロ級、本誌発売には間に合わないが、きっと盛り上がって終わっているであろう63キロ級。それぞれ二つの階級は今後、何を課題に進んでいくべきか? 展望を考えてみた。

文／中村拓己（GBR格闘技ウェブマガジン）

「僕はポスト魔裟斗になれないけど、僕なりのやり方でK－1MAXを盛り上げます。僕がチャンピオンになって絶対にK－1MAXは潰させません！　K－1MAXは潰させません！」

今年のK－1MAXのスタートとなった日本代表決定トーナメントは、悲願の初優勝を遂げた長島☆自演乙☆雄一郎の涙ながらのこんな言葉で締めくくられた。

魔裟斗という絶対的な象徴・存在がリングを降りたK－1MAXの船出は厳しいものとなった。魔裟斗引退の影響を受け、ただでさえ大会への注目度が落ちるなか、佐藤嘉洋vsジョルジオ・ペトロシアンの目玉カードがペトロシアンの欠場により消滅し、トーナメントに出場を予定していた小比類巻太信は大会直前に突然の引退を発表し、欠場を申し出た。

さらにテレビ中継では真裏で浅田真央やキム・ヨナが出場するフィギュアスケートが放送されることも決定。そんな状況を察した選手たちからは、大会までの会見などの公の場で「K－1MAXは崖っぷち」「視聴率を獲らなかったらやばい」という言葉が飛び出していた。

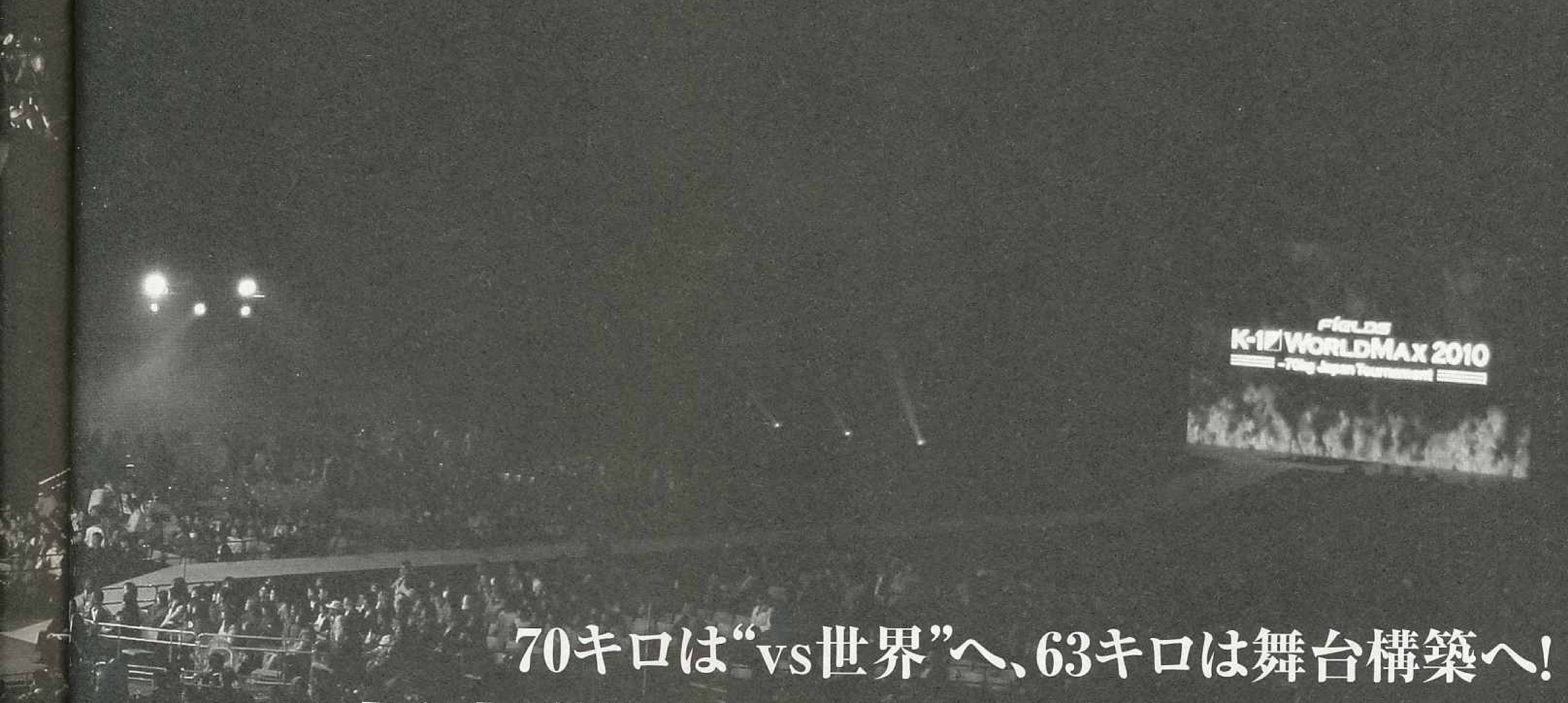
しかしいざ蓋を開けてみると、大会は近年まれに見る熱戦が続出。決勝戦で長島と中島弘貴が見せた倒し倒されのド突き合いは、これぞK－1と唸らせる激しいものとなり、平均視聴率でも10・7パーセントと〝二桁奪取〟に成功。選手たちの危機感が試合内容につながり、それが大会の盛り上がりとなったわけだ。

魔裟斗がいなくても大会は盛り上がるし、テレビ的な数字も獲れる。この大会ではそんなK－1MAXの新たな可能性を見ることができた。しかし筆者は決してそれを手放しでは喜べないと思っている。というのもこのトーナメントでは〝vs世界〟というテーマが見えてこなかったのである。

ご存知のとおり、K－1MAXは年頭に日本トーナメントで日本代表を決めて、そのあとに世界トーナメントを開催し、そこで世界王者を決めるというのが基本的なシステムだ。このあとの闘いでは日本王者となった長島、佐藤らを中心に、トーナメントに出場した日本人選手たちが世界一を目指した闘いに挑むという命題がK－1MAXの軸になっていく。

魔裟斗がK－1MAXにおいて絶対的な存在になりえたのは、大前提として世界と闘える強さを持っていたから。魔裟斗のキャラクターや試合のおもしろさがあったにせよ、何よりもまず、魔裟斗が世界チャンピオンになる可能性を秘めた選手であり、魔裟斗がそこに挑む姿に、見ている人間が期待をして〝乗ってきた〟からこそ、K－1MAXはイベントとして確立したのだ。

では、今年の日本人選手たちはどうだったのか。確かにどの試合もスリリングな内容で、手に汗を握るような闘いの連続だった。しかしそれは裏を返せば、それだけ選手の実力が拮抗していたということ。このトーナメントを通じて〝vs世界〟が見えるような、ずば抜けた存在はいなかった。最近の世界大会を見てもわかるとおり、K－1MAXのレベルは確実に上がっている。



ブアカーオ、アンディ・サワーの二強に加え、昨年はペトロシアンという怪物王者まで現われた。しかもその下にはアルバート・クラウスやアルトゥール・キシェンコらがずらり。日本人選手はそのなかに食い込む必要があり、せめて強さという面だけでも魔裟斗同様に〝乗れる〟存在になっていかなければならない。

日本トーナメントにはそういう選手や可能性を見つける場という側面が求められるにもかかわらず、今年はそれがあまり見られなかったのだ。

いちイベントとして考えれば、大会が盛り上がるに越したことはないし、ましてやイベントそのものの危機にあるいまのK-1MAXにとってはなおさらだ。しかしもっと大きな枠でK-1MAXを考えた場合、日本トーナメントが盛り上がる＝世界と対等に闘える特出した存在がいないということは、決してプラスばかりではない。

そして今年からスタートするK-1の新機軸である63キロ級にも選手たちが乗り越えなければならない高い壁がある。MAXには〝vs世界〟という大命題が存在するが、63キロにはそういった軸そのものが現時点では存在しないのだ。つまり、〝K-1の63キロ〟という舞台を築き上げることこそが最大のテーマであり、〝K-1の63キロ〟の象徴となる覚悟が闘いを通して選手から見えてくるかが一番の着眼点なのである。

確かにメンツを見れば各キックボクシング・打撃系格闘技団体のチャンピオンクラスや主力選手たちがずらりと並び、さらにそこにK-1甲子園出身者が混ざるなどして、顔ぶれとしては興味深いメンバーが名前を揃っている。しかし、悪く言ってしまうといまは〝それだけ〟だ。

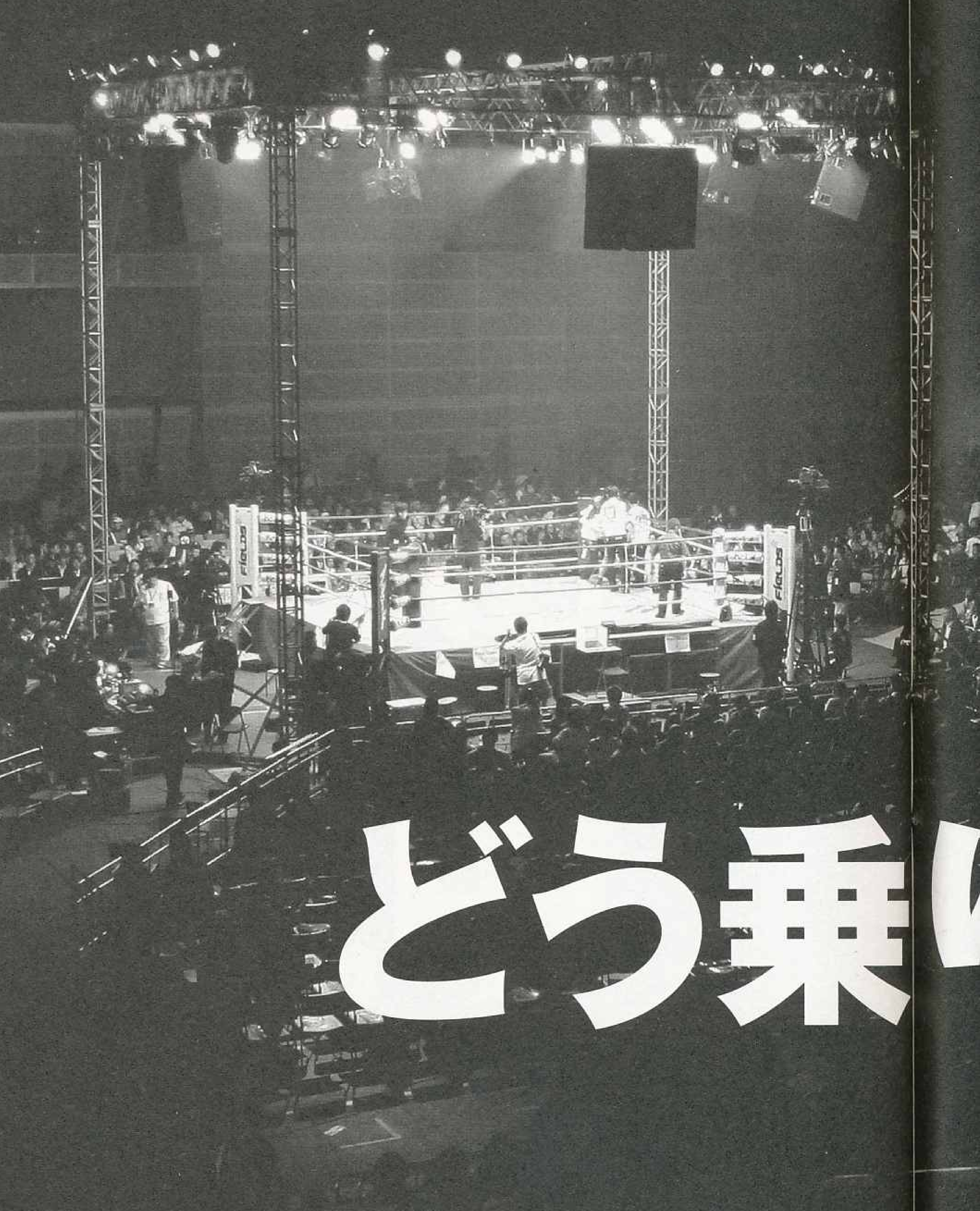
もちろんK-1という大会の規模、63キロという新たな階級で、これまでにないカードが実現したり、ビッグイベントを経験することによって大化けする選手もいるだろう。しかしそのレベルで終わってしまっては、K-1で63キロをスタートさせる意味がない。事実、試験的に行なわれた60キロでの試合は大きな成功につながることがないまま消滅してしまっている。

たとえば昨年、K-1ルールで行なわれているイベントKrushではフェザー級グランプリ2009が開催され、各団体からトップ選手が集結し、神興行と言ってもいい大会となった。またK-1へ選手を送り込んでいるRISEでは毎大会で60キロと65キロで熾烈なタイトルマッチ争いが繰り広げられている。僕のような格闘技オタクからすれば、そういった大会は充分におもしろく、それだけで熱狂できてしまう。日本一を決める闘いであったり、日本人対決の意地と意地のぶつかり合う場は、もうすでに存在しているのだ。


では、いまのK-1MAXと同じように〝vs世界〟を一つの軸にすればいいかと言うと、そういうわけでもない。このカテゴリーでそのテーマを掲げる以上、避けて通れないのがムエタイの存在。しかしキックボクシングの歴史を見ても、軽量級におけるムエタイ選手の存在はあまりに絶対的すぎて、K-1MAX以上に〝vs世界〟は現実味のない、はるか遠いものになってしまう。

K-1 63キロの選手たちはそういった既存のテーマとは別の何かを自らの手で打ち出していかなければいけない。かたちとして5・2JCBホール大会は日本トーナメント出場者の査定試合として行なわれ、その結果にさまざまな試合の見方やテーマが生まれてくることになるだろう。しかし選手たちに課せられているテーマはとてつもなく大きなものであることは間違いない。「それってわざわざK-1でやらなくてもよくない？」と思われてしまったらそれこそ終わりである。K-1 63キロがただ国内の実力者が揃うだけの舞台でなく、K-1 63キロという一つの舞台として確立させなければならないし、選手それぞれがそのくらいの使命感を持っていなければ、新たなビッグステージを生み出すのは難しい。

魔裟斗がいたことであたりまえになっていた〝vs世界〟というテーマの奪還が求められるMAX。日本一を決める闘い・緊張感のある日本人対決・世界の頂点への挑戦とは違う新しいテーマを打ち出し、舞台として確立しなければならない63キロ。谷川貞治イベントプロデューサーが口にする〝2010年代の新しいK-1〟は正念場からのスタートである。



どう乗



ヴァンダレイ・シウバに心酔する若きMAXファイター

K-1 MAXで PRIDEみたいな試合をしたいんです

K-1 MAX日本代表決定トーナメント準優勝

中島弘貴

“ヴァンダレイ・シウバになりたい”K-1 MAXファイター登場〜！　PRIDE大好きっ子であり、ヴァンダレイに憧れてシュートボクセに入門したという中島弘貴。MAX日本人トーナメントでも、ヴァンダレイばりの豪腕で準優勝を勝ち取った中島だが、彼が歩んできた道はPRIDEにずいぶん左右されている!?　はたしてMAXにたどり着くまでにどんなことがあったのか？

聞き手／細田大志　構成／松下ミワ　写真／乾晋也

——今日も練習ですか？

中島　この前のK－1MAXで拳を痛めたんで来週からです。たぶん打撲ですね。

——中島選手は挑発的な言葉が印象的なので、今日はどんな話が聞けるか楽しみに来たんですよ（笑）。

中島　……。いや……あんまりしゃべれなくて（笑）。慣れてないんで、緊張します。

——あれ？　人見知りですか？

中島　そうなんです。慣れたら大丈夫なんですけど。

——MAX前にバンバン強気な発言をしてた人とは思えない控えめな感じですね。

中島　試合が終わったからですよ。試合前はピリピリしてるし、試合の映像を観た人からは怖いやつだって思われてるみたいです（笑）。

——こうやって話してると、人のよさそうな好青年ですけどね。

中島　ありがとうございます。自分では普通の性格だと思ってるんですけど、トレーナーの新田（明臣）さんからは「すべてがヘン。ほかの人と違う」って言われるし、周りからも「みんなと種類が違う人だ」って言われます。昔からそうなんですよね。

——へぇ～。じゃあたとえば格闘技をする前、学生時代で変わったエピソードはありますか？

中島　ワルではなかったですけど、まじめなタイプでもなく、とにかくワケわかんない学生でしたよ。水筒の蓋を1階に置いて、なかのお茶をどうやって2階から入れるか、とか（笑）。友だちと笑いながらやってました。

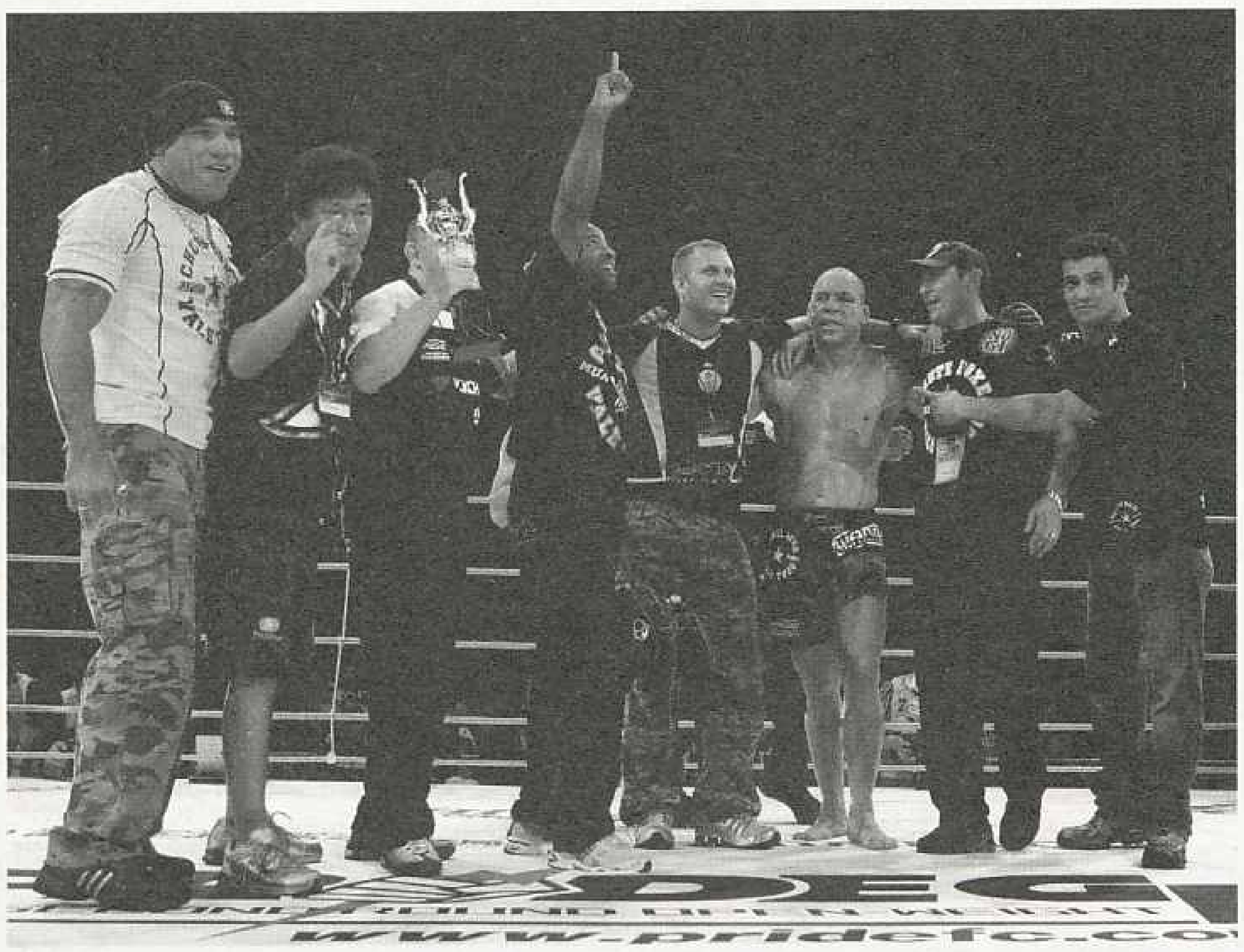
キャッチャーの指示を無視して全球フォーク投げたりしてました。チームプレーが苦手で

——そんなことしてたら変わってるって言われますね（笑）。

中島　あとは授業中、先生が黒板に何か書いているあいだに友だち目がけて消しゴムを投げて、先生が振り返った瞬間にまじめな生徒のフリしてノート書いたり。

——やんちゃな感じだった、と。部活は何をやってたんですか？

中島　中学1年までプロを目指して野球を一生懸命やってました。小学校はセンターで中学校はピッチャーです。チームプレーが苦手だったんで、キャッチャーの指示を無視して全球フォーク投げたりして、キャッチャーもパスボールばっかり（笑）。バッターもまさか全球フォークがくるとは思ってないからけっこう抑えてましたね。でも、途中でプロになるのは無理だと思ってあきらめました。



「僕はリング内でもリング外でもヴァンダレイみたいになりたい」と、どっぷりヴァンダレイに心酔している中島。MAXでヴァンダレイみたいな試合が観られたら、そりゃ燃えること間違いないでしょう!!

——なぜあきらめたんですか？

中島　僕の学校は八王子市だったんですけど、八王子の大会で優勝して、都大会とか出てもレベルが違いすぎたんですよ。

——なるほど。格闘技に興味を持ったのはいつだったんですか？

中島　K－1を見始めたときで、そのときはやろうとまでは思わなかったんです。でも中学生のときにPRIDEでヴァンダレイ・シウバがランペイジ・ジャクソンを倒した試合を観て「これはやらないといけない」と思ったんですよ。

——それでシュートボクセ・アカデミー・ジャパンへ？

中島　はい。高校入学ちょうどぐらいですね。ジムは中野で遠かったんですけど、ほかのジムへ行く気はまったくなくて学校が終わったあとに行ってました。

——ヴァンダレイもジムに来たりしたんですか？

中島　はい。3回ぐらいジムに来たかな？　握手してくれたのを覚えてます。最近の整形は……ちょっとショックでしたけど（苦笑）。

——その気持ちわかります（笑）。当時の話に戻りますが、シュートボクセはハードな練習を課すことで有名ですけど、キツくなかったですか？

中島　かなりキツい練習をしてました。でもほかのジムに行ったことなかったんで、当時はみんな同じぐらいの練習をやってるもんだと思ってたんですよね。それにシウバと同じ練習だし、（マウリシオ・）ショーグンや（ムリーロ・）ニンジャを育てたジットという先生に教えてもらっていたので、これは強くなるな、と。

——中島選手といえばパンチの強さがウリですけど、それはシュートボクセの練習の成果ですか？

中島　そうですね。格闘技を始めた当初はパンチも強くなかったんですよ。入って2年ぐらいして、18歳ぐらいのときから急に。2キロのダンベルを持ってサンドバッグ叩くのを5分10ラウンドやらされて、インターバルが10秒だったんですよ。もう……死ぬんじゃないかって思いました（笑）。10秒だからタイマーが鳴って、時計見たら残り7秒とかなんですよ。

——それはキツい！

中島　毎日練習へ行く前に「今日は倒れて死ぬかもしれないな」って思いながら通ってました。ほかにもガチスパーを休憩30秒で5分5ラウンドでやったあと、最後7分追い込みでまたスパー。それに攻めないとコーチに怒られるんで、殴り合いを30分くらいずっとやってたってことですよね。もちろんヘッドギアは着けないし、たまにスネ当てすら着けないときもありました。「マジ？　試合かよ」って（笑）。いま考えれば凄いことやってたと思いますけど、当時はがむしゃらでしたから。

——当時はPRIDEを目指してたっていうことですけど、プロデビューしてから上がったのはキックのリングだけ。総合の試合にも出たかったんじゃないですか？

中島　はい。でもジムの方針で、立ち技のプロ興行に出てからじゃないと総合をやらせてもらえなかったんです。

——そうだったんですか。デビューから4戦はシュートボクシング（以下SB）で闘ってますけど、それにも理由はあるんですか？

PRIDEも消滅して、シュートボクセ・ジャパンも閉鎖して、最悪の状況でしたよ

中島　全日本アマチュアシュートボクシング選手権で優勝して、SB側からオファーがきたというのが一つ。あとはSBは立ち関節がありなので、PRIDEに向けていいステップになるかなって思ったんです。でも、そろそろ総合やりたいなって思ったときにちょうどPRIDEがなくなって、総合の道を断念せざるをえない状況になってしまったんですよね。僕は総合が好きっていうより、PRIDEが好きだったので。

――ではアカデミーの閉鎖より、PRIDEがなくなってしまったことのほうが総合をあきらめる理由として大きかった、と。

中島　PRIDEも消滅して、ジムも2007年の10月31日で閉鎖になったし、最悪の状況したよ。いまは笑って話せますけど、そのときは目指すものもないし、ジムも潰れちゃったし、どうしようってなりました。

――そのときは何をモチベーションにしていたんですか?

中島　モチベーションになるものは何もなかったですね。とくに何を目指してるでもなく、ジムが閉鎖してから3、4ヵ月は気を紛らわせるために一緒にシュートボクセへ通ってた人と体育館で練習したりしてました。そのなかにはいま『THE OUTSIDER』に出てるメンバーもいましたね。それで、そろそろジムを決めなきゃいけないなってときに、俺はシュートボクセが好きだったからどこへ行く気もしなかったんですけど、練習もしなくちゃいけないし、メンバーはあっちのジム行ったり、こっちのジム行ったりバラバラになっちゃったんです。俺もいろいろなジムへ行ったんですけど、違うなって。それからジムも行かなくなって、一人で走ったりはしてたんですけど、自分の行きたいところもなくてどうしようって。そこからバンゲリングベイにたどり着くまで1年ちょっとぐらいですかね。

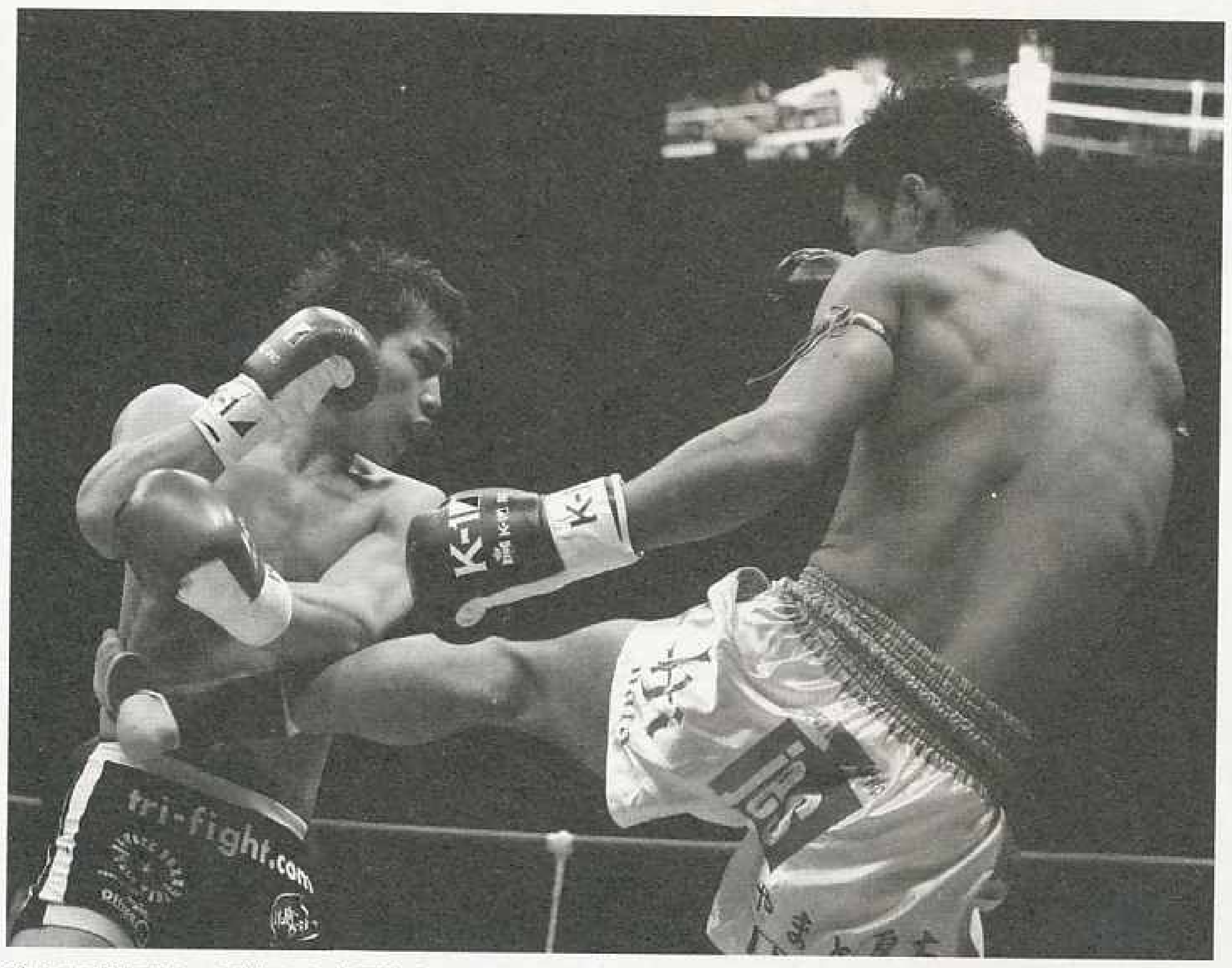
――なぜバンゲリングベイで練習をしようと?

中島　シュートボクセからバンゲリングベイに行った人が何人かいたんです。だから俺もそこへ行ってみようかなって。ほかのジムへ行くと「キックボクシングでそのパンチは通用しないよ」って言われちゃうんですけど、バンゲリングベイだけはそれでいけって、シュートボクセのスタイルを崩さないで教えてくれて、それがしっくりきたんです。

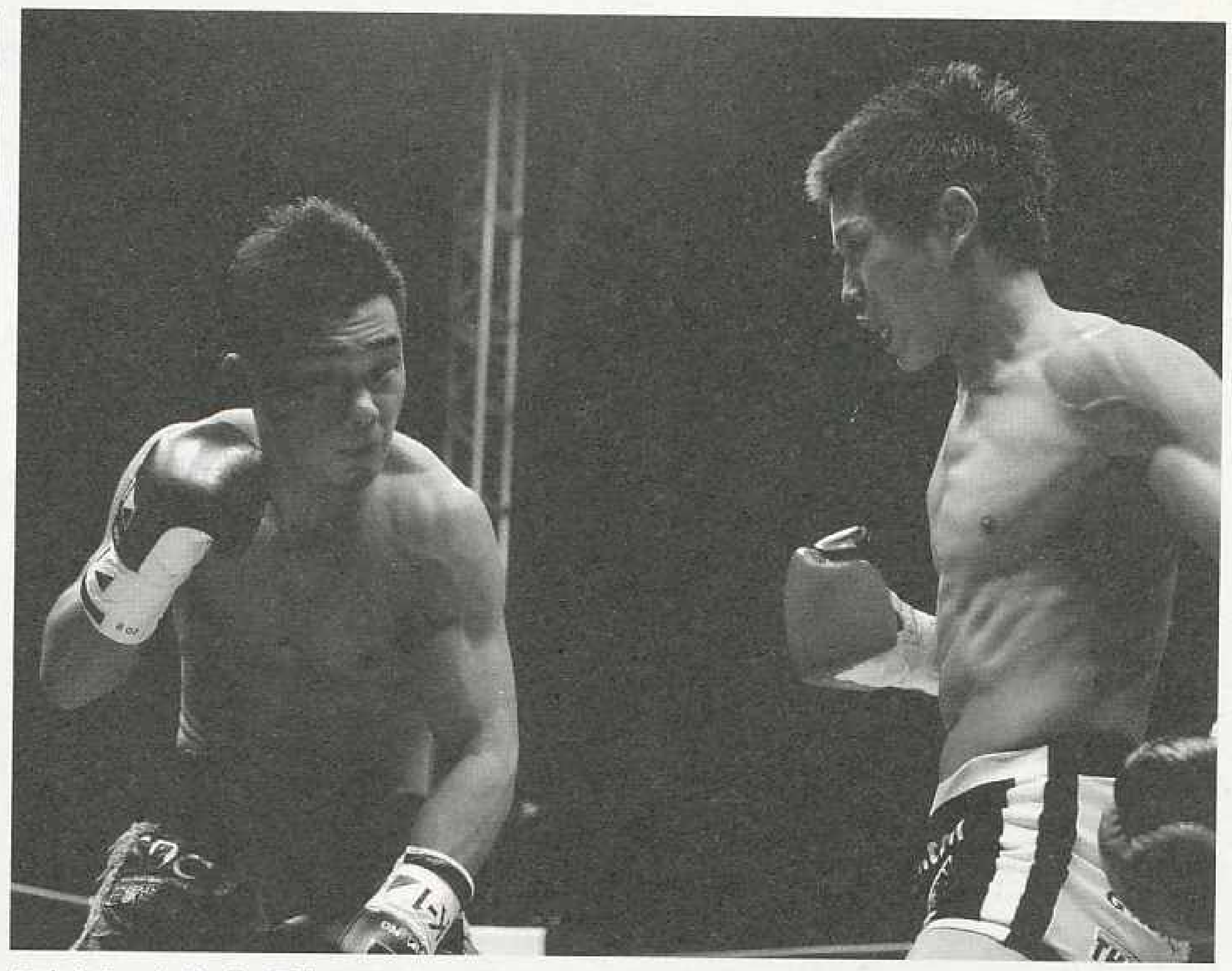
――でもシュートボクセとバンゲリングベイでは練習の内容が違いすぎて戸惑いませんでしたか?

中島　やっぱり最初は戸惑いましたよ。バンゲリングベイの練習に不満はなかったですけど、シュートボクセのほうがよかったんじゃないかって。でも、シウバがそうだったように、おもしろい試合をして最後に倒すのが僕の目標なんで、そのスタイルだけ崩さなければバンゲリングベイでもやっていけるんじゃないかって思ったんです。

――なるほど。なんとか練習環境を取り戻したわけですけど、総合からキックへ気持ちを切り替えるのは難しかったんじゃないですか?



続く2回戦では、1回戦で山本優弥とフルラウンド闘った日菜太と対戦。蹴りと拳の対決となったが、中島の右フックが日菜太のテンプルを捕らえ、日菜太は前のめりにダウン。



日本人トーナメント1回戦のTATSUJI戦では2ラウンド目に自慢の豪腕で二度のダウンを奪い一気にKO勝ち。それでも「あの試合は本来の自分じゃなかった」と言い放つから恐ろしい。

中島　そうですね。最初にPRIDEを目指してたときよりは、気持ちが入らなかった部分がありましたね。でも、僕の出られる可能性がある大舞台といえばK―1 MAXしかなかったですから、徐々に気持ちも切り替えられました。

――総合への未練もあったわけですね?

中島　ありましたよ。やっぱり総合やろうかなって。

――どうやって未練を断ち切ったんですか?

中島　Krushという舞台で強い相手と試合をしていくなかで「いけるんじゃないか」って。それからキックでどこまでいけるんだろうって思い始めましたね。

――そのKrushでは、K―1 MAXに出る直前の試合で判定が続いてストレスも溜まったと思いますが。

中島　溜まりましたね。「スタイルが貫けてないな」って、悔しかったですね。僕にとっては格上の相手だったんで、勝ててうれしかったですけど、帰って思い出すと悔しいとしか思えませんでした。

――でも当時11戦無敗の戦績で、MAX出場に向けて自信もあったんじゃないですか?

中島　そうですね。テレビで観てて、日本人選手は強いですけど「いけるな」って思ってたし、内容も自分からするとつまらなかったんですよ。たとえば佐藤(嘉洋)選手は強いですけど、ああいう試合は佐藤選手の知り合いじゃなきゃおもしろくないじゃないですか。俺はパッとチャンネルを切り替えて「おぉ」って観てくれる試合をしたいんですよね。

――しかし聞いたところによると、MAX出場前に入院されたらしいですね。

中島　そうそう、そうなんです!　1月ぐ



決勝戦の自演乙戦では中島がダウンを奪えば、自演乙もダウンを奪い返すという白熱した試合に。しかし、結果的には自演乙がKO勝利。だが、この大会を通して中島の強さと獰猛なファイトスタイルが広く認知されたのは間違いない。

Hiroki Nakajima

長島戦は熱くなっただけの試合だったんです。もっと冷静にいけば勝てたかもしれない

らいに母親が自分のために鍋を作ってくれて、牡蠣を食ったら次の日にめちゃくちゃ腹が痛くて、歩けなくなって救急車で運ばれましたから。「あ、これ死ぬな」って思いました。これ本当ですよ。

――そんな状況だとMAXに出られるか心配になりますね。

中島　いや、それより「死ぬんじゃないか」としか考えられなかったです。病院のベッドの上でお母さんとか昔のことを思い出しちゃってましたからね。

――走馬灯が見えちゃいましたか（笑）。でも、いざ大会本番では中島スタイルが爆発しましたね。

中島　でも、1試合目のTATSUJI戦は固くなっちゃいました。あれは試合してて自分でもヤバイなと思ってたんですけど、とりあえず1ラウンド終わってコーナーに戻ったらちょうどいらない力が抜けてきたんで、2ラウンドいけると思ったら勝っちゃいましたね。もっとぶん殴りたかったですけど。でも最初は新田さんも白川（裕規）さんも「今日、まずいな」って焦ってたらしいですよ。

――そうだったんですか。準決勝の日菜太戦はそれに輪をかけて凄いKOでしたけど、狙いどおりの展開でした？

中島　新田さん、白川さん、寒川（直喜）に「ミドルの距離潰して、パンチでいけ」って言われたんですよ。やりづらさはありましたけど、自分もそれしか考えてなかったです。でもあんなに早く倒せるとは思わなくて、日菜太選手が倒れたとき、普段だったら最後まで殴りにいくんですけど、ビックリして手が止まっちゃいました（笑）。常に倒すパンチですけど、KOになるようなパンチではなかったんで。

――それも意外ですね。最後、決勝戦には長島☆自演乙☆雄一郎選手が勝ち上がってきて、大会前には長島選手に打ち勝つっていう言葉もあったので、僕は相当ワクワクしながら観てました。

中島　そう言ってしまったのを試合後に思い出したんですよ（笑）。試合してみて強さがわかりましたね。パンチが強いとは聞いていたんですけど、自分が思っていたよりも強かったです。いろいろフェイントかけてくるんですけど、それにやられました。振り返ってみると反省しかない試合ですね。普段の試合であれば熱くなりつつ冷静を保ってるんですけど、長島戦は熱くなっただけの試合だったんですよ。あれは僕がダメなパターンの内容です。熱くなってパンチだけでいっちゃったから、もっと蹴ってればよかったですね。冷静にいけば勝てたかもしれない。

――試合後のコメントではワンマッチでっていう言葉もありましたね。

中島　もう一回やりたいですね、初めて負けた相手なんで。

――初めて負けたわけですけど、試合後はどんな心境だったんですか？

中島　悔しすぎましたね。いまもずっと長島選手との試合を思い出しちゃうし、次やったらどうしようっていうことしか考えてないです。試合のあともみんなが声かけてくれたと思うんですけど、覚えてないです。悔しくて。

総合に出ることになったらおもしろいと思う。でもいまはMAXのことしか考えてないです

――K―1オフィシャルサイトの投票を見ると、あの試合が大会のベストバウトに選ばれてますよ。

中島　うれしいっちゃうれしいですけど、負けちゃったから素直には喜べないですね。

――そうかもしれないですね。でもあの試合で足りないところや収穫もあったんじゃないですか？

中島　経験が足りないと思いました。もっと経験値があればあそこで熱くならずに蹴りを出していけたし、ポイントでも勝ってたから……いや、でもおもしろい試合して勝つのが俺なんで、そういう闘い方もどうなんでしょうね。やっぱり最後、倒しにいったほうがよかったですよね、あれ？

――もちろん、そうだと思います。中島選手のスタイルがあってこそのあの試合だったと思いますから。

中島　自分がポイントで勝ってても最後に倒しにいく。それが目標なんですけど、やっぱり負けた直後は、あそこでいかないほうがよかったのかなって思っちゃったんです。でも試合から少し時間が経ったら、もっと練習してあそこで倒して勝てる選手になりたいなって思い直しましたね。

――2KOして、最後も殴り合うインパクト大の試合で周りの反応も大きかったでしょう。

中島　最後に負けたんで、自分ではそんなにいい印象じゃなかったんですけど、周りの人は「よかったよ」って。たまに歩いてる人に声かけられるんですけど、なかには俺のことを怖いと思ってる人もいて、ジーッと見るだけで最後まで話しかけられなかったりすることもあります（笑）。

――こうやって話して中島選手本来の姿を知ってるとそんなことないんですけどね（笑）。

中島　だからシウバみたいな感じですよ。普段は優しくて、試合で怖いっていう。

――ファイトスタイルだけじゃなく、中島選手はまるまるシウバなんだ、と。

中島　……はい、ということに（笑）。強気な発言するのだって、試合決まって記者の方に意気込み聞かれたら「いやぁ、どうですかね」とは言えないじゃないですか。「これを言っちゃったら負けられない」って、自分を奮起させるためにもなるし、観てる人からしたらそうやって言ってる人が本当に強かったらおもしろいじゃないですか。

――魔裟斗選手みたいな？

中島　そうですね。まぁ魔裟斗選手だったら最後負けないと思うんですよ。それが悔しいです。

――なるほど。今年MAXに出るという目標もかなえてひと段落して、総合にチャレンジなんて気持ちはないですか？　いまは総合からキックへ出る選手も増えてますし、中島選手の場合、総合のベースもあるわけじゃないですか。

中島　そうなったらおもしろいかなって思ったりはしますけど、いまはMAXのことしか考えてないですね。俺はPRIDEファンだった人にK―1 MAXのリングでPRIDEを見せたいんですよ。

――おぉ、グッとくる言葉ですね！　中島選手ならできる気がします。

中島　いまでもPRIDEのDVDは観るし、オープニング、試合、最強の選手が集まってるのもそうだし、煽り映像が大好きなんです。だから煽り映像とか俺だけのために佐藤（大輔）さんに作ってもらえないかなって。どんな感じになるのか。大会のときに俺の煽りだけおもしろいじゃねえかって（笑）。

――どんどん呼びかけたほうがいいですよ（笑）。

中島　本当ですか？　PRIDEを目指してるとき、俺の煽り方はどんな感じになるのかなって妄想してたんで、ぜひお願いしたいです！

――中島選手の願いがかなうか、乞うご期待ですね。最後に今後の目標を教えてください。

中島　シウバみたいにアグレッシブでおもしろい試合をして、最後はKOで勝つ。勝ちまくってハムスターに長生きしてもらいたいと思います。

――最後の最後にまた意外なキャラクターが出てきましたね（笑）。ハムスターを飼ってるんですか？

中島　俺は動物で一番ハムスターがかわいいと思ってるんですよ。めちゃくちゃかわいいですよね？

――あれをかわいいと言わず、なんと言うんですか（笑）。何匹飼ってるんですか？

中島　いまは1匹です。でも心配事が一つあって、ハムスターって寿命が2年なんでいつ死んじゃうかわからないんです。だから試合前とかに死んだらどうしようって毎回ハラハラしてて、MAX出るときも相当心配させられました（笑）。

――牡蠣に当たった意外にもまた別の闘いがあったわけですね（笑）。名前はなんていうんですか？

中島　プリンっていう名前です。もう死んでしまったんですけど、もともともう1匹いて名前はヒョードルでした。

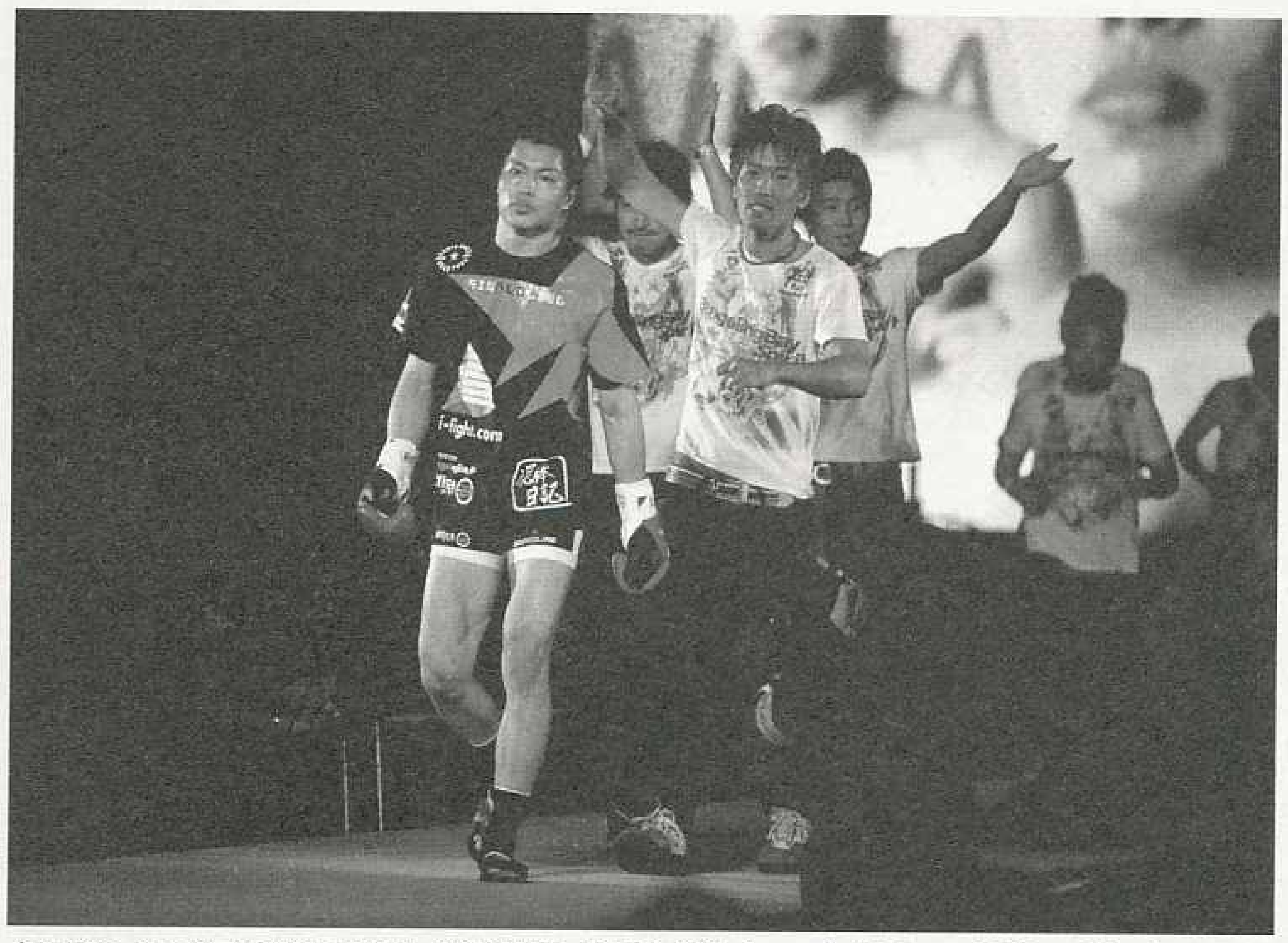
――そんなところにもPRIDE愛が（笑）。

中島　プリンは茶色なんですけど、ヒョードルはジャンガリアンハムスターで毛が白っぽい感じだったのでそういう名前にしたんです。白っぽい時点でヒョードルなんですけど、プリンとケンカし始めたら、絶対にヒョードルが上取って勝つんですよ（笑）。

――ハハハ、名前と実力が一致してますね。じゃあ試合に勝ってハムスター王国を作るというのはどうですか？


中島　それもいいですね、大きな小屋を買ってあげて長生きしてもらいます。

【10年4月10日／都内・バンゲリングベイ駒沢にて収録】



なかじま・ひろき■1988年7月5日、東京都出身。高校入学後、シュートボクセ・アカデミー・ジャパンに入門。06年にシュートボクシングでプロデビューし、Krushライト級GPで優勝。これを機にK-1MAX出場権を得て、MAXの日本人トーナメントでは準優勝。ヴァンダレイへの心酔っぷりはいまだに健在。176cm、68kg。

Hiroki Nakajima



MAX新世代が考えるこれからのK-1とは!?

え!? ウルティモ・ドラゴンと花見!?

僕はコスプレなんかしません!

それでも蹴り続ける男

日菜太

K-1 MAXの次代を担う象徴的存在といえば、日菜太は間違いなくその一人である。
今回の日本人トーナメントは優勝にこそおよばなかったが、その覚悟の闘いぶりは見事。
インタビューでは試合後に考えたこと、そしてこれからのK-1 MAXの盛り上げ方について
語ってもらった。でも、日菜太はコスプレはしませんから!

聞き手／長谷川亮　構成／松下ミワ　写真／乾晋也、丸山剛史

――試合から10日が経ちましたが、あれからどうすごしていたんですか？

日菜太　やっと昨日からロードワークを再開しました。こんなに休んだのは人生で初めてです。いっつも2〜3日で再開してるんですけど、今回は初めて10日も休みました。

――身体のダメージはもちろんでしょうけど、やはり心痛が……。

日菜太　いろいろ言われました（苦笑）。あまり格闘技に詳しくない人でも口を出すというか、ほんと負けってこんなに人生変えるんだなって。2試合目しか観てない人には「何秒で負けたっけ？」とか言われて、クッソーって。でも、どんな組み合わせであれトーナメント3試合を勝ち抜く力がなかったのが一番悔しいです。

――じゃあ人に会わず、いっそ引きこもりたくなるような。

日菜太　「なんで負けたの？」とか、どこ行ってもそればっかりで。でも引きこもっていたかったんですけど、うちの社長に「ちょっと出てこいよ」って言われて。まぁもちろん悔しさはありましたけど、みんな励ましてくれたりもするので。

――〝社長〟というのは、なんの会社なんですか？

日菜太　地元のトーシンホームっていう住宅の会社に、選手として専念してできるよう雇ってもらっているんです。

――そういえば、社名の入ったTシャツで応援の人がたくさん来てましたね。

日菜太　今回も400人くらい来てくれて。

――凄い！　過去最高ですか？

日菜太　過去最高は去年の10月ですかね。10月は500人近かったんで。

――新宿FACEならいっぱいですよ！

日菜太　それだけの人が勝つと思って来てくれるから、練習も手を抜かずやれたりもします。まぁ400人来てくれてみんな違う意見を持ってるから、ちょっとつらいことを言われたりもするんですけど（苦笑）。でも一流の選手たちはみんなそれを越えていってるので、僕もはい上がっていきたいです。

――そういう口さがないことを言われたときはどうするんですか？

日菜太　とりあえず「すいません」しか言えないですよね。心のなかでは「クソ、何もわからないくせに」って思いますけど。やっぱりいろんな人がいろんな意見を言うわけで、「日菜太はワンマッチだったら強いけど、トーナメントには向いてない」とか。でもこれからはトーナメントで勝てるスタイルに変えていかないといけないかなって。

――いろいろ言われるなかでも、そこは少し思うところがあったのですか？

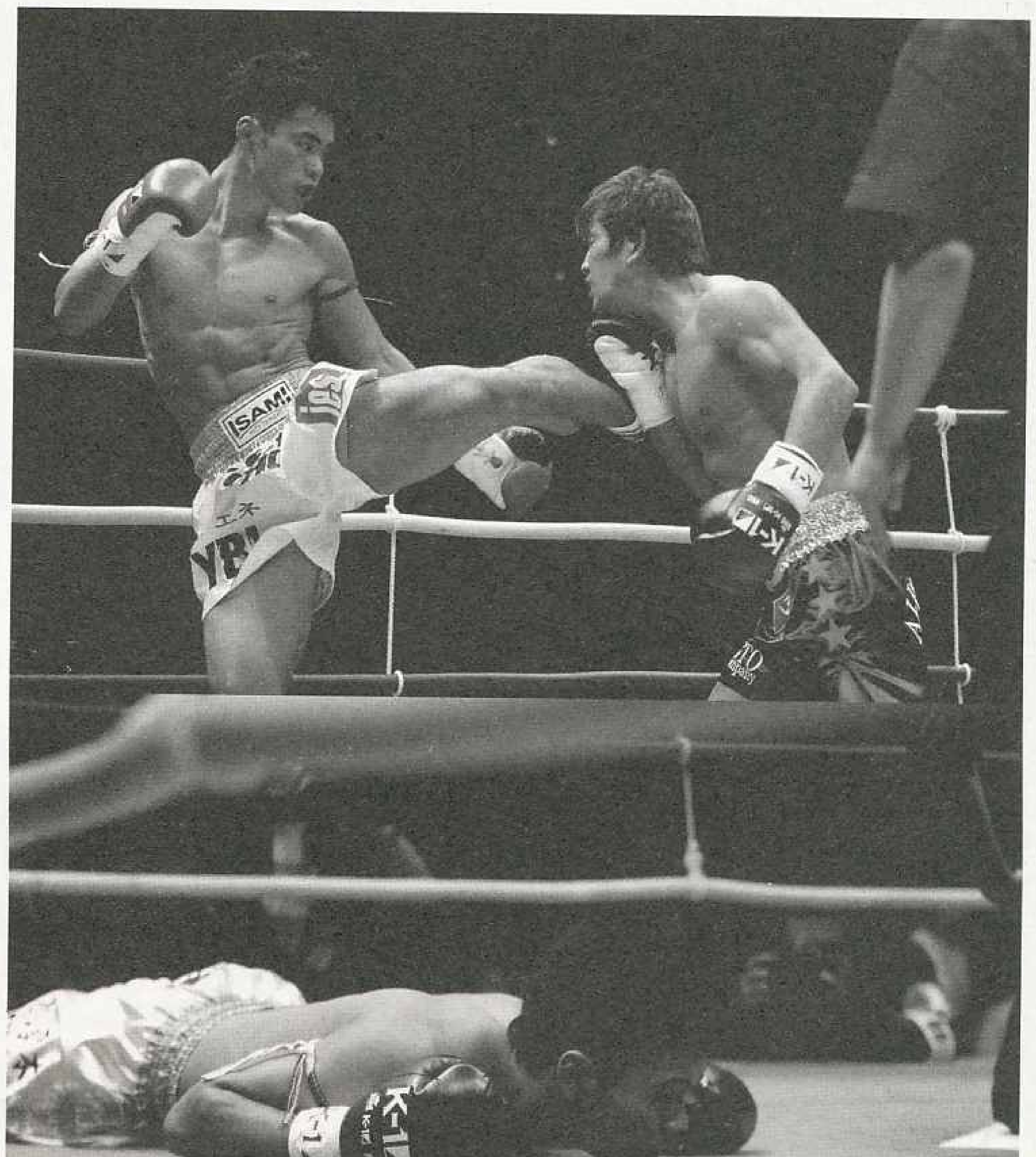
日菜太　でもこのスタイルは僕の代わりにできる人はいないと思うし、そこは譲りたくないんですけど……。だからもっと、蹴り続けて倒せるスタイルに。みんなパンチができるからパンチでやってるわけで、僕はそこを蹴って倒していきたい。

――K-1初登場の去年は大学生として注目されましたが、社会人1年生としてすごしたこの1年はいかがでしたか？

日菜太　ほんと凄くいろんなことがあったんですよ。7月はほぼ勝ってる試合を最後延長でダウンを取られて悔しい負けになって、10月の試合前にはうちのお父さんが亡くなって、そういうキツいなかでやってきて。でも、ほんと1年よく練習したと思います。

――お父さんは日菜太選手を応援してくれていたんですか？

HINATA



1回戦に〝一番強い〟山本優弥を自ら指名した日菜太。その心意気と試合は白熱したものとなったが、2回戦の中島戦では山本戦後の疲れが見え、なんとKO負けに。しかし、負けっぷりもまたすがすがしく、日菜太幻想はいまだ健在だ。

日菜太　たぶん普通に会社へ入ってほしかったと思います。お母さんもそうだと思うんですけど、普通の生活をしているほうが。うちはお姉ちゃんがいるんですけど8つ歳が離れてて、高校を卒業したら家を出ていってしまったので、一人っ子みたいなところもあって。

――まぁ親御さんとしては格闘家っていうのは心配がつきないでしょうし。

日菜太　本当は今年のベルトを獲って見せてあげたかった、っていうのを一番思っていたんですけど……。あと、応援してくれる人たちのなかでもよく「気持ちが弱いから最後にもらっちゃったんだ」とか言われて、気持ちでは負けてないと思ってるんですけど（苦笑）。

――日菜太さんの周りは言うことがだいぶ厳しいんですね（苦笑）。

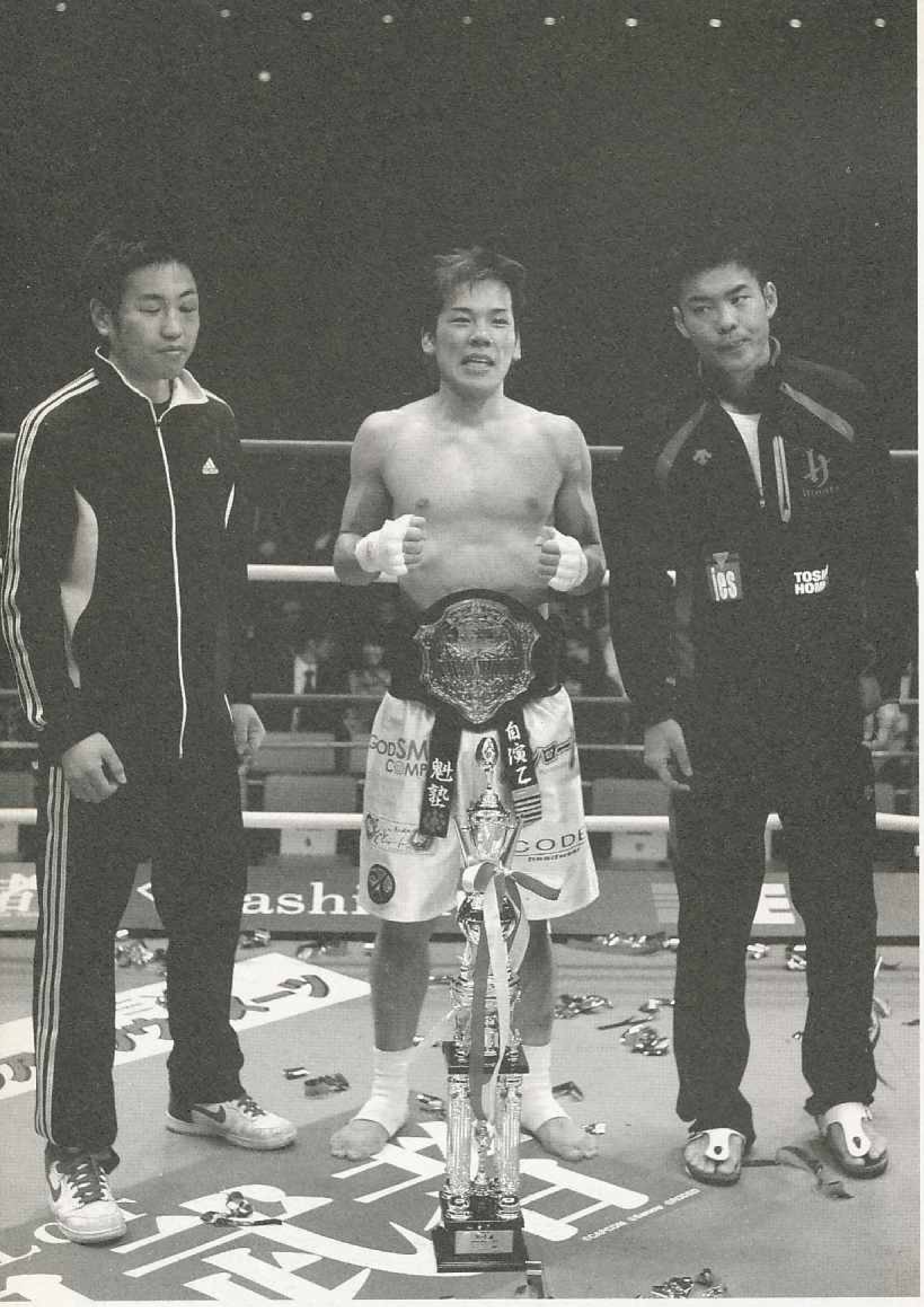
日菜太　けっこうズバズバ言う人もいます。やっぱり僕って普段弱そうじゃないですか（笑）。だからけっこう言いやすいのかもしれないです。でも、期待してなかったら誰も何も言わないし、そのぶん期待されてるんだなって。自分ではそういうふうに受け止めています。

――今年は1回戦から山本選手と〝事実上

蹴り続けるスタイルは僕の代わりにできる人はいないと思うし、そこは譲りたくない

このあいだ、ある人に「キミはなんのために格闘技をやってるの?」って聞かれて……

の決勝〟と言われた対戦でした。
日菜太　優弥さんは本当に強かった。僕は自分もレベルが上がってるし、もっとダメージなく勝てると思ってたんですけど、予想外っていう言い方はおかしいですけど足が効いちゃって……。痛み分けですよ。いまでも（※大会から11日後）まだ足が痛いですから。だてに去年の世界ベスト4じゃないなって思いました。
――去年は城戸選手、今年は山本選手と、その年の下馬評ナンバーワンを降しながらも優勝できず、どこか不運な印象もありますが……。
日菜太　でも僕が自分で「やりたい」って選んだからそこはなんとも言えないし、運がなかったとは言いたくないです。
――去年も自分で城戸選手を選びましたし、率先して貧乏くじを引きにいってるような……。
日菜太　周りも「やめとけ」って言ってました。でも、また来年機会があるなら、こういうことはやめようかと思ってます。
――さすがに二年やって思うところがあったのですか？
日菜太　もう優勝狙って（苦笑）。でも、佐藤さんを別にして優弥さんが日本人で一番強いってみんな思ってるじゃないですか。それを倒して日本一になるのが僕のなかで最高の条件だったんです。やっぱり名前がある人、強い人を倒していくのが新しいスターっていうか、みんなが認めてくれる存在になれると思うんです。圧倒的に強いヤツ・強いヤツ・強いヤツって、3回勝って優勝したっていうふうにしたかったんです。でもこのままじゃ、昔のジェロム・レ・バンナみたいになっちゃいますよね。
――強い選手に勝つけど最終的には優勝できない、みたいな。
日菜太　試合前はそういう強いヤツが相手でも3試合勝ち抜けると思ってたんですけど、あそこまでダメージ差が2回戦に響くと思ってなくて。あと今回、1回戦が終わってから準決勝までの早さが尋常じゃなかったんです。控室に戻ってグローブ外してひと息ついたら、新しいグローブをはめて「もう行ってください」って言われて（苦笑）。それで自演乙と龍二選手の試合も3ラウンドやるかと思ってちょっと座って待つかと思ったらもう終わったって言われて、「青コーナーから早く入場してください」みたいになって（苦笑）。入場も、TBSがいつものタイミングじゃなく1分半以内に入ってくれって言われたり。
――DJ選手もそう言われて〝エア氷室〟を早く切り上げたと言っていました。
日菜太　キツかったですね。でも来年こそは優勝したいです（実感を込めて）。トーナメントっていうのは持って生まれた運もあるのかなぁって思うところもあって、今回乙くんはみんなに自信を持たれてたと思うけど、そういうなかでそれを覆して勝ったから、運を引き寄せるものがあったんだと思います。
――日菜太選手自身はこれまでの人生で、「いいところまで行くんだけど最後のところで運がない」みたいなことがあったんでしょうか？
日菜太　うーん、そうなのかもしれないです（苦笑）。最後に悔しい思いをして、3歩進んで2歩下がるみたいのが多いんですよね。でも確実に進んでいるとは思うんで、最後に一回でもいいから世界王者になりたいです。
――ちょうど名前の出た長島選手のコスプレに関してはどう思っていますか？
日菜太　長島選手はあれが仕事ですから。「ああしないとテレビが映してくれない」って言っていました。だからそれは彼のプロフェッショナルなスタイルなんですよ。
――日菜太選手のプロイズムといいますか、そういった面はいかがですか？
日菜太　テレビには映りたいです。このあいだある人に「キミはなんのために格闘技やってるの？」って言われて、僕は普通に「世界チャンピオンを目指してるから」って言ったんです。でも「それは甘い考えなんじゃない。お金持ちになりたいからやってるんじゃないの？」って言われて、確かにそうなのかもしれないって思っちゃったんです。僕はそういうハングリーさがないのかもなって。一番になってお金を稼ぎたいっていう、そういうモチベーションは大事だと思うし。そう言われて、少し思うところがありました。でも、ほんと上へ上がっていって、恩返ししたい人がたくさんいるんです。チャンピオンになるとならないじゃ人生で全然違うし、世界チャンピオンになっての風景を見てみたいですね。
――今回は魔裟斗選手がいなくなって初めてのMAXで、どの選手も気持ちのこもったファイトを見せてくれましたが、日菜太選手もそういう思いがあったのでしょ



大会終了後のリング上では、優勝の喜びを隠せない自演乙と一緒に記念撮影。しかし、自演乙とは対照的に、日菜太は悔しさを隠せないこの表情。なんともステキなワンショットである。

うか。
日菜太　僕は、MAXはやっぱりおもしろいんじゃないかって思うんです。今回はMAXのあとで亀田を放送したじゃないですか。そしたらなおさら「K-1のほうがおもしろかった」っていう人が僕の周りでたくさんいて。やっぱりみんな早いラウンドで倒しにいくっていう気持ちがあって、バンバンいくし。

――自分が引っぱっていく、盛り上げていくぞっていう気持ちは？

日菜太　自分が一番になって、一番盛り上げたいっていう気持ちは充分あります。でも入場とかも大事だと思うんですけど、試合内容とか結果で引っぱっていきたいです。「日菜太の試合はおもしろい」って。なかには入場半分、試合半分みたいな人もいるじゃないですか。でも、僕は試合で魅せたいです。「中味重視」で、まぁほかにも何かできることがあれば。

――たとえばテレビでTBSだったりすると、優弥選手も出ていた『オールスター感謝祭』とかありますけど。

日菜太　出たいですね。マラソン自信あるんですよ。絶対、僕速いと思います。K-1 MAXのファイターでそういうランニング勝負だったら負けないです。

――ヌルヌル相撲のほうだったら？（笑）。

日菜太　それは困りますけど（苦笑）。

――でも、そういった面では長島選手のほうがコスプレで露出が多いので、嫉妬を感じたりはないですか？

日菜太　べつにコスプレはいいと思うんですけど、実質しゃべり的なものはそんなにでもないのかなって。

――言いますねえ。

日菜太　いやいや、大会前の記者会見とかもツンデレなのかしれないですけど、べつにおもしろいこと言わなかったし、しゃべり的なものだったら渡辺カズ（一久）さんのほうが全然おもしろいんじゃないかと思います。

――日菜太さん自身は何かああいったオタク的な趣味だったりはないんですか？

日菜太　僕もマンガとか好きですよ。でも『ジャンプ』、『ヤンジャン』とかのやつですけど（笑）。

――じゃあ、ちょっと奇抜なほうは乙選手に任せて、日菜太選手は王道で、と。

日菜太　そうですね（笑）。

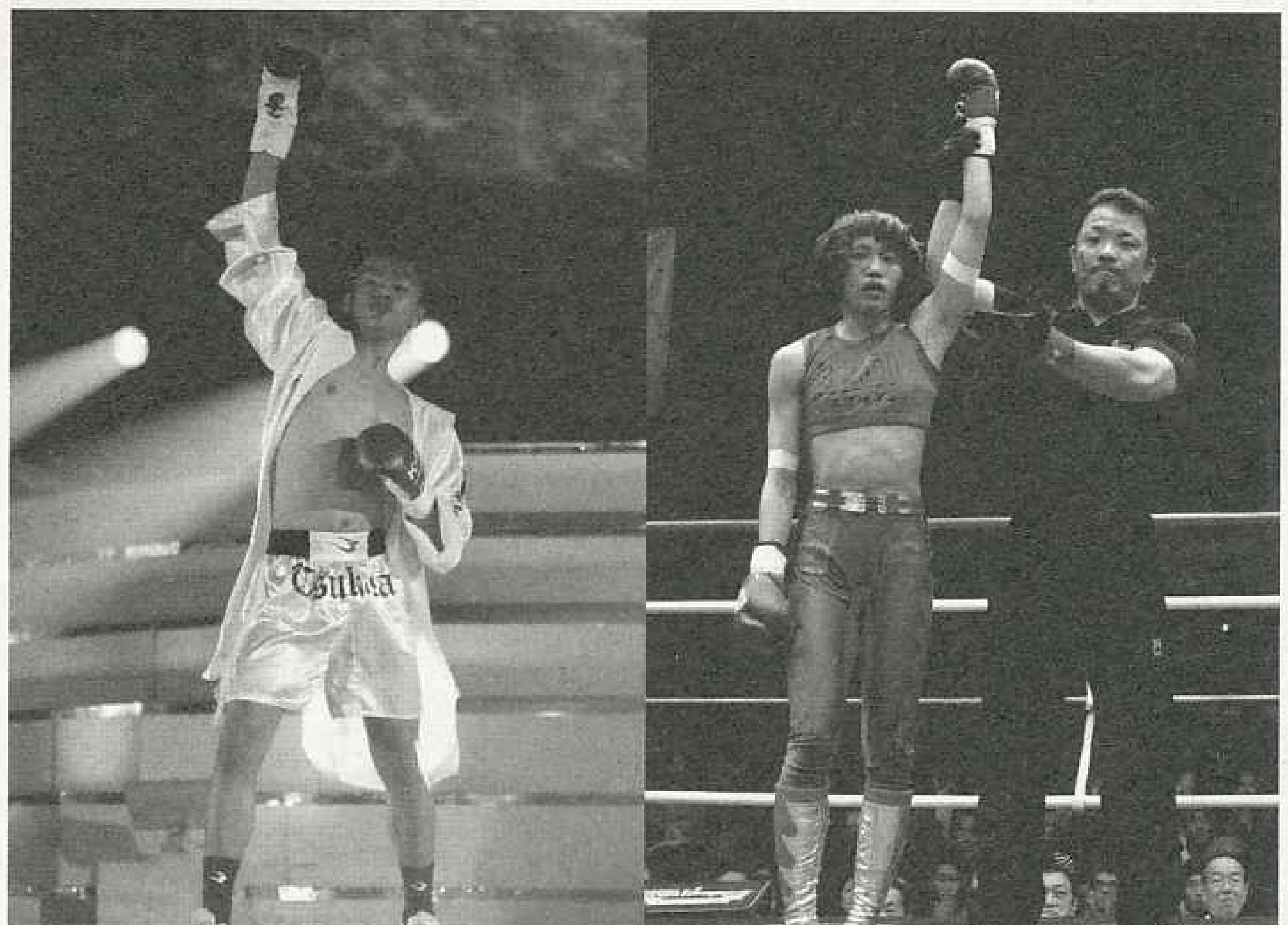
――あと今回は魔裟斗選手がいなくなったことを受け、佐藤選手や長島選手から「K-1を潰すな」といった発言も聞かれましたが、日菜太選手はそれを聞いてどう思いました？

日菜太　でもそういうことを言ったら、みんなよけい「K-1潰れちゃうの？」って心配すると思うんです。だから逆に「安泰なんだよ」っていうぐらいの試合を僕らがすればいいわけじゃないですか。いまは万人受けするスターはいないけど、みんなの個性で引っぱってる感じなのかなって思うんですよね。本当は僕が魔裟斗さんの一番の挑戦者になりたかったんです。最後もペトロシアンとやってほしくて、そうすればスパーリングパートナーで呼ばれる予定があって。拳を交えてやってみたかったですね。だからいまでも僕がチャンピオンになって、1年2年ぐらいして魔裟斗さんが戻ってきたいって思ったときに迎え撃てるようにしたいって思うんです。

――「魔裟斗、戻ってこい」ってリング上から呼びかけたりですか？

日菜太　いや、それはちょっと……。前の藤鬥嘩裟みたいになっちゃうじゃないですか（苦笑）。

HINATA



なんと、日菜太が練習しているジムへはKGこと朱里が出稽古、藤鬥嘩裟も練習仲間だという。インタビュー中に出てくるそれぞれの印象やエピソードには思わず笑ってしまったぞ！ 朱里も藤鬥嘩裟もガンバレ！

――J-NETWORKで王者になったときに「ヒロヤ選手に一言。絶対に負けません！」って叫んだシーンですね（笑）。

日菜太　あれはおもしろく使われちゃってかわいそうでしたけど、そういうのじゃなくて僕は本当の意味で闘ってみたいです。

――その藤鬥嘩裟選手とはいま一緒にトレーニングをしてるんですよね？

日菜太　はい、鬥嘩裟とはたまに一緒にやってます。まぁ、あいつはいろいろかわいそうなヤツなんですよ（苦笑）。人付き合いもうまくないし、愛されキャラだとは思いますけど。

――鬥嘩裟選手に対しては、何かお兄さん的視点で見ているようですね。

日菜太　そうですね。でもちょっと甘えてる感じもあるから、それをなくして頑張ってほしいですね。トレーニングでも一人だけ先生に「今日ちょっと足が痛いんで1本休んでいいですか？」とか言うんですよ。そういうところはなくしたほうがいいかなって思います。

――7月の世界大会開幕戦に推薦出場で名前も挙がっていますが、今後はいかがですか？

日菜太　どんどん出ていきたいですね。それじゃなくてもオランダとかヨーロッパでどんどん試合をしたいと思ってます。僕に足りないのは経験だと思うんで。よくプロレスの人も海外武者修行とかするじゃないですか。僕もそういう考えを持ってるんです。もし7月にオファーがなければ、海外で練習して試合してもいいんじゃないかって思ってます。

――話が出たので聞きますが、日菜太選手はプロレスはお好きなんですか？

日菜太　僕こないだ山田邦子さんのお花見に呼ばれて行って、そこでウルティモ・ドラゴンさんにお会いしたんです。さっきの話はドラゴンさんに言われた話だったんですけど。

――さすがウルティモ・ドラゴン！

日菜太　で、世界チャンピオンを目指してるって言ったら「そういうので目指してるヤツはメキシコにはいない。そういう根本的なものにお金は関係してあるんじゃないか」ということをドラゴンさんが凄く言ってくれたんです。いろいろ精神面の

コスプレはべつにいいと思うんですけど、乙くんはしゃべり的なものはそんなでもない

山田邦子さんのお花見に呼ばれて そこでウルティモ・ドラゴンさんに お会いしたんです



ひなた■1986年8月26日、神奈川県出身。高校のサッカー部を引退後、湘南格闘クラブに入門し、04年にプロデビュー。08年にはRISE70キロ王者決定戦で龍二に勝利し、見事ベルトを手に入れる。09年2月にK-1MAXデビュー。10年日本人トーナメントでは中島弘貴に敗れ2回戦敗退となるが、その幻想はいまだ健在である。181cm。73kg。

話とかもして、凄いプロなんだなと思いました。あとプロレスは中3の終わりか高1の初めぐらいに、会場のイス並べのバイトをしました。平塚総合体育館で、蝶野選手とライガーとか出てましたね。プロレスラーが間近で観れるから友だち同士でヤベぇヤベぇ行ってみようぜって。凄く楽しかったですよ。

――プロレスつながりで言えば、元KGの朱里選手と練習を一緒にしているとか。

日菜太　あぁ、あの人KGっていうんですか。うちのジムへ練習に来てるのは見たことあるんですけど、話したりしたことはないですね。でも、シュートボクシングのとき（風香戦）は観に行きましたよ。基礎体力は凄いし、もっとちゃんとやればキックボクシングは全然強くなると思います。ただ、いつも思うんですけど格闘技やってる女の人って怖いですよね。

――唐突ですが、何が日菜太選手にそう言わせるんですか（笑）。

日菜太　いや、女の人のほうが気が強かったりするじゃないですか。もらってもいったり。怖いなって（苦笑）。

――じゃあ女子格闘家は付き合ったりする対象としては……。

日菜太　ちょっと怖いですね（苦笑）。

――湘南格闘クラブ所属の日菜太選手は入場曲も湘南乃風を使っていますね。

日菜太　はい、もうずっとRISEの頃から使ってて、変えてないです。僕の目標は湘南乃風に歌ってもらって入場したいんです。やっぱり同じ地元の湘南つながりだし、高校の頃から聴いていたので。そうなれるようになりたいです。やっぱり地元の人が応援してくれて、地元の人がたくさん観に来てくれるんで、地元からK－1を盛り上げていきたい。平塚市だけは視聴率60パーセントとか（笑）。湘南から世界に行きたいですね。

――でも、地元じゃもう立派なヒーローなんじゃないですか？

日菜太　いやいや、まだまだ全然です。まぁ「サイン書いて」っていうぐらいはありましたけど。まず市民栄誉賞をもらって、次に神奈川県民賞をもらえるように（笑）。

――じゃあ世界チャンピオンになったらパレードとか（笑）。

日菜太　はい、ベルマーレと一緒に！

――やっぱりそういう地元への愛着はあるのですね。

日菜太　ありますね、ずっと地元にいるので。都内へ練習に通うのも、地元にいるのが好きだから練習に通うわけで。だって都内で練習するんだったら都内に住めばいいじゃないですか。それでも通うっていうことは、やっぱり平塚でやりたいんですよね。

――"平塚愛"がある、と。

日菜太　都内へ行って思うのは「こういうところには住めないな」って。明るいですよね。

――あまり「明るい」という言葉を悪い意味では使わないと思います（笑）。

日菜太　夜とか人が多いじゃないですか。車も多いし。静かじゃないというか（苦笑）。

――では日菜太選手は地元密着型のヒーローを目指していく、と。

日菜太　うーん、そうなれるように。でも、どんなになっても明るく謙虚にいきたいです。どんなに上へいっても謙虚に、いつも自分らしさを出して、言いたいことは言えるように。

――わかりました！　今日はいろいろお話ありがとうございます。ぜひ"湘南のロッキー"目指して頑張ってください！

【10年4月7日／都内・後楽園ホールにて収録】



第2代全日本スーパーフェザー級王者
石川直生

生年月日　1979年4月18日
出身地　東京都
身長／体重　177cm／60kg
所属チーム　青春塾

全日本キック時代から「軽量級を世に出す」と宣言し続け、キックボクシングへのこだわりを強く持っていた時期もあったが、軽量級の未来を変えるべくK-1に参戦。端正なルックスと倒し倒されのスリリングな試合は大舞台でも受けることは間違いなし。この階級の軸になりうる存在の一人だ。またプロレスファンということもあり、試合前後のインタビューで見せる語りと言葉のチョイスは秀逸。青木真也とも親交が深い、通称"ナオキック"。



韓国ムエタイジュニアライト級王者
チョン・ジェヒ

生年月日　1986年5月29日
出身地　韓国
身長／体重　168cm／60kg
所属チーム　プサン・テサン・ジム

K-1復帰戦となった山本"KID"徳郁の対戦相手として連れてこられた感が強かったものの、そのKID戦では戦慄のKO勝利。続く渡辺一久戦でもきっちりと勝利を収め、その実力が確かなことを証明した。フィジカルの強い韓国人選手らしいパワフルなパンチと蹴り。またKIDや渡辺といった"本能系"のファイターとも真っ向から打ち合うハートの強さも持っている。日本トーナメントの候補に入っているのが謎だが、注目選手であることに変わりない。



ISKA世界ライト級王者
上松大輔

生年月日　1984年10月3日
出身地　愛媛県
身長／体重　173cm／60kg
所属チーム　チームドラゴン

昨年、試験的にスタートしたK-1 60kg時代からエース候補として期待を集めていた存在。モデル業もこなすイケメンで、チームドラゴンの前田憲作会長に「全部面倒見てやる」と言われて上京するなど、テレビ的なブレイクの要素もたっぷり。ただしファイターとしては実力者との対戦が少なく、また階級の壁（もともと上松は60kg前後で試合をしていた）もあり、なかなか結果を出せないのが現状。今後の飛躍にとって最も必要なものは"強さ"か。



WPKC世界ムエタイライト級王者
大月晴明

生年月日　1973年12月30日
出身地　京都府
身長／体重　165cm／65kg
所属チーム　フリー

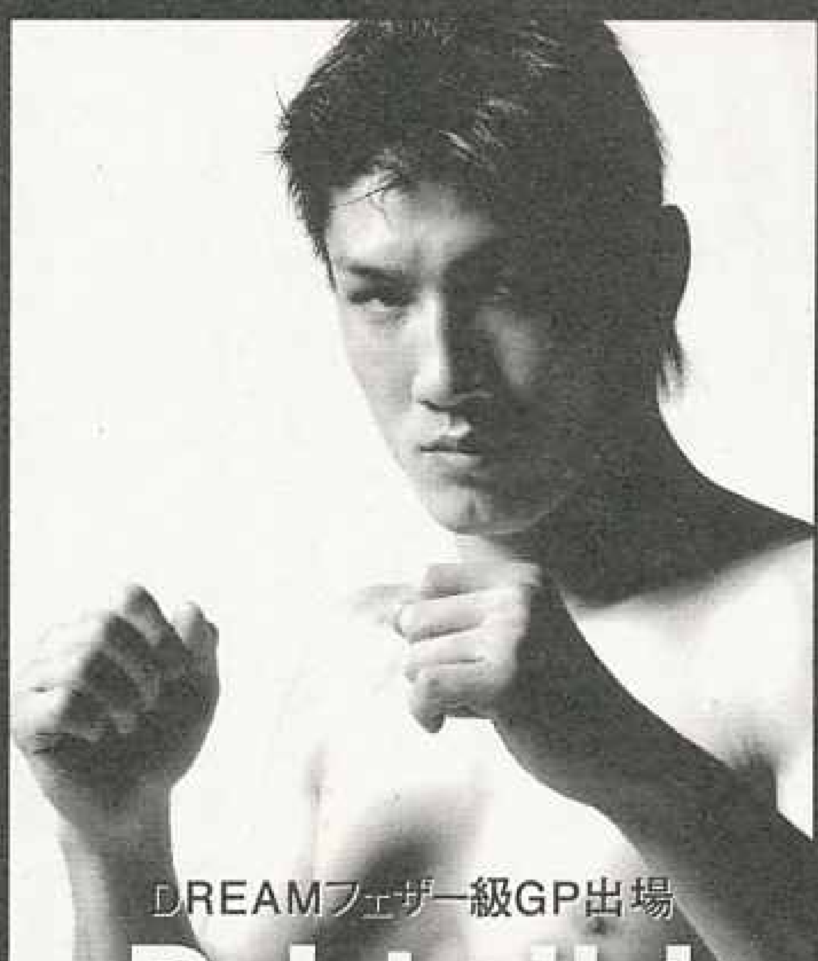
ガードを下げた構えと武道を取り入れた独特の間合いの取り方。そして相手をなぎ倒すような"爆腕"でキックボクシング史に残るような衝撃的なKO勝利を収めてきたレジェンド的存在。今回のK-1 63kgでは落選したり、最後の大物扱いされたりと微妙な感じになってしまったが、ファンからK-1参戦を望む声が多かったことは事実。いままで対戦することのなかった若い世代との絡みが生まれたとき、どんな化学反応を起こすか期待◎。

…したが、おっとり刀で注目選手をご紹介!

…ファイター名鑑

ついに5.2『K-1 MAX』JCBホール大会で開幕した63kg級トーナメント！　しかし『kamipro』読者にはいまいちなじみの薄い選手が多いのでは？　てことで、「NO KICK NO LIFE」な格闘技ライターの中村氏が注目選手をレクチャー！　ポスト魔裟斗はこの中にいる!?

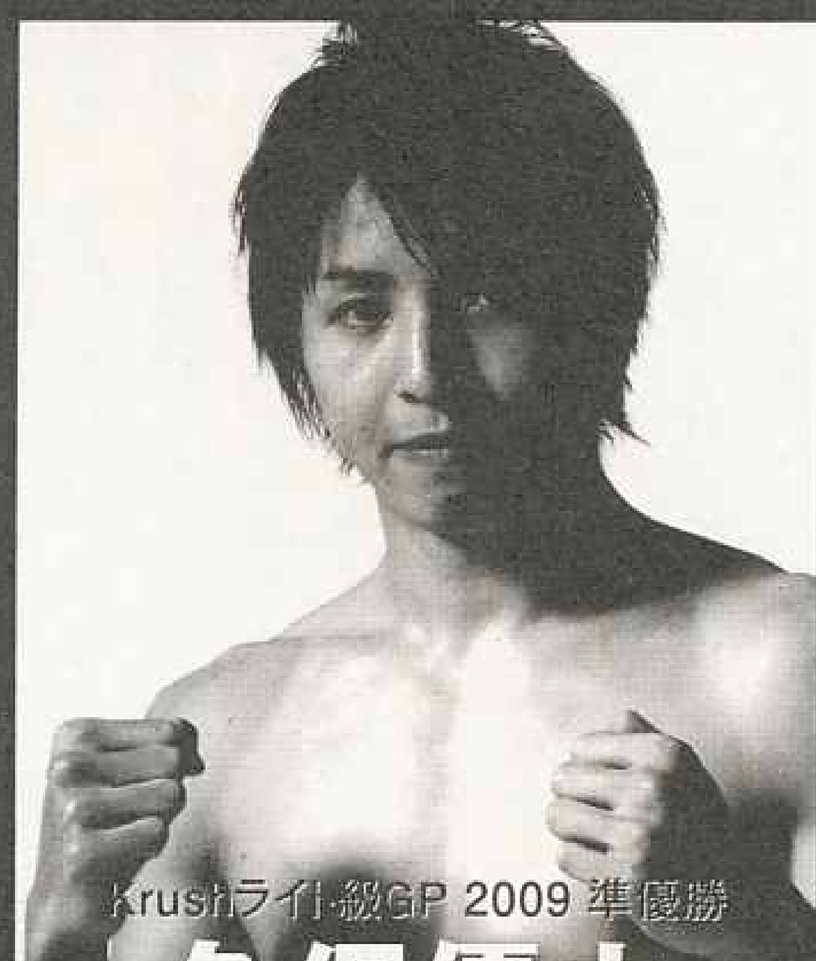
文／中村拓己　構成／鈴木佑　写真／©FEG.Inc



DREAMフェザー級GP出場
DJ.taiki

生年月日　1982年8月24日
出身地　千葉県
身長／体重　172cm／65kg
所属チーム　フリー

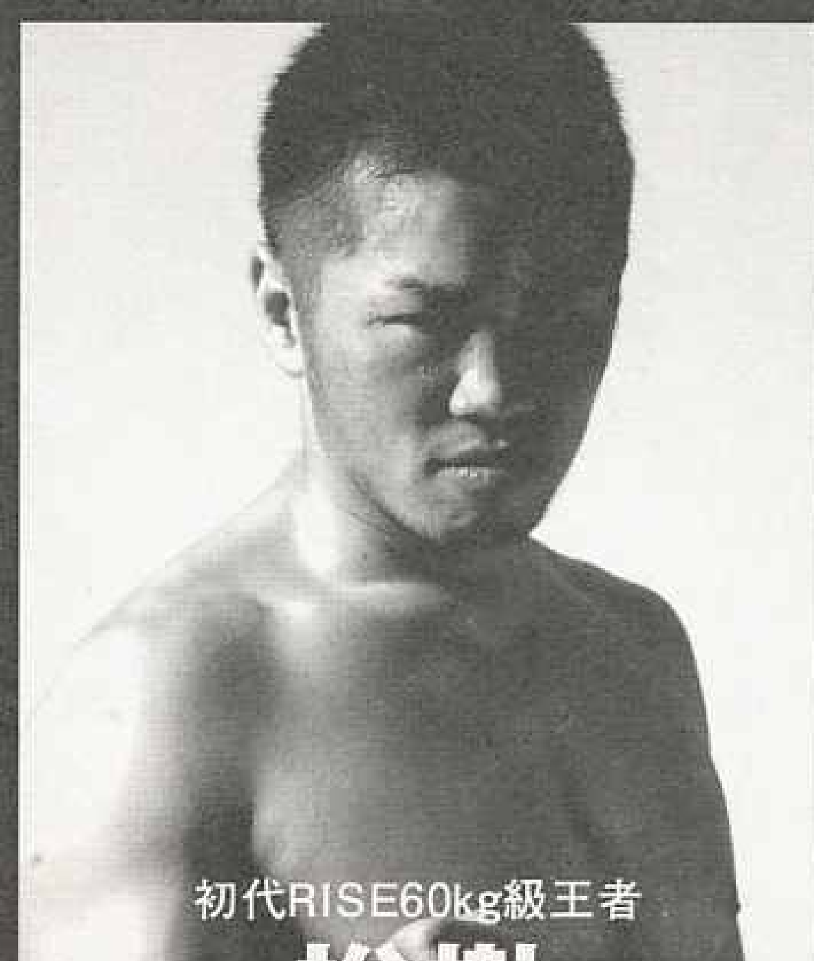
執事コスプレやタイ焼きコスプレで公の場に現われ、つかみどころのない発言とパフォーマンスを繰り返して、その場を微妙な空気にしてしまう異色の総合格闘家。しかしキックボクシングの出身で、その打撃スキルは本物。過去にキックのリングでもトップランカーを撃破し、K-1では渡辺一久から勝利を奪っている。そのキャラとは対照的に試合前にはタイに1ヵ月間泊り込みで練習するなど、裏ミスター・ストイックぶりも見せる。



Krushライト級GP 2009 準優勝
久保優太

生年月日　1987年10月19日
出身地　東京都
身長／体重　175cm／67kg
所属チーム　アンリミテッドジム

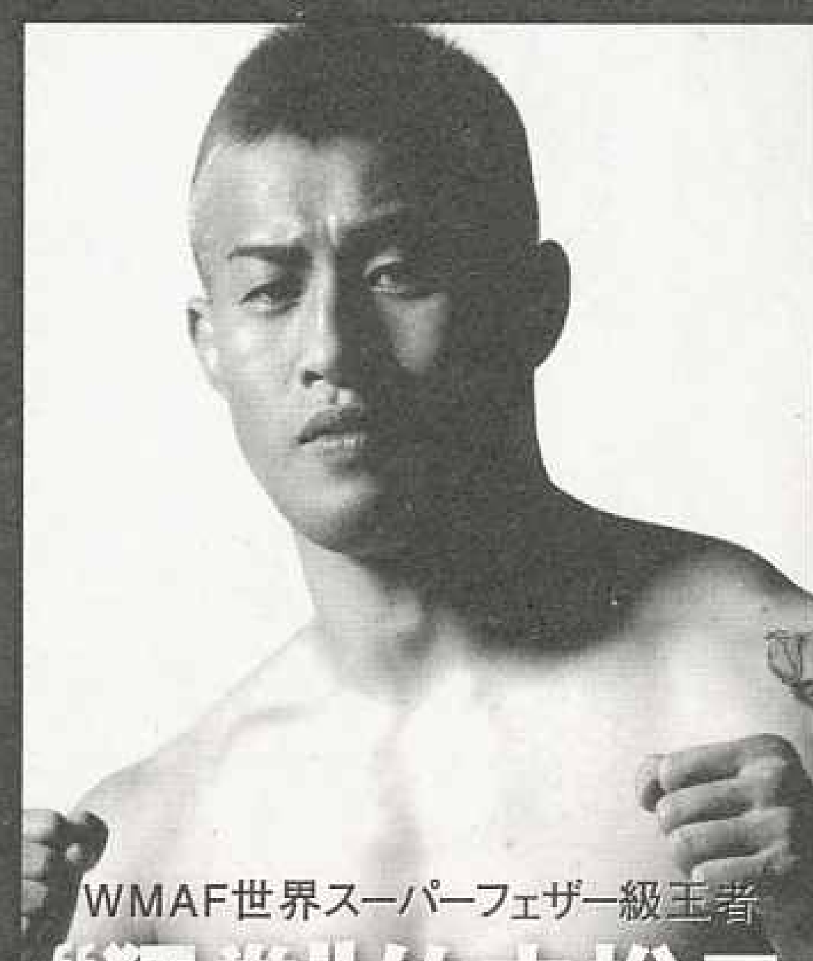
高校2年生でプロデビューし、19歳でチャンピオンとなった逸材。その後、約1年5ヵ月のブランクがあったものの、そのあいだに急激なパワーアップを遂げて表舞台に復帰。リザーバーから勝ち上がったKrushライト級グランプリ決勝では"日本最強の男"山本真弘をあと一歩のところまで追い込んだ。サウスポースタイルから繰り出す強烈な左ミドル、左ストレートが武器で、あの大月晴明に「いまの若手で注目している選手」とも言わしめた。



初代RISE60kg級王者
裕樹

生年月日　1982年11月6日
出身地　福岡県
身長／体重　170cm／65kg
所属チーム　リアルディール

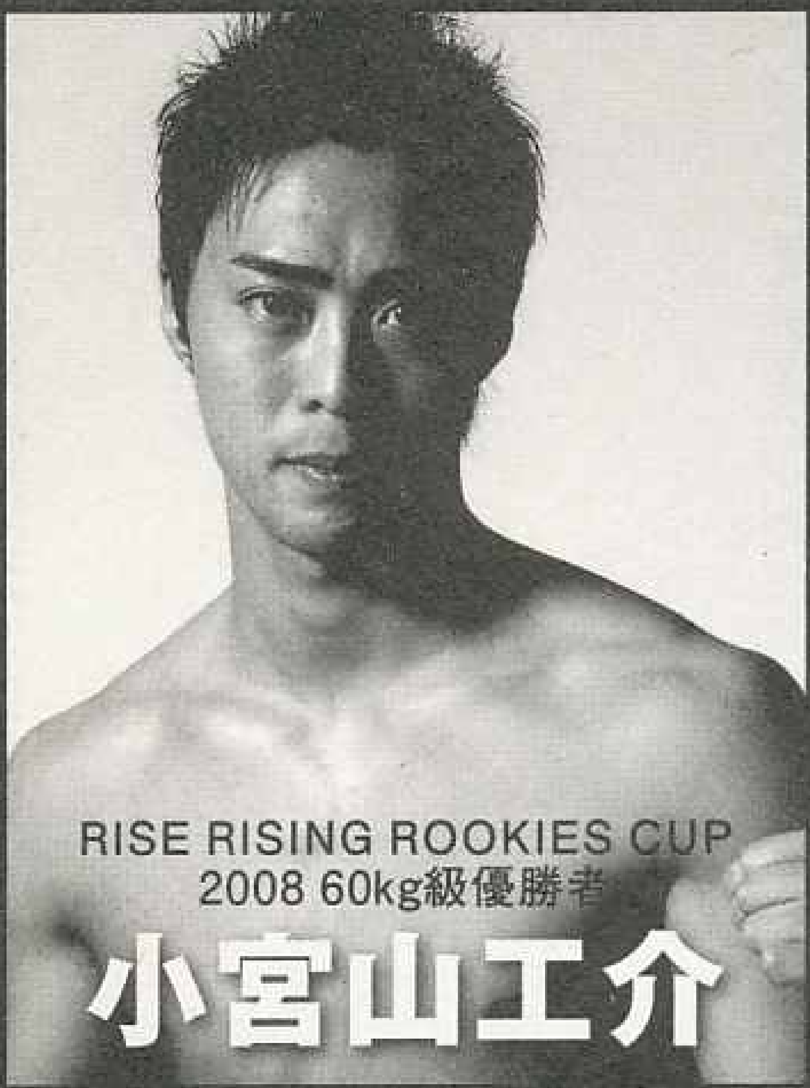
デビュー当初は福岡に活動の拠点を置き、そこから東京進出。RISEを中心に活躍し、その地位を確立、RISEを引っぱってきた存在で、同団体の初代60kg王者となった。試合前に相手をコケにする発言・暴言からついたニックネームは"博多の悪童"。必殺技は左右のローキックで、わずか数発で対戦相手を戦闘不能に陥れたこともあり、また対戦した選手ほぼ全員がローキックを効かされるという脅威の破壊力を秘めている。キャラ的にも非常にK-1向き。



WMAF世界スーパーフェザー級王者
"狂拳"竹内裕二

生年月日　1983年8月13日
出身地　千葉県
身長／体重　170cm／60kg
所属チーム　菅原道場

リングネームの"狂拳"というフレーズを見てもわかるとおり、軽量級屈指のハードパンチャーでKO勝利を次々と量産。この大会にもエントリーしている日本最強・山本真弘に土をつけた唯一の日本人でもある。また暴走・暴言を繰り出す、いわゆるバッドボーイキャラ。「ゴリラはバナナを食べてるだけで強い」という持論から、練習は試合前の2〜3週間だけ。練習がきつくて沖縄に逃走したことがあるなど、そのエピソードには事欠かない。



生 年 月 日　1986年12月16日
出 身 地　長野県
身長／体重　170cm／63kg
所属チーム　北斗会館

幼稚園から始めた空手では優勝回数66回というありえない記録を持つ元天才空手少年。空手時代から独創的でアメージングな蹴り技を武器としており、プロのリングでもその才能を存分に発揮。K-1デビュー戦となった村浜TAKE HERO戦では胴廻し回転蹴り、飛びヒザ蹴り、ジャンプしての二段蹴りを次々と披露し、ファンの度肝を抜いた。谷川貞治イベントプロデューサーも「小宮山くんはおもしろい！」と絶賛。



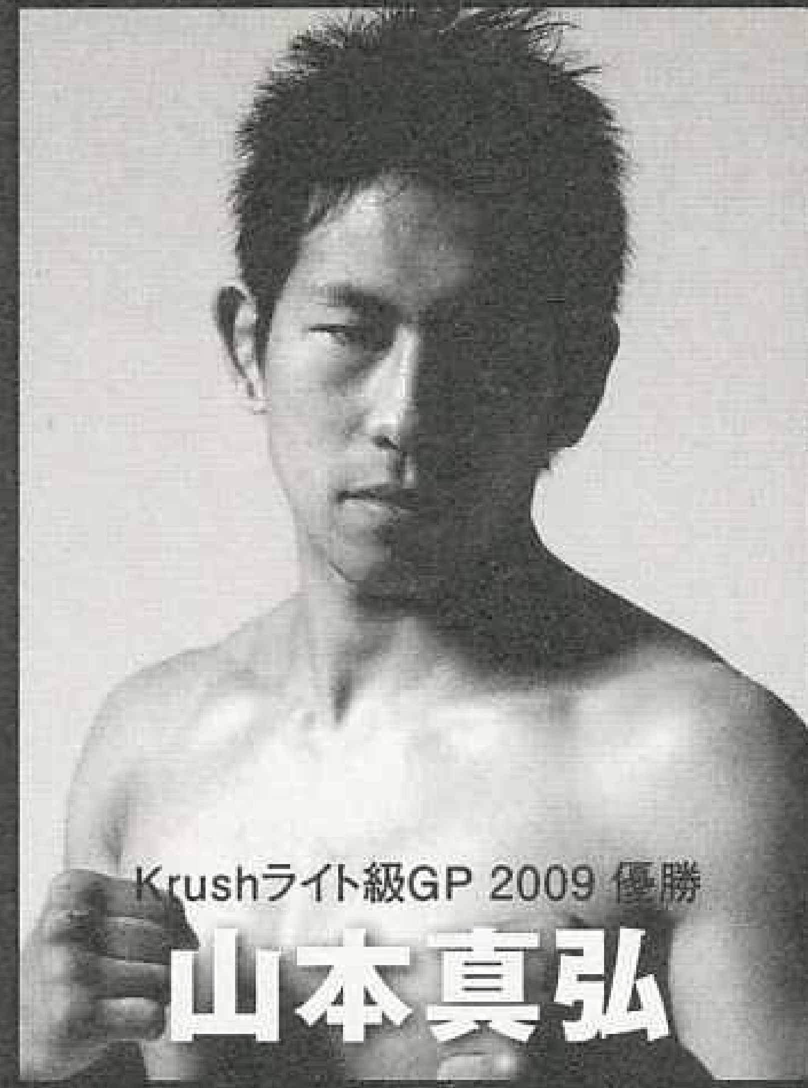
生 年 月 日　1980年4月24日
出 身 地　神奈川県
身長／体重　169cm／68kg
所属チーム　チームドラゴン

テコンドーをベースに持ち、RISEやK-1 MAXで活躍。デビュー当初は60kg前半の体重で、それからMAX参戦に向けて70kgまで増量。その後は60kgまで減量するなど、なかなか適正体重での試合が組まれなかった。しかしこの63kgはまさにベストウェート。持てるポテンシャルを存分に発揮し、テコンドー仕込みの蹴り技、バックブロー、バックキックといった回転系の技が見られることになるだろう。



生 年 月 日　1987年12月10日
出 身 地　愛知県
身長／体重　171cm／63kg
所属チーム　大和ジム

佐藤嘉洋と同じ「愛を知る県、愛知県から来た」キックボクサー。類まれな攻撃力とアグレッシブなスタイルで高いKO率を誇り、必殺のボディブローで国内外を合わせて3つのベルトを獲得した。短期間に連戦で試合をすることも多く、日本人だけでなくタイ人との対戦経験も豊富。K-1での活躍を主な目的とする選手が多いなかで、打倒ムエタイというテーマにも挑み続けているキックファンの胸を熱くさせる男。



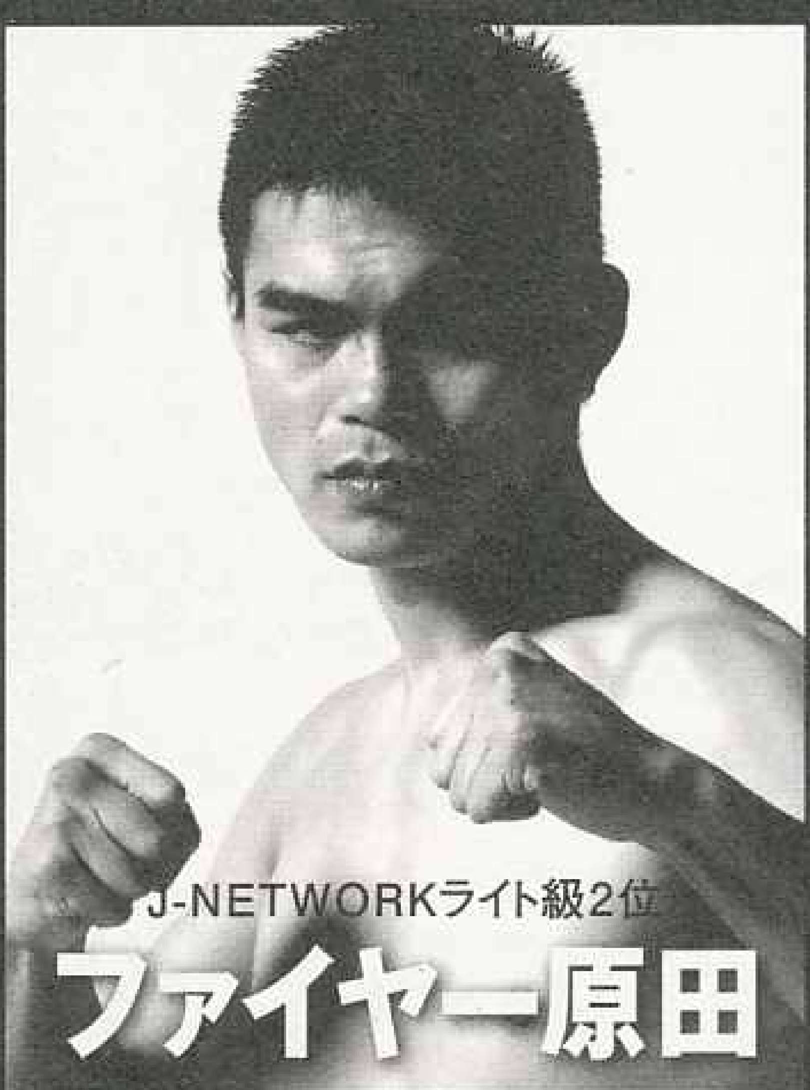
生 年 月 日　1983年5月14日
出 身 地　長崎県
身長／体重　165cm／60kg
所属チーム　藤原ジム

過去に日本国内で行なわれたIKUSA-GP、キックリターン、Krushライト級GPという3つのトーナメントを制覇。誰もが認める"日本最強の男"。卓越したディフェンスとカウンターはもはや芸術品の域まで達しており、勝負どころを絶対に見逃さない勘の良さとどんなに苦境に立たされても折れない心は天下一品。競技的に見た場合、この男を誰が止めるかがK-1 63kgのテーマになることは間違いない。

『kamipro』読者にもやさしい

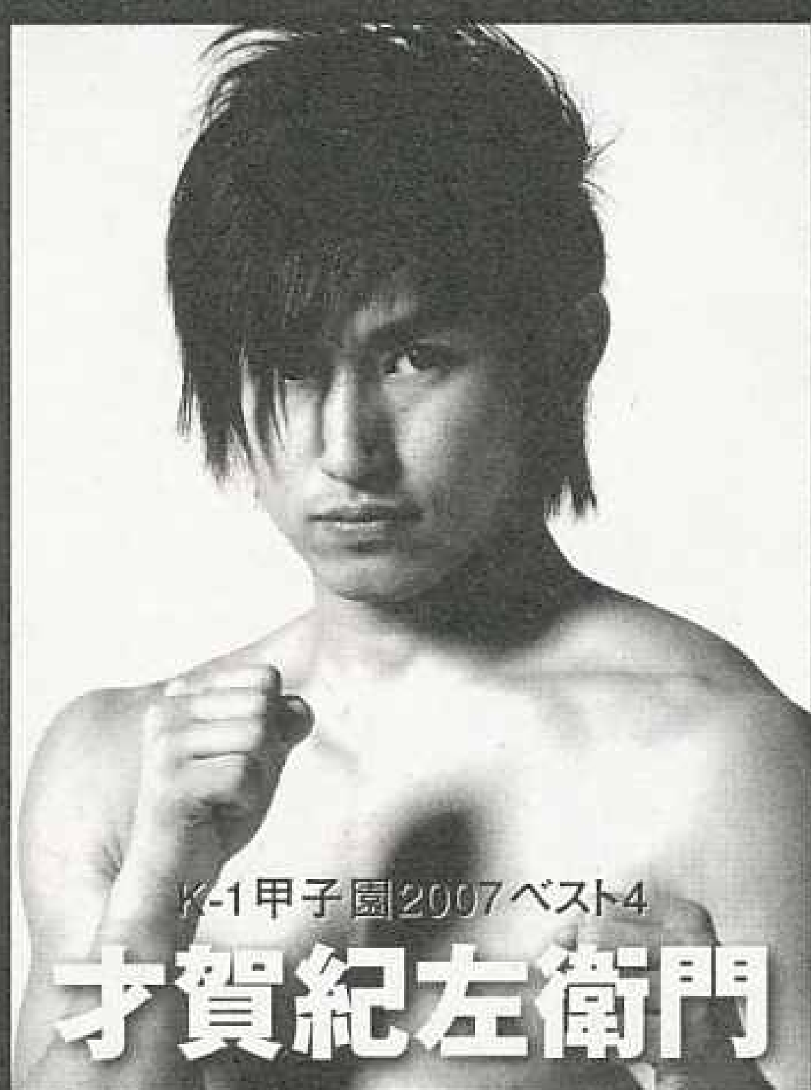
すでにトーナメント1st ROUNDは終わりました

63kg級K-1フ



生 年 月 日　1974年8月14日
出 身 地　埼玉県
身長／体重　170cm／60kg
所属チーム　ファイヤー高田馬場ジム

元引きこもりで「精神的な強さを学びたい」という理由で近所にあったキックボクシングのジムに入門。27歳でキックを始めるという遅咲きながら着実に結果を出してプロにまでのぼり詰めた。ドラマ『スクール☆ウォーズ』の主題歌『ヒーロー』が入場曲で、試合に勝つとファイヤーダンスと呼ばれるハイテンションなダンスとマイクパフォーマンスを見せる。試合に勝っても負けても観ている者に強烈なインパクトを残す。ザ・グレート・サスケの大ファン。



生 年 月 日　1989年2月13日
出 身 地　大阪府
身長／体重　168cm／60kg
所属チーム　大誠塾

幼稚園から始めた空手がベースで、漫画を参考にしたという派手な蹴り技を武器としている。第1回K-1甲子園に出場し、海外勢との対抗戦にも勝利するなど、初期のK-1甲子園を引っぱってきた存在で、若手ファイターの旗手としての活躍が期待される。「ライバルは球界一の投手でイケメンのダルビッシュ有」と断言し、デビュー前の公開練習では記者からの質問を受けて普通に恋愛話をやってのけるなど、そのイケメンぶりと発言はいつも注目の的。



生 年 月 日　1990年6月8日
出 身 地　千葉県
身長／体重　170cm／60kg
所属チーム　チームドラゴン

兄・弘嵩とともに10代の頃から活躍。K-1甲子園2008ではHIROYAに敗れるものの、準優勝という結果を残している。昨年から本格的にプロデビューし、Krushを主戦場とし、無敗街道を突き進んでいる。サウスポーで左ミドル、左ハイキック、左ローとどの蹴り技も強く、ヒザ蹴りやパンチもそつなくこなすオールラウンダー。ここまで若手らしからぬ安定感のある試合を見せている。このトーナメントでもその安定した実力を出せるかどうかが試される。



生 年 月 日　1989年7月10日
出 身 地　愛知県
身長／体重　171cm／65kg
所属チーム　OISHI GYM

日下部竜也、野杁正明といった10代ファイターを次々と世に送り出している"愛知の虎の穴" OISHI GYMの所属ファイター。格闘技のバックボーンは空手でファイトスタイルはパンチ、蹴り、ヒザ蹴りを満遍なく駆使する万能型。しかし試合そのものは開始のゴングが鳴らされると、1秒たりとも手数を止めず、最初から最後まで殴り合い・蹴り合い続ける男気あふれる根性ファイトを見せる"激闘派"。ビジュアルは小見川道大似の肉食獣系。

kamipro books 驚ガク! 衝ゲキ!! kamipro booksシリーズ! 死闘インタビューの歴史的目撃者になれ!!

PRIDEはもう忘れろ!



フジテレビショックから始まった日本マット界激動の歴史を追う!

フジテレビショックは日本格闘技界に何をもたらしたのか? 本誌でおなじみのライター橋本宗洋が送るMMAクロニクル。本書は、本誌携帯サイト『kamipro Move』で好評連載中の週刊コラムを厳選収録したものである。PRIDE凋落の時期からスタートした連載は、あらためてPRIDEの存在意義、役割を見つめ直し、そしてPRIDE消滅後、それでも生き続ける格闘技のおもしろさを綴っている!

B6変型判　336ページ
定価=1,680円(本体1,600円+税)

魔王　秋山成勲 二つの祖国を持つ男



秋山成勲なのかチュ・ソンフンなのか――。

2006年12月31日大晦日『Dynamite!!』秋山成勲vs桜庭和志戦で発生したクリーム塗布事件。この一件以降、秋山は日本では悪質な反則選手、片や韓国では悲劇の元・在日韓国人と、評価が真っ二つに分かれた。本書籍は秋山成勲が、柔道界での挫折ののち、総合格闘技家としてデビューして"魔王"と呼ばれる怪物に至るまでを検証するノンフィクションである。

B6変型判　264ページ
定価=1,680円(本体1,600円+税)

新日本プロレス学習帳



"業界の盟主"の魅力を凝縮したインタビュー12連発!

★鈴木みのる&獣神サンダー・ライガー★小林邦昭★平田淳嗣★金本浩二★山本小鉄★新倉史祐★田中秀和★中西学★天山広吉&金原弘光★マサ斎藤★永田裕志★中邑真輔

『kamipro』に掲載された新日育ちのレスラー&関係者のインタビューが一冊に! これを読めば老舗団体の過去・現在・未来がまるわかり!

B6変型判　320ページ
定価=1,680円(本体1,600円+税)

PRIDE機密ファイル　封印された30の計画



ついにその秘密のベールを解禁!! PRIDE幻の超極秘プロジェクト!!

★高田vsヒクソンの前座に前田日明登場!?★長州力、橋本真也、船木誠勝の参戦計画★ホイスvsケアー消滅の計画★PRIDEが小錦獲得に動いた!?★"皇帝"ヒョードルを二度破った男 ほか

その消滅から早2年――世界最高峰のリングに封印された30の計画を発掘! さらに青木真也、三崎和雄ら6大インタビューも同時収録!

B6変型判　296ページ
定価=1,680円(本体1,600円+税)

生前追悼 ターザン山本!



え、ターザンが死んだ!? 90年代プロレスを徹底検証!

★浅草キッド★いしかわじゅん★堀辺正史★更級四郎★松本晴夫★杉山頴男★谷川貞治★山口日昇★金沢克彦★市瀬英俊★小島和宏★菊地成孔★Oka-Chang★原タコヤキ君★椎名基樹 ほか

『週刊プロレス』編集長として辣腕を振るった山本さんの人生を通して、90年代プロレスブーム、はたまたプロレスという生き様を振り返る!

B6変型判　304ページ
定価=1,470円(本体1,400円+税)

八百長★野郎



ミスター高橋本から7年…… "呪いなき"時代のプロレス再入門書!!

★マッスル坂井★大槻ケンヂ★菊地成孔★森達也★杉作J太郎★ミスター高橋★菊池孝★高木三四郎★ハチミツ二郎★鶴見亜門★プロレス業界初"台本"全文掲載!

カミングアウト当事者から元ファンの知識人まで総動員してプロレスを再考! "プロレスの向こう側、『マッスル』"の世界に迫る!

B6変型判　296ページ
定価=1,680円(本体1,600円+税)

U.W.F.変態新書



ダメな大人たちへ捧げる"変態"とUWFの晩餐!

★UWF★前田日明★船木誠勝★高田延彦★桜庭和志★ターザン山本!★キン肉マン★PRIDE★プロレス★変態とは何か?(菊地成孔スペシャルインタビュー)★変態解説

プロレス界の一大潮流となったUWF。そのUWFに人生を学び、人生を狂わされた変態的プロレスファンたちが、UWF神話を語り倒す!

B6変型判　296ページ
定価=1,680円(本隊1,600円+税)

プロレス狂の詩　夕焼地獄流離篇



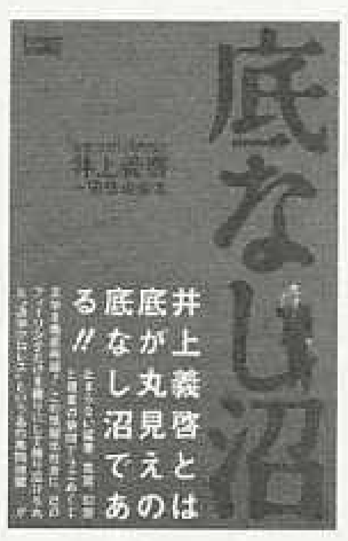
プロレス狂がシビれる凄玉たちのインタビュー集!

★ジェラルド・ゴルドー★後藤達俊★小畑千代★ザ・グレート・サスケ×韮澤潤一郎★中島らも★大槻ケンヂ★シーザー武士★ダニー・ホッジ★高山善廣★金原弘光★真樹日佐夫×三池崇史

メインストリームからはみ出さずにはいられなかったファイターや、リング内外の裏表を凝視してきた関係者へのインタビューがテンコ盛り!

B6変型判　304ページ
定価=1,890円(本体1,800円+税)

底なし沼　活字プロレスの哲人 井上義啓 一周忌追善本



井上義啓とは底が丸見えの底なし沼である――!!

★『週刊ファイト』&『SRS・DX』激筆再録★『猪木は死ぬか』、『不在証明あるいは猪木へのレクイエム』★新間寿★夢枕獏★ターザン山本&吉田豪★『kamipro』ラスト喫茶店トーク ほか

"活字プロレスの父"井上義啓氏の一周忌追悼本!! 氏を偲ぶインタビューや、人生最後の旅模様を振り返るエピソードも収録!

B6変型判　312ページ
定価=1,680円(本体1,600円+税)

吉田豪のセメント!! スーパースター列伝　パート1



吉田豪インタビュー11連発!! インタビュー本の最濃傑作!


★ストロング小林★阿修羅原★康芳夫★倉持隆夫★サムソン・クツワダ★猪木快守★イーデス・ハンソン★田中健一★小川宏★鶴見五郎★田代まさし

プロインタビュアーの吉田豪が、『紙のプロレスRADICAL』誌上で聞き手を務めたロングインタビューの一部を完全徹底再録!!

B6変型判　344ページ
定価=1,890円(本体1,800円+税)

おかげさまで10周年 エンターブレイン　ANNIVERSARY 10th


enterbrain
発行／株式会社エンターブレイン
〒102-8431 東京都千代田区三番町6-1 TEL.0570-060-555(代表)
発売／株式会社角川グループパブリッシング
[エンターブレイン総合サイト] http://www.enterbrain.co.jp/



菊野克紀復活バンザイ記念！

終わりなき空手最強幻想

空手最強幻想、急浮上!? だいぶ時間は空きましたが、
菊野克紀『DREAM.13』復活激勝記念ということで、
今号では菊野&空手特集を敢行!
はたして菊野の強さ、そして空手の強さとはどこにあるのか!?



闘えるというのは
幸せだなって思います

必殺・三日月蹴りはいかにして生まれたのか!?

菊野克紀

壮絶格闘技人生

空手&MMA

必殺・三日月蹴り復活！ということで、菊野克紀の強さの秘密を聞かずにはいられなくなった『kamipro』編集部は、幼少時代から現在まで、菊野の歩んできた道のりをガッツリ聞いてみた。極真時代の壮絶な特訓、さらに師匠TKとの気になる出会い、そして人生を変えた友とは!?

聞き手／細田大志　構成／松下ミワ　撮影／タイコウクニヨシ　試合写真／乾晋也

―今回はこれまで菊野選手が歩んできた道のりを振り返ってもらいたいと思いますが、まず幼少時代の菊野選手はどんなキャラクターでしたか?

菊野　むっちりした力自慢でしたね。ジャイアンみたいに暴力を振るってた感じもありました。ちょっと小突かれただけで、ドカーンと一発やり返したりとか、思いやりが足りないような子だったかもしれないですね。

―そんな性格が災いして、一時期は無視されたこともあったとか。

菊野　はい、小学校4年生ぐらいですかね。そんなクソガキだったんでみんなから無視されて遊ぶ相手もいなくて、昼休みは図書館で『ウォーリーを探せ』をやってた毎日でした（苦笑）。でもあのときは僕が悪かったと思います。反省してあまりワガママをしなくなった5、6年生からはみんなと仲良くできましたね。

―なるほど。そんな小学生時代を経て中学校からは柔道を始めたんですよね?

菊野　懐かしいですねぇ。僕が中学1年生で入部したときはまだまだ身体は小学生で、先輩たちにはまったく歯が立たなかったですよ。片手で投げられましたね。8人ぐらい一緒に入ったんですけど、僕を含め上から3、4人はどっこいどっこいの強さでした。

―高校時代も柔道をやろうと思ったキッカケはあるんですか?

菊野　中学校3年生のときに鹿児島市の大会で優勝したんですね。それで自信もついて、ほめられてうれしかったんですよ、初めての賞だったんで。でも高校に入った当初は親がラグビーを勧めてきて迷ってました。早稲田のラグビー部とかかっこいいイメージがあって、就職にも有利だって親が言うんです。それで洗脳されたところもあって柔道かラグビーで迷いました。それで高校入学してから先に柔道部の見学へ行ったらけっこう強かったんですよ。進学校だったんであまり期待してなくて、弱いところだったらラグビー部に入ったほうがいいかと思ってたんですけど、先輩が強くて「ここだったら強くなれる」って思ったんで、それで柔道部に入るってを決めましたね。

―6年間、柔道をやって一番思い出に



07年にはヒザのケガで長期欠場に追い込まれていた菊野。06年の長岡戦、さらに07年の上小園戦はケガをしている状態で無理やり試合をし、しかも白星奪取というから、本当に凄い男だ!

子どもの頃はむっちりした力自慢でジャイアンみたいな感じでした

残っていることはありますか？

菊野　高校3年生の最後の大会で1年生に負けたことですかね。それで負けてなかったら僕は普通に大学へ行って就職してたかもしれないです。その前の大会で僕は優勝してて、優勝候補って言われて自信満々で臨んだ大会の2回戦で負けたんです。やっぱり練習してる人が強いというあたりまえのことを思い知らされました。僕の通ってた鶴丸高校は1時間くらいしか練習できなかったんですよ。でも相手の学校は3時間ぐらい練習してる学校だから「鶴丸だし、しょうがない」って自分のなかで言い訳ができてしまったんですよね。それが悔しくて。いろいろ悩みましたけど考え抜いて、言い訳できないぐらい100パーセント僕の人生を格闘技に注げばどこまでいけるのかを試すことにしました。

——聞くところによると、〝オヤジ〟さんという方が格闘技の道を志すキーパーソンになったらしいですね？

菊野　はい。僕が高校3年生の夏、最後の大会で負けたあとに周りが受験モードに入ってるときです。自分はどうしたいんだろう、どういう大学へ行ってどういう仕事に就きたいんだろうって悩んでました。その悔しさで悶々としてたときに、中学の同級生で同じ柔道部だった〝オヤジ〟っていうあだ名のクラスメイトだったHがお笑い芸人になるって言いだしたんですよ。僕は鹿児島出身なんで有名人なんて身近にいないし、まさか友だちがお笑い芸人になるなんて思わなくて衝撃を受けました。普通なら「なれるわけない」と思うじゃないですか。でも二人は「なる」って言ったんですよ。その衝撃で考えさせられて、数分後に「俺は格闘家になる」って。

——菊野選手にとって何が衝撃的だったんでしょう？

菊野　普通だったら無理と思われることに二人が挑戦するって言いだしたのが僕の殻を破ったんですね。当時僕はPRIDEを観てましたけど、あそこに立つなんてできるわけないって思うのが普通じゃないですか。日本、世界のトップ選手が集まってる場所で試合するなんて。でも二人はお笑いでトップを獲るって言った。その瞬間、僕の殻が破れたんです。こいつらがトップへいくって言ってるのに俺はなんとなくで就職していいのかって。親友だからこそ負けたくないっていうのがあったし、将来3人でおいしい酒を飲み



いくつかのジムを見比べ、TK率いるアライアンスに籍を置くことを決めたという菊野。入門当時はまだTKが現役だったとのことだが、目の前で師匠にマーク・ハント戦のような凄すぎる試合を見せられると、感銘を受けずにはいられないだろう。

僕がプロの格闘家を目指したのは芸人を目指してた〝オヤジ〟のおかげ

たいじゃないですか。

——それで、その二人はいま何を？

菊野　オヤジはまごまごしてた時期もあったんですけど、3、4年前に吉本興業に入って〝苺くらぶ〟っていう売れない芸人をやってますよ（笑）。Hは途中から仕事のほうがおもしろくなっちゃってお笑い芸人にはならなかったですけどね。僕と一緒に鶴丸高校へ入学して、アメリカに留学後トップの成績を取って帰ってきたんです。でも高校を辞めて一時期とび職に就いたと思ったら、21歳ぐらいで独立していまでは10人以上雇って会社やってます。反社会的な変わったヤツなんです（笑）。彼にはいま、専務として株式会社菊野克紀っていう僕の会社を手伝ってもらってます。

——おもしろい二人ですね（笑）。その衝撃を受けたとき、選択肢は格闘家しかなかったんですか？

菊野　そうですね。自分と向き合ったときに何が一番俺はやりたいんだって思ったら強さに憧れてて、強いヤツと闘いたいというのがあったんですよね。僕は闘うことが好きで、中学校までは『クローズ』とか『ろくでなしブルース』みたいなことをちょっとやってたんですよ。こう……〝勝負しようぜ！〟みたいなことを（笑）。高校は進学校でとてもそんな感じじゃなかったけど、強い相手とおもいっきり勝負したいなっていう欲求が心のなかにずっとあるんです。闘いたい、強い人とおもいっきり勝負したいって。なら、これだって感じです。

——でも格闘家を目指すってご両親に言ったときは心配されませんでしたか？

菊野　もう母は泣いて、父ちゃんは無言でした。「何言ってんだ、このバカは」って感じでしょうね。何を夢見てる、なれるわけないじゃないかって。父はホームセンターの販売員で、温和で口数も少なくて仕事が終わったらちゃんと家に帰って、お酒もほどほどにギャンブル、タバコもせず本当に優しい人で、母は生命保険のおばちゃん。営業なのでけっこう社交的な感じなんですけど、努力が嫌いらしくて、天才肌なタイプだからなおさらできるわけないっていう感じでした。

——どうやって説得したんですか？

菊野　理解はしてもらえないし説得も無理だけど、僕はやると言い続けるしかない。一応家には置いてもらって、ごはんも食べさせていただいて。僕は絶対に東京で総合をやるつもりでいたので、二人からすればしばらくほっとかざるをえない状況だったと思います。でもずっと受験勉強して大学行きなさいって言ってましたよ（笑）。

——お兄さんもいるそうですけど、何か言われました？

菊野　じつは兄貴も格闘技が好きで、プロボクサーを目指すか悩んでた時期があったんですよね。3つ上の兄貴は鹿児島大学に行ったんですけど2年のときに中退して、大学を受け直したんですよ。それで受験の時期が僕とかぶったんです。そ

菊野克紀 壮絶格闘技人生



れで僕は両親より先に自分の思いを兄貴に話しました。そのとき、兄貴がプロボクサーになりたいということを聞いて、僕は大学に行きながら格闘家としてトップを獲る自信はない、と。やるなら100パーセント格闘技で勝負しないとチャンピオンになれないから僕は大学へ行かないという話をしたら、兄貴は大学へ行ってボクシングをやる、と。それでお互い頑張ろうという感じでした。でも兄貴は身体が丈夫じゃなくて、パンチで自分の拳が壊れたりして途中で断念せざるをえませんでした。プロライセンスを取ろうと努力はしてましたけど、兄貴は限界までやれてスッキリしてるみたいで、プロをあきらめたあとは横浜国立大学の大学院を卒業してから早稲田の博士課程を卒業して、いまは古文教育っていう超マニアックな学者を目指して頑張ってます（笑）。

――お兄さんも一風変わった方なんですね（笑）。それで、菊野選手は高校を卒業して極真の木山（仁）さんのところへ行った、と。

菊野 そうです。でも僕、木山先輩のことよく知らなくて、入ってから気づいたんですよ。「鹿児島に空手の凄い人がいるらしいよ」ってボヤっとは聞いてたんですけど、たまたま僕の住んでた東谷山の近くにある谷山道場っていうところへ行って、たまたまそこの責任者が木山先輩。道場に〝木山仁、中量級世界大会優勝〟って書いてあって、本当に偶然です。それで入門してから1年間、通いの道場生をして、木山先輩に「プロの格闘家になりたいんだろ？　それなら内弟子になってがっちりやったほうがいいんじゃないか」って誘っていただいて、上京資金を稼ぐためと社会勉強のために1年間働いた仕事に

けじめをつけて内弟子にさせていただきました。

――当時は練習量も凄かったとか。

菊野　本当に鍛えられました。高校の部活はのびのび楽しく和気あいあいとやっていたんですが、極真のときは「押忍」としか言えない状況で、とにかく鍛えられましたね。一番印象に残ってるのは、木山先輩のほかにも強い先輩がいて、僕はその先輩に3回連続で負けたんです。超縦社会なのでいろいろな愛の鞭があったぶん、試合では勝ちたいっていう気持ちが凄くあって、一回目はしょうがない、次は絶対勝とうと思ったんですけど二回目も負け……。それが悔しくてめちゃくちゃ練習したんですよ。それで絶対先輩よりも練習して自信もあった3回目だったんですけど、また負けたんです。もう僕は本当に胸が張り裂けそうで、本当はやったらいけないんですけど、判定で主審の方が先輩の勝ちを告げたときに「アアーッ!!」って叫んでしまったんです。控室に戻ったあと、あまりのストレスに身体が拒否反応して吐きました。内弟子ってプロと一緒で、勝たなきゃ意味がないわけです。一日中空手に携わってるので結果がすべてで、負けたからには誰に何を言われてもしょうがない。その悔しい思いというのは忘れられません。

――菊野選手の過去を振り返ると、成長するキッカケはすべて悔しさにある気がしますね。

菊野　本当にそうですね。強くなりたいっていう目標があって、勝ち負けは過程なんです。だから負けたからってその目標はブレないんですよ。勝っても一緒ですけど、目標をかなえるためにどうするかっていうことなんで、悔しい負けをしたほどその振り幅というのはあるんじゃないですかね。結局、僕はその先輩に勝つまで極真を辞めないって決めて、ようやく体重判定で一回勝ったんです。でもいまいち納得いかなくて、もう一回やって一本勝ちしたんですよ。それでようやく自分のなかでケジメがついたので竹隆光(和也)師範に相談して、上京前に総合の練習を半年間、桂塾という道場でさせてもらいました。桂塾長はもともと極真にいて、顔面ありの空手も経験して総合の練習もされてたんです。凄く穏やかで頭もいい方なんですけど、怒らせたらめちゃくちゃ怖い方ですね(笑)。その桂塾長が藤本ジムの鴇(稔之)さんと仲が良くて、鴇さんからリキックスの小野寺力さんを介して髙阪さんのアライアンスを紹介してもらいました。



「潜在意識のなかに『アルバレスには負けてもいいかも』と理由をつけていた自分がいたかもしれない」と自己分析する菊野。取材後の雑談では、ビジネス書を熱心に読んでいると話しており、敗戦の理由を深く分析しているようだ。

髙阪さんという本当に格闘技が好きな方の下で成長できるのは幸せです

――当時、髙阪さんの存在は知ってたんですか?

菊野　"世界のTK"という名前だけ知ってるくらいで、挨拶にうかがったときに「ここだ」って決めました。23歳のときに東京に来て、半年ぐらいでアマチュアデビューしましたね。失なうものはなかったですし、とにかく経験をって感じでしたね。

――その後、菊野さんは長岡弘樹戦でプロデビューしますけど、その当時髙阪さんはPRIDE全盛のなかで闘ってたわけで、かなり影響を受けたんじゃないですか?

菊野　当時、髙阪さんは引退を見据えながら練習されてたと思うんですよ。負けたら引退という覚悟で、壊れるっていうような練習をずっとやってました。最後やり残したことがないようにっていう鬼気迫る感じでしたね。それが理にかなってるかどうかはわからないですけど、絶対に後悔せず、思い残すことなくとことんやりたいんだなって。だから僕もたぶん引退前ってそんな気持ちになるんだと思いますね。うまくやるとか、勝とうというよりも自分のすべてをぶつけてリングに置いてこようっていう、そんな気持ちになるんじゃないかって。マーク・ハント戦なんてモロじゃないですか。あれは髙阪さんとしては勝つためにやった試合だと思うんですけど、客観的に見たらもっとうまい方法があったんじゃないかって思うわけです。でも、あれは髙阪さんの生き様。とにかく前に出る、引かない。気持ちで折れないという自分との闘い、自分のために試合したんじゃないかなって思いますね。

――じゃあ、その髙阪さんの生き様は継承されている、と。

菊野　アライアンスのジムには「前に」という言葉が飾ってあります。試合も心も生き方もすべてにおいて「前に」を心がけたいです。そして闘えること、好きなことをやれるというのは幸せだなって思います。髙阪さんは本当に格闘技が好きで、そういう人の下でやれることも含めて幸せです。

――07年にはヒザを壊して長期欠場、好

菊野克紀 壮絶格闘技人生

倒れている弘中さんを見て、僕は「明日は我が身」という感じがした

きなことをやれないという時期もありましたね。

菊野　本当にきつかったです。長岡戦の前にスパーリング中に死角から別の二人がもつれて突っ込んできてヒザが内側に折れたんです。それでもだましだましやってたんですが上小園（琢大）戦の直前にまたおもいっきりやっちゃいました。試合直前だからやるしかないっていうことで意地でやりきったんですけど本当にヤバかったです。でも後日医者に行ったらじん帯は大丈夫って言われてホッとしてたんですがやっぱりおかしくて……、あらためて違う病院へ行ったら「バカか、キミは！　すぐ手術だよ」って言われて、前十字と内側じん帯が切れて、半月版割れてました……。（苦笑）

――生活にすら支障をきたすようなケガじゃないですか！

菊野　本当そうですよ！　たまにバコンって外れてましたから。本当にヤバかったですね。07年の7月に手術して3週間入院、群馬で1ヵ月リハビリしました。プロとして練習や試合ができないのはストレスでしたけど、リハビリに必死になれたのが救いでしたね。



きくの・かつのり■1981年10月30日、鹿児島県出身。05年12月にプロデューをはたし、以降、DEEPを主戦場に実績を積む。09年にはDEEPライト級トーナメントを制し、王者に君臨。DREAMでは09年10月にアルバレスに敗れるも、10年3月弘中戦で見事復活。必殺技はご存知、三日月蹴りだ! 170cm、70kg。

――選手生命の危機というケガではなかったんですか？

菊野　斉藤先生という前田日明さんも手術してるような先生で、リハビリ次第っていう感じでした。東京体育館のジムへ行って泳いだり、ひたすら歩いたり。歩くっていうのもどうしてもかばっちゃって意外と大変なんですよ。いまだにちゃんと歩けないんですから。別のじん帯をヒザに移植して筋肉もまだうまく使えてないんで、常に右側に重心を預けるようにしてるんです。だから立ち読みをしながらでもじつはリハビリをしてるという（笑）。その翌年の1月ぐらいからジムに顔を出してごっついサポーターをして練習を始めたっていう感じで、不安やうれしさというよりは必死でしたね。でも逆によかったかもしれないです。やることがあるっていうのが本当に救いで、不安になってる暇もないしひたすらやれることをやってるっていう。

――そのケガから復帰したあとは破竹の勢いでDEEP王座までのぼり詰めて、09年に念願の大舞台に上がるわけですね。

菊野　いまはDREAMと名前は変わりましたけど、PRIDEのリングで闘うというのが高校3年生のときに志した夢だったので、僕が憧れたテレビの中の世界で闘えるというのは本当に幸せです。僕は試合が決まると「必ず勝ちます」って宣言して自分を追い込むようにしてます。そうしないと力も湧かないし、勝ちを引き寄せられない。でもその反面デビューからチャンピオンになるまで落とせない試合がずっと続いて、やっと上がったDREAMでもアンドレ・ジダと闘い、さらにアルバレス戦が決まりついに精神の限界がきたようです。アルバレスはトップ選手だし、緊張や恐怖から逃げたくて、いま思えば心の深いところで「負けてもしようがないかな」っていう気持ちがあったかもしれないです。だから僕は試合のとき凄くリラックスしてたんですよ。それはよかれと思ってしたんですけど、自分のいいところが全然出なかった。何がなんでも勝つという断固たる決意がなかったんです。そういう意味でもあの試合は完敗でしたね。いろんなものを失ったし、あそこで菊野幻想というのも一回終わったと思います。

――しかし弘中邦佳戦は、その失なった幻想を復活させる内容でしたね。

菊野　アルバレス戦の反省として僕は自分ととことん闘って、緊張して、それを乗り越えて試合をしないと最高のパフォーマンスを発揮できないって学びました。あの試合で負けてたら僕はDREAMから降ろされてたと思います。仮にDEEPで勝ってまた戻れたにしても1、2年は必要でしょう。会社もせっかく作ったのに次負けたら倒産だってくらいの感じでしたし、僕の計画や夢が頓挫するようなプレッシャーもありました。そういうプレッシャーをめいっぱい感じて試合に臨みました。だから試合が終わっても笑ってないじゃないですか。倒れてる弘中さんを見て、「明日は我が身」という感じがしたんですよ。一歩間違えば自分がそうなっていて、今後常にこういう闘いをしていかなくちゃいけないんだって。そういうことをあのとき考えていて、「これから大変だな」って。そういう精神状態でした。

――余韻がないですね（笑）。でも、確かにファンに幻想を見せ続けるために、今後もきつい試合が続くと思います。

菊野　僕は強い選手と闘いたい欲求があるんです。だから団体のチャンピオンっていうのを目標にしても全然燃えないんですよ。タイトルというよりは青木真也、BJペン、そういう強い選手にどうやって勝つかというのを考えるのが凄く楽しいんです。アルバレスに負けるまでは無敗だったんでガンガンいってやろうと思ってたんですけど、プロの選手の負けは自分を否定されることと一緒で、それは真摯に受け止めないといけない。だから、これからは勝ちまくって向こうからやらざるをえないような、周りが勝手に煽るような状況を作りたいです。あえて「僕はいいっすよ、じゃあやりましょうか」みたいな（笑）。そこまで僕はとにかく実績を積むことですね。勝ちます！

【10年3月31日／都内・A－SQUAREにて収録】

試合レビュー

菊野克紀、闘いの軌跡をなんと菊野本人に解説していただいた。戦術や必殺・三日月蹴りの鋭さなど、試合ごとに進化している様子がよくわかるぞ。やっぱり菊野は強い!!

文／細田大志　構成／松下ミワ
写真／平工幸雄、乾晋也

1

[05.12.25 DEEPフューチャーキングトーナメント1回戦]
東京・ゴールドジムサウス東京アネックス

○ vs 槌井仁基

（1R終了時 TKO）

この選手は強かったイメージなんですよね。強くてどっこいどっこいの試合をしてて、たまたま僕のパンチが相手の鼻に当たったんですよ。そうしたら折れたか何かでドクターストップになってしまったんです。だから結果はTKOになってますけど、内容的にはいまいちだったし、僕にとっては反省点が多い印象の試合です。

2

[05.12.25 DEEPフューチャーキングトーナメント2回戦]
東京・ゴールドジムサウス東京アネックス

○ vs 竹田誠志

（1R 2分30秒 KO）

これはなぜかパンチが入って倒せましたね。この選手はパワフルでいまはプロレスやってます。ZSTで試合をしてたときはチャンピオン候補だったんで強かった印象があります。レスリングタイプだったんですけど僕のパンチがスコーンと入って。まだ自分に自信がなかったんでなんで当たったのかわかりませんでした。



3

[06.2.5 DEEP23 フューチャーキングトーナメント決勝]
東京・後楽園ホール

× vs 田村幸成

（2R終了 判定3-0）

初めての後楽園ホールでの試合で舞い上がっちゃってましたね。相手はたしかサウスポーの柔術家で、僕は寝技を警戒してました。1ラウンドはローを効かして僕のペース。2ラウンドは相手がガーッと殴ってきたんですけど、このときはまだ顔面パンチに慣れてなくてうまく対処できかったので判定負けしちゃいました。だからこのあとキックボクシングの藤本ジムへ1年間行って、新日本キックの松本哉朗さんたちと練習してました。

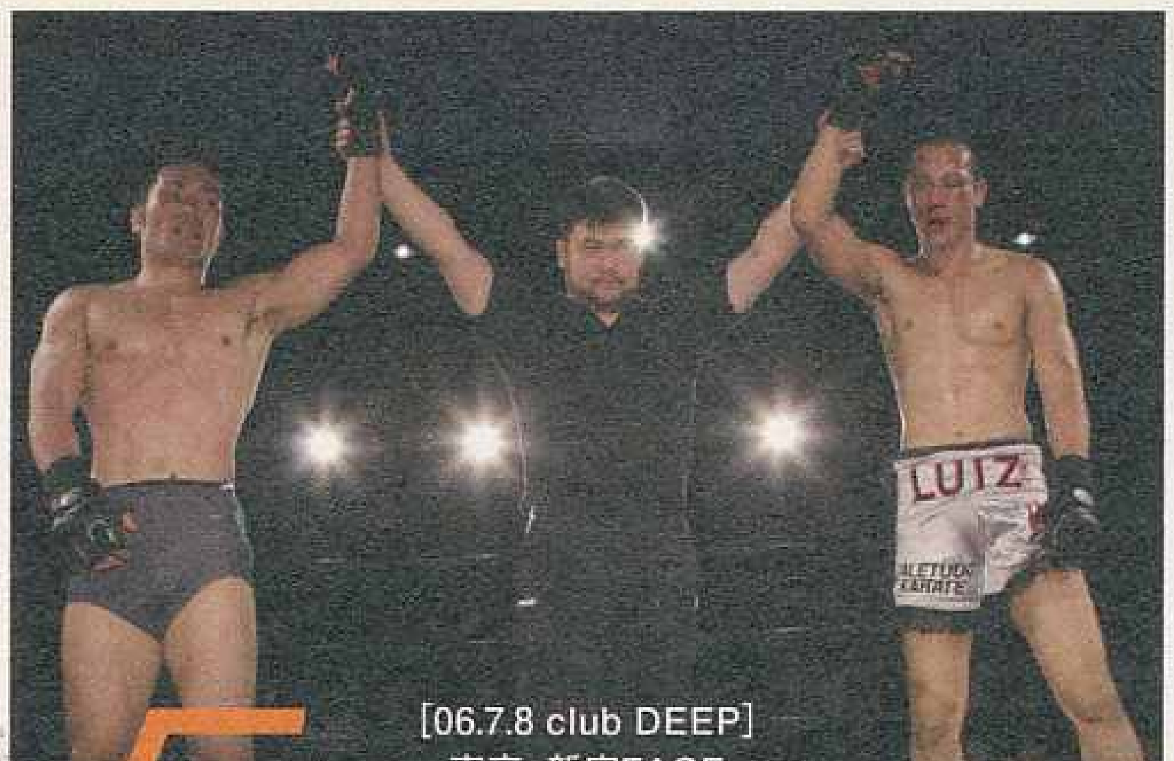
4

[06.6.4 SWAT! 05]
東京・ゴールドジムサウス東京アネックス

○ vs 小島一朗

（1R 1分18秒 TKO）

これは三日月蹴りでKOした試合ですね。記憶は定かじゃないですけど、三日月蹴りをちゃんと出したのはこの試合が初めてだと思いますよ。負けたあと自信を取り戻せた試合でした。



5

[06.7.8 club DEEP]
東京・新宿FACE

△ vs LUIZ

（2R終了 時間切れドロー）

LUIZは打撃が得意でリーチが長かったので、スタンドで押し込めませんでした。でも突然グラウンドに引き込んできたので、パウンドで顔をボコボコにしたんですけど決めきれなかったですね。判定があれば間違いなく僕が勝ってたと思うんですけど。……なんで引き込んできたんだろう? LUIZとは仲良いんですけど、相当な変わり者ですよね（笑）。



6

[06.10.10 DEEP26]
東京・後楽園ホール

○ vs 小林裕

（1R 3分26秒 裸絞め）

キックボクシングのジムに通った成果が出た試合ですね。パンチで殴って効かせてテイクダウンしてパウンド。それを嫌がった相手がうしろを向いたところでスリーパーっていう完全に総合的な試合になりました。僕はストライカーって思われがちですけど、TKチャートで言えば寝技は「3」 ぐらいあるつもりです。DREAMのレベルで「4」って言ったら相当ですからそこまでは言いませんけど（笑）。



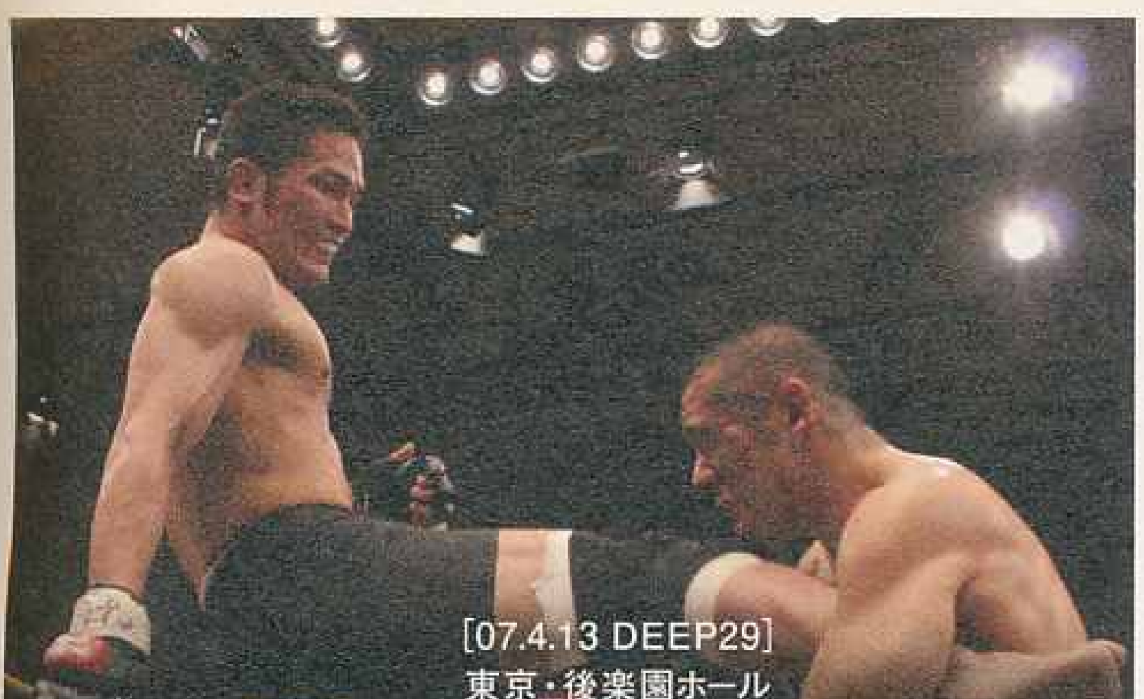
7

[06.12.20 DEEP27]
東京・後楽園ホール

○ vs 長岡弘樹

（2R終了 判定2-0）

この試合からバンバン三日月蹴りを使ってましたね。でも、必殺技と呼べるまでのレベルにはなってなくてまだ改良段階。緊張もなく試合に慣れた感じもあったし、長岡選手は映像を見るかぎりオールマイティな選手ですが怖いところもなく、負ける気はしませんでした。打撃でも寝技でも負けない自信がありました。



8

[07.4.13 DEEP29]
東京・後楽園ホール

○ vs 上小園琢大

（2R終了 判定2-0）

ヒザがグシャグシャになってたときですけど、相手を見るかぎりそんなに怖いところは感じませんでした。彼は寝技が得意な選手なんですけど、やられることもないだろうっていう感じで。ただヒザが……（苦笑）。相手よりも自分のコンディションを整えるのに必死でしたね。試合の映像を見ると、ときどきヒザがカクンってなってる場面がありましたし、ヒザを踏んばる攻防ができなかったので自分から寝た場面もありました。



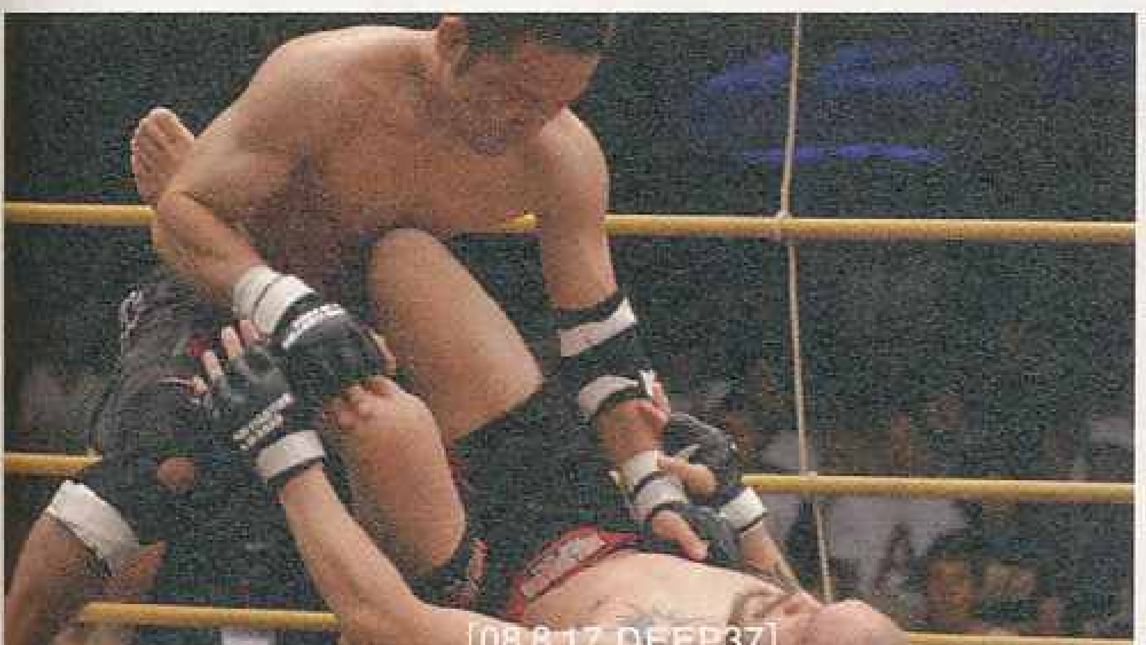
9

[08.5.19 DEEP35]
東京・後楽園ホール

○ vs 井上誠午

（2R終了 判定3-0）

長岡選手、上小園選手はサウスポーで、サウスポーの相手にはオーソドックスのほうが蹴りやすいのでその2試合はオーソドックスで構えました。井上選手はオーソドックスだったので僕はサウスポーでやろうと思ってたのですが相手をかく乱させるためにリングチェックのときからゴングが鳴る直前までオーソドックスに構えて、試合が始まった瞬間にサウスポーへスイッチしたんです。そんな小細工を混ぜて1ラウンドから先手を取って勝ちました。あとで聞いたんですけど井上選手は相当驚いたらしいです（笑）。



10

[08.8.17 DEEP37]
東京・後楽園ホール

○ vs Barbaro44

（2R 2分34秒 TKO）

この試合前くらいからBarbaroが調子を落とし始めたんですよね。僕とやったときもなんかいつもの元気がなくて、身体が小さくなってた気がします。当時の僕にとってはビッグネームだったんでチャンスだと思ったし、モチベーションも高くて最初からガンガンいってプロとして初めてKOしたんですよ。だからここでKOする感覚をつかんだ気がします。三日月蹴りも効かせた、KOもできたということで大きなキッカケになった試合です。

必殺・三日月蹴り"殺し"の軌跡

菊野克紀全試合

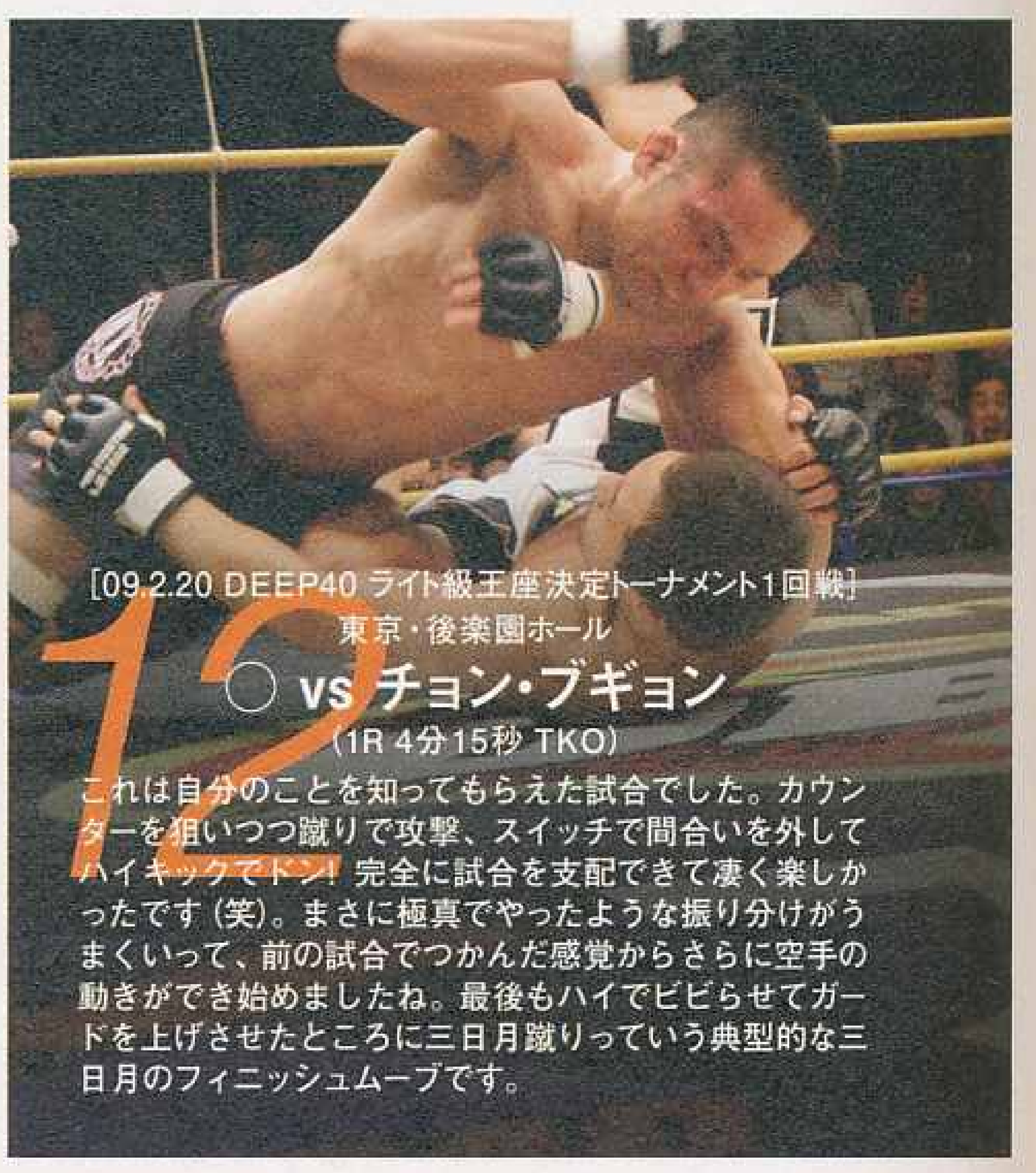
11



[08.12.10 DEEP39]
東京・後楽園ホール
○ vs キム・ジャンヨン
(2R終了 判定3-0)

僕の右ミドルが効いてガードは下がるんだけど、またヒザを壊してたのでハイが蹴れないっていう試合でした。相手の選手はパンチがありタフでしたね。でも、言葉がわからないからへんな雑音が入らず集中して試合できるのはいいですね。この試合ぐらいから相手の気を読んで一撃で倒すっていう意識が芽生えました。いまの三戦(サンチン)スタイルへいい感触をつかんだのを覚えてます。

12



[09.2.20 DEEP40 ライト級王座決定トーナメント1回戦]
東京・後楽園ホール
○ vs チョン・ブギョン
(1R 4分15秒 TKO)

これは自分のことを知ってもらえた試合でした。カウンターを狙いつつ蹴りで攻撃、スイッチで間合いを外してハイキックでドン! 完全に試合を支配できて凄く楽しかったです(笑)。まさに極真でやったような振り分けがうまくいって、前の試合でつかんだ感覚からさらに空手の動きができ始めましたね。最後もハイでビビらせてガードを上げさせたところに三日月蹴りっていう典型的な三日月のフィニッシュムーブです。

13



[09.4.16 DEEP41 ライト級王座決定トーナメント決勝]
東京・後楽園ホール
○ vs 松本晃市郎
(1R 4分32秒 KO)

僕のスタイルがそのまま対策になりましたね。相手の松本選手はカウンターを取る選手なので、僕から手を出せば向こうのペース。逆に僕が手を出さずに近くまでいけば向こうは手を出せないわけです。まさに僕のやりたいことがガッチリはまって、最後は相手が手を出した瞬間に合わせました。しかもこの試合は300人以上の応援団と竹師範と木山先輩も来てくださって、いままでで一番緊張した試合ですね。

14

[09.7.20 DREAM.10]
埼玉・さいたまスーパーアリーナ
○ vs アンドレ・ジダ
(1R 3分47秒 TKO)

松本戦同様、僕のやることは決まっていて思いどおりの試合になりました。凄く集中できて絶対に自分のパンチが先に当たる自信がありましたね。ジダ選手が僕に打ち込んでこなかったんですけど、あれはジダ選手がいったらやられるという感覚があったと思うんですよ。だから不用意に近づいてこなかったんだと思います。三日月蹴りが効いてないような顔してましたけど、あれは効いてます! 足応えがありました(笑)。



15

[09.10.25 DREAM.12]
大阪・大阪城ホール
× vs エディ・アルバレス
(2R 3分42秒 肩固め)

集中力が足りなかったし、心を作れなかったっていうことに尽きます。怖さ、緊張から逃げて楽しもうとしてしまいましたね。僕はアルバレス選手が打ち込んでくる瞬間に倒す自信があったんですけど、心と身体がリンクしてなかったです。あのフルネルソンのかたちは初めてのパターンですね(笑)。痛いだろうなとは思ってたんですけど、いろいろやっても極まらないんですよ。クラッチに余裕もなかったんで引き込むこともできませんでした。



16

[10.3.22 DREAM.13]
神奈川・横浜アリーナ
○ vs 弘中邦佳
(1R 1分26秒 KO)

ウェルター級から落としてきて経験もあるし、下馬評は弘中さん有利だったらしいですね。佐伯さんですら僕のこと信用してなくて、試合後謝りに来ましたから(笑)。構えも少しずつ変わってきて、簡単に言えば脇が締まったっていう感じですかね。本来三戦立ちっていうのは脇の締めが大事なんです。太気拳の"立禅"っていう気を練る構えも参考にしてます。





克紀は入門してすぐ「強くなる」と思いました



A-SQUARE主宰
髙阪 剛

菊野特集といえば、もちろん欠かせないのはTKである!
勝利後のマイクで「"世界のTK"の弟子、菊野克紀です!」と菊野が挨拶するとおり、
菊野のTKへの信頼は絶対だ。そんな二人はどのような師弟関係なのか?
またTKから見た菊野克紀の強さについても語ってもらった。

聞き手/長谷川亮　構成/松下ミワ　試合写真/平工幸雄、乾晋也

総合では「バカで素直なヤツが一番強くなる」って言うんですけど……

——今日は"世界のTKの弟子"菊野選手についてお聞きしていきますのでよろしくお願いします！ まず出会った当初の印象からお聞きしたいのですが。

高阪 えっと、最初はリキックスの小野寺会長だったかな……昼にやってるプロ練のときに「お願いします」って紹介されてきて。ちょっとそこはおぼろげなんで、本人に確認してください（笑）。でも、入ってきたときに礼儀だったり言葉使いだったり「あ、武道やってた人間ぽいな」っていう雰囲気はありました。気持ちがしっかりしているなと思いましたね。

——最初はどんな話をしたんですか？

高阪 「プロを目指して頑張ります」っていうことを言っていたので、こっちもそういう目で見て最初から指導するようにしてました。あと、最近はだいぶ取れてきたけど、鹿児島なまりが凄かったんです（笑）。だから言ってることが理解できないっていうのが最初はよくありました。いまでこそ標準語に近くなってますけど最初は凄くて、何回も聞き直したりしたことがありましたね。

——最初から「これは強くなるな」っていう才能があったんですか？

高阪 それはすぐ思いましたけど、総合の寝技とか試合をするための技術って、実際そんなすぐに身につくものじゃないんです。だからやっぱり時間はかかるし、そこは時間をかけなきゃいけないし。総合ってほかの格闘技をしっかりやってた人間のほうが逆に入りが難しかったりするんです、前の技術にこだわっちゃったりして。そういう、もとの技術や感覚が邪魔しちゃうことが多いんですね。前にほかの格闘技をがっちりやってたほど、そういう"いいクセ"が身体についちゃってるから、それを一回解きほぐす作業から入らないといけない。真っ白な状態から始める人はそれがないから、いきなり積み重ねるだけでいいんですけど。



菊野の試合には必ずセコンドについているTK。この写真のTKからは、まるで我が子を見守る父親のような温かさを感じるぞ！
©DREAM

——菊野選手の場合はどうだったんですか？

高阪 うーん、ただそこも早かったとは思います。それはたぶん「こうじゃなきゃいけない」とか、そういうイメージがあまりなかったからじゃないですかね。自分はよく言うんですけど、総合では「バカで素直なヤツが一番強くなる」って（笑）。何も身についていないのに「こうだ！」って決めつけすぎちゃうと、その場その場で起こってることに対処ができなくなるんです。いま起きていることに柔軟に対処できる人間は総合に向いているというか、総合を覚えていくのが凄く早いと思います。克紀はバカじゃないけど素直だったんで（笑）、そこはすんなり入っていくことができたんでしょうね。

——確かに菊野選手は天真爛漫で素直そうな印象です。

高阪 やっぱり素直が一番ですよ。でもアゴが上がるとか、姿勢がよすぎて攻撃できることがかぎられるとか、だいぶクセのある身体なので、本人はそれで相当悩んでました。タイプ的にも、寝技もできてキックボクシングもボクシングもしっかりできて、という全部がうまくできるタイプじゃないので、自分ができることはなんなのか？ っていうのを探す作業に苦労していたと思います。

——アゴの上がりや姿勢のよさはいまも残っていますが、そこは直そうとしなかったのですか？ 空手も当時はまだ総合向きでないと思われていたでしょうし。

高阪 いや、それはなかったですね。やっぱり"やりにくさ"っていうのが残ると試合ではよくないんです。どんなにいい技術でも本人にとってやりにくい、できるけどぎこちないとか、それはどんなに素晴らしい技術でもその人にとってはダメなんですよね。だからそういうところが見えたら、それは無理にやる必要ないよとか、自分は逆にそういう指導をしていました。

——では、総合に順応する苦労はあったけど早くから強くなる予感はあった、と。

高阪 まず根本的なところで、自分から進んでつらいことを練習のなかでやっていましたからね。それって上へ登っていくには大事なことじゃないですか。そういう気持ちの持ち方とそれを行動に移す実行力は必ず必要になる。あとはそれをどう試合へとつないでいくか。いろんな選手がいるんですよね。ちょっとずつ段階を踏んで経験を積ませていったほうがいい選手と、2、3段飛ばしながらやったほうがいい選手と。それで克紀は飛び級でやったほうがいいと思ったので、フューチャーファイトも含めてできるだけ早くプロのリングに上がれるよう考えていました。結局これもタイプによるんですけど、同じ経験でも凄い量の情報を手に入れられる選手と、それを小刻みにしかもらえない選手と、いろいろいるんです。それが克紀の場合は一回の試合で持ってくる、もらえる量が多い。それは気持ちが開いてるから、こだわりは残しつつ入ってくるものをいったん受け止める、そういうかたちで格闘技と向き合ってるからだと思います。

——では最近の話に飛んじゃいますが、アルバレス戦で得たものも大きかったのではないですか？

高阪 デカいと思います。もちろん勝つに越したことはなかったけど、あれは負けても必ずもらうものがある"修業になる試合"っていう位置づけで決めた試合なんです。選手って必ずいつか頭打ちがくる。いろんな技や展開作りを覚え、経験を積んで成長していくけど、研究されたり情報が知れ渡って技術が通用しなくな



毎試合、「ウィー・アー・ザ・ワールド」という至極平和な歌を入場曲にしている菊野。“殺し”の三日月蹴りで対戦相手を“刺しにいく”菊野の戦法とはあまりに対照的すぎて、逆に身震いがしてしまうのは気のせいか。

克紀は教材がないからたいへんなんです
自分で作っていかなきゃならない

り、下へ回りだすときがくるんです。でも克紀はまだそこまでいってない、一周してない状態なんで、まだまだ身につけられるものがあると思います。素直なところと、こだわりはあるけど常に受け入れる姿勢を持っているから、まだ膨らむと思います。

――素直、飛び級、一回で得る経験値が多い、発展途上……菊野選手を理解するためのキーワードがいろいろ出てきましたね。

髙阪　ただ、全部が全部できるタイプの人間じゃないから、逆に選んでいかなきゃいけないんです。もっと言えば、自分で作っていかなきゃならない。教材がないから大変なんです、克紀の場合は。ワン・アンド・オンリーで似たものはないっていうことではいい部分もあるんですけど、その作業は大変だし、これからも大変だと思います。だから自分で創造していく力がなかったら、難しいタイプのファイターだったと思います。

――現在の菊野選手はアライアンスのなかでどういう存在なんですか？　キャプテン的な？

髙阪　結果の面で頭は出てますけど、それはないですね。むしろまだまだ頑張らなきゃいけない立場なんで、チームを引っぱるとか、いまはそういう意識を持ちすぎるのはよくないんです。たとえば部活って、ポイントゲッターでバリバリ活躍するヤツはあえてキャプテンにはしないんです。チームっていうのを考えるとそういう状態のほうがいいんですよね。そのほうがバランスがとれるんです。

――一番強い選手がリーダーじゃないほうがいいんですか？

髙阪　そうですね。もしそうなりかけても自分はやらせないようにします。もちろん、それができるタイプとできないタイプというのはありますけど、本人がどういう状態なのかっていうことのほうが大事ですね。本人がいまから頑張ろうとしているときにほかの仕事ができちゃうと、やっぱり散漫になっちゃうので。だから本人が頑張ってることによって自然と“ああ、あいつ頑張ってるから俺もやらなきゃな”とか“俺も頑張らなきゃ”というふうになるほうがいいですね。

――では、アライアンスのなかでは副キャプテン的な位置？

髙阪　う〜ん、そうでもないですね（笑）。“副”がけっこういっぱいつくくらい。まぁ行動で周りをついてこさせるというか、チームのなかではそういう状態ですね、いまは。まだみんなから教わることもあるし、逆に克紀が練習することによってみんなが強くなってくれるという相乗効果も起こっているので、道場の中の一人っていう、そういう存在のかたちは崩れてないですね。だから“化ける”ことができたんだと思いますよ。選手は「自分はほかの人と違ってこういう身体の使い方しかできない。だったらできることをやろう」って切り変わる瞬間があるんです。で、だい



道場内では「副がたくさんつくキャプテン」という菊野。TKいわく、意外にいじられキャラらしく、あの長南亮からは“教祖”と呼ばれているそうだ。確かに、そういうオーラは凄くある!?

一気にケガ人が増えだしたんですよ 克紀の蹴りで肋骨が折れちゃったりとか

たいそこからうまくいきだす。だから、自分だけの技を手に入れるためには開き直ったほうがいいんです。「どうせ俺はこれしかできないんだから」「下からの三角絞めとか考えられないし」みたいに。相手が倒す気でガンガンくる試合のなかで、そこに気がついていなくてできもしないことを一生懸命やっててもすぐ負けちゃいますから。そのへんの開き直りとか、どういうふうに自分をとらえるかっていうのは苦労してたけど、チームのなかでもまれていたおかげで早かったと思います。

――どのあたりでそういう成長・変化があったんですか？

高阪 えーと、ケガ人が続出したときぐらいですか（苦笑）。だんだんケガ人が増え始めて、たぶんそのときぐらいから克紀がわかりだしたと思うんですね。蹴りをもらって骨折したとか、肋骨が折れちゃったりとか。それで見てても「これはマズいな」というふうになって。で、「ちょっと待て」と。

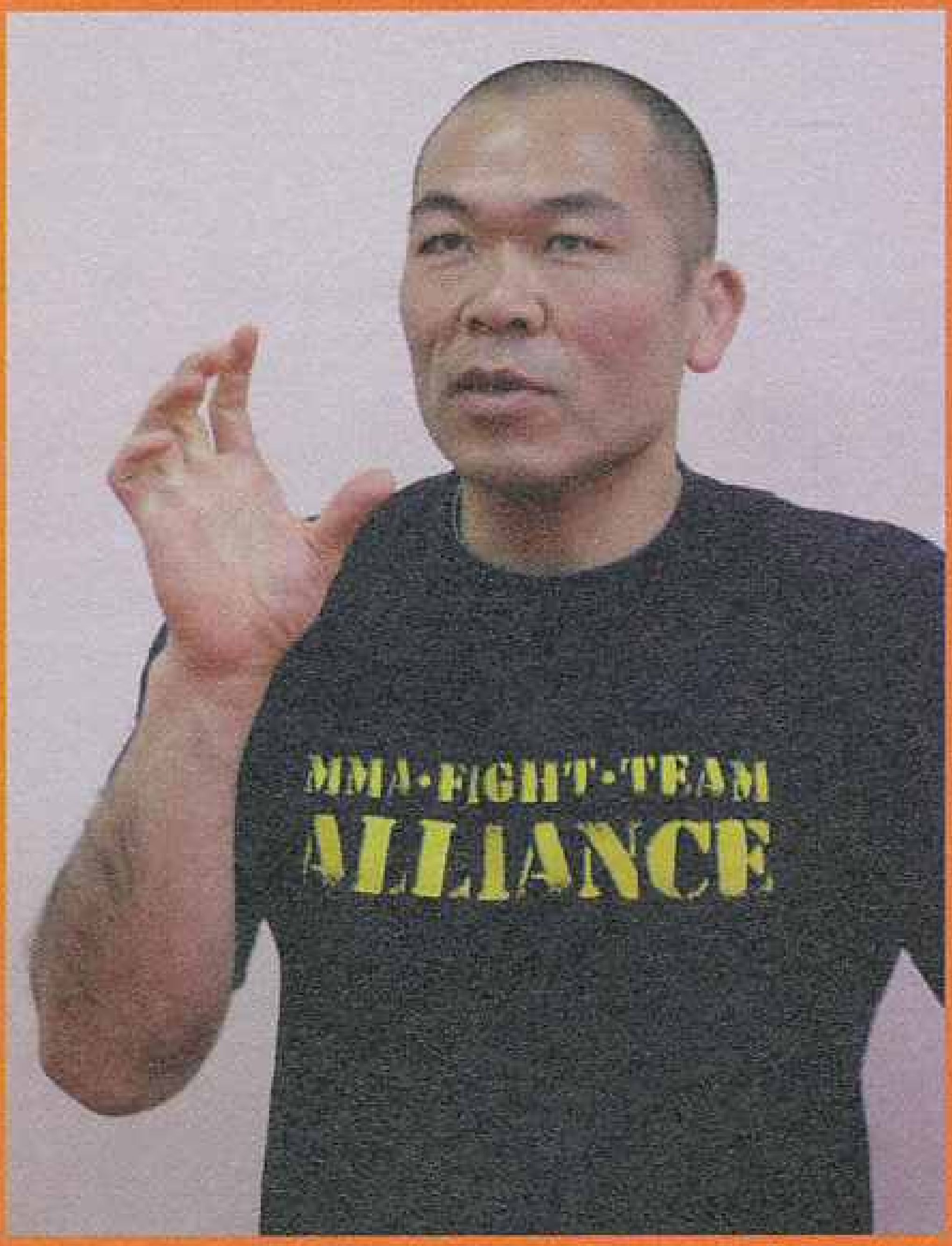
――ドラゴンならぬTKストップがかかったんですか（笑）。

高阪 もうギリギリのラインですね。全員壊されて練習相手がいなくなる前にやめさそう、みたいな（笑）。一気に増えだしたんですよ、ケガをする人が。でも、それをちゃんと試合で使えれば武器になるわけですから。

――そのとき覚醒したんですかね？

高阪 だからそこで開き直ったんでしょうね。それまでは総合だから寝技もできなきゃいけない、テイクダウンもしっかり取れなきゃいけないって、いろいろ試してやってたんです。でも「自分の試合はこうでいいや」っていう。もちろん寝技もテイクダウンもあるけど、比重を置く場所であるとか、試合で勝つための標的がある程度定まりだしたんじゃないかと思います。そのときに「伸びてきたな」って。

――なるほど。ではここからは普段の菊野選手についてお聞きしていきたいと思います。



こうさか・つよし■1970年3月6日、滋賀県出身。柔道をバックボーンにリングスに入団し、94年にプロデビュー。その後、リングス、UFC、PRIDEで活躍し、06年5月のマーク・ハント戦で引退。その後は名解説者としてDREAMやUFCの解説を務める。密かに"復帰説"があるのは気のせいではないはず!?

髙阪剛

高阪 普段はうちのジムでは相当ツッコまれてますね（笑）。本人のイメージをあまり悪くしない程度に言うなら……。

――そんなに悪い話が多いんですか（笑）。

高阪 いや、おもろいことが多いです（笑）。けっこうみんなにいじられてますからねぇ。いや、本人は何も悪くないんですけど周りがそういうヤツなんです。俺も含めてですけど。

――でも、確かにいじられやすそうには見えます（笑）。

高阪 そうですね。でもまぁ、あんまりいじられてるって言わないでやってください（苦笑）。

――では、愛されてると。

高阪 あぁ、言い方を変えるとそうですね。まぁ、うちのチームは全体の雰囲気として凄く風通しがいいんでね。たとえが悪いかもしれないけど、ハゲてる人間に「ハゲ！」ってちゃんと言えるっていうか（笑）。へんに気を使わないし、逆に凄いところは「おまえ凄いな！」って素直に言うし、どうやってやったのかも聞くことができる。へんな障壁とかはないんです。腹の底からしっかり付き合えるのが自分が理想とするチームなんですけど、そういうなかでもしっかり役割をはたしてますね、克紀は（笑）。

――何か失敗談だったりがあれば……。

高阪 あまりそういうのはないですけど、ウチの渡辺悠太がM－1ロシア大会に出たときセコンドで行かせた帰りに、ホテルにパスポートを忘れてもう一泊するハメになったというのはありました。当時はまだDEEPでプロに上がったか上がってないかくらいだったと思うんですけど。で、そこには佐伯さんとかDREAMの関係者の方がけっこういて、それで顔を覚えてもらったっていうのはあったと思いますよ。あれはいまだにみんなに言われますね。

――あと菊野選手といえば欠かせない、『ウィー・アー・ザ・ワールド』での入場についてもお聞きしたいのですが。

高阪 最初は「なんじゃこりゃ」と思いました（笑）。そのとき自分はセコンドじゃなかったんですけど、会場にいたらあの曲が流れてきて、「誰だ、こんなんで入ってくるのは？」って思ったら克紀だったんです。

――で、なんじゃこりゃ、と（笑）。

高阪 正直そう思いました（笑）。まじめにやってるのか冗談でやってのかわからなかったし。なんであれで気合いが入るのか信じられないですよねえ。これはウチの連中もいまだにみんな言ってます。なんであれで気持ちが高まるのか不思議でしょうがないって。でも本人は毎回ちゃんと気持ちも乗ってリングへ上がっているのが確認できたので、だったらもういいやと思えるようになりましたけど。

――ある種「おめぇはそれでいいや」と（笑）。

高阪 自分もリングスでデビューするとき入場曲をスティーブ・ヴァイにしたら「誰？ それ」ってよく言われてたんで、人にわかってもらえない部分ではちょっとわかるところがあったんで（苦笑）。ただ『ウィー・アー・ザ・ワールド』はこれから相手を殴りにいくのに何か包み込むような……（笑）。でも試合では普通にバチバチやってるんでまぁ大丈夫かな、と。

――今後も空手幻想を体現しつつ、『ウィー・アー・ザ・ワールド』で入場してくる菊野選手から目が離せません（笑）。

高阪 ちなみにうちでは"教祖"とも呼ばれてます。"菊野空手教"教祖（笑）。最近は長南なんかも「おい、教祖」とか呼んでいて。でも本人もあきらめたのか、ちゃんと「はい」って返事をしてますよ。

――ジム内でのキャラについても開き直ったのかしれないですね（笑）。

【10年4月1日／都内・A－SQUAREにて収録】



菊野にGSPにリョート……地上最強幻想ふたたび！

空手復権の刻

総合格闘技が産声を上げるはるか前の時代から、地上最強幻想に包まれてきた空手。
時代の移り変わり、MMAの成熟の過程のなかで空手はどのように生き残ってきたのか？
その歴史をひも解きながら、現代格闘技における空手の神秘的ともいえる強さの構造を考察する。

文／長谷川亮　構成／鈴木佑　写真／Josh Hedges（UFC）

「カラテ・イズ・バック！」

09年5月、『UFC98』でラシャド・エバンスを降し、世界ライトヘビー級王者となったリョート・マチダは戴冠後のインタビューで興奮気味にこう叫んだ。

すでにタイトル奪取以前から独特の打法や間合い操作で空手の強さを示していたリョートだが、世界王者となったことでその優秀性や実戦性を完全証明。〝空手復古の大号令〟と言うべきこのマイクにつながった。

またこの発言に前後して、UFCの先輩王者GSP（極真出身）、DEEPからDREAMへステップアップした菊野克紀、松濤館空手をベースにするマリウス・ザロムスキー、トレーナーがやはり松濤館空手出身のMAX王者ジョルジオ・ペトロシアンと、空手と縁のある選手の活躍がマット界で目立ってきた。

日本ではプロレスと並び、長く〝最強論争〟のメインキャストであった空手。UFCの誕生から総合格闘技の隆盛を経て、しばらく厳しい位置へ追いやられていたが、前述した選手たちの活躍により再評価のときを迎えた。

三戦立ちや三日月蹴りといったボクシングやキックとは異なるセオリー、技法で、いまだミステリアスな印象と幻想を抱かせる空手。本稿ではマット界で活躍した空手の先達を振り返るとともに、その最強幻想についても（ほんの少し）考えてみたい。

日本マット界の始祖・力道山。敗戦に打ちひしがれる国民にテレビ中継を通じ勇気と活力を与えたが、その必殺技は空手チョップ。極真空手の大山倍達がその著書で力道山に伝授したことを明かしたが、二巨星の交流、および空手技の伝達は、その後の空手とマット界との〝つかず離れず欠かせない〟関わりを予見していたのかもしれない（力道山の弟子・ジャイアント馬場が用いた逆水平、脳天唐竹割りも空手チョップのアレンジである）。

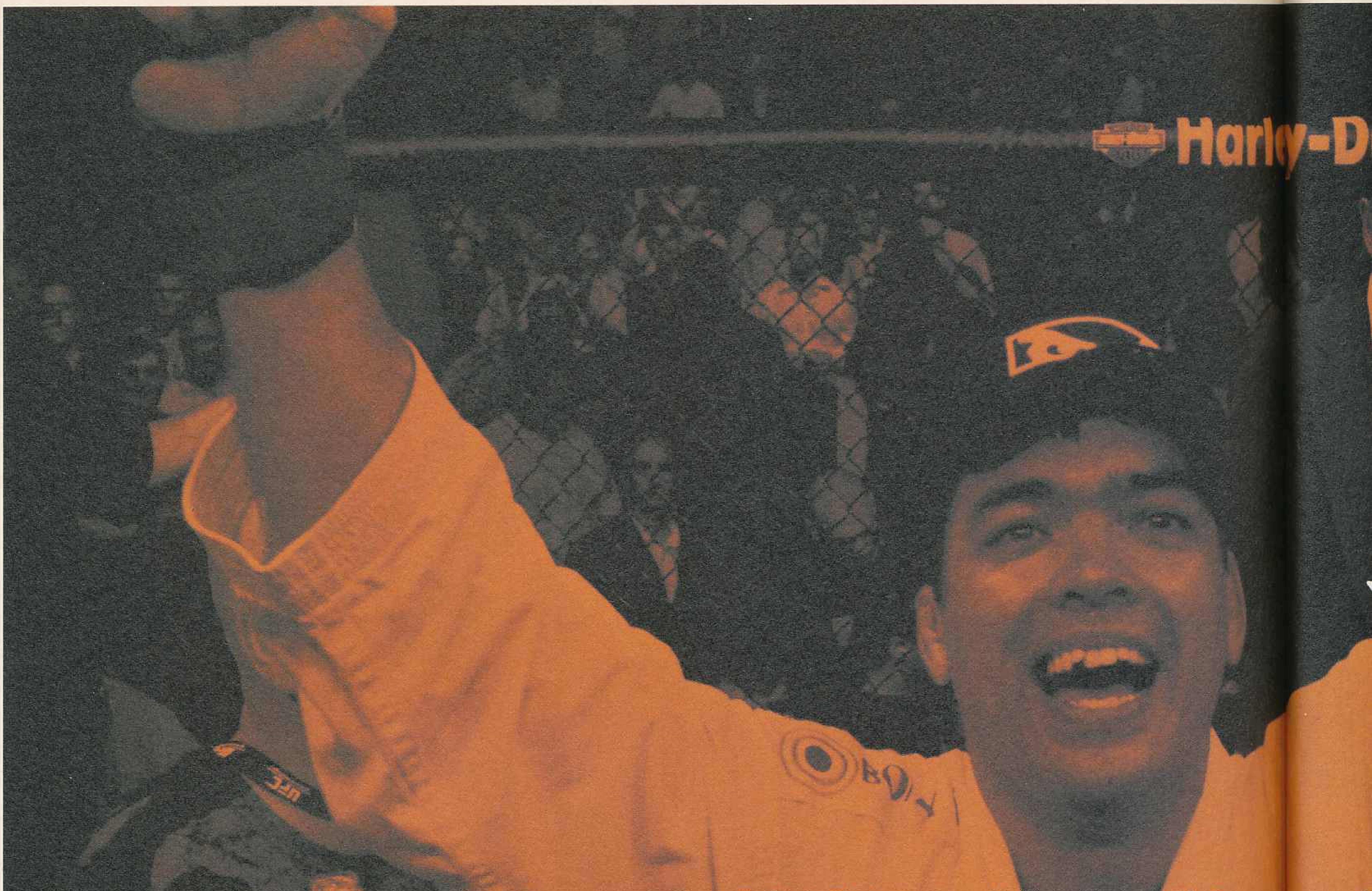
早くから強さのイメージと技自体が持つ説得力でマット界に導入されていた空手だが（ブッチャーの地獄突きなど）〝空手家〟自体が登場するにはやや時間を要し、猪木が行なった一連の異種格闘技戦で「全米プロ空手王者」ザ・モンスターマンが登場したのが最初であったか。しかしプロ空手は空手やテコンドーなどの修行者がグローブを使用し顔面パンチを取り入れるかたちで行なったもので、ほぼキックボクシングと相違ない。

日本では「マーシャルアーツ」と呼称され、モンスターマンも派手な跳び技、回転蹴りなどテコンドーの影響が色濃い選手であったが、跳躍力や蹴りのキレなどは目を引き、後年山本小鉄をして「もしいまモンスターマンがいたらK—1で優勝できる」という発言を引き出すに至る（根拠には乏しいが……）。

その後、まるで振るわなかった同じくプロ空手のミスターX（なぜか覆面、猪木の格闘技戦史上最低の相手とも評され、替え玉説あり）という選手もいたが、なんといってもビッグインパクトは〝熊殺し〟ウィリー・ウィリアムス。2メートルにおよぼうかという長身に体重100キロと均整のとれた肉体を持ち、その暴風雨のようなファイトはエヴェルトン・テイシェイラと並びいまだ極真史上最強外国人として名を挙げる声も多い。何より映画『地上最強のカラテPART2』ではグリズリーと闘っており、逸話のスケールにおいて最強論争の好敵手プロレスラーになんら劣っていないのだ（むしろ勝っているか）。

さらにその後、猪木の敷いた格闘技路線はUWFへと引き継がれていくが、その中心人物・前田日明が空手出身であるのもこうして見ると何か運命的に感じられる。

マット界においては「世界最強の格闘技」を標榜するプロレスの敵役として担ぎ上げられ



ることの多かった空手だが、その後のUWF以降もジェラルド・ゴルドー、佐竹雅昭、ビターゼ・タリエルといった空手家が参戦。K—1を経てPRIDEに挑んだ佐竹こそ勇気と挑戦はたたえられながらも結果を残すことができなかったが、タリエルはリングスで無差別級王座に就くなどその強さを認められ、ゴルドーも空手家としてのイメージは薄いもののUFCと広範囲に活躍した。(初来日は極真の世界大会)その後はK—1、

だが総合格闘技黎明期において主力は当初の柔術からレスリングへと変遷していき、空手の強さが発揮されることはなかった。また空手だけでなくストライカー受難の時代で、寝技とテイクダウン対策を欠く打撃格闘家が勝利を挙げるのは至難をきわめた(ボブチャンチンなどの例外はあったが)。プロレスは桜庭和志の「プロレスラーは本当は強いんです」という発言に溜飲を下げるが、「空手家は本当は強いんです」という実感は2000年代、リョートの出現まで時間が必要となる。

そんななか90年代から来日し、大道塾で初の外国人優勝者となるなどれっきとした空手家で、パンクラスでも王者となって総合対応を見せていたのがセーム・シュルト。PRIDEでハリトーノフの凄惨なマウントパンチの犠牲となった印象が強いが、K—1王者となって以後もキム・ミンス、マイティ・モーを相手に三角絞めで勝利する器用なところを発揮している。K—1においても後ろ回し、三日月蹴りといった空手由来の技で勝利を挙げており、規格外の肉体に隠れてしまいがちだが、空手の強さを見せてくれる選手の一人だ。


そして技術変遷の速い総合格闘技において、空手はついにGSP、リョートといった存在を得て逆襲のときを迎える。GSPこそ入場時に空手着をまといつつ柔術とレスリングを巧みに吸収・昇華させたMMAスタイルだが、リョートのスタイルは構え、打法においても空手そのもの。王者となり発した「カラテ・イズ・バック」の叫びは逆襲、そして空手革命ののろしでもあったのだ。

GSP、リョート、菊野——3人には腰の重さ、容易にテイクダウンを喫さないという共通点がある。かつて打撃格闘家たちは徹底してテイクダウンを狙われ、得意の打撃を発揮できず敗れたが、リョートは相撲、菊野は柔道といった空手以外のバックボーンを活かし、ストライカー固有の弱点を克服。相手のテイクダウンを切り続けてスタンド戦を強要し、従来にはない空手の距離感、間合い操作から空手技を使って仕留める、という勝ちパターンを持っている。

また、すぐに映像が出回る現代においては青木vsメレンデス戦に顕著なように徹底した分析と対策が可能となるが、空手は型などいまだ解明されない部分を残すため、対戦相手に対策を進ませない利点もある。倒れず立ち続ける、倒されたらすぐ立つ——現在のMMAにおける主流の戦法で、そのうえでスタンドでの主導権争いが試合の鍵を握るが、ここでまだ研究の進んでいない空手を駆使することはアドバンテージの掌握にもつながるだろう。

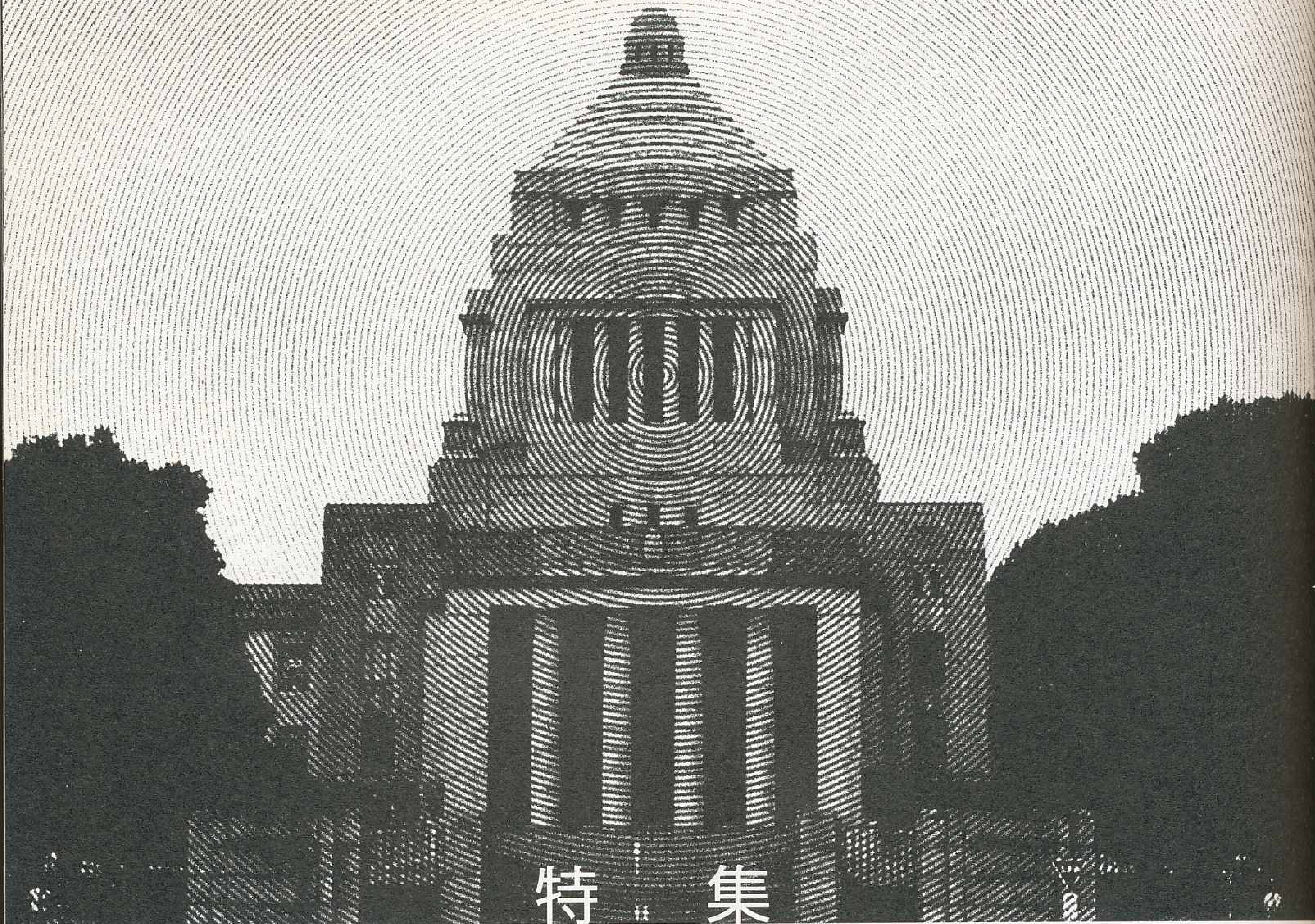
全世界至るところに道場と修行者を持ち、海外ではほかの格闘技を並行して学んだり、技術を取り入れる者も多い空手。豊富な競技人口を誇ることから、今後第二のリョートが生まれてくることも予想される。また、空手の型は相手が組みついてくるようななんでもアリ的局面を想定しているという説もあり、MMAにおいてこそ真の空手の姿、そして強さが発揮されるのかもしれない。

今後空手がMMAシーンにおいて一時の隆盛に終わるのか、あるいは打撃のメインストリームとなっていくのか。その最強幻想の行く末とともに注目していきたい。



現IWGPヘビー級チャンピオンが初の単行本をリリース!!
プロレス界で最も難解な男
中邑真輔がつぶやく10万字!!
デビュー当初から
「媚びを売るな!」って
アドバイスする
アゴの長い人が
身近にいましたからね
中邑真輔の
一見さん
お断り
プロレス界史上最高に難解な男の脳みそを解き明かす!!
全国書店にて絶賛発売中!
B6変型判／定価=1,890円（本体1,800円+税）
おかげさまで10周年
エンターブレイン
ANNIVERSARY 10th
enterbrain
発行／株式会社エンターブレイン
〒102-8431 東京都千代田区三番町6-1 TEL.0570-060-555（代表）
発売／株式会社角川グループパブリッシング
［エンターブレイン総合サイト］http://www.enterbrain.co.jp/

切っても切り離せないマット界と政界
そこに棲むのは豪傑か？ 妖怪か？



特集

レスラーと政治

今夏の参議院選挙に国民新党から西村修の出馬が電撃決定！
さらにはすったもんだこそあったものの、前田日明の出馬も噂されている昨今。
この何かと縁のあるマット界と政界の関係について、憂国（？）の『kamipro』が考えてみましたよ！



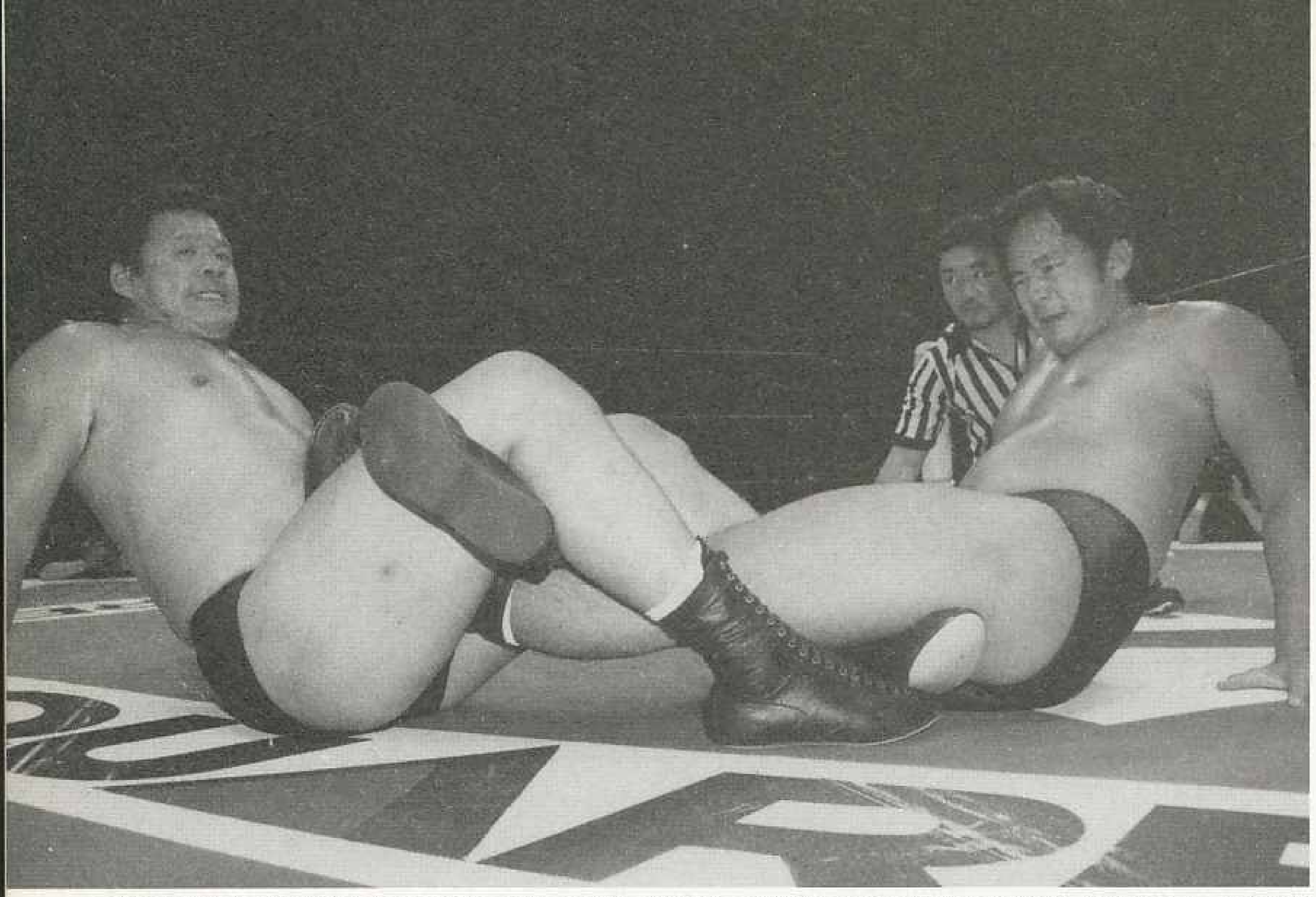
国民新党から夏の参議院選に出馬決定！

「無我で国を救います」

亀井静香もほれた男 西村修

マット界きっての思想家・西村修が、な、な、な～んと選挙に出馬！
国民新党からの公認候補第１号として、参議院選挙への参戦が決定したのだ。
新たな闘いのリングに上がらんとする無我の伝道者にその真意を直撃！

聞き手／高崎計三　構成／鈴木佑



西村の思想に大きな影響を与えたのが、新日所属時にドラゴン主催の自主興行「無我」に参戦をはたしたこと。いまは袂を分かった状態であるかつての師匠ドラゴンは、西村の出馬をどのように思っているのだろうか？

——国民新党から参院選に出馬されると発表されたときは驚きました！　まずは、あらためて出馬の経緯を教えていただけますか？

西村　私の母の母、つまり祖母なんですが、その兄弟に細田彦一という人がおりまして、私は会ったことはないんですが、文京区の区議会議員だったんですよ。ずっとその話を聞かされてまして、子どものときって将来何になりたいかとか書くじゃないですか？　パイロットとか野球選手とか。私の場合プロレスラーになりたいっていうのは中学生からの話で、あまり口にはしてませんでしたが、小さい頃から国会議員、政治家っていうのはどこか頭にあったんですよ。

——あ、そうなんですか。

西村　でもなかなか、なろうと思ってなれるもんでもないし、自分はプロレスラーになろうと思ってずーっと努力してきたんですけど、やっぱり一番大きいのは「無我」の思想ですよね。

——「無我」の思想で政治へ！

西村　「無我」っていう思想もいきなり持たされるわけではないんですね。まず、ヤングライオン時代があってアメリカに行って、ヒロ・マツダさんのところでそれまでと180度違うことを教わって、自問自答の日々がずっと続いたんです。そして、日本に帰ってきてもまた鳴かず飛ばずの96年というのがあって、97年にヨーロッパに行ってトニー・セントクレアーに出会って。その前、95年にアメリカから帰ってきたときに藤波辰爾さんと『無我』をスタートしましたけど、デビュー5年ぐらいですから自分自身のキャラとかがまだ開花してなかった。はっきり「こういうものだ」という価値観ができたのは、やはり97年にドイツに行ってからですよね。

——ヨーロッパスタイルというのは『無我』の大きな要素ですよね。

西村　それで98年に日本に帰ってきて、病気をするわけですよ。

——ガンにかかって。

西村　はい。それで、要は進路の決断になっちゃうんですね。ガンですから再発予防のために、放射線とか抗がん剤とか、化学治療を使って延命のための処置をしていくわけですよ。で、私の部位は放射線を勧められたわけです。でもそうすると、スポーツ選手としては致命傷になってしまう。また腫瘍っていうのは、1〜2センチぐらい、ある程度大きくならないとわからないんです。そういういまあるかどうかわからないものを叩いて、延命処置をとってプロレスをあきらめるってことは納得できなかったんです。

ガンを克服してプロレスを続けること
そこから自分の政治活動は始まっていた

——続行する道を選んだ、と。

西村　重要な決断ですけど、そんなに簡単にプロレスはあきらめられなかったし、逆にガンを克服して闘い続ける姿というのはいろんな人、ガン患者や小児ガンの子どもに対して、よりメッセージ性が増すんじゃないかなと考えたうえで、決心したんです。プロレスを続けて、より多くの人に勇気を与えることこそ私の使命である、と。そこからもう、ハッキリ言って、自分にとっての政治活動っていうのは始まってるんですよね。

——なるほど。

西村　そもそも無我の思想っていうのは、「一つ一つの技を大切にしなさい」という原点回帰の思想なんです。それを、2000年の6月に復帰してからずっと訴えてきました。とくに06年に新日本を辞めて、同じ思想のレスラーだけで団体を作ろうと決意したのが無我ワールド・プロレスで、私は絶対に成功させる自信があったんですよ。絶対的にこっちのほうが正しいという……私も藤波さんも、時代に合わせようとかいう発想は微塵もなかったですからね。だけどビジネスとして考えると、いろんな困難が出てきたわけですよ。それでそうこうしているうちに藤波さんと決別し、07年に全日本に入って。

——あのときはいろいろ物議を醸しました。

西村　それでも私の訴えることは一緒なんですけども、そうして訴えることはリング上のことだけですよね。そこで悪く言えば、リング上のことだけでは満足できなくなり、もっとより強烈に、より多くの人に、より強く無我の思想を訴えたいという欲望が出てきちゃったんですよ。この1年ぐらい。でも普通は政治家になろうったってなかなかできないですよね。タイミングもありますし、ブレーンになってくれる人にも偶然出会ったんです。それで真っ先に私は手を挙げさせてもらいまして。でもまあ、「なるべくしてなったかな」とは思うんですけどね。別の角度から行動を起こそうとしていた時期もありましたし。

——というと？

西村　無我ワールドプロレスのときに、1ヵ月に一回か二回しか試合がなかったので、プロレスをしながらプロレス版の○○ヨットスクールをやろうか、と。スタッフも全部見つけて、法人も作ったんですよ。ちょうどそのときに、全日本から話があったので、すぐに入団したんですよね。まだ私もリング上で訴えたいことがあったので、学校経営は一度先送りにして。ただ、個人的なカウンセリングとかはずっとやってきたんですよ。それをやりながら、プロレスだけじゃ刺激が足りなくなってきたっていうか。政治の力を利用して、とくに最近の引きこもりとか鬱とか、登校拒否とか自殺者の問題を新聞とかで見てますと、我慢の限界になりましたね。

——リング上での無我の思想はプロレスファンにはある程度なじみがあると思うんですが、これを広く世間一般にとなると、もっとわかりやすく噛み砕く必要が出

てきますよね。
西村　そこは、それこそ政策という話になってくると思うんですが、実際に何ができるかという話で、食事の問題から教育の問題から数えきれないぐらいありますけども、やっぱりこれだけ自殺者とか鬱の人がいるって、正常じゃないですよね。国レベルで取り組んでいかなければいけないと思うんです。ガンのことにしても、無我ワールドプロレスのときは毎回毎回、小児ガンの子どもたちを何十人も招待してたんですよ。リング上で勇気を訴えることはできたとしても、もっともっと政治の力を使って何かしないと、どうしようもない未来になっちゃうんですよね。



西村の出馬に関して武藤は「最初に聞いたときは何をトチ狂ったのかと思った」と笑いつつも、「全日本プロレスは西村が勝つために全身全霊でバックアップします」と協力することを明言！

——しかし、プロレスの世界とは方法論もまったく違ってきます。そのあたりは？
西村　こればっかりは未経験ですから、なんともわかりませんけど、リング上も引退したわけではないですから。とりあえず一時休業宣言というのをこの前の両国でしましたけど、国民の心の健康のため、人のためですから。自分のため、私利私欲じゃないんですよね。だから誰かが動かなきゃいけないんじゃないかという気持ちでいっぱいです。
——出馬を決めるにあたってどなたかに相談は？
西村　最初に武藤さんのところに報告に行きましたけど、武藤さんはやる気をきちんと買ってくださる方ですから。ただ、タイミング的にはチャンピオンカーニバルの直前で、会社に凄く申し訳なかったんですけど、それが終わってからでは遅かったので。あとは全日本、私を応援してくださっている方々に政治への思いを伝えるために、いま全国を回っているところです。
——ちょっと聞いたところでは、武藤さんにも出馬の話があったということですが？
西村　プロレスラーって当選してる確率が高いんですよね。だから武藤さんのところにも、いわゆる「政治屋」さんから選挙のたびに話がくるらしいですよ。
——確かにスポーツ選手のなかでは、プロレスラーは多いですよね。
西村　政治屋さんからすると、プロレスラーは全国各地を巡業してるからその土地ごとに支援者がいるじゃないですか。それはやっぱり大きいらしいですよ。

亀井さんにお会いして、長州政権に一人で刃向かってた頃の自分を思い出した

——西村さんの出馬が決定したのも、そういう「利点」があったからということですか。
西村　でも私は、誰かにそそのかされて「受かったらラッキー」というような気持ちではないんですよ。自民とか民主とか、いま勢いのあるみんなの党とかじゃなくて、なんでまた亀井静香さんなのかというと、１００人敵がいようと……実際に郵政民営化で小泉さんに真っ向から反対して自民を出られて、国民新党を作られるわけですけど、自分の「亀井派」の部下60人からも、お兄さんからも裏切られてるんですよね。でもホントに5人ぐらいのところから始められて、お会いすると意志の強さというのは尊敬に値しますよ。
——そんなに感銘を受けましたか。
西村　「受かるためにあっちこっちに行くようなヤツはオレも大っ嫌いだ」って言うんですよね。それで非常に思い出したことがあるんですよ。私自身が長州政権に一人で刃向かってた頃は、藤波派っていうのは私一人ですよ、一人！　あとは全員、長州派。長州派にいるふりをして心のなかは無派閥っていうのもたくさんいましたけど、心の底からは刃向かいたくないわけですよ。全部長州派ですからね。当時は越中さんから飯塚さん、佐々木さん、永田、中西……みんなそうですよ。唯一、スタンス的に無所属なのは金本ぐらいで。
——凄い状況ですね。
西村　やっぱりそういうなかで、あっちにこっちにフラフラ行くっていう人は過去20年、いっぱい見てきましたからね。だからホントにそういう意味でも、何人かお会いしたなかでは亀井大臣こそが「この人だ！」と思える人だったんですよ。
——ちなみに西村さんが反長州派だった理由というのは？
西村　そのときは5～6年のキャリアで、何十年のキャリアの選手に刃向かうってのがおかしいんでしょうけど、基本的に、人間的な考え方が合わなかったですよね。93年までの野毛の道場ってのは「気合いだ、気迫だ、とにかくパワーファイトでガンガンいけ」っていうことで、理論的なものなんて何もないんですよ。長州さんは、それを全部一緒にさせようとするんです。
——全員に強制するわけですか。
西村　だからそれに従わない者は、自分の思想に従わないんだからチャンスなんかもらえなくなっちゃいますよね。でもやっぱりホームランばっかりが野球じゃないっていうのはかなり前から思ってましたし、なんでもかんでも有名選手ばっかり集めてきてホームランをバカバカ打てばいいってもんでもないと思うんですよね。たった1本のバントだけで戦況が変わってしまうこともあるでしょうし。
——先ほどのお話に出たマツダさんに一番影響を受けた部分とも関係する？
西村　考え方っていうのは、結局戦法なんですよ。『水戸黄門』みたいにお客さんをジリジリ引っぱって、ガスを溜める方法もあるんです。まさに全部心理学の問題で。長州力のスタイルっていうのは「バーン！」と始まったときから爆発的に圧倒させようとするんですけど、それは彼には合ってると思いますよ。だけど全部がそれだったらおもしろくないんじゃないかっていうのが私の考えで。
——よくわかります。
西村　私はまだ中立的なんですよ。それ

西村修

もいいとして、こっちもあるんじゃないかという。だけど長州力という人は、自分の考え以外は全部間違ってるっていう人なんです。そこまで言われたら、私も「向こうが間違ってる」っていうので子どものケンカみたいになってしまいましたけどね、昔は。だから無我を旗揚げしたときなんかも、新日本が一致団結していかなきゃいけないときに別の流派ができちゃって、猛烈に嫌ってたみたいですけどね。でも藤波さんとの微妙な距離感……現場は全部長州力が仕切っていながら、藤波さんは先輩なんですよね。言うに言えないわけですよ。そこに私がガッチリついているわけですから、そりゃ当然のごとく目をつけられますよね。

——格好の標的ですよね（笑）。

西村　でも私は小さいときからそうでしたけど、長いものに巻かれるというのはまったくなかったんです。だから政治活動として尊敬する人を亀井大臣に選んだのも、やっぱりそういうところがあるんですよ。絶対曲げないですよね、あの人は。

——それでまた大臣にまでなったわけですからね。

西村　だから、幼稚園があって小学校があってプロレスがあって、長州政権があって、マツダさんの教えがあって日本に帰ってきて、ヨーロッパ行ってまたさらに強固なものになり、日本に帰ってきて病気になり、人々に訴えようとする考えが出てきて……これは全部つながってるんですよ。亀井静香にたどり着くまで。

——運命だ、と？

西村　これが小沢一郎さんのところとか行っちゃったらアレですけど、渡辺喜美さんでもなく平沼赳夫さんでもなく、亀井静香だったという。ヒロ・マツダ、トニー・セントクレアー、ドリー・ファンク・ジュニア、カール・ゴッチ、そして亀井静香なんです、私としたら。

——そう聞くと凄い並びですね（笑）。西村さんはいままでのプロレス生活のなかで、選挙に触れる機会はあったんですか？　たとえば馳さんや猪木さんの選挙のときとか。

西村　いや……会場なんかでは政治の話は一切しませんでしたよね。また猪木さんが89年から95年にやられてたときは、私自身がペーペーすぎちゃって、口もきいてもらえないし、こっちから話すのもおこがましいぐらいで。もっともそのときは政治以前に、プロレスラーとして一人前になることで精一杯ですし。それに、私はイラクも中国も平壌も行ってないんですよ。議員時代の猪木さんが、夜中とか早朝に道場にちょっとだけ来て練習してるのを見たりはしましたけど。

——そういうのを見てると、レスラーと政治家の二足のわらじは大変そうだと思いませんか？

西村　いや、私も国民新党に入党して以来、一日も休みはないですよ。日本をよくしなきゃいけないという気持ちが一番になると、自分が休もうとかそういう気持ちはなくなりますよ。みんなにより健康になってもらいたいっていう、純粋にそこだけなんです。

——プロレスラーでそこまでの思想を持って臨む人というのもなかなか……。

西村　いや、プロレスの世界で無我の思想がわかるっていうのも、100人いて一人いるかいないかだと思いますよ。そう思って征矢（学）にもずっと教えてましたが、彼は真逆の長州プロレスのほうに行ってしまいましたけども（苦笑）。やっぱりみんな、拍手がたくさんあって、盛り上がればいい試合だと思ってるんですよ。そういう低レベルな心理学しか持ってないレスラーは、試合も大技のオンパレード。あれはたいへんレベルの低いプロレスですよね。あの、団体が続いていてもっと新人をとってたら、私なら確実に筆記テストを入れてましたね。

——筆記テストですか！

西村　心理学、思想、哲学の論文ですよ。

——そりゃ凄い（笑）。あの、西村さんにとって政治活動のなかでプロレスラーであることは「ウリ」ですか？

西村　マイナスよりはプラスになることのほうが多いですよね。いままで何もなく、人の拍手だけを目安にやってきたんだったら政治活動をやりたいという発想もなかったかもしれないですけど、でもレスラーは多かれ少なかれ、何かを訴えたいというのがあると思うんですけどね。まあでもここまで同じ感性のレスラーっていうのは……難しいですよね。昔、G1でノアの秋山さんと試合したときに、少し通じるものを感じましたけど。

——ああ、わかる気がします。

西村　試合の進め方とか、技を大事にする。これって、もの凄く大事なことだと思うんですけどね。水戸黄門なんか、印籠を2回も3回も出したら全然意味ないわけじゃないですか。

——ぶち壊しですね（笑）。

西村　でもいまの程度の低い人たちは、そういうプロレスになっちゃってるんですよ。やっぱり45分から50分、溜めるからこそ、最後にバーッとガス抜きできるわけですよ。懐に印籠が入ってるにもかかわらず、縛られて「すみません」って謝って（笑）。早く出しなさいって話ですよ！

——確かに（笑）。今回の出馬に関しても、周りには知らせず？

西村　今回は完全にサプライズの発表にしたかったので、まったくの秘密でしたね。武藤さんと内田副社長ぐらいしか知らなかったですよ。無我から全日本に入ったときと同じですよ。

——後楽園から代々木第二体育館に直行したときですね。

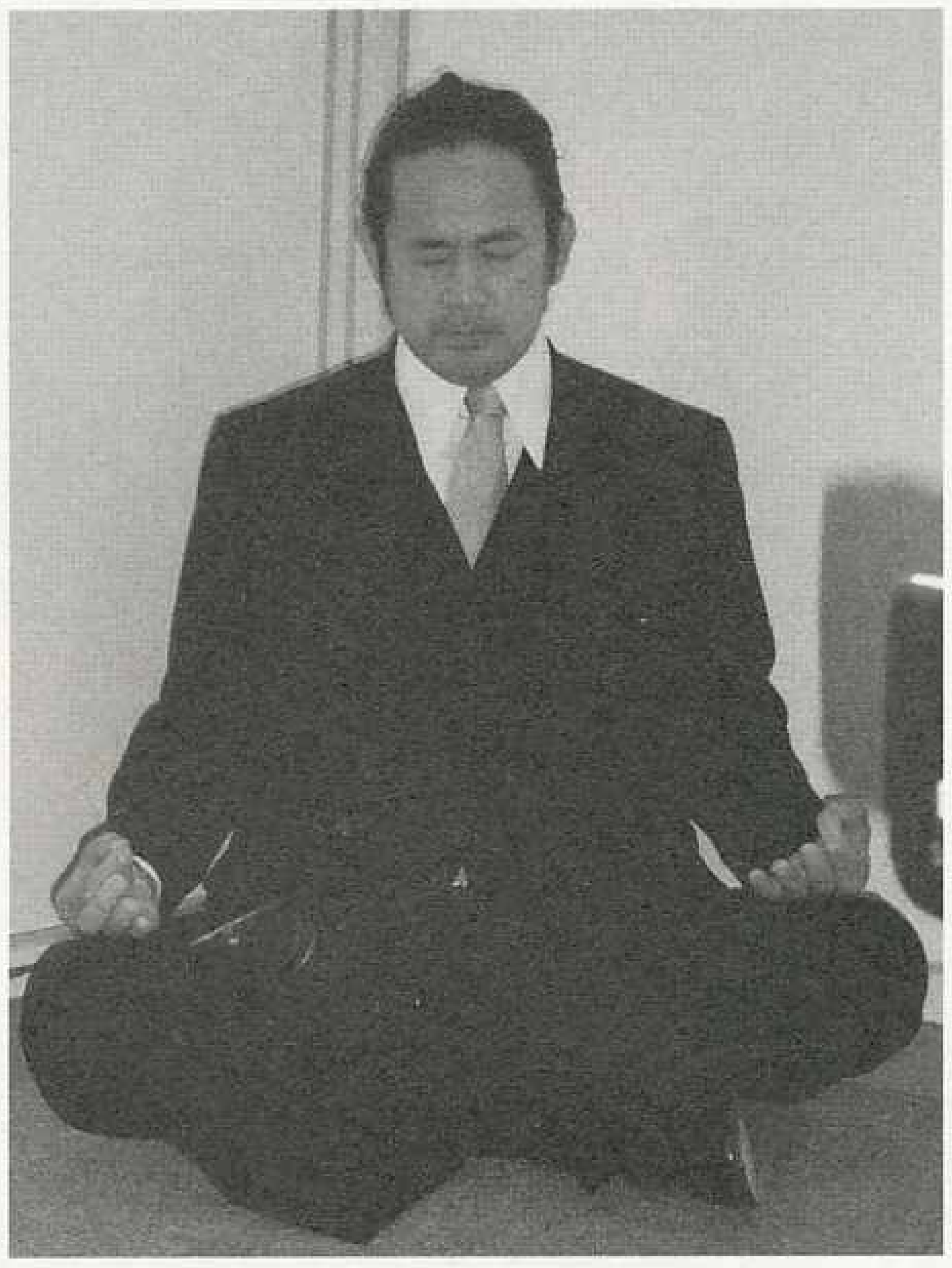
西村　あのときも選手は誰も知らなかったですからね。

——それこそ政治の世界では多数派工作とか、長いものに巻かれるかどうか、という決断を迫られる世界ですよね。そこでも闘っていかないといけないわけですが。


西村　もちろん。そこで曲げるようなら初心を忘れたことになって、応援してくれる人たちにも顔合わせができないですよ。でも国民新党は、相当な覚悟の持ち主が集まってますから。

——その覚悟で選挙のほうも頑張ってください。ありがとうございました！

【10年4月5日／都内・某所にて収録】



にしむら・おさむ■1971年9月23日、東京都出身。90年に新日本プロレス入門。一時はガンで長期欠場も見事に復活。06年1月に新日本退団後は無我ワールド・プロレスリングに参加も、07年10月に全日本プロレスに電撃移籍。"無我"を旗頭に、クラシカルスタイルの求道者として活動中。186cm、105kg。



「猪木さんが務まるなら俺でもできるかなって」

自分も愛する妻も息子も出馬経験あり！じつはマット界で最も政治と縁のある男!?

稲妻戦士

木村健悟

マット界で政治と最も縁のあるレスラーはいったい誰なのか?
それは自身も息子も出馬経験があり、さらに奥さんが現役区議会議員であるこの男に違いない!
てことで、奥さんの街頭演説に連れ添う健悟兄ィに話を聞いてみました! イナヅマッ!

聞き手／高崎計三　構成／鈴木佑

——木村さん！ 今回は政治関係の経験が豊富な木村さんに、「プロレスと政治」をテーマにお聞きしたいと思ってるんですよ。

木村 ああ、なんか前田（日明）や西村（修）が出馬するらしいねえ。

——そうなんですよ。それで、話を聞くならご自身も息子さんも出馬経験があり、奥さんも現役の区議会議員という「選挙一家」の木村さんしかいないかな、と。

木村 なるほどね（笑）。いいですよ、なんでも聞いてください。

——まずはご自身の出馬についてなんですが、98年に民主党から出られたんですよね。

木村 はい、橋本内閣が退陣したときの参院選ですよね。もともと政治には凄く興味があって、誰かがやらなければ日本はよくはならない、と。一般の人たちを見てると、凄く政治に無関心なところがあるじゃないですか？ それを変えるには「誰かが手を挙げなければならない」と思ってましたね。

——使命感があったわけですね。

木村 俺は小さい頃からあまりいい生活はしてなかったけど、いまの子どもたちを見てると何かが足りないような気がして、それが何かというとやっぱり親のしつけだったり学校の教育だったり。それをスポーツを通じて、自分たちが何か発信できればと思ったんです。



毎週早朝、都立大学の駅前などで街頭演説を行なう洋子夫人を、優しく見守る健悟。ちなみに洋子夫人はかつてひったくりに遭い、ワイドショーなどで取り上げられたことも。「区民の見本になるべき人間がそんな目に遭っちゃイカンよねえ（笑）」（健悟）。

——出馬まではどういう経緯で？

木村 うちの女房が民主党で地方議員をやってる関係もあって、海江田万里っていう衆議院議員と仲がよかったんですよ。まあこれは野末陳平さんの関係なんですけど。

——ああ、なるほど。プロレスと政治といえば、野末さんですね。

木村 海江田さんとはどこで知り合ったかはハッキリ覚えてないんだけど、凄く仲良くさせてもらってて、自分も好きだから応援にいったりしてたんです。それで、「やってみる？」って話になったんですよね。それで「ぜひ、やらせてください」と。

——あのとき、ハーレーで選挙活動されてたのが印象的でした。

木村 あれねえ、ハーレーって言われてるけど、違うんですよ。

俺はバイクに民主党ののぼり旗を立てて選挙違反しながら活動してましたから

——えっ、そうだったんですか？

木村 ハーレーの格好してるだけで、400ccなんですよ。雑誌とかではハーレーって書かれてたけど。まあ派手な車ではありましたねえ。

——やっぱりインパクトを出すために？

木村 うん。金のかからない選挙をしようと思ったんですよ。日本全国回ると、新幹線代だけでもバカにならないですから。バイクだったらガソリン代だけでいいし、3台で回ったんだけど、宿も3人で一部屋に泊まればいいし、そのほうが目立つだろう、と。ホントは選挙違反になっちゃうんだけど、民主党ののぼり旗を立ててね。でも風や雨ですぐダメになっちゃうから、行く先々で旗を調達しましたよ。

——効果はありましたか？

木村 いやあ、目立ってよかったですね。ただ、選挙違反なんでお巡りさんがいたら旗を下げて、いなくなったらまた立てて走りましたけど（笑）。

——ちょっとアウトローな選挙活動だったんですね（笑）。実際出てみて、大変でしたか？

木村 大変ですねえ。まして比例で、いまと違って名簿の順番が決まってるんで、やる前から落ちることは決まってたんですよ。でも自分はやると決めてマスコミの前で発表もして、公示の前日にはパーティもやったんですけど、その日の午前中には順位がわかって、23位だったもんだからみんなガックリきちゃってね。

——こりゃ無理だ、と。

木村 当時は菅直人が代表で、「ふざけるな」と思ったけど、まあ政治がスポーツには関心がないというか、上に持ってくる魅力がなかったということなんでしょう。

——当時、江本孟紀さんとひと騒動ありましたよね。

木村 江本さんは12位でね、それで「もう選挙活動しない」なんて言うから、頭にきてね。こっちは23位ですから、どうしたって受かりっこないですよ。それでももう引けないから、ちゃんとやってたんだから。この前みたいに民主党が追い風だったら違うだろうけどね。

——追い風のときに出ようという気持ちはなかったですか？

木村 ないわけではないけど、いまの小沢幹事長のやり方は選挙の虫というか、ちょっと違う気がするね。よっぽどの知名度がないかぎり、スポーツ選手とかよりは頭のいい人から選んでるでしょう。前田日明も外されちゃったしねえ。あれは小沢さんが外したと思いますよ。

——前田さんの出馬の件を知ったときにはどう思いました？

木村 ビックリしましたよね。「えっ、アイツがやるの？」って思いましたけど、凄くまじめなヤツですから、なったら一生懸命やるんじゃないかとは思いましたね。

——新日本時代の印象でいうとそうなりますか。

木村 凄くまじめで、けっして器用じゃないけど一つのことをコツコツコツコツやるヤツでしたよ。あの気の強さと、一つのことを突き詰める探求心、そういうところが彼のよさですよね。受かればいい政治家になるんじゃないですか、へんなことに妥協するタイプじゃないから。国民新党から出るのかな？ そうなったとしても、亀井さんのバッシングが凄いから難しいかもね。西村も出るし、プロレスラー同士で票の取り合いになるかもしれないね。

——木村さん自身の選挙運動のなかで、プ

ロレスファンの反応は大きかったですか？

木村　いやあ、あんまりないですよ。

——あ、そうですか（笑）。

木村　いや、街頭でしゃべってると、もの珍しさから人は集まってきてくれましたけどね。でもどこまで信用して、「おまえなら入れてやるよ」と思ってくれてたのか。まあ、まったく名前のない新人の人よりはよかったんでしょうけどね。

——新日本からのバックアップは？

木村　いや、そんなになかったんじゃないかなあ。あのときの社長は……坂口さんか。まぁ、「やるなら勝手にやれ」（口をとがらせて坂口のモノマネで）って感じでね。あの人はそういうタイプだから（笑）。

——ダハハハ！

木村　めんどくさがりだからねえ。まあでも、バックアップがあってもあの名簿順位だったらダメですよ。だから投票が終わる前に敗北宣言しちゃったんだもん。

——あれは前代未聞でしたね（笑）。

木村　駒沢の赤坂ラーメンでね。すべてメチャクチャだね。でもどうせなら話題にするために、選挙が始まる前にやっとけばよかったかな（笑）。

——選挙が始まる前に敗北宣言は斬新すぎます（笑）。ちなみに猪木さんを見て、政治に意欲を出したのは木村さんぐらいだったんですか？

木村　まあ、一番は馳（浩）だろうけど……。でもほかにはいなかったかなあ。

——藤波さんなんかは？

木村　いやあ、政治家って感じじゃないよねえ。まあ俺もそうだけど、「俺が俺が」って感じじゃないよね。

——なるほど。先ほど西村さんの名前も出ましたが、じつは木村さんの引退試合の相手なんですよね。

木村　これもまじめな人間でねえ。前田とはまた違った生まじめさを持ったヤツなんですよ。まじめというよりは優しさというか、なんとも人に配慮するタイプでね。前田が体育会系の部活の厳しい先生だとすれば、西村は保育園の保母さんのようなね。人のことに気がつくタイプですよ。これももし当選できれば、おもしろいなと思いますね。

——ちなみにその二人でいうと、どっちのほうが驚きましたか？

木村　いや前田はビックリしたけど、その前に武藤敬司が出るというウワサを聞いて、それが一番ビックリしましたね。「えっ、あのチャランポランなヤツが!?」ってね（笑）。

——向いてない、と（笑）。



現役時代は藤波のタッグパートナーなど、バイプレイヤーの印象が強い健悟だが、もちろん自身が主役になったことも。古きよき昭和新日本のムードが伝わってくるナイスな写真だ!

女房は草原のような心を持ったヤツで俺はそこに飼われてるヒツジみたいなもの

木村　あいつはチャランポランですよ！でもかわいいヤツでねえ。

——武藤さんはもともと木村さんの付き人をされてたんですよね。なんだか木村さんと縁のある方々が次々に政治に関わってますねえ。

木村　まあ誰がなってもね……いや、武藤はともかく、前田も西村もいい政治家になると思いますよ。

——でも、これだけプロレスラーの政治進出が多いのはなぜなんでしょう？

木村　それはやっぱり、いいのも悪いのも含めて、猪木さんですよ。

——ああ、やっぱり影響は大きいですか。

木村　猪木さんが出馬して、当選できた。ということは、これは……誰でも当選できるのかな、と。「猪木さんでも務まるなら、俺でもできるかな」ってね。

——ダハハハ！　そういうことですか！

木村　実際はそうじゃないんだけどね。でも猪木さんも一生懸命、世界のことを考えてたけど、あまりにも話がデカすぎる！世界はちょっと大きすぎてわかんないから、もっと身近なことで一生懸命やってくれればね。彼なんか日本でスポーツ庁を作って、長官になってやらなきゃダメだったんですよ。オリンピックも国が先頭に立ってやらないと、もう勝てないよ。

——猪木さんの場合、同じスポーツでも世界平和に向いちゃいましたからね。

木村　そう！　デカすぎるんだよね。イラクまで行ってね、急に人質の件が出てきたから飛びついて、猪木さんが解放したってことになったけど。まあ、猪木さんもやったんだろうけどね。まあだから、すべては猪木さんだよ。

——あと、目黒区議をやられてる奥さんの話も聞きたいんですが、もう務めてからは長いですよね？

木村　5期やってますから、もうすぐ20年だね。じつは、最初は俺がやりたかったんですよ。猪木さんが当選したばっかりぐらいの頃かな。それで「俺にもできるのかな？」と思って、スポーツ、勉学を通じた子どもの教育とかいろいろ考えるところがあったわけ。偶然、大田区議に知り合いがいて応援してたんだけど、目黒区で候補が足りないから探してるっていう話になって、「じつは俺もやりたいんだ」って話をしたんだよね。そしたら、「健悟ちゃんにはもったいないよ」って言われて。

——もったいない、ですか。

木村　「給料もたいしたことないんだし、プロレスもあんなにやってるんだから、やるんだったらもっと上を目指したほうがいいよ」と。それでそのときはみんなで飲んでたんだけど、その人がふと見たら俺の横に女房がいて、「あ、奥さんだったらおもしろいね」って。女房は性格的に、人の面倒見るのは大好きだし、こまめに動けるタイプだし、なんて言うのかなあ、草原のような心を持ったヤツなんですよ。俺はそこに飼われてるヒツジみたいなもんですよ。

——大草原の小さなヒツジ（笑）。

木村　「そうだ、こいつならおもしろいや」ってことで、口説いたんですよね。でも、

木村健悟

最初は本人はいやがってたんです。米つきバッタみたいに人の前で頭なんか下げてらんないし、ましてそんなにしゃべったりもできないし、それより家で俺や子どもたちのごはん作ってたほうがよっぽどいいって言うんですよ。

——素晴らしい奥さんじゃないですか！

木村　でも、ガンガン酒を飲ませてね。最後はグデングデンになって、あんまりしつこいもんだから「わかった、うん……」って言ったんですよ。

——悪質な手口ですねえ（笑）。

木村　「よし、『うん』って言ったよな？」って念押ししてね（笑）。で、翌日に社民連の関係者のところに連れていって、またその翌日にはスタジオで写真撮影して、すぐポスター作って貼りだしちゃったんですよ。

——電撃作戦じゃないですか（笑）。

木村　「いいから、俺が絶対に当選させるから」って言ってね。「猪木さんでも当選してるんだから」って（笑）。

——ここでも猪木さん（笑）。猪木さんからは何か？

木村　「まあ、やるんならいいんじゃねえか？　おまえがやるよりゃいいだろ」って。

——ダハハハ！　いい具合に無責任なコメントですねえ。

木村　まあでも、俺は絶対当選すると思ってたからね！

——ほほう、その根拠は？

木村　ないです！（キッパリ）。いや、だって猪木さんでも当選したからね。

——あくまでそれですか（笑）。

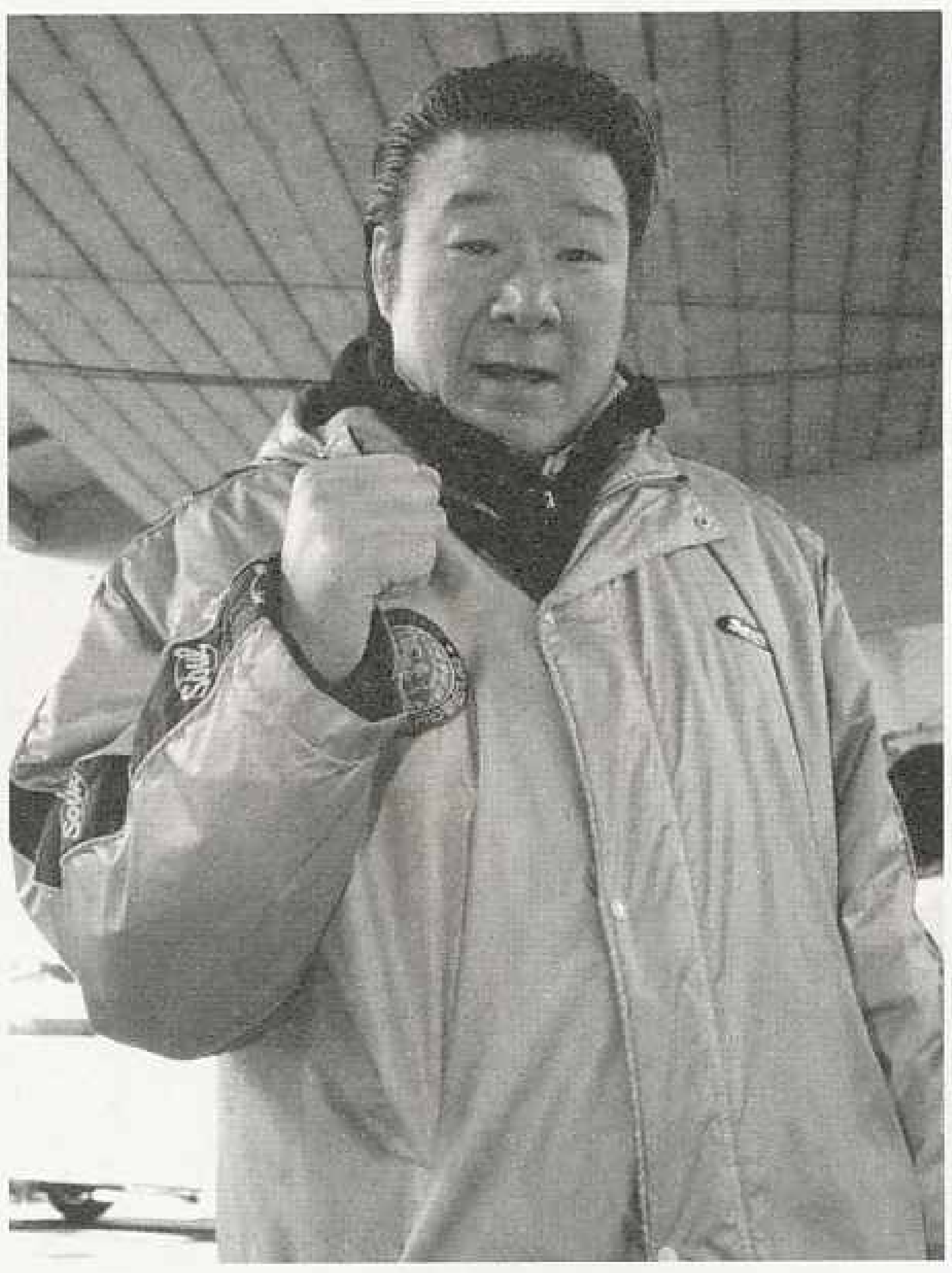
木村　まあ、「プロレスラーの女房」ってことで大々的に騒いで、ワーッとやったわけですよ。

——『ゲゲゲの女房』ならぬ『イナズマの女房』。

木村　猪木さんがよく言う、「馬鹿になれ」っていうのと一緒ですよ。馬鹿になってね、一生懸命やればいい。そんなにかしこまってやる必要ない、お祭り騒ぎなんですよ。

——選挙は祭りだ、と。

木村　まるっきりプロレスのやり方と一緒ですよ。それも猪木さんから学んだね。何事も、最初にお客さんに謎をかけて、それで引っぱって引っぱって引っぱって、最後にボーンと弾けさせるっていうやり方。でもね、だいぶあとになってから1議席を獲ることの大変さを学んで、それを知ってからは「大変なことをしたんだなあ」と思いましたけどね。なんて無茶なやり方をしてたんだろう、なんて軽視してたんだろうって。



きむら・けんご■1953年9月4日、愛媛県出身。大相撲宮城野部屋を経て、72年に日本プロレスに入門。73年、新日本プロレスに移籍。ジュニアヘビー級時代から藤波辰彌(辰巳)とライバル抗争を繰り広げた。03年4月に引退、現在は学芸大学でリサイクルショップを経営している。186cm、107kg（現役時代）。

——落ち着いて考えてみれば（笑）。

木村　でも何はともあれ当選させて、いまでは女房は目黒区の宝なんじゃないかって思ってますよ。彼女は天職ですね。「ああ、凄い人間だなあ」と思いましたね。

——最初は強引で、しかも軽視してたけど間違ってなかった、と。

木村　彼女が41歳のときに初当選して、もう60ですよ。でもまだ、「もうちょっとやりたいこともある」って言ってますからね。来期もやるみたいですよ。

——区議の仕事もしながら、妻であり母でもあるわけですよね。

木村　母の仕事はもうほとんど終わってるけどね。彼女はホンットにねえ、万能な人！　そういう人とめぐり会えただけでもねえ……ノロケだけどさ。

——ごちそうさまです（笑）。いまでもずっと、駅で演説されるときは見守ってらっしゃるんですよね。

木村　それはまあ、俺がだまして立候補させたから。それは責任があるからね。ホントに凄いことをやったなあと思うし、政治ってもっと重く考えなきゃいけないことだよね。人の命にまで関わることじゃないですか。だから俺自身は「安易に国会に立候補したなあ、バカなことしたなあ」とも思うけど、やっぱり自分が正義感を持ってやったことは間違いじゃなかったよ。いまでもチャンスがあればやりたいですよ。

——木村さんは長年ボランティア活動もやられてるんですよね。

木村　そうですね。そもそも、毎年ディナーショーをやってたんですよ。それで百何十人とか200人とか集まってもらって、その売上から車イスを贈ってるんです。目黒区のほうには40台ぐらいかな。1台5万円ぐらいするんですよ。それをずーっとやってたんですけど、俺が現役を引退して会社を辞めてからはしばらくやってないんですよね。今年ぐらいからはまたそういう活動をやっていきたいなと思ってるんですけどね。ほら、いずれ自分も乗らなきゃいけないから、そのためにさ。

——いやいやいや（笑）。そして、07年には息子さんも都議選に立候補されてますね。

木村　うん、大田区のほうで立候補させましたけど、本人が芯からやりたいという気持ちはなかったですね。母親の姿を見てて、多少はそういう気持ちもあったかもしれないけど。人の役に立つには人前に立ったほうがいいかなと思ってさせてみたんですけどね。まあ、何もないところから闘ったわけですから、よく頑張りましたよ。

——そのときはレスラーの応援とかは？

木村　蝶野に来てもらってたんだけど、さあ演説ってときに奥さんのおふくろさんが倒れたっていう連絡が入って、中止して帰っちゃってね。「ここまで来たらやっていけよ」とも思ったけどね（笑）。まあでも、やっぱり選挙を闘い抜くには相当名前がないと厳しいよね。それか、何かで風が吹かないと。だから西村にしても前田にしても、正直厳しいんじゃないかと思いますけどね。

——そうですか。

木村　いまは民主党だったとしても厳しいでしょ。ま、民主党とは何があったか知らないけど、でも全国回るのに2〜3億かかるってのは大きく言いすぎだよ！

——ハーレーで回れ、と（笑）。

木村　そんなにかかるわけないからね。いやでもまあ、俺も今回はないだろうから、次にチャンスがなければもう政治家にはならないだろうね。もう俺も56だしね。じつはちょっと打診もしてたんだけど。プロレスのときの知名度を生かしきれなかったのは、俺の才能の問題だよね。やっぱりヒツジなんですよ、女房の大草原でメーメー鳴いてるだけの（笑）。

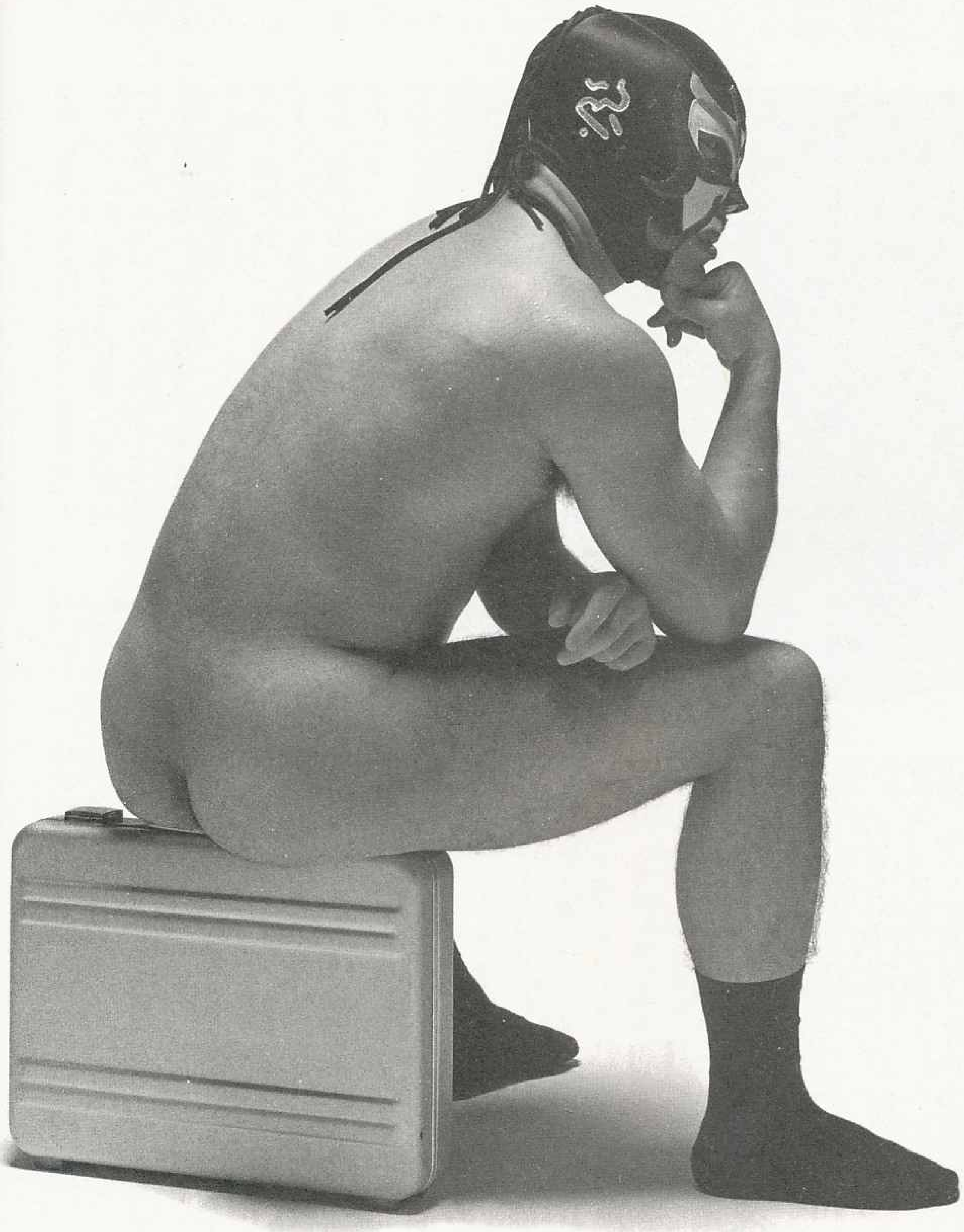
——いやいや、稲妻議員の誕生を見てみたいですよ。大草原を飛び出してください！

木村　やっぱり誰かがやらないといけないよね。じゃあ、いつか「国会にイナズマ！」をスローガンに考えてみようか（笑）。

【10年4月5日／都内・某所にて収録】

はたして東北の英雄はスキャンダル議員だったのか?

それでも私はAVに出ていない。



前・岩手県議会議員

ザ・グレート・サスケ

レスラーと政治を語るときに外せない存在といえば、我らがザ・グレート・サスケ! マット界で一、二を争うお騒がせ男であるサスケ先生がこれまでの、そしてこれからの政治活動、さらには疑惑のAV出演について激語り! そのグレートな答弁に耳を傾けよ～(異議は受け付けません)。

聞き手/井上崇宏　構成/鈴木佑

そもそも県議会議員選挙に出馬したのは「頼ちゃん事件」がきっかけなんです

——今日はザ・グレート・なにがしさんに選挙についてお話をうかがいたいと思います。

サスケ　こらこら〜っ！　こんな目立つ覆面を常に被ってる人間はサスケしかいないでしょうが!!（笑）。

——まず、そもそもサスケさんが2003年に岩手県の県議会議員選挙に出馬した理由というのはなんだったんですか？

サスケ　私はですね、政治に昔から興味があったとか、政治家になってみたいっていう気持ちはなかったんですよね。だけど、2002年の9月に岩手県の一関というところで「頼ちゃん事件」っていう全国的に有名になった事件があったんですね。

——あー、乳幼児の救急病院たらい回し事件ですね。

サスケ　そうです。で、結局は死亡したっていう。これは全国的にもかなり大きく報道されて、それに私はもの凄く怒りに震えたんですね。結局、これは人災というか、「行政が一人の赤ん坊の命を救えなかったんだ」っていうような思いでね。「幼い命が救えない岩手なんかクソくらえ！」と。

——じゃあ、政治にほぼ興味ナシという状況から、あの事件で一気に火がついちゃった、と。

サスケ　火がついちゃったんですねえ。これはもう県議会で暴れてやろうと思って。「誰か助けろよ！」みたいなね。本当に暴れようと思いましたね。

——実際に県議会でドクターヘリの導入を訴えてましたよね。

サスケ　そうです。訴えまくりましたよね。

——そうして県議会議員選挙に立たれたわけですが、たしか告示5日前での出馬表明でした。

サスケ　ええ。まあ、それは先日出させていただいた『ザ・グレート・サスケの飛ぶ教室』という本でも書かれてたことですが、当時のみちプロ内での私が置かれていた立場っていうのが微妙に反映されていて、まあ、孤独だったと（笑）。ということは誰も話し相手がいないし、相談相手もいない状況ではありましたね。

——ご家族とみちプロの選手とスタッフ含めて、周囲からは全面的に反対されたらしいですね。

サスケ　ええ。反対だし、私はみちプロでそういう孤独な状況に置かれていたので、みちプロの選手やスタッフには相談すらしなかったですからね。もうほとんど何も言わなかった。ただ、家族には当然言わざるをえないので、言ったら猛反対で。

——具体的にどういった理由で反対だったんですか？

サスケ　まず、女房に関しては「だってお金がかかるんでしょ？　だから、反対よ」っていう。それで父親は「どうせ政治家は汚職で捕まるんだからやめなさい」と、そういう意味での反対（笑）。

——とても聡明なお父様ですね（笑）。

サスケ　それで母親は女房と同じくお金の面ですよね。「選挙にはお金がかかるでしょ？」っていう。

——そこを最終的にサスケさんが説得をするわけですか？

サスケ　いや、しなかったですね。

——「もう出るんだ」っていう。

サスケ　そう。「反対されてもやるよ」と。「だって、俺にはお世話になってる横浜の会長さんと、地元の同級生二人がいるんだから。俺はこの4人体制で闘うからもういいよ！」って（笑）。

——少な!!（笑）。

サスケ　だからみちプロの人間に言ったのは、それこそ出馬表明と同じタイミングですね。

——「これから会見やるから」と。

サスケ　「もう会見やっちゃうから」って。で、それにあたっては「ちょっと合宿所の1階部分だけは借りるよ。選挙事務所に使うから」と。私も社長でしたからもうそこは有無も言わさず、ほぼ事後承諾ってい







サスケが07年の岩手県知事選挙に出馬した際に、本誌ではサスケと同郷であり、サスケの妹とクラスメイトだったという伝説の編集者、阿修羅チョロ氏が密着不完全レポート！（110号に掲載）。落選についてサスケは「我が人生、最大の屈辱であり、挫折の日です」と敗戦の弁。

ザ・グレート・サスケ

う感じでしたね。

――で、選挙戦に関しては一切協力ナシですよね？

サスケ　ええ。ナシだし、こっちもアテにしてないという。どうせやってくれないと思って頼みもしなかったですね。

――たとえば、猪木さんが一回目の参院選に出馬したときなんかは、新日本の選手、スタッフが一丸となって「絶対に政界に行ってもらおう！」と躍起になってたわけじゃないですか（笑）。そういうふうにも作用しなかったんですね。

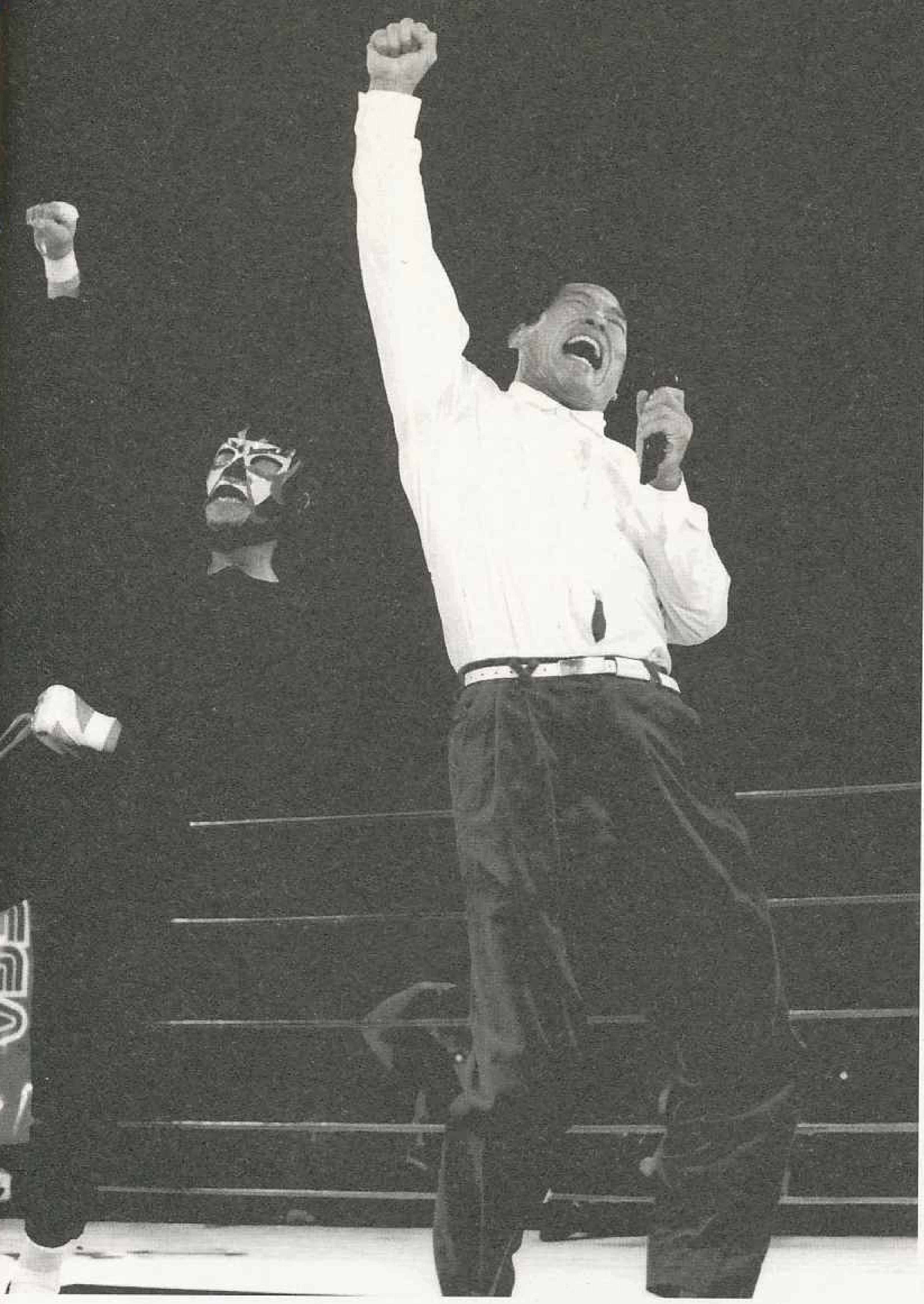
サスケ　それもまたナシの無風状態ですね（笑）。だからたぶん、みちプロのみんなは「どうなるんだろうなあ？」ぐらいの感じだったでしょうね。

――じゃあ資金力もなければ組織力もないっていう完全な徒手空拳で。

サスケ　そうですね。でもまあ、いまだから話せる内情を話すと、このあいだ逮捕された小沢一郎先生の秘書で大久保隆規という人がいますよね？　じつは彼が材木町のみちプロ事務所に来たんですよ。

――大久保氏がなんのために？

サスケ　当時、出馬表明の2週間くらい前に地元マスコミでは「サスケが出るんじゃないか」という報道が出たんですよ。その報道を見て駆けつけてきたんです。いまだから時効ということで話せるんですけど、大久保さんと現・岩手県知事で当時は衆議院議員だった達増拓也氏が二人で来たんですね。いきなりみちプロ事務所に訪ねてきて、「サスケさんと会いたい」と。で、これもいまだから話せるんですけど、



かつてサスケはレスラー議員の元祖、アントンと一緒に猪木ボンバイエのリングで「ダーッ!」を披露。スキャンダルをマット界にも政界にもリンクさせるという意味で、じつはサスケこそ猪木イズムを最も体現している男なのかもしれない。

私があえて地元マスコミを利用して「サスケが出るんじゃないか」と煽っておいて、自民と民主、まあ当時は自由党だったんですけど、自民と自由の両方の反応を見たかったんですよね。

――なるほど（笑）。それで自由党が釣れた、と。

サスケ　ええ（笑）。ただ、そもそも当時の私は政策ポリシー的には反自民だったんですよ。だから当時は自民よりは民主、当時の自由党寄りっていうのがあったので、自由党の人間が私に会いに来てくれたのはうれしかったですよね。それで、そのときに大久保さんが「小沢一郎からのメッセージを持ってきました」と。

――おおっ、どんな内容だったんですか？

サスケ　「サスケさんに出てほしい」と。「ぜひ県議会に立って、我々と一緒にやってほしい」みたいなメッセージでしたね。それで無所属ではあるけど「自由党推薦」というかたちで出たんですよね。ですから、自由党から人員的な補充はしてもらったんですよ。選挙運動要員としてボランティアスタッフの手配とかをやってもらいましたね。

――やっぱり岩手での小沢さんの影響力っていったら、それはもう相当なもんなんですよね？

サスケ　そうですよ。やっぱり小沢ブランドがついてのサスケ候補者ですからね。それは強かったです。ただ、大久保さんも心配してくれたし、私も心配した部分は、やっぱりプロレスラーって政治とは関係なく人気商売ですから。プロレスファン、みちプロファン、サスケファンの中にもいろんな政治的考えがある方がいらっしゃるわけで。自民を応援している人もいれば、バリバリの共産党の人もいるだろう

ボクたちに清き一票を！ 出馬経験のある主要レスラー

■アントニオ猪木
（1989年・比例区「スポーツ平和党」・当選）
記念すべきレスラー当選第1号。その選挙活動でのパフォーマンスぶりはさすがで、遊説先に設置されたリングで消費税人形の首を延髄斬りで飛ばしたり、「ワル・ザ・消費税」なるマスクマン（正体は馳浩）を卍固めで倒したりしていた。

■高田延彦
（1995年・比例区「さわやか新党」・落選）
「政治にフェアプレーを！」をキャッチフレーズに「さわやか新党」なる政党で出馬。ちなみに遊説先の第一声は「私たちはスポーツ平和党ではありません！」。なぜか応援演説には、さわやかとかけ離れたローバー美々が駆けつけたりもした。

■佐山聡
（2001年・比例区「自由連合」・落選）
「武士道精神の復権」を公約に掲げ、遊説では「ICPOのように日本の警察も権限を強化すべき！」「私は凶悪犯は撃っていいと思う！ ていうか撃ち殺せ！ 警察の強さを見せてやれ！」と狂気の絶叫を繰り広げ、黄色い悪魔ぶりを見せつけた。

■ミスター・ポーゴ
（2003年・群馬県伊勢崎市議選・落選）
群馬県議を6期務めた政治家の息子として出馬するも、26議席中29人出馬という状況のなかでぶっちぎりの最下位落選。ちなみに応援に来た大仁田厚は「大仁田、サスケ、ポーゴによる、初の議員レスラーによる3WAYマッチの実現」を訴えた。

■そのほかのレスラー
当選した際のインタビュアーが「プロレスを馬鹿にしてる」と公言していた福澤朗氏だった馳浩。イラクでも「ファイヤー」を連呼しまくった物騒きわまりない大仁田厚。年金未納なのに「わからないシステムが悪い」と逆ギレした神取忍。自費で「自由連合」の公認を得るも落選し、リングで「自由連合」なる軍団を結成した高木三四郎、等々。

し、そこで小沢先生の色がつきすぎたらよくないなっていう心配はしてくれましたね。だから岩手は小沢王国のようであって、けっして小沢王国でもないみたいなところもあるんですよ。でも、それは人生を生きていくなかでなんでもそうだと思うんです。何か目立つことをやると、必ずそれに反対する人が絶対に出てくる、と。

——目立つといえば覆面姿での登院がその最たるものだったと思うんですけど（笑）、あのときのバッシングも凄かったですよね。

サスケ　まあね、私もそんなに馬鹿じゃないんで（笑）、やっぱり立候補する前に「そもそもマスクはどうなんだろう？」って考えますよね。リングネームはともかく、この覆面姿でいいのかなっていう。それは逆に、事前に自民党の県議会議員の方に相談してみたんですけど、自民党の県議会議員や関係者の方は「マスクはちょっと問題あるかもしれないねえ」って言ってましたね。「でも、立候補するときはウチから出てね」とか言いながら（笑）。そんなこともあったりしたんですけど、「サスケといえば、この顔なんだから」みたいな見切り発車的なところはありましたね。で、選挙管理委員会に立候補の届け出をするわけですけど、そこでとくに問題はなかったんですよ。

——自民党は当初から微妙ではあったけど、選挙管理委員会では問題ナシ。

サスケ　ただ届け出の際、「文字をていねいに書くように」っていうのは妙に言われたんですね。ちゃんと本名も書いて、芸名も書いて、住所も書いてるんですけど、とくに漢字っていうのは「はね」と「はらい」があるじゃないですか？　もちろん基本は楷書で書くんですけど、ついつい行書っぽく、走り書きっぽくいつものくせで書いちゃったりすると、そういうのが一切認められなくて。5〜6回ほど書き直しをさせられたんですよ。そこが妙に不自然だなと思ったんですけど、それが選挙管理委員会なりの抵抗だったのかなって（笑）。



FMWで敗者は全裸にならなければいけないというネイキッドマンマッチを行なったこともあるサスケ。本誌の過去写真でもサスケはなぜだかやたらと全裸写真が多かったりする。もちろんどんなに脱いでようが、断固としてAVには出ていないのである（棒読み）。

議員時代に議会でUFOやエシュロンについて質問したのは使命感に燃えたから

——そんなバカな（笑）。そういう子どもじみた抵抗をするもんなんですか？

サスケ　覆面にはケチつけられないし、芸名にもケチをつけられない。だったら、文字にケチをつけちゃえってことだったのかな、と。

——「10回書き直しをさせたら出馬を取りやめるんじゃねえか」と（笑）。

サスケ　そうそう（笑）。そういう意図があったのかな、と。これもいまだから話せる秘話ですけどね。そういうことはありましたねえ。

——それと、サスケさんが県議会議員時代に世間を賑わせたのがUFOに関する質問を議会でしたことですよね。「岩手県内でUFOの目撃情報が多数相次いでいるが、県はどう認識しているのか？」っていう（笑）。

サスケ　しましたねえ。なんであの質問をしようかと思ったのかっていうと、じつはあの直前に国会のほうでUFO論戦があったんですよ。

——参議院の総務委員会でありましたね。

サスケ　そうそう。民主党の山根隆治先生が、当時総務大臣だった麻生（太郎）さんに対する質問としてUFOの話をされていて「あっ、いよいよ国会でUFOが出たか」ということで（笑）。「だったら我が県議会でもやらなければ！」っていう使命感で燃えちゃいましたねえ。ましてUFOに関してはもともと詳しいし、むしろ質問する必要がないくらい私のほうが詳しいんですけど（笑）。

——本当は聞く必要もない（笑）。

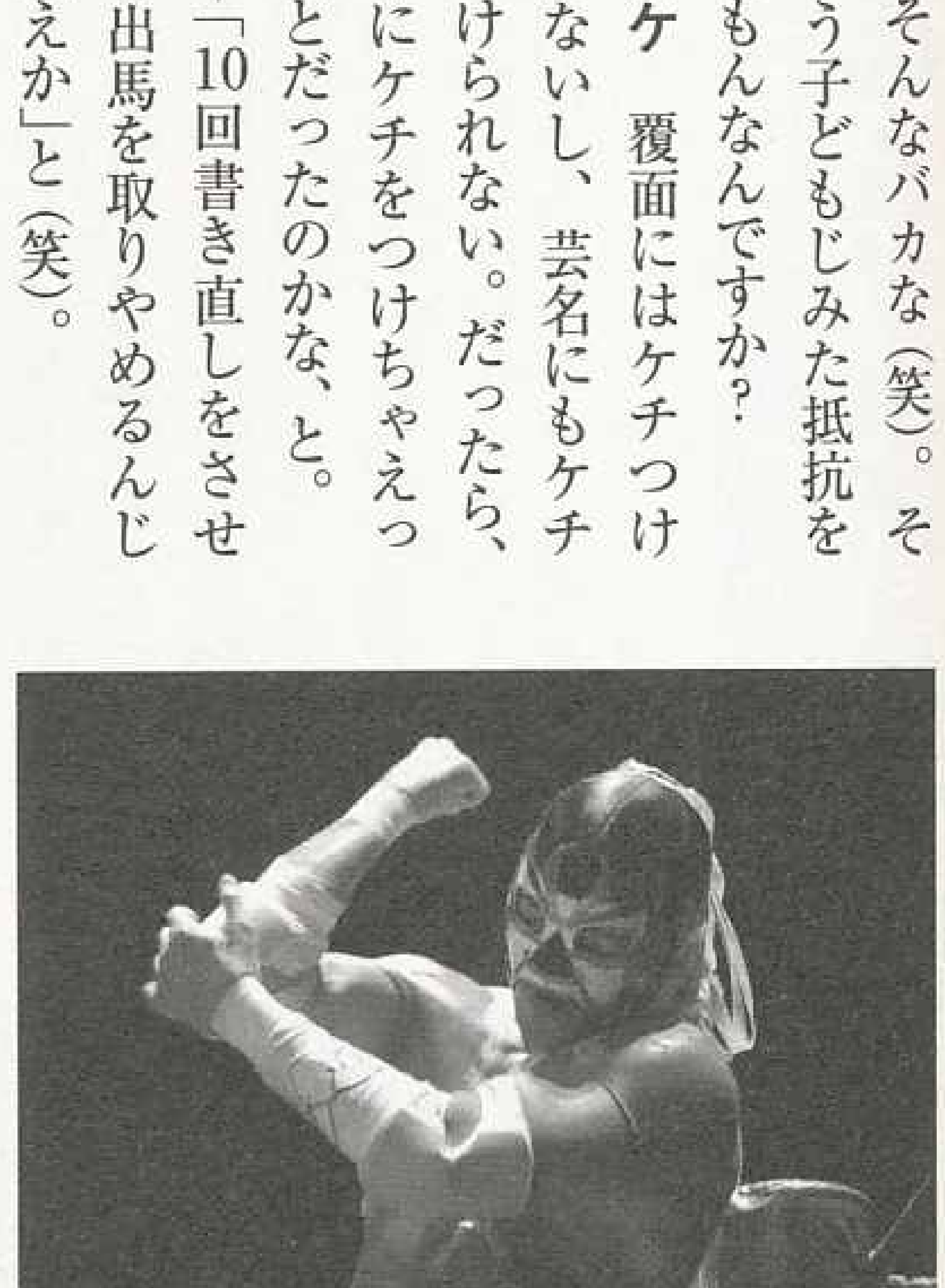
サスケ　でも、やっぱり岩手県としての認識を聞きたかったんですよ。で、県側の答えがええっとですね、なんつってたかなあ……？

——聞いただけで満足したんですね（笑）。

サスケ　聞いておいて忘れてるのも……あっ、「確かに、目撃情報は寄せられております」という答えと、あとは……、そうそういいこと言ったんですよ！「もし、県民に危害をおよぼすようなことがあった場合には、それなりの対処法を考えねばなりません」というような答えでしたね。だから、まじめに答えてもらいましたよ、ええ。あとね、エシュロンのことも聞きましたね。

——エシュロンシステムも（笑）。それはどういった切り口で攻めたんですか？

サスケ　要はエシュロンの基地が、日本では唯一、米軍三沢基地にあるということで、これはもう岩手の目と鼻の先にある。つまりは県民にとっては脅威の存在だということで、これも岩手県としてエシュロンの存在、そしてプライバシーの侵害、あるいは通信傍受に関しての対応策をどのように考えているのかっていうのを聞きましたねえ。で、県側のエシュロンに関する答えとしては、まあ「わかりません」的



昨年は映画『レスラー』に感化されて、「これは私の映画です!」という言葉とともに、ランディ化が凄いことになっていたサスケ。「ランディと同じく、私もリアルに娘に嫌われてるんだよね」と寂しそうに語るインタビューは本誌139号に掲載。

オンブスマンの調査はズサンな部分が多い。ひとことで言えば「バカ野郎」です！

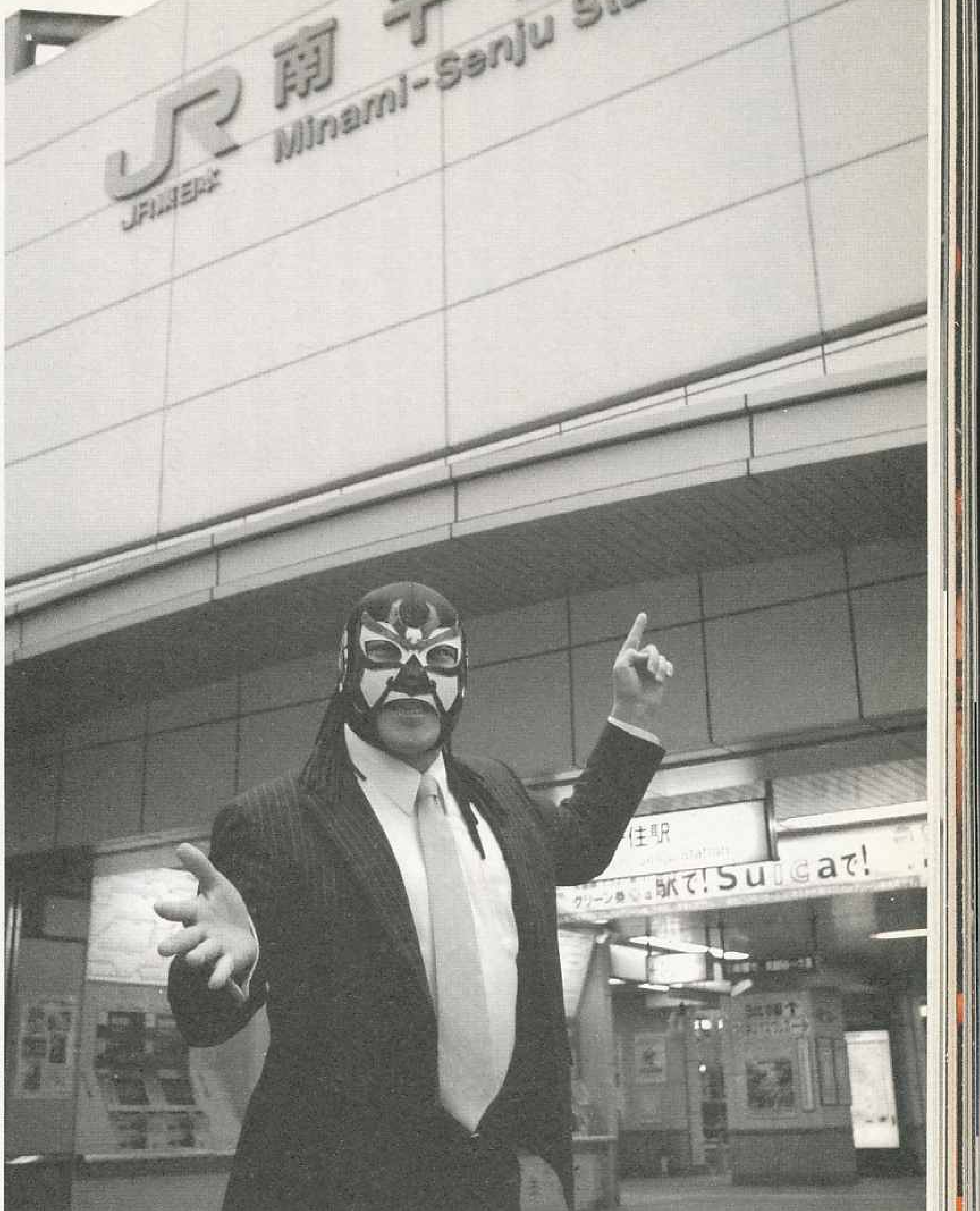
な答えでしたね。まあ、都道府県レベルではわかんないんですよ。

――これまでプロレスラー議員っていろんな方がいたと思うんですけど、なかでも猪木さんとサスケさんに関していえば、常に自分ペースというか。へんに政治の世界に染まらないという特徴がありますよね。

サスケ　あ～っ、なるほど、なるほど。

――議会でUFOやエシュロンの質問をするというところにサスケ議員の存在意義があるというか。猪木さんもそうじゃないですか、「イラクの人質を取り戻しに行っちゃう？」みたいな（笑）。

サスケ　そうですね。確かにそこの部分は常々心がけていたんですよ。つまり、県議会の盛岡選挙区は10名の枠があるんですけど、この10人が全員東大の法学部卒だったらつまんないっていうか、絶対に政策が偏っちゃうんですよね。そういうバリバリの法学部出も何人かは絶対に必要なんですけど、やっぱり社会人経験者、民間企業で勤めあげていた人がいたりとか、いろんなジャンルで成功を収めた人とか、当然スポーツ界からも上がってこなければならない。そういう多ジャンルの人が集まって、ようやくまんべんない政策ができると思うんですよね。そういう意味では私の政治活動、議場での質問も含めて、やっぱり私なりの個性、切り口というものを大事にしましたよね。



09年2月には電車内で、携帯カメラで撮影しようとした男性ともみ合いになり、南千住駅で暴行逮捕の憂き目に遭ったサスケ。どこまでいってもスキャンダルなのはレスラー、そして政治家の鏡？

――それでですね、ここからはちょっと聞きづらい話なんですが……、まあ、そんなに聞きづらいと思ってないんですが（笑）。公費である政務調査費をプロレス会場までの移動の新幹線代にあてていたという疑惑が一時期起きましたよね。

サスケ　ありましたねえ！（笑）。

――それに対するサスケさんの答弁が、「新幹線の混み具合を調査していた」という（笑）。

サスケ　まあ、言葉のあやですよね（笑）。新幹線というのは、要は観光政策だったりとかそういうジャンルの調査対象なんですよね。これは我々は一時「はやて現象」と呼んでいたんですが、昔は盛岡が新幹線の終着駅だったんですね。それが「はやて」と「こまち」が延伸して開通してから、せっかく東北を目指してきた観光客が盛岡を通り越して、八戸あるいは秋田まで行っちゃうっていう。この「はやて現象」というものをやっぱり検証しなければならない、と。そういう意味合いもあったんですね。だから、決してプロレスの移動費だけに使ったわけではない、と。これはいまだから明かせるシリーズではないんですねえ（笑）。

――当時から揺るがない真実なんですね（笑）。

サスケ　これはブレないですよ（笑）。

――まあ、新幹線の混み具合なんかネットですぐにわかりますしね（笑）。

サスケ　ウヒャヒャヒャヒャ！　そう、おっしゃるとおり！（笑）。だから、その言葉尻をちょっと揚げ足取られちゃったんですよぉ。

――こういうのって、誰がネタを挙げてくるんですか？

サスケ　いわゆる一般的にいうオンブズマンみたいな連中がやってますよね。私に言わせれば、彼らは探偵ごっこをして遊んでるんですよ。

――確かに楽しそうですよね。

サスケ　ただ、彼らの調査にはイージーミスというかズサンな部分が多いんですね。だからもう、「勝手に探偵ごっこをやってろ」っていう話で、「いちいち付き合ってられるか！」っていうのが本音ですよ。それはいまだからこそ語れるオンブズマンに対する思いというか、まあひとことで言えば「バカ野郎！」ですよね（笑）。

――あと、これはオンブズマンの仕業ではないと思うんですけど、「サスケ議員、AV出演疑惑」っていうのもありましたよね（笑）。



暴行事件から釈放後のサスケが公の場に現われたのは、旧知の間柄にある高須基仁が主催する『熟女クイーンコンテスト』！ もちろんどんなにエロイベントに出演しようが、断固としてAVには出ていないのである（棒読み）。

ザ・グレート・サスケ

サスケ　ありましたねえ！（うれしそうに）。あの～、ザ・グレート・サスケのAV出演っていうのはですね、1947年にアメリカのニューメキシコ州で起きたロズウェルUFO墜落事件、異星人の死体回収事件と同列だと思うんですよ。

──うまいこと言いますね（笑）。

サスケ　ええ（笑）。だからその……、なんて言うのかな？　サスケがAVに出たと言う人もいる。あれが本当だったとまことしやかに言う人もいる。で、それを否定する私もいる。つまり公式には否定されている。ロズウェル事件もそうです。公式には米政府が否定している。でも、いまでも根強く本当だと信じている熱狂的な人々がいる。そういうことですよ（笑）。

──それはすなわち「出た」っていうことですよね？（笑）。

サスケ　違う！　言ってない、言ってない！　出てないんだから。

──サスケさんって、本当に強いですね（笑）。

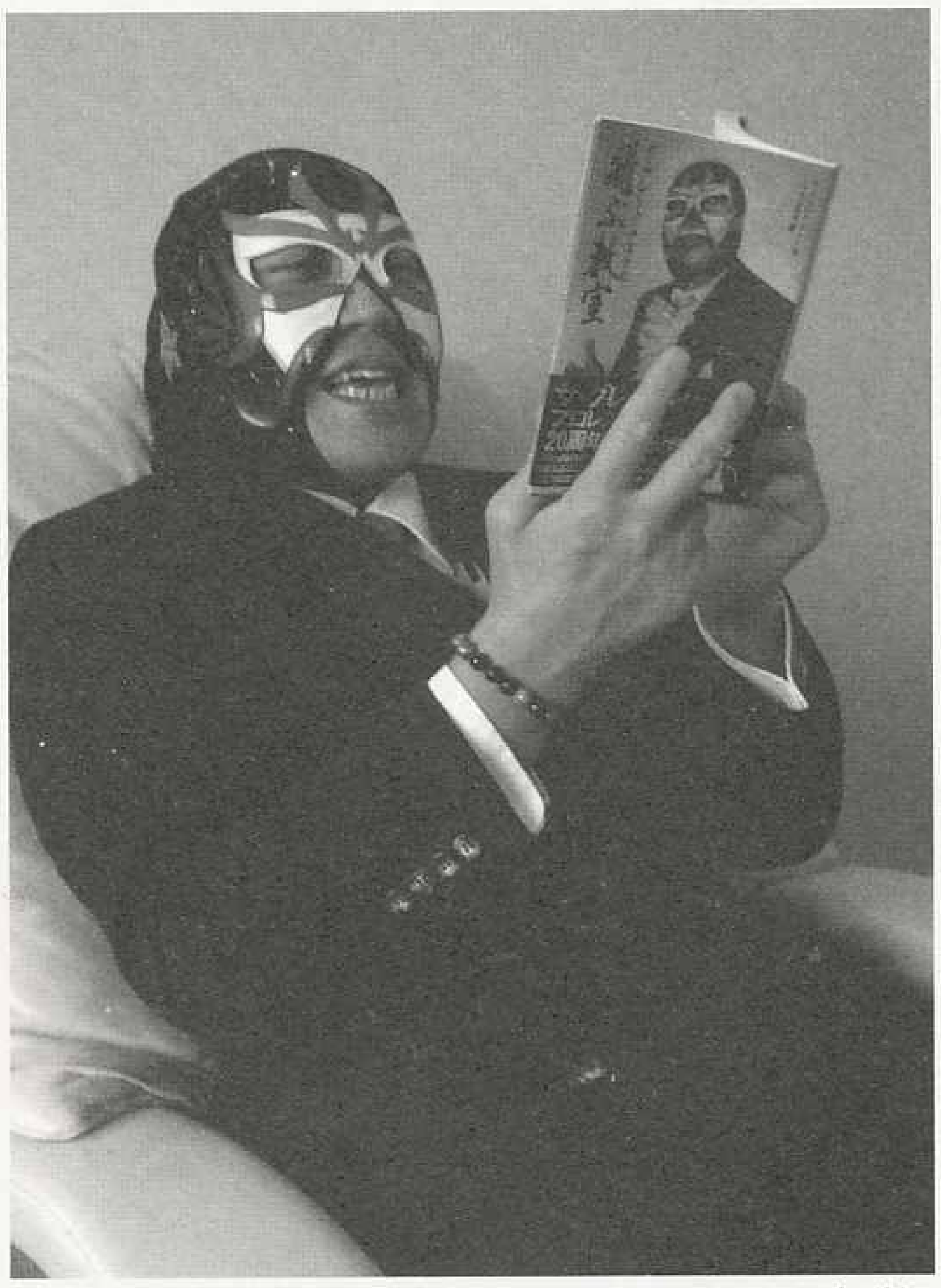
サスケ　ウヒャヒャヒャヒャ！　ただ、そのご縁なのか、おかげさまでいろんなイベントに出させてもらって、こないだもモッツ出版の高須社長の『熟女クイーンコンテスト』にも審査員で出させてもらったり。そういった関係でのAV女優さんとの交遊は広いですよ、は～い（笑）。

──ただ、まじめな話をすれば、AVに出演したとしてそれの何がいけないんだっていう。

サスケ　そうですよ！　私も現職時代にはよっぽど開き直ろうと思ったんですよ！

──出てないのに!?

サスケ　うん、そうそう。あっ、出てないのに開き直るのもおかしいか（笑）。それでまたおもしろいのは、AV出演疑惑をやたらと焚きつけた日テレの『NEWS ZERO』の前にやってた『今日の出来事』でも、私のAV出演疑惑を当時、第一報で報道したりしてて「バカじゃねえの！」って話なんですけど（笑）。で、この疑惑を焚きつけてたのが、盛岡市内に開業の眼科医だったかな？　そいつが透明の定型封筒に私のAV……、いや私のじゃなくて、いわゆる疑惑のAVパッケージのカラーコピーと「これがサスケ議員の出演だ！」みたいな自分で作ったカラーの文書を作って、わざと透明の封筒で見えるようにしてすべての県議会議員に送ったり、それを持って本会議中の議会に勝手に入り込んでバラまいたりとかそういうことをやってたんですよね。



ざ・ぐれーと・さすけ■本名・非公表。1969年7月18日、岩手県出身。新日本プロレス学校を経て、90年3月にユニバーサル・プロレスでデビュー。現在はみちのくプロレス会長として、さまざまなリングで活躍中。また、小見川道大にも負けぬ愛猫家としても知られている。180cm、88kg。
サスケブログアドレス→http://ameblo.jp/thegreatsasuke/

私のAV出演というのはロズウェルのUFO墜落事件なんかと同列なんですよ

──盛岡にはそんな強者がサスケさん以外にもいるんですね（笑）。

サスケ　だから、いつかそいつのクリニックにバズーカ砲をブチ込んでやろうと思って！　これはいまだから強く言える！

──アハハハハ！　その火種はいまだくすぶってるわけですね（笑）。

サスケ　は～い。あの野郎、よけいなことをしやがって!!（怒）。

──凄いですねえ。それで2007年には岩手県知事選に出馬しましたね。結果からいうと、これが開票後わずか2分の秒殺劇で（笑）。

サスケ　秒殺、秒殺。もう私の感覚からすれば1分すらなかったような感じでしたね。もうあれは「人生最大の屈辱の日」ですよね。テレビで速報を見て青ざめましたから（笑）。

──一定の得票がなかったこともあり、供託金300万円も没収で。

サスケ　そのときの心境はまあ、先が見えなくなりましたよね。でも、私の場合、現役のプロレスラーを続けてましたので、完全にお先真っ暗でもないですよね。またプロレス一本で頑張ろうくらいの思いでしたよね。

──県議でも国政でも、また政界のほうに打って出ようというお気持ちはないんですか？

サスケ　まぁ、私を知事選に担いだ陰の勢力がいるくらいですから、このままでは終われないっていうのはありますよ。ただ、なんか私が盛り上がるためにもうひと声ほしいかなということと、私は昔から常々言ってるんですけど、選挙というものは自分から立候補しますと言うべきではないと思うんですね。まず有権者の方々から「サスケさん、出てよ」と言われないかぎりは、私は出るつもりはないです。ただ、あちこちからけっこう言われるんですけどねえ（笑）。

──もうすでに待望されている、と（笑）。

サスケ　ただ、あともうひと声が必要かなあ？

──もう一つ何か、背中を押してくれるきっかけというか。

サスケ　そういうことですよね。まあ余談ながら、来年に地方統一選があるんですけど、仮に私が出た場合にですね、ポスターのキャッチコピーを決めてるんですよ。ズバリ、「たった一人の闘い」！

──おおっ？（笑）。

サスケ　それがキャッチコピーなんですけど、そんなのを先に考えてどうするんだっていうね（笑）。


──まだ誰からももうひと声があがっていないのに（笑）。

サスケ　先にポスターだけはできあがったみたいな（笑）。まあ、今後の私の動向を期待しないで注目してもらいたいな、と（笑）。

【10年4月7日／神奈川県・某所にて収録】



飛んで飛んで20年!
ザ・グレート・サスケ
プロレスデビュー20周年記念出版!!
サスケ流「2010年代のプロレスのあり方」を
悩めるコミックレスラー・マッスル坂井が受講!
プロレスにまつわる諸問題は解決したのか!?
+マッスル坂井
編集者デビュー第一弾
「坂井さん、何かお悩みでもあるんですか?」(サスケ先生)
「そっ、そんなのレスラーなんですから悩みだらけですよ!」(坂井)
「最近はケガを怖がるレスラーが多いですよね。『じゃあ、おまえらは何をやりたいんだ』って!」(サスケ先生)
「う、うわっ!　す、すいません!!」(坂井)
全国書店にて
絶賛発売中!!
B6変型判/328ページ
定価=1,890円(本体1,800円+税)
ザ・グレート・サスケの
飛ぶ教室
ザ・グレート・サスケ 著　マッスル坂井 編



証言検証

4・17 ストライクフォース

シンヤ・アオキはなぜ負けたのか？

盟友が見た青木真也の敗戦と日本の現実――



青木はメガジムを作るしかない！

初代戦極ライト級王者にして青木の名セコンド

北岡 悟



今回、青木真也のセコンドとして
アメリカに渡った北岡悟。しかし北岡は
青木の敗戦を最も間近で観ることとなった。
はたして、青木の盟友であり
ライト級トップファイターである北岡悟は
この敗戦をどう受け止めたのか？
そして日本が生き残る道とは!?

聞き手／高崎計三　構成／松下ミワ
試合写真／石井史彦

青木は日本でぶっちぎりで強いわけで それが勝てなかったのがすべてです

――青木選手のセコンド、お疲れさまでした。あの試合のことをいろいろうかがいたいんですが。

北岡　いいんですけど、某誌と企画がまるかぶりですけど（笑）。

――まあそうなんですが（笑）、別の角度からもお聞きしますんで。まず大会を終えて、日本に帰ってきてからの周囲の反応はどうでした？

北岡　まず僕が刺激を受けて帰ってきたのに、日本の仲間とかはあんまり変わらず生きてるんで、ちょっと違うなというか……そういうギャップみたいなものはありましたね。僕は意識がより高くなってきたんですけど。

――なるほど。さて、あの結果になってしまったからこそ、青木選手やその周囲が「日本を背負う気持ち」だったことの是非が言われたりしてますよね。

北岡　ともかく青木は日本で一番強い選手だったわけですよ。しかも飛び抜けて強かったわけで、その選手が勝てなかったってことは、イコール日本の総合格闘技が通用しなかったってことだとは思いますよ。だけど、誰よりも悔しいのは青木自身なんだよっていう。まあ、意識を共有してみんなが応援できたってことは素晴らしいと思うし。

――ニコニコ動画も3万人くらいが観たらしいですね。

北岡　それだけ熱があるってことだし、その熱を使ってまたみんなで頑張って盛り上げていったり、選手が強くなっていったりすればいいと思うんですけどね。僕自身も青木が勝てなかった、メレンデスが上だったっていうことはやっぱり凄い刺激になったし、この競技をもっと頑張らなきゃダメだなと思った感じですね。そうでないと抗うことすらできないし、それはあまりにもむなしいことだと思うから。

――この結果と試合内容を受けて、ファンからは「川尻選手のほうがタイプ的に合うのでは」という声も上がってますが。



©Josh Hedges（UFC）

青木返り討ちのショックがあまりに大きすぎたのか、「川尻だったら……」「五味の敗戦とどう違うのか」などという声まで上がっている昨今。そんなざわつきを北岡は「くだらない」とバッサリ。確かに大事なのはこの敗戦を受けてどうするかだ。

北岡　川尻さんがどうこうじゃなくて、その論調はくだらないですよね。

――くだらない！

北岡　べつに川尻さんに頑張ってほしいと思うことはいいし、自由だと思うんですよ。ただ先にやるべきは、青木と川尻さんの試合だと僕は思いますけどね。

――北岡さんは早くやるべきだ、と？

北岡　タイミングの問題ですか？　仕方ないんじゃないですか。これは僕が言うことじゃないですけど、僕の感覚なら次いきなりやるべきだと思いますけどね。

――ナッシュビルでの話に戻りますが、試合までの様子は実際どうでした？

北岡　青木はへんに高ぶることもなくすごしてたと思いますけどね。僕はいい状態に見えましたけど。ちゃんと、なんとも言えない緊張感も上がってたし。責任感とか使命感とか意識してるのも凄く感じましたよ。ほかでも言いましたけど、今回の青木は、僕はカッコよく見えましたよ。

――日本を背負うにあたって、五味隆典選手の敗北は関係してますか？

北岡　……うーん、五味選手のことを悪く言うことになっちゃうじゃないですか。比較すること自体がもしかしたら向こうにも悪いかもしれない。「もう違うよ」っていうことを向こうも発信してる気がするんですよね。リップサービスなのか強気なことも言ってますけど、もう基本的には「違う」って認めてらっしゃるような気はするんですよ。比較するのは周りじゃないですか。それは青木に失礼じゃないかな、と。

――間隔が短かったこともあって、五味選手、宇野選手、青木選手と日本ライト級のトップ3人が同時期にやられたという印象もあります。

北岡　そのなかでもトップなわけですよね、青木は。だから青木の負けこそが日本の負けなんだと思うし。

――ここは、日本はいったん負けを認めなきゃいけないところですか？

北岡　と、僕は思います。強いヤツのレベルが違うんだよ、と。試合後すぐに控室で話したんですけど、メレンデスくらい強いヤツが10人、20人、30人っているんじゃないかって。でも青木は日本で一番、ぶっちぎりで強いわけで、それが勝てなかったのがすべてだし、事実ですよ。ある意味、そこがスタートだと考えれば、ここからどうするかってことですし。

――あの内容と結果って、いままで築き上げてきたものが崩壊したような、絶望感を受けるものとは違ったんですか。

北岡　僕は違うと思います。そういうふうに思われるのかもしれないですけど、ここからまた作り直せるものだと思うし、感じられたほどの差ではないと思うんですよね。格闘技ってそういうふうに思われがちな部分ってあるじゃないですか。勝ち負けがハッキリ出るものだし。青木自身が向こうのほうが強かったって認めてるように、まだまだ伸ばさなきゃいけない部分があるなってことだと思うんですよ。それにメレンデスのほうがレベルが高かった。だからあんなふうに追い込まれてしまったってことなんですよ。逆に直したり伸ばしたりすればいいわけで、青木自身も、もっと言うと日本の格闘技も作り直すチャンスをもらったってことですよね。

――それは青木選手個人がやることの問題なのか、日本のジムとかの環境そのものから変えていかなきゃいけないのか。

北岡　うーん、その環境を変えても（日本は）勝てないと思いますけどね。人口と人



青木はメガジムを作るしかない!



アメリカは突然変異を待たなくてもそのレベルの選手が簡単に出てきちゃう

チーム・クエストやAKAなどアメリカのメガジムでは、打撃からフィジカルまでスペシャリストがずらりと揃い、そのうえ選手層まで厚いというからやはり日本の環境は不利に思えてくる。

種的な問題、意識も差がある気がしますしね。メジャーに出られるレベルの日本人トップ選手たちの偏差値が60〜70くらいだとして、結局アメリカには60〜80くらいの選手がゴロゴロいるってことじゃないですか。日本人でメジャーに出られる70キロの選手って20人もいないと思うんですけど、アメリカにはそういうレベルの選手がもっとたくさんいて、しかもその偏差値がより高いという状態なんですよね。しかも、さらにその予備軍がいっぱいいると思うんですよ。そして全体も凄いレベルで進化していってますよね。それは僕自身も凄く感じてることなんですけど。

——じゃあ、とりあえず何をすればいいんですかね。

北岡　ホントにやれることはいっぱいありますよね。何をやればいいのかっていうのは一概に言えないというか、人によっても違うし。僕自身も取り組んでることはあるんですけど、それは間違いじゃなかったなあとは思いましたね。具体的には言いませんけど（笑）。

——気になりますね（笑）。

北岡　少しだけ言うと、何かを突き詰めればいいってことじゃないと思うんですよ。だけど、突き詰めるのもやめちゃいけない。難しいでしょ？（笑）。

——それで言うと、今回の青木選手の戦法って「突き詰め型」だったんじゃないですか。

北岡　そうですね。そうなると思います。でもご存知のように、青木もキックとか上手になってますし、そういうのがプレッシャーになってましたよね。ちょっと足を上げるだけで牽制になるわけですよ。僕、ずっと「牽制！　牽制！」って言ってたんですけど、声って放送に入ってました？

——すっごく聞こえてましたよ（笑）。

北岡　もちろん青木は組み技を突き詰めるタイプではあるけど、総合力もあるんですよ。そのなかのアベレージをもっと上げていければよいということですよね。それを青木なりにわかりやすく言ったのが「相手のほうが強かった」っていう。だから一個のことじゃないんですよ。みんな一番誤解しがちなのが、アメリカだったとか金網だったとか、ルールや団体が違ったとかは正直、まったく関係ないんです！　青木自身もコンディションも、心身ともむしろよかったと思うし。だからこそ青木は素直に負けを認めてるわけじゃないですか。それがすべてですよ。

——ただ、最初に立ててた作戦が序盤に崩れたわけじゃないですか。そのときに別の作戦に切り替えるというのはなかったんですか。

北岡　それはできたかもしれないですね。戦前、上かバックは取れるだろう。取れなかったらガードの試合になっちゃうんだろうな、でもガードになってもまあ固められるだろう、少なくともワンチャンスはあるだろう……というイメージでしたよね。プレッシャーはかけられるかもしれないけど、青木の組みのプレッシャーもあるはずだから、そこまでずーっとはないだろうと。確かにその意味では負けるべくして負けたというか、見当が違ってたってことかもしれない。1ラウンドが終わったときに、「プレッシャーが凄いからうまくやれない」ってこぼしてたんですけど、「先にプレッシャーかけて入らなきゃダメだよ」って言って。3ラウンド終了の時点で、「もう下からは取れない」と本人が言ってきたので。4ラウンド終わった時点では「下からは取れないんだから座るなよ」って言い

ましたよね。ほかにも作戦じゃないけど、細かいやり方を微調整するアドバイスはしてたんですけどね。

――中盤、青木選手のヒザ蹴りが入っていた場面がありましたが。

北岡 首相撲とかも言ってたんですけど、いけなかったんでしょうね。まああの試合は、「もっと蹴ればよかったのに」とか、わかってない人は言うわけじゃないですか。蹴れねー！　っつー話で、蹴りにいったらぶん殴られちゃうよとか、首相撲取りにいっても殴られたりとかするわけですよ。そんな簡単な話じゃないんですよね。

――1ラウンドが終わったときの青木選手の言葉ですけど、弱気になってしまったわけではないんですか。

北岡 相手の強さを感じてしまったということで、乱暴に言いきれば弱気ってことかもしれないですけど、そこから彼なりに奮い立たせて頑張ったと思います。まあ途中、軽いパニックではあったみたいですけど。3ラウンドだか4ラウンドのあと、「オレ、引いてないでしょ」みたいなことを言ってましたから。肯定もしづらかったけど、アタックは入ってましたからね。「攻めてはいるから、先にいこう」って返しました。まあ僕は今回、いいセコンドをやれたという自負はありますよ。

――さて、日本が復権するためにはどうしたらいいんでしょう。

北岡 そこまで業界全体のこととか考えてらんねえよって話なんですけど、なんとか選手を作って一人ずつ勝負にいって、ひとヤリふたヤリ刺すっていうくらいだと思うんですよ。

――北岡さんはいかがですか？

北岡 その前にやることがあるから、オレがヤリになりたいとは思わないですね。それこそ短絡的だと思うし、僕はその資格すらないと思ってますから。逆に僕は競技者として見習うべきところは見習って、やるべきことをやっていかなきゃなと思うだけですね。

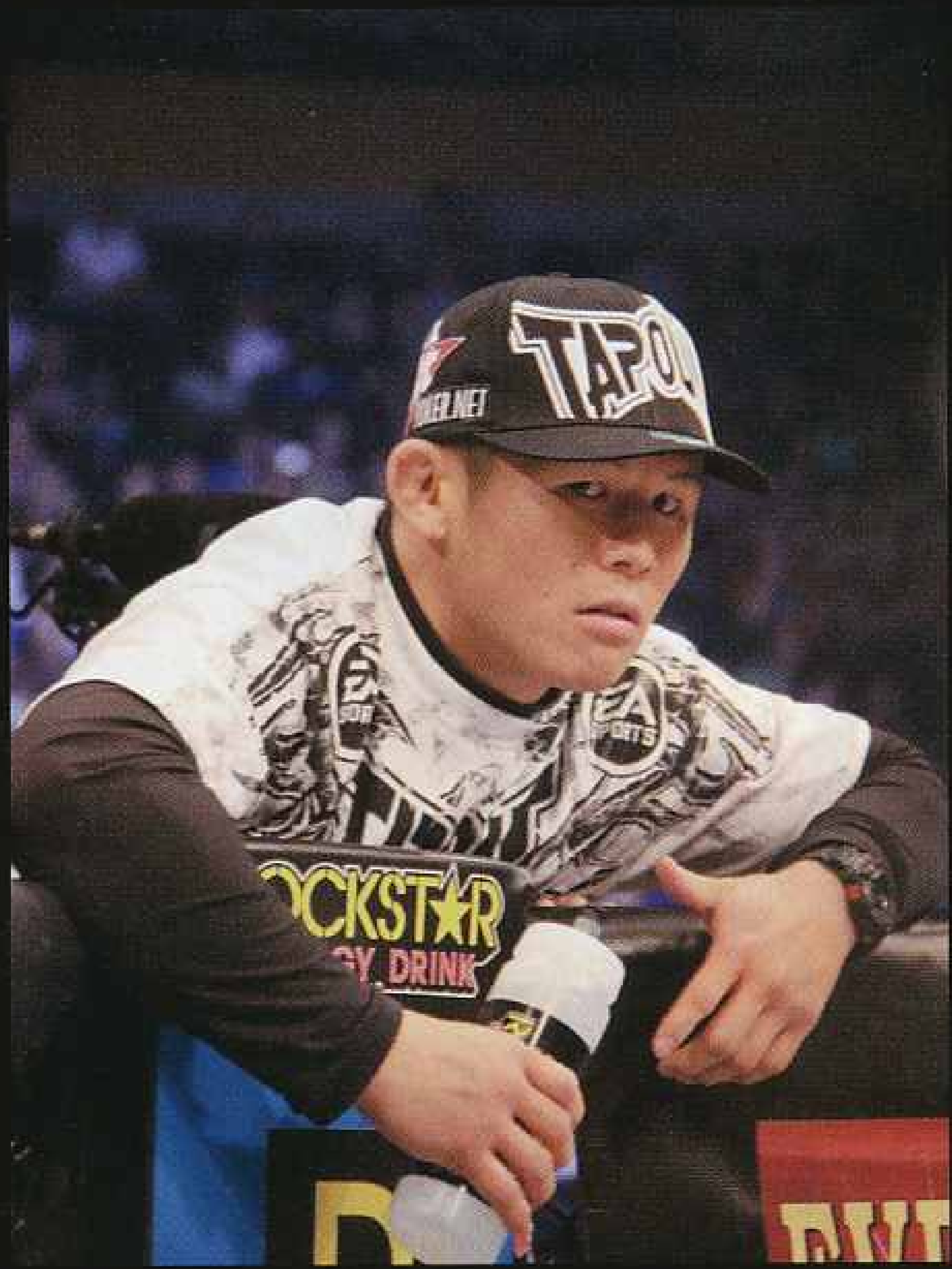
――青木選手に関しては、また日本を背負うべきですか？

北岡 ある意味ではリセットされた部分もあると思うけど、悔しいのは青木なわけで、日本どうこうってのはそのときの状況だと思いますね。またそういう試合をするときに青木がトップなのであればそうなるでしょうし。まあでも、その責任感を持ってやってると思いますよ。

――青木選手はシーザー・グレイシー道場に行きたいと話してるみたいですが。

北岡 「メレンデスと試合しづらくない？」って聞いたら、そんなのどうでもいい、そんな問題じゃないって。それもわかるし、彼が重きを置いてるのは強くなるって部分ですから。だからいいんじゃないかなと思いますけどね。僕も正直、海外で練習するのは興味湧きましたけどね。

――あ、そうですか。



きたおか・さとる■1980年2月4日、奈良県出身。00年、パンクラスに入門。09年1月、初代『戦極』ライト級王座に君臨。青木真也の盟友であり、足関節とマイメロディをこよなく愛する日本を代表するグラップラー。168cm、70kg。

SATORU KITAOKA

北岡 チーム・クエストのアップの様子とか見たらおもしろかったんですよ。5人のトレーナーのサポート体制で、なおかつそのなかにそれを総合的に見られる人がいて。確かにこういうふうにやればいいよなって。そうすれば、そこまで考えなくてもレベルの高いMMAが自然にできちゃうんでしょうね。日本だと青木とか僕とかみたいに意識の高い人って、突然変異だと思うんですよ。ちょっと違うじゃないですか。でも向こうの仕組みだと、突然変異を待たなくてもそういうレベルの選手が簡単にできちゃうんですよ。だから日本じゃ無理ですよ。ムリムリムリ！

――いやいや（笑）、でもそのシステムを学ぶことはできるわけですよね。

北岡 そうそうそう！　だからこそ練習に行ってみたいと思うんですよ。日本人は取り入れるのが得意だから、それはできると思いますけどね。興味は湧きましたよ。でも、僕はハングリーさとか人種的なものとかあると思うんですけどねえ。

――でも、なんとかしないといけないでしょ？

北岡 そう思うとしんどくなっちゃいそうだから、僕自身は競技者一個人としてやろうと思いますけどね。ジャンルを背負う人はそこの部分と勝負しなきゃいけないですけどね。あ、DJ（・taiki）がメガジムのことをブログで書いてましたけど、あれは正論ですよね。整ってるのは大事ですよ。その環境だと選手も量産できますから。だから青木には「もうオマエがメガジム作るしかねえよ！」って言いましたけどね。彼が貯め込んだ貯金で。

――期待しましょう（笑）。さて、北岡選手ご自身のこともお聞きしたいんですが、6月5日、パンクラスでの復帰戦が決まりましたね。

北岡 ただ、まだ相手は決まってないですけどね。

――昨年の連敗があって、スタイルを見直すという発言もありました。もうリングに立てるだけのものになった、と？

北岡 うーん……時間は永遠じゃないですからね。どこかで区切らないといけないですから。ただ正直、自分も格闘技に懸ける純度は高いと思うんですよ。飛び抜けてる、と。そこに迷いが生じて、懸けれないなと思ったときに一度辞めたいと思ったし。だからMIKUさんの気持ちとかもよくわかるし。取り組めるだけ取り組もうと思ってこの半年やってて、それはウソじゃないんで。

――となると、ますます復帰戦が気になりますね。ちなみに、その先はどうでしょうか？

北岡 個人的には、自分が今後MMAをやっていくうえで、納得いくものを出したいなと思ってますね。勝ち負けはどうでもいい……って言うと危険な発想なんですけど。勝ったうえで、以前僕は「メジャーの1勝はそれ以外の10勝に匹敵する」って言ったことがあるくらいで、やっぱり星を取り戻したいですよね。出るならばSRCだと思いますし。


――継続参戦ということですね。

北岡 正直、僕は『戦極』でいろいろ作ってきた自負はあるんですよ。それがまたイチからになっちゃうのはしんどいですけどね。でもその前に、6月5日に納得いく自分に仕上げたいというか。それがまず大前提ですね。

――期待してます。ありがとうございました！

【10年4月23日／都内・某ホテルにて収録】

ニコニコ動画での中継決定秘話を激白!



DREAMは“ガラパゴスMMA”になってしまうのか?

DREAMイベントプロデューサー

笹原圭一

DREAMを、そして日本格闘技界を背負った闘いと言われた
青木真也の全米進出。しかし、絶対に負けられない闘いで敗戦を喫してしまった。
今回の結果を受けて、DREAMは今後どう進んでいくべきなのか。
日本格闘技界が“ガラパゴスMMA”にならない方法とはいったい!?

聞き手／ジャン斉藤　試合写真／乾晋也

笹原　今日はなんの話ですか？　90年代のプロレスですか？

——１９９０年代の笹原圭一のお話……ではなく、現実から目をそらさずに青木vsメレンデスの話をお聞かせいただければと思います。

笹原　……はい、よろしくお願いします。

——歯切れが悪いですね（笑）。

笹原　そんなことないですよ。ナッシュビルはいい町でしたし。

——ええ⁉　ボクは空港職員に「ナッシュビルは観光するところじゃねえぞ」って言われましたよ。

笹原　ボクらもシカゴから国内線に乗り換えるときに「何をしに行くんだ？」って凄くしつこく聞かれました。で、「ＭＭＡのイベントがあるんだ」って言ったら、向こうはボクらが日本人だってわかってたんで「それはＰＲＩＤＥか？」って聞かれたんですよね。

——それはいい話だ！

笹原　だからボクは説明しましたよ、「ＰＲＩＤＥはもうなくなったんだ」って……（遠くをみつめて）。

——ダハハハハ！　ズバリ聞きますが青木vsメレンデスはいかがでした？

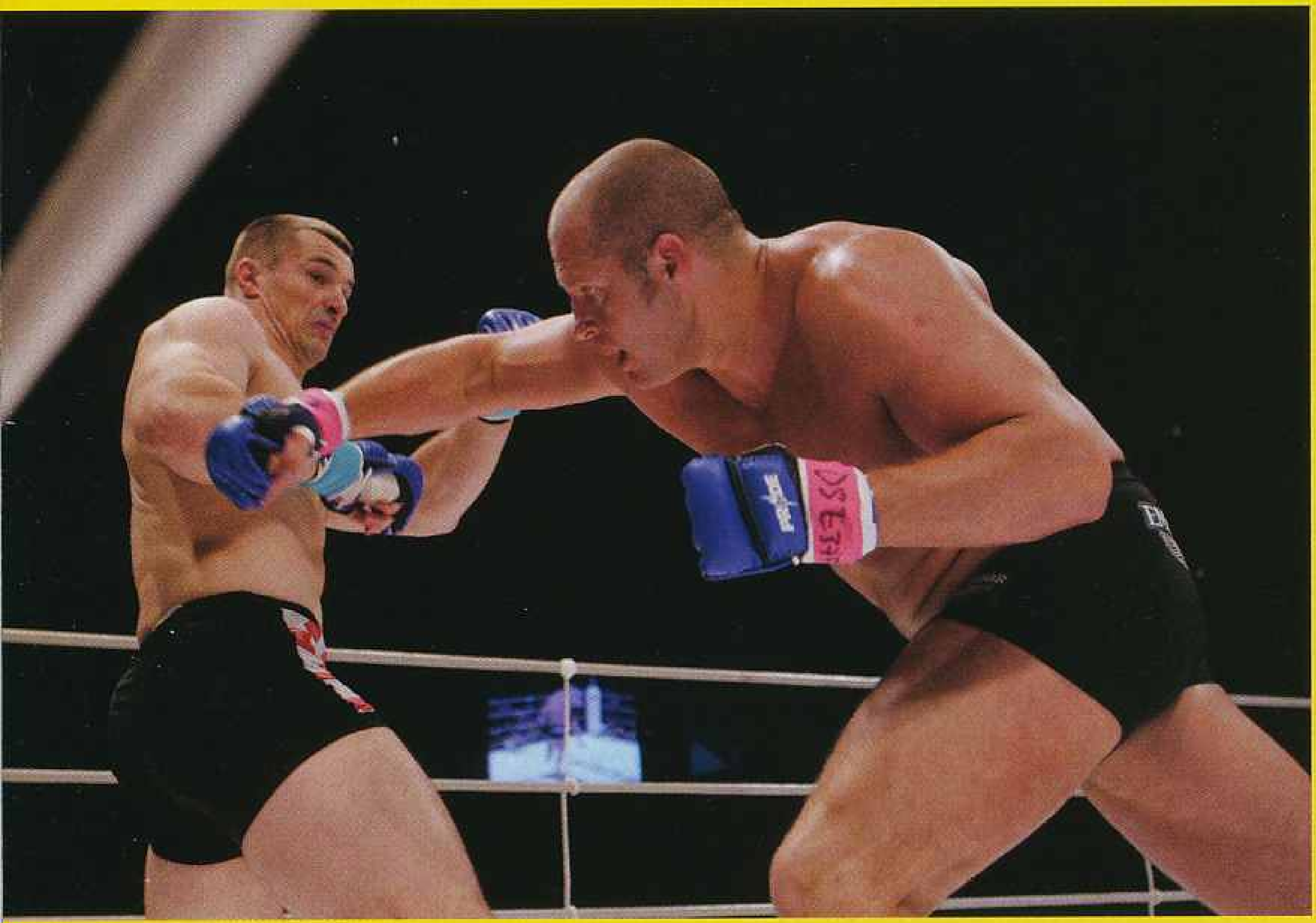
笹原　あのー、青木選手の試合が終わったあとに一部の方々が「青木vsメレンデスは『ｋａｍｉｐｒｏ』が勝手に煽ってただけだ。この責任を取って謝れ！」とか騒いでるじゃないですか。

——ズバリ、終わったあとに言われても困るんですけど。それに青木が勝っていても、決してほめられてないと思う（笑）。

笹原　というか、『ｋａｍｉｐｒｏ』を擁護する気は１ミリもないですけど、煽るのが当然じゃないですかね！（ドンッ）。

——まあ、太鼓を叩くしか能がないですからね、ボクらは。

笹原　しかも「それに笹原がさらに乗っかってる」みたいな書かれ方もしてたんですよ。そもそも闘いを観るときに、ヒョードルvsミルコは「最強を決める闘い」だとか、桜庭vs田村のときに「ＵＷＦの総決算」だとかテーマづけして観るわけじゃないですか。だから今回の青木選手の試合を「これで負けたら日本格闘技界が終わる」って煽ること自体はべつに間違ってるとも思わないですし、この試合はそのくらい重要だったわけじゃないですか。でも、負けた瞬間に「それみたことか」みたいに言うのは、反則だなあと思うんですよね。それを言うんだったら、その打ち出しをやってるときから言うべきでしょう。その点、ボクは最初から「青木真也に全額ベットしますよ」って胸張って言ってましたからね。それは勝とうが負けようが、いま青木真也にベットせずにいつするんだって話なんですよ。



「最強を決める闘い」や「ＵＷＦの総決算」など、闘いを観るときにテーマづけすることで試合をおもしろく観るというのは常套手段。それが厳密に「最強」や「総決算」でなくても、おもしろければOKなのだ!

——おかげでスッカラカンですけどね（笑）。それに、青木真也みたいに「オレにベットしてくれ！」って手を挙げる選手っていないじゃないですか。

笹原　しかも博打ってよく上限がありますけど、今回の青木真也は青天井だったじゃないですか。本人もどんどん賭けてくれって感じでしたからね。だからスッカラカンになっても何も後悔もしてないし、恥ずかしいとも思ってないです。むしろ、だったらもう一回お金を貯めて青木真也にベットするよって話ですね。青木選手ももう一回全額ベットしてもらえるように練習もするでしょうし、アメリカで勝てるようにいっぱい努力もすると思うんですよ。ただ、試合後に批判するのは全然いいですけど、「ひれ伏すまで謝れ！」みたいに糾弾するのは、ちょっと違うなぁと思いますけどね。

——まあ、ウェブは悪意が見える場所ですからね。そういう声があるのは、本当にアンチも含めて注目してたからだと思うんですよね。

笹原　だからニコニコ動画で中継したこととかも、簡単なことのように思っている方が多いかもしれないですけど、どえらい大変だったんですから。ＣＢＳに許可を取って、ストライクフォース、ＴＢＳの許可も取って。それでスコット・コーカーが大会の「やってもいいよ」って言ったのが大会の二日前くらいだったんですよ。

——それって青木vsメレンデスの決定時から動くことはできなかったんですか？

笹原　そのときはネットライブというよりもまずはスカパー！さんだったんですよね。でも結局時間の制約も含めて、いろんな問題があって無理だった。そういう状況でも最終的にネットライブというかたちを作れたことは、本当によかったと思います。あの時間のないなかで、各所いろんな方々が必死に動いてライブ中継を実現させるのを見ていて、日本人サラリーマンは本当に優秀だなってあらためて思いましたよ（笑）。

——自分の仕事のみを全うするアメリカ人だったら難しいでしょうね。

笹原　でも、それは青木vsメレンデスだから実現できたと思うんですよ。青木真也が海外に挑戦していく姿を日本で観たいという人もたくさんいたし、見せたいと思う人もたくさんいたから実現したんだと思うんですよね。

——ただ裏側で熱意があるというのはわかるんですけど、ファンからするとその熱意が伝わってなかったんですよ。それって、へんにファンを期待させて落っこちるよりは、いきなり発表したほうがいいんじゃないかって思いがあったのかなって。

笹原　いや、あのね、伝える余裕がなかったんですよねえ……（小声で）。

——あ、一番ダメな理由じゃないですか

博打でスッカラカンになっても後悔してないし、恥ずかしいとも思わない

（笑）。

笹原　いや、こんなにたいへんだとは思わなかったんですよ。もっとスムーズにいくものだと思ってたんで、そこは読みが甘かったです。もっと事前に煽れれば、より多くの人たちに届いたでしょうし。その点は非常に反省しています。

──ただ、今回の大会で海外MMAもライブで観られるという道筋ができたことは素晴らしいですよね。

笹原　今回、ニコニコ動画でもライブ中継をやっていただいたんですけど、あれは川上会長のご英断だったんですよね。ニコ動さんの現場はたいへんだったと思うんですけど、川上会長がツイッターで「アメリカと日本のMMAを比べたときに、日本の規模が縮小したのはアメリカのPPVのせいだ」と。「それで資金の差ができてしまって盟主の座を奪われた。だからネットPPVでその視聴習慣を作れれば」とおっしゃってたんですよね。

──なるほど。

笹原　もちろん現状ではスカパー！さんにその部分を担っていただいて、本当に助かってますけど、プロモーターはいろんな可能性を探ってお金を稼がなくちゃいけない。その一つが今回のネットライブだったわけです。やっぱり格闘技にはライブで観たいと思わせるパワーを示せたってことは、非常に意義があったと思います。

──それも今回の試合が注目されていたからこそ切り開けたことかもしれないですね。で、肝心の試合はどうご覧になりました？

笹原　うーん、終わった瞬間というか、2ラウンド終わったくらいから「マズいな」って思いましたね。「いやな展開だなあ」って。

──笹原さんから見て、青木の敗因はなんだと思いますか？

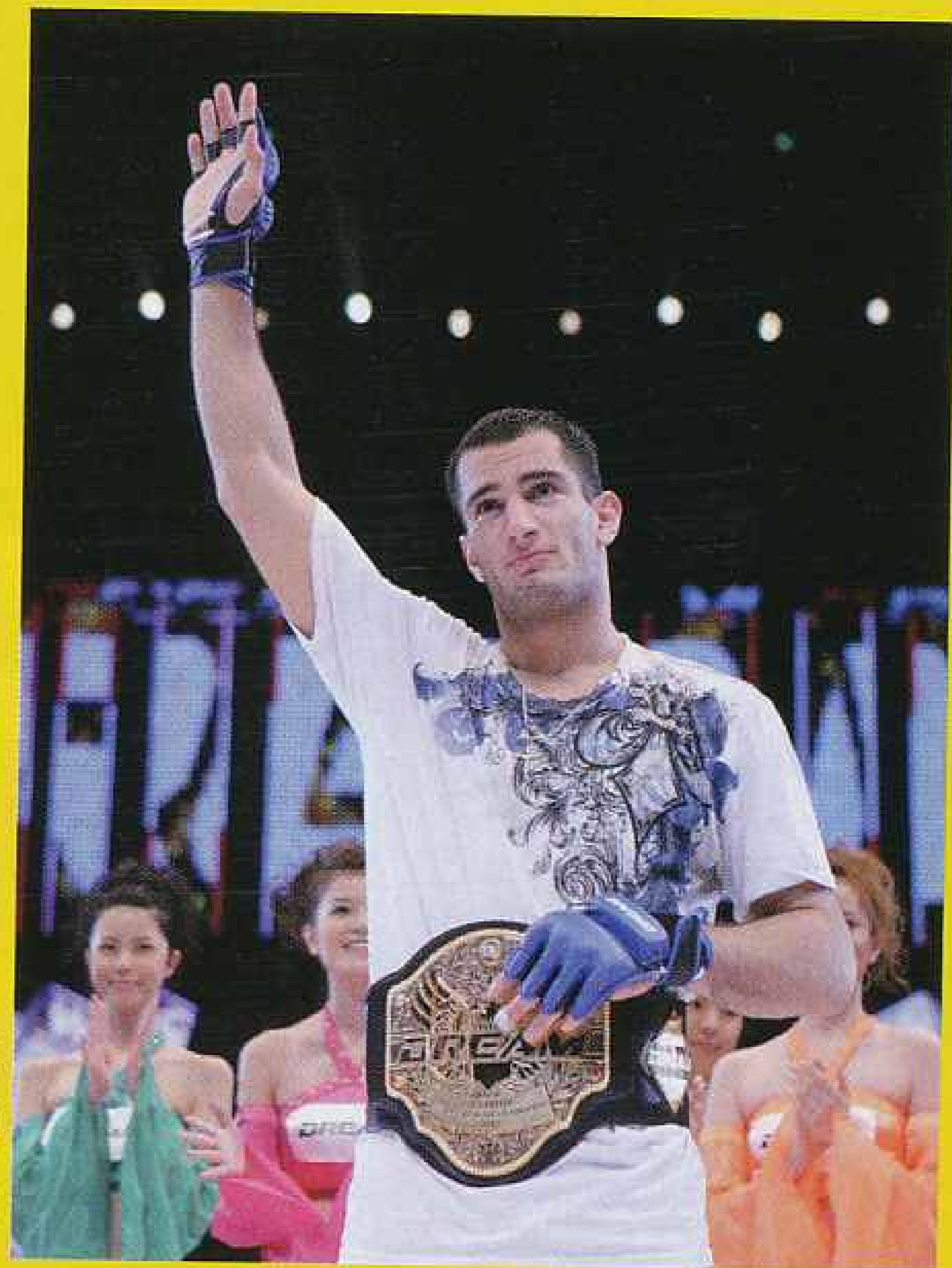
笹原　…………………………わからん（首をかしげて）。

──非常に長い沈黙でした（笑）。でも、そこですよね。今後が不安になるのは。きっと一つじゃないんでしょうけど。

笹原　技術的なことだったり精神的なことだったりいろいろあるんでしょうけど、ケージ対策ができてないとは思わないですし、精神的なプレッシャーが大きいからというなら、いつも大きいですしねえ。たとえば今回セコンドにいた北岡選手が言っていたことで凄く印象的だったのは、いまのMMAって間合いの潰し合いで、いかに自分の間合いで闘えるか、青木選手はそこで負けたって言ってたんですよ。そう言われると確かにそうだなとも思うんですよね。

──技術側の分析ですね。

笹原　そういう展開になってしまったのは、精神的に余裕がなかったということもあるのかもしれないですけど。ただ考え



青木真也の敗戦に隠れてあまり目立たないが、DREAMのなかでも"最先端"を感じさせるゲガール・ムサシも今回のストライクフォースで敗戦を喫している。DREAMにとってここからの立て直しは非常に険しい道のりだ。

青木真也は情念を燃やして闘うタイプ 今回は怒りを持ちづらかったのかも

てみると、いままでの青木選手の試合って、とくに廣田戦はそうですけど、プレッシャーを怒りに変えて闘ってきたじゃないですか。

──怨念系ファイターですよね。

笹原　情念を燃やして闘うタイプだからちょっと燃料が足りないというか、怒りを持ちづらかったというのはあるのかもしれないです。何かぼんやりとした巨大なモノに立ち向っていったわけですから。だからメレンデスが青木真也のことを「気持ち悪い日本人！」とかボロカス言ってくれればよかったんですよねえ（笑）。

──ダハハハハ！　ところで、プロモーターサイドとして、メレンデスの身体がすべるということに対しては疑念はあったんですか？

笹原　もちろんそこは凄く注意していました。石田戦でのこともあったんで、スコットにはさんざん注意してくれって言ってたんですよ。もちろんコミッションにも提言してますし。でもどこまでいっても事実はわからないじゃないですか。まあ、そんなの関係なくメレンデスは強かったですし。

──うーん、そう考えるとグラップラーはことごとく不利ですね。正直な話、今回の青木の負けというのは相当痛くないですか？

笹原　痛いです。こうなると次からDREAMをどう打ち出すかが凄く重要だと思います。

──それは青木さんが明確な柱だったからですよね。で、その柱を修復するのにもやっぱり時間がかかりますし。

笹原　ボクらはあの1敗で青木真也という背骨をボキって折られて、さらによく見たらゲガール・ムサシという右足も骨折していた。もう複雑骨折なんですよね。だからそんな状況のなかで、淡々と次のDREAMのカードを発表して、その出来事がなかったかのように進めるのは絶対ダメですよね。この出来事を奇貨にしないと。

──仮に日本で青木vs川尻をやったり、アルバレスだ、カルバンだと騒いでどんなにいい試合しても、「結局メレンデスに負けたんでしょ」って言われる可能性はありますよね。

笹原　ただ、ボクは青木選手の敗北は競技者としての1敗でしかないと思ってる面もあるんですよ。長いキャリアのなかで負けるというのは誰しもに起こりえることで、確かに今回のメレンデス戦は、絶対に勝たなくてはいけない試合だったのにやられてしまった。その意味では凄く大きな1敗だと思うんですけど、イベントを作っている立場からすると「どうってことねえよ」って、そこは凄く冷静に見てる部分もあります。

──それは、この敗戦を受けてDREAMをどうしていくかが重要だということですか？

笹原　そうですよ。で、この先DREAMがどれだけ実績を残しても「でもメレンデスには負けるんでしょ」って言われてしまう可能性があるなかで、ボクらができるこ

とはDREAMの価値を上げることですよね。

――価値を上げるといいますと？

笹原　たとえば最近、日本のMMAが〝ガラパゴスMMA〟だって言われてたりするじゃないですか。そのガラパゴス化をさせないためにも、やっぱり世界に出ていかないといけないんですよ。それは決してDREAMをケージにするということではなくて、世界につながっているようなイベントをDREAMとしてどう作るかという意味で。

――世界にというのは、最強につながっている階段がDREAMにあると思ってもらうという意味でもありますよね。

笹原　そうです。で、いま日本はガラパゴスMMAだと言われがちですけど、PRIDEがあった時代はケージこそガラパゴスだと言えたんですよ。でもいまそれが逆転しているからといって、卑屈になったり、リングをすぐにケージにしたりするというのは違うと思うんですよね。で、価値を上げるめには何が必要かというと……（言いにくそうに）。

――つまり、〝興行力〟が必要ということですね。

笹原　あ～、うまいこといいますねえ！

――ホントはお金（笑）。

笹原　お金じゃないです。興行力です！　だから、DREAMはもっと足もとをみつめて、競技としてちゃんとしたものを作るべきだという意見も正しいとは思うんですけど、やっぱりメジャーって誰もが憧れるリングであるべきだし、そうなるためには「世界最強」という称号が絶対に必要なんですよ。

――それはかつてのPRIDEであり、いまのUFCが持っているものですよね。

笹原　それが本当に「世界最強」でなくても、そういうイメージがあればいいんです。だからUFCがケージでゴチャゴチャやってるのはボクから観るとやっぱりつまらないと思うわけですよ。でもそれはべつにどうでもいいんです。それよりいまのUFCには「世界最強」という看板があるんじゃないかなって思わせるものがあるわけじゃないですか。それですよ。で、そのイメージでいうと、まだ青木真也がいるライト級というのはイメージが保てたんですけど、それがポキって折られたからショックが大きいわけなんです。

――では今後、青木さんはどうしたらいいと思いますか？　川尻さんとのタイトルマッチなんかもやらないといけないんでしょうけど。

笹原　う～ん、だから川尻選手の立場に立つと、もちろんタイトルマッチをやってあげたい気持ちはありますけど、この状態を考えると凄く考えちゃいますね。ただ、青木選手の試合が終わったときに思ったのは、ライト級GPをケージでやりたいなと思ったんですよ。そこにメレンデスも青木真也も入って、川尻、石田、菊野が入ってってなったらおもしろくないですか？

――それはおもしろい！

笹原　もちろん現時点では不可能なアイデアですよ、でも考え方としてはそういうことです。だからいろんな意味で次のDREAMをどう舵を切るのかというのが非常に重要です。

――そうすると具体的にDREAMはどうするべきだ、と？

笹原　身も蓋もない言い方をすると、「興行力＝世界最強」という部分ってあるわけじゃないですか。だから単純に海外に行って選手が試合をするということだけではなく、マーケットの開拓という意味で海外に出ていくことも重要でしょう。さっき言ったガラパゴスMMAは、それ自体が劣っているんじゃなくて、世界と隔絶されてしまうことが問題なんです。だから、そのガラパゴスMMAで世界に打って出ていけばいいわけです。少なくとも格闘技が世界一を決めるとか世界最強を決めるとかいう幻想を持ってやっていくのであれば、興行のシステムを我々が先陣をきって変えていかなきゃだめでしょう。先日も谷川さん含め、スタッフでミーティングをしたんですよ。やっぱりこういうピンチのときって、ハッとするようなアイデアが出てくるんですよ。みんな危機感を持って臨んでるからなんでしょうけど。まぁ、次の『DREAM.14』から早速勝負を仕掛けていきますから、楽しみにしていてください。それで「世界最強」という称号を奪う闘いを、リスタートさせますよ。

――たとえば小川直也vs吉田秀彦みたいにドラマを楽しむ試合ってあると思うんですけど、それってあくまで本流があったうえでの試合ですよね。

笹原　そう。本流があるからこそ、それとは違う世界観が成立するんだと思うんですよ。で、日本ではそういう「世界最強」を打ち出しづらい状況がで2～3年やってきて、それでもライト級は生命線だったんですよね。そういうなかで今回その生命線が絶たれたんですけど、でもやっぱりDREAMはライト級や、もう一つ下のフェザー級が生命線なんですよ。だからもう一度この階級を磨き直すことが、世界への窓を開くことになるんだと思います。

――なるほど。お聞きするかぎり、かなりたいへんな作業になってきますね。

笹原　でも結局、格闘技興行は幻想の奪い合いなんですよ。それをDREAMという場所が奪ってくるしかないんです。

――わかりました。では我々も期待しております。

笹原　ええ。昔、榊原（信行）さんが「チャンスはピンチのカタチをして現われる」ってよく言ってたんですよ。いまはまさにそれだなぁと、実感してます。まぁ、期待していてください。

【10年4月21日／都内・リアルエンターテインメントにて収録】



MMAイベントは「幻想の奪い合い」だという笹原EP。世界最強の幻想はいま間違いなくUFCが持っているが、その幻想を取り戻すには"興行力"も必要になるから難しい。



世界のTKが勝者に苦言炸裂!?

「メレンデスはプロじゃない」

マット界のご意見番

髙阪 剛



**恒例のTKによる技術講座！
戦前、「青木にはアメリカ人が『なんだかわかんねえけどすげえやつだな』って思うような試合をしてほしい」と語っていたTKだが、結果は残念ながら……。いったいリングではどんな応酬があったのか、今回もわかりやすくプロフェッショナル解説！**

聞き手／長谷川亮　構成／鈴木佑
試合写真／Esther Lin（STRIKEFORCE）

――当日はライブ中継で大会をご覧になったそうですが、感想はいかがですか？

高阪　3試合をモニターで凝視して観て凄く疲れました。それで体重が2キロ落ちました（笑）。

――2キロも！（笑）

高阪　自分の場合は体重の落ち方がバロメーターになってる部分があって、いい試合じゃないときはストレスを感じてるのか体重が落ちるんです。一番落ちたのは『PRIDE武士道―其の十三―』のときで、あのときは5キロ落ちました（笑）。

――髙田さんが終わったあとで「TKがフケて見えた」と言ったあの大会ですね（笑）。さて、戦前髙阪さんに聞いたときは、青木選手の勝利を予想していたわけですが……。

高阪　メレンデスがいつもどおりガンガン前に出てくると思っていたんです。青木はたとえばアルバレスとか、そういうガチャガチャやってくる選手に強いし、攻めてくる相手に寝技を仕掛ける術というのをいくつも持っているので。そのうえでの展開を予想していました。

――攻めてきたメレンデスを寝技に持ち込み、そのうえで仕留めて勝つだろう、と。

高阪　そうですね。とくにメレンデスの右ストレートは身体を伸ばして打ってくるので、そこにタックルがドンピシャで合えば、間違いなくテイクダウンを取れると思っていました。青木はそこを合わせるのもうまいですから。そういう展開を期待していました。

――しかしそうではなかった、と。



髙阪　いや、まったく来なかったですね（苦笑）。結果的に見ればメレンデスの作戦勝ちです。やってもジャブを突くぐらいで、身体が伸びすぎるようなパンチだったり、青木がタックルを合わせられるしっかり踏み込んで打つ打撃はありませんでした。ボディストレートは目いっぱい伸ばして打ってましたけど、ボディストレートにタックルを合わせるっていうのはあそこまで低いと無理なんで。

――メレンデスのボディストレートはタックルをけん制するためでもあった？

髙阪　だと思います。あと、そもそもメレンデスはタックルに入られる距離にしませんでしたね。それはイコール、メレンデスも倒しにいけない距離なんですけど。

――〝勝つこと〟が最優先で、〝倒すこと〟は狙ってなかったような……。

髙阪　自分はそういうふうに見えました。でもジャブと、そこまで身体を返さず顔に当てる右のパンチはやってたんで、もしそれでフラッシュダウン気味に効くことがあれば、そこからたたみかけるというのは用意してたと思います。ただ、青木も打撃を警戒してそういう状態にはさせなかったから、結局ああいうポイントの取り合いのような試合になってしまったと思いますね。

――そのうえで寝技へ持ち込ませず、コツコツ打撃を当てたメレンデスが勝った、と。

ボクシングの〝守らなきゃいけない世界戦〟みたいだった

髙阪　そういうことですね。青木もとにかくテイクダウンを取らなきゃっていうことで、空振りしてもいいから両足タックルで入って、取れなくても仰向けになってガードへ引き込んでパンチを2、3発もらってもそこから極める、ということを考えてたと思うんです。でも、まったくメレンデスが寝技をやらなかった。仰向けになって引き込んでも、メレンデスは網のほうへ持っていってパンチを2、3発当てて、そうしたら立って離れるっていう。とにかく寝技をやらないという試合のやり方でしたね。

――寝技というインファイトを避けた、完全なアウトボクシングだったというか。

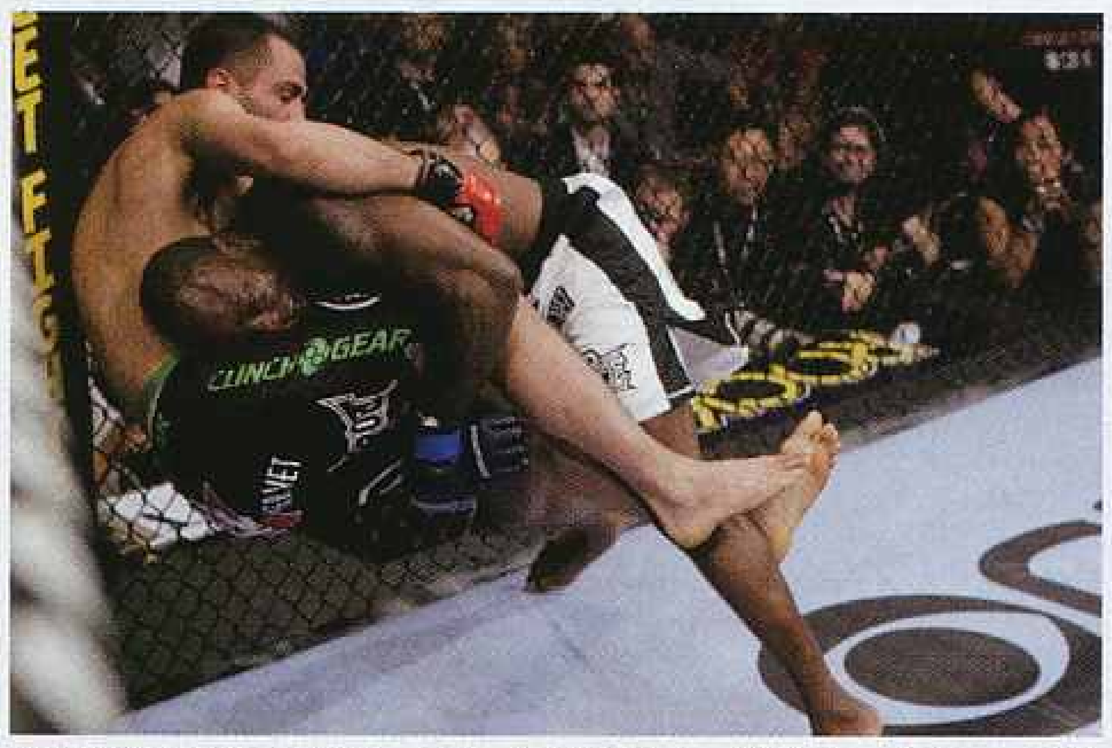
髙阪　それを5ラウンドですから。だから確かに勝負やテクニックの部分でメレンデスはうまいなとは思いましたけど、はたしてこの試合をプロの興行でやっていいのかどうか。この試合がタイトルマッチだったということを加味しても、メレンデスの姿勢を自分はちょっと疑問に思いました。

――せっかく多くの人の目に触れる機会であったのに、MMAの魅力を伝える内容にならなかったのは残念でした。

髙阪　メレンデスはおおざっぱな試合のなかにも細かいテクニックを混ぜてくるおもしろい選手だなと思っていたのですが、これで一気に自分のイメージが崩れました（苦笑）。はたしてあれでいいのかって本当に思ったし、〝負けない試合〟をメレンデスがやったという、観てる人にもそういうふうにしか映らなかったんじゃないですかね。とくにこれまでのメレンデスの試合を知ってるファンの人たちには。

――これまでの試合ぶりから考えるに、予想しがたい展開ではありました。

髙阪　結果論なんですけど、ああいうふうになってしまった場合、青木は打撃に付き合うべきだったかっていう話になると思うんです。打ち合いの試合になれば、メレンデスが大きなパンチを出して青木がタックルに入るっていうことも考えられたんですけど、正直青木がいまのスタイルのまま打ち合いへいくというのはちょっと危険ですよね。そのためにはディフェンスがしっかりできないといけないし、そのへんに青木自身も不安があったからいけなかったのかもしれない。だからもしかしたらあの試合を受けて、青木のなかで試合の展開作りというのをもう何パターンか作らなきゃいけないっていう気持ちが出てるかもしれないです。手技、パンチをもうちょっと、そんなにたくさんはいらないでしょうけど、二つ三つ持つようにしたほうがいいと思います。



日本になじみの深いファイター同士による一戦となったモーvsムサシ。もちろん入場では日本と同様〝モーガールズ〟を引き連れ、戦前の予想を裏切って見事な判定勝ち！

――今後、青木選手の対戦相手があの作戦を踏襲してくることは考えられないですか？

髙阪　ただDREAMのリングであれをやったら、二度と呼ばれないですよね（苦笑）。ほんとこれは難しいところで、今回は挑戦する立場だったじゃないですか。向こうへ挑戦しに行った、それもああいう試合になった原因の一つだと思います。メレンデスにしたら絶対負けられない、青木も背負うものがある。プレッシャーだったり、いろんなものが複雑に絡んで影響して、ああいう試合になったと思います。でも一般の人があれを観て、正直おもしろかったとは思わないですよね。

――自分のよさを発揮するより、相手のよさを潰すのに力を注いで勝負に徹したというか。

髙阪　それで無理はしない、あの試合はそういう試合でしたね。青木が一回だけクラッチを組めた場面があったんですけど、メレンデスのテイクダウンされないための動きというか、もう必死で逃げてたところが凄く印象的で。とにかく寝技をやらない、やりたくないっていう（苦笑）。だからといってスタンドで倒しにくるわけでもないし。

――難しいですねえ……。

髙阪　たとえばキング・モーの場合は、とにかくテイクダウンしてパウンドっていう、自分のできることをめいっぱいやった試合だったと思うんです。『戦極』に出てたときはオーソドックスだったモーが、今回はサウスポーに構えていて、要はレスリングの右構えで、タックルに入りやすい構えで試合をしていた。とにかくグラウンドで上になることを優先して自分の持ってるテクニックを使っていたし、あれはある意味、モーの総合格闘技だったと思います。それに対しメレンデスは、〝やれること〟をできるだけやらないようにしたというか。

――あぁ、倒しにいくことをしなかったり、攻めることをしなかったと。

髙阪　ボクシングの〝守らなきゃいけない世界戦〟みたいな感じはありました。ひょっとしたら総合も、歴史のなかでそういう段階に差しかかっているのかもしれないです。10年前ならチャンピオンがあそこまで守りに徹する、ああいう試合はなかったですから。だから今回は自分自身も、選手がああいう試合をやられたときにどうしたらいいんだろう、〝いい試合〟っていうものを考えたときどう対峙したらいいのか、とか考えさせられましたね。

――なるほど。今日はよくわかる試合の読み解きをありがとうございました！

【10年4月23日／都内・ALLIANCE-SQUAREにて収録】

こうさか・つよし■1970年3月6日、滋賀県出身。94年にリングスでデビュー。98年からUFCに参戦、世界のTK、と呼ばれる。その後、パンクラスやPRIDEなどで活躍し、06年に引退。「A-SQUARE」ジムを主宰。

青木真也のよき理解者がメレンデス戦を分析！



俺だって悔しいわ!!

DEEP代表

佐伯 繁

「DEEPと日程がまるかぶりだわ!」。というわけで、今回の青木vsメレンデスはニコニコ動画で観戦したという佐伯代表。遠くアメリカで闘った青木の姿に何を思ったのか。青木の"反撃"に恐れながらも、敗因や展望を語っていただいた。佐伯さんも悔しがってます!!

聞き手／松下ミワ　試合写真／乾晋也

佐伯　今日は青木の話でしょ？　困ったわ～。

――困らせてすみません（笑）。さっそくですが当日はどうやって試合をご覧になったんですか？

佐伯　前の日にDEEPがあったでしょ？　だから朝4時くらいまでスポンサーさんとか回って……（説明が続きますが、ページ数の関係で割愛いたします）、で、6時に寝て、9時に起きて、今成とウチのドクターの中川さんと3人で観ましたよ。ニコ動でね。

――ズバリ、感想はいかがでした？

佐伯　またねえ、へんなこと言うと青木が怒るんだけどさあ。そろそろ現われそうだしね（外をチラチラ見ながら）。

――表に青木さんの黄色いバイクが停まってますもんね（笑）。

佐伯　ただまあ、青木は青木のなかでわかってるとも思うんだけど、まあ何もできなかったじゃないですか。僕なんかから見ても「何もできなかったかあ」という印象だよね。あれは3ラウンド後のインターバルだったかな？　セコンドの北岡が必死にアドバイスしてるんだけど、そのときに映った青木の表情は、もういままで見たことのない青木の顔だったじゃない。だから、本当にアイツが体感したことのない内容だったと思うんだよね。

――いろんな意味でプレッシャーがキツかったんでしょうか。

佐伯　うーん、わからん。アイツはアイツで「そんなの、俺にしかわかんねぇよ！」って思ってる部分があると思うけど、でもそんなことはあたりまえなんだよな！　ただ、こっちからするとあんなに追い込まれた青木の姿というのは見たことがないからね。

――試合後、青木さんとはお話されたんですか？

佐伯　うん。青木本人は本当にやれることとやって、体調もベストだったしすべてがよかったから、逆に完敗だと言ってたんですよ。本人は自分が努力してやってきたことを出しきって負けたからべつにそんな悲しくないって。逆にマッハ戦は何もできなかったから、そっちのほうが悔しかったって言ってたしね。

――それを聞くと逆にショックですね……。ちなみに、敗因はなんだと思いますか？

佐伯　これを言うとまた青木はブーブー言うだろうけど……。

――そんなにいつもブーブー言われてるんですか（笑）。

佐伯　選手からすると「やったことねえんだから、おまえらにわかるわけないじゃん」って気持ちあるでしょ。もちろんそう

作戦ミスとか調子が悪かったって
俺らはやっぱりそう思いたいよねえ

なんだけど、逆に言ったら客観的な見方って選手にはできないんだよね。これは本当によく言うんだけど、選手出身の人にジャッジをやってもらったりすると、意外にダメなんです!(鼻息荒く)。

――なるほど(笑)。

佐伯 だから俺なりの客観的な見方で考えると、やっぱり一つは5ラウンドだったのかなあっていうのがあるよね。それは、北岡のときも思ったんだけど。

――それは廣田戦のことですね。

佐伯 5ラウンドあるなかで、やっぱりグラップラーの場合はどうしても力使っちゃうじゃない。だから本当はフルラウンド全開でいきたいけど、5ラウンド制だから「1、2ラウンドは様子を見たほうがいいかな」とか、「力使いすぎちゃいけないな」って考えちゃう。で、途中になると「うわー、あと2ラウンドもある!」ということで逆に疲れちゃったりね。だから青木の場合は1ラウンド目に何回かタックルいってダメだったじゃない。その時点でそういう精神的なスタミナが切れちゃったのかなというのもあるわな。そこでどうしても作戦が変わってきちゃうと思うんだよね、実際。

――逆に10分5分というのはもうDREAMでしかやってないですもんね。

佐伯 試合時間の差って体験しないと慣れないと思うんだよ。『戦極』のジョルジ・サンチアゴなんか観てると、4ラウンド目くらいから急に息を吹き返してくるでしょ? 三崎も勝てると思って観てたら、最後いきなり強くなったりするからね。その点でメレンデスはあきらかに最初から5ラウンドやるつもりで闘ったと思うんですよ。なかなか中に入らなかったのは、ずーっと見てたんだよね。

――そういう意味ではメレンデスのほうが一枚上手だったんですかねえ。

佐伯 あとは青木は自分の距離になれなかったよね。メレンデスも青木のタックルを切る練習をちゃんとしてるはずだし、まして金網に押しつけてるから青木はいつもの体勢ができない。一緒にしてはよくないけど今成のよくないときとそっくりだよね。あの試合がおもしろいかって言ったら、おもしろくはないよ。ウチのフューチャーファイトであれをやってたら、「おまえ、帰れ!」ってなってたかもしれないよ!

――ただ、そういうふうにメレンデスが固めたという見方もできます。

佐伯 だからすべて勝つための試合をしたなって感じですよ。青木がシャオリンに立ち技でいったように。ただまあ作戦ミスとか調子が悪かったって、俺はそう思いたいよねえ。ホント、悔しいわ。

――今回メレンデスが固めてきたように、青木選手の手の内が読まれてきたという部分もあると思いますか?



メレンデス戦の敗戦よりも、昨年のウェルター級GP1回戦で対戦したマッハ戦のほうが断然悔しいという青木。逆に「メレンデス戦は出しきったから悔しくない」と言うが、それを聞くとますます"世界"との差を感じてしまい、ショックを隠せないぞ。

佐伯 青木も闘いづらくなってるとは思うよ。だからやっぱり今成の話と一緒だよね。みんながまったく中に入ってこなくなったらどうするの? っていう話で。でも、それでもトップの選手は捕まえるときは捕まえるし、なんとかできる人はなんとかしちゃうじゃない、実際。逆を言ったら、もっと青木がタックルを強くしたり極める力を強くするとか、打撃でも倒せるように力をつけるかだよね。まあ俺はいまの青木の技術をもっと伸ばして、自分のペースに持ってくって作業をしたほうがいいと思うけど。じゃないと、青木じゃなくなっちゃうもんね。

――しかしここ最近、〝日本〟がことごとく〝アメリカ〟に返り討ちにされてますが、今後日本格闘技界はどうなっていくと思いますか?

佐伯 いや、返り討ちって言うけど、アメリカでやってるんだからルールも違うし、それは一概には言えないって。じゃあ、ショーン・シャークがPRIDEに来て上山(龍紀)とやったときに強いと思った? チャック・リデルが凄いと思った?

――しかし、それは6~7年前のデータです(笑)。

佐伯 いや、たとえばの話よ。だから何を基準にするかであって、いまはUFCがあるからMMAはアメリカだってなってるかもしれないけど、こっちが向こうにいってるだけの話であって、逆でやったらまた違うだろうしね、実際には。

――つまり、一概には言えない、と。

佐伯 全部が統一でやんないと一番を決めるのは無理だよね。

――では今後、青木さんはどうしたらいいと思いますか? もっとアメリカで闘うべきだと思います?

佐伯 慣れるという意味ではそれはあるかもしれない。やっぱり金網で試合経験積むことは大きいと思うんだよ。たとえば俺がUFC組に思うのは、もう生活拠点をアメリカに移すぐらいのことはしたほうがいいって思うんですよ。細かい部分だけど、向こうに行ったときに日本食がないとかね。そしたら困るでしょ?

――それは佐伯さんの話じゃなくて、ですよね?(笑)。

佐伯 (聞かずに)たとえば岡見選手なんかも環境すべてをアメリカ式にしたほうが対応しやすいんじゃないかなと思うんだよ。ただまあ青木はそういうのまったく気にしない性格だから、青木は日本でもまったく問題ないと思うんだけど。だけど試合だけの経験は向こうのルールでしたほうがいいと思うよ。

――そうなると心配なのは日本メジャー団体の今後なんですけど……。

佐伯 まあ、なるようになるんじゃないの?

――過剰な心配はするな、と。

佐伯 俺はそう思うよ。アストラが終わってまたいろんなものが変わる時期が近々来るんじゃない? ……しかし、これ、青木読むよなあ。絶対文句言われるわ!

――ハハハ! じゃあ、こちらは青木さんが戻ってこないうちに失礼します(笑)。

【10年4月20日/都内・DEEP道場にて収録】

――ストライクフォースのナッシュビル大会でもお会いしましたが、会場を訪れた目的はなんだったんですか?

ヴェウドゥム　スコット・コーカー（ストライクフォースCEO）に招待されたんだ。もちろん友人であり練習パートナーであるキング・モーとメイヘム・ミラーの応援というためでもあるけどね。

――そのメイヘムが、メイン終了後に乱闘を起こしてしまいましたが、あれについてはどう思いますか?

ヴェウドゥム　ジェイソンは普段からファニーでいつも周りのみんなにジョークばかり言っている奴なんだ。メインの試合のあとケージの中に入ったのはジョークのつもりだったんだよ。

――ジョークでしたか（笑）。

ヴェウドゥム　でも、それをほかの奴らが理解できなかったのが、乱闘のきっかけになったようなんだ。だからメイヘム自身は乱闘やトラブルを起こすためにケージに入ったわけじゃないことは理解してほしい。おそらく「リマッチしよう」ということを伝えるのに最高の場所だと判断したんだろうし、イベントを盛り上げたい気持ちもあったと思う。いずれにしても私自身は乱闘は大嫌いだし、今後のMMAにとってよくないことだったのは間違いないので、残念ではあるけどね。

――青木真也vsメレンデスの試合はどんな感想がありますか?

ヴェウドゥム　ハイレベルな闘いだったと思う。とにかくメレンデスの戦略のよさ、ゲーム運びのうまさが際立った試合になったよね。アオキに関しては優れた柔術技術を持っているし、自信もあるんだろうけど、スタンドアップは全然ダメだった。だからテイクダウンへの流れが作れなかったのは残念だね。おそらく多くのファンはアオキのアメージングな柔術を観たかったはずなのに、それができなかったんだからね。

――あなた自身は同じグラップラーとして、青木選手をどう評価していますか?

ヴェウドゥム　アオキは大好きなファイターの一人だよ。でも、柔術だけでは今日のMMAでは通用しないんだ。おそらく数年前だったら、柔術が飛び抜けて強いだけでトップになれたんだろうけどね。いまのMMAは柔術だけではダメで、スタンドアップ、レスリングのテクニックを身につけないかぎりトップに登り詰めることはできない、というのが現実なんだよ。それは私自身も何年も前から感じていることで、トップを目指すファイターたちは、MMAで要求されるすべてのトレーニングを積む必要があるんだよ。

――そんななかで青木選手はどんなゲームプランを立てて実践すべきだったと思いますか?

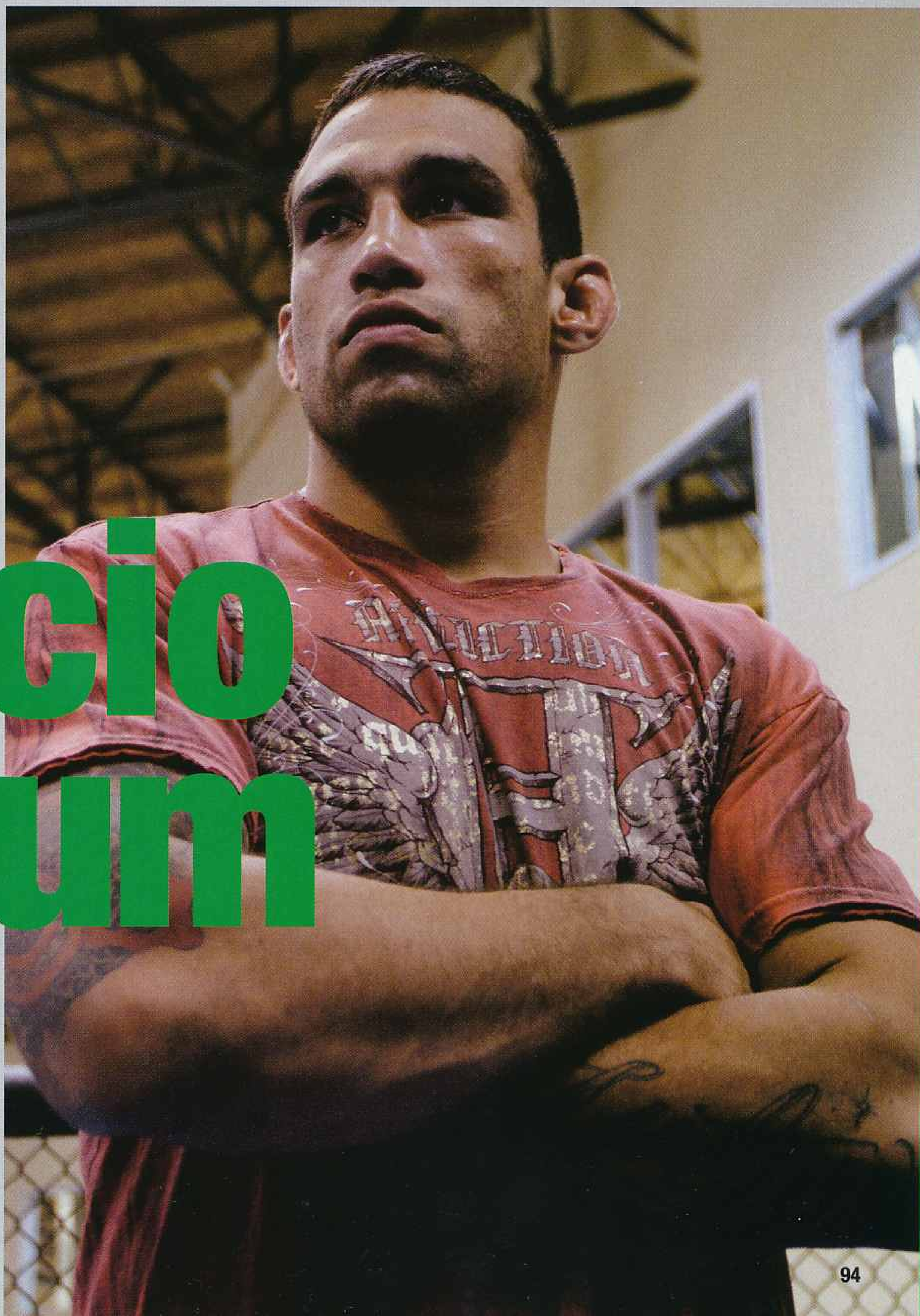
ヴェウドゥム　KOできないまでも、とにかくもっとパンチを出してメレンデスを打ち合いに誘い込み、そこからクリンチに持ち込んでテイクダウンを狙うべきだったと思う。また同時にレスリングのテクニックを使うべきだったんじゃないかな。アオキはちゃんとレスリングの練習もしているのかい? アオキの最大の武

ヘビー級最強の寝技師が
青木vsメレンデスを解析!

「アオキvsメレンデス戦と私のヒョードル戦は勝負のポイントが一緒なんだよ」

Fabricio Werdum

ファブリシオ・ヴェウドゥム



テイクダウンを防がれ、得意の寝技に持ち込めずメレンデスに敗れた青木真也。この一戦をストライクフォースヘビー級のトップファイターであり、ヘビー級屈指の寝技師はどう観たのか?　ヒョードル戦に向けてカリフォルニアのアフリクションジムでトレーニングを積むファブリシオに、ケージにおけるグラップラーの闘い方について語ってもらった。

聞き手／堀江ガンツ　通訳／石井史彦
試合写真／ Esther Lin（STRIKEFORCE）

柔術だけでは勝てないというのは私自身、数年前から痛感している

器である柔術のテクニックを使うには、まず相手からテイクダウンを取らなきゃいけないんだから、そのためにもスタンドアップで攻めながら組みつく流れを身につけないと、メレンデスのようなトップファイターに勝つことは難しいだろう。メレンデスにこの前のような戦略でこられたら、どんなに強い柔術という武器を持っていても、完全に封じられてしまうわけだからね。

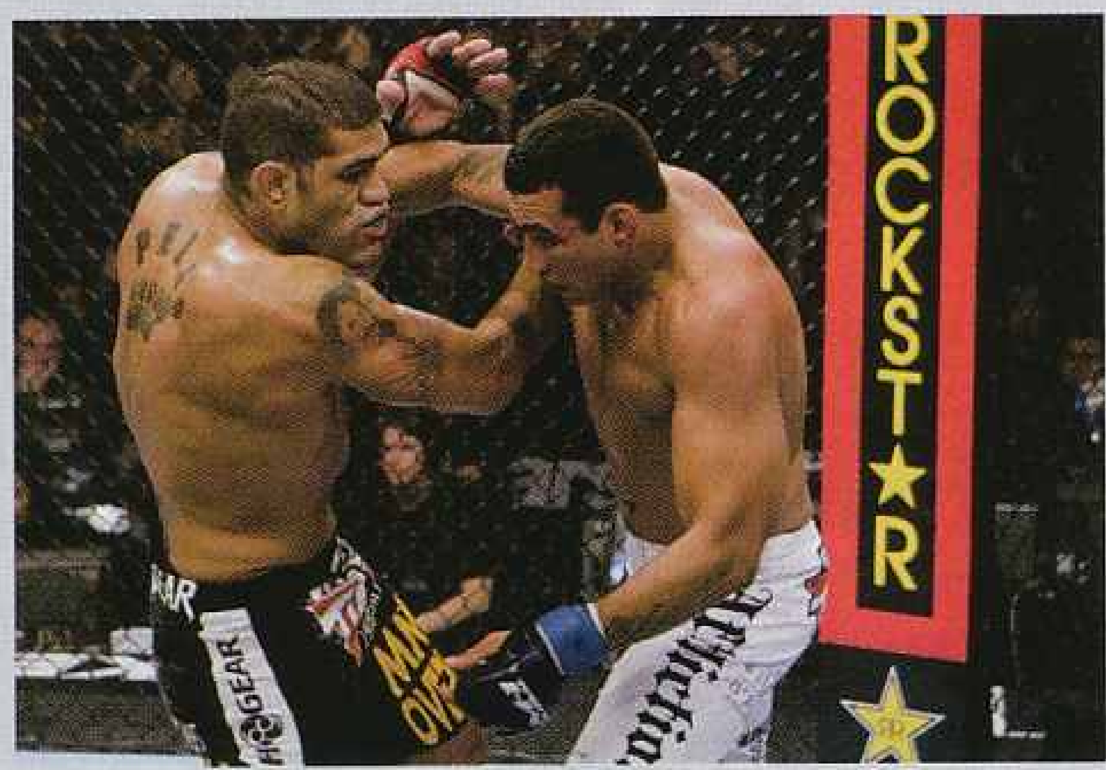
——とにかく、まずは組みつくまでの流れを作ることが必要だ、と。

ヴェウドゥム 仮にアオキがメレンデスからテイクダウンが奪えていたら、トップポジションでコントロールして、絞め落とすことができたと信じているよ。でも、あの夜は青木の武器を完全に封じたメレンデスのテイクダウンディフェンスが素晴らしかったということさ。

——試合が5ラウンド判定に持ち込まれたことについてはどう思いますか？

ヴェウドゥム メレンデスが素晴らしい戦略でゲームを完全に支配していたけど、結果的に仕留められなかったということで、アオキがタフであることを証明したと思う。最後まであきらめないハートを持っていることも、私がアオキを好きな理由の一つだよ。彼はいつでもフィニッシュすることを狙っているし、どんなに劣勢でも一度グラウンドに持ち込めば、相手を仕留めるだけの技術も持っているからね。とにかくアオキは、スタンドアップの技術を中心に、テイクダウンまでの流れを作る技術を身につけて、またストライクフォースに戻ってきてほしいね。そのときこそ、アオキがアメリカのファンを驚かせるときだと思っているよ。

——わかりました。その一週間前に『UFC112』で行なわれたアンデウソン・シウバ vs デミアン・マイア戦はご覧になりましたか？



昨年11月、アントニオ・シウバと対戦したファブリシオは、得意の寝技だけでなく、スタンドの打撃でも優位に試合を進め判定勝ち。もはや柔術だけの選手ではないことを証明した。

ヴェウドゥム もちろん観たよ。アンデウソンの1ラウンドの攻めは、フェイントを交えた動きで素晴らしかったし、周りのみんなも評価していたんだ。でも、5ラウンドのただ遊んでいるだけで、さらに相手を挑発した態度は好きじゃないよ。

——同じストライカー vs グラップラーの判定試合でしたけど、メレンデス vs 青木戦とは、意味合いが違いますか？

ヴェウドゥム 違うね。メレンデスはフィニッシュを狙っていたけど、シウバは〝プレイ、プレイ、プレイ〟で相手を挑発していただけだからね。もちろんデミアンのグラウンドゲームはアオキ同様危険なんで、それを避けるための戦略だったのかもしれないけどね。

——では、あなた自身のヒョードル戦についても聞かせてください。



アフリクションジムでは、ハファエル・コルデイロコーチのもと、ヴァンダレイやババルともトレーニングするファブリシオ。この成果をヒョードル戦で発揮することはできるのか？

ヴェウドゥム いま、6月26日に闘うことが内定しているんだけど、この試合は昨年11月から約7カ月間も待たされたものなんだ。でも、集中力を途切れさせることなく、その時間を有効に使って、いまハファエル・コルデイロコーチのもと、スタンドアップの強化に努めている。この試合は私にとって、メレンデス戦のアオキ同様、いかにしてヒョードルからテイクダウンを奪うかがカギなんだ。テイクダウンできれば自分が勝ち、できなければヒョードルが勝つ試合だと思っているからね。

——なるほど。勝負のポイントは青木 vs メレンデスと一緒なんですね。

ヴェウドゥム だから私は、そのためにもスタンドアップやレスリングを強化するため、ハファエルのほか、キング・モーやライアン（チーム・クエストのコーチ）、それに今日ここにいるレナート・ババルやヴァンダレイ・シウバに助けてもらっているんだ。さっきも言ったけど、相手が世界最強のヒョードルであっても、テイクダウンしてグラウンドに持ち込めば極める自信があるからね。

——そのヒョードル戦なのですが、6月26日に闘うことは正式決定なんですか？

ヴェウドゥム いや、6月の試合に出ることは100パーセント決まっているけど、対戦相手がヒョードルであることは100パーセント保証してもらってないというのが実情なんだ。11月に自分に負けたビッグフット（アントニオ・シウバ）が5月の試合に出るんだけど、普通に考えたら勝者が敗者より先に試合を組まれるはずだろう？ それでもあえて6月の試合を受け入れたのは、ひとえにヒョードルと闘うためなんだから、絶対に実現するように祈っているよ。

——試合の日程が4月から、5月、6月と延び延びになってしまっていますが、コンディション調整は大丈夫ですか？

ヴェウドゥム 確かに一度、試合用に仕上がった身体を維持するのは困難だし、再度作り上げるのも難しいことなんだ。身体にも負担がかかるし、メンタル面にも影響を与えるからね。それでも、いまはとにかく6月に最高のコンディションに仕上げることだけに集中しているよ。


——アリスター・オーフレイムが5月のストライクフォースで試合をすることになりましたが、どう思いますか？

ヴェウドゥム アリスターのことは気に入らないね。だって彼は3年以上、アメリカで試合をしてないじゃないか。3年間も試合をしていないファイターにチャンピオンベルトを持たせているストライクフォースの方針が気に入らないよ。そんなオーガニゼーションほかにあるかい？ みんなファイターたちはチャンピオンベルトを目指して試合をしているんだよ。そのチャンピオンが3年もタイトルマッチをやらないんだから、おかしいだろ。それにアリスターには4年前にPRIDEのリングで自分がキムラを極めて勝っているから、もしまた闘えば必ず自分が勝てるだけに、気に入らないんだよ。

——では、ヒョードル戦のあとはアリスターとのタイトルマッチを望みますか？

ヴェウドゥム もちろんタイトルマッチはやりたいけど、いまはとにかくヒョードル戦のことしか考えてない。ヒョードルに勝つことは、3年間もタイトルマッチをやってないベルトより、ずっと重要なことだからね。世界最強の男を倒すため、とにかくトレーニングをするだけだよ。

【10年4月19日／米国カリフォルニア州ロングビーチ、アフリクションジムにて収録】



悪魔の予言が現実となった！

Nick Diaz

暴力柔術王
ニック・ディアス

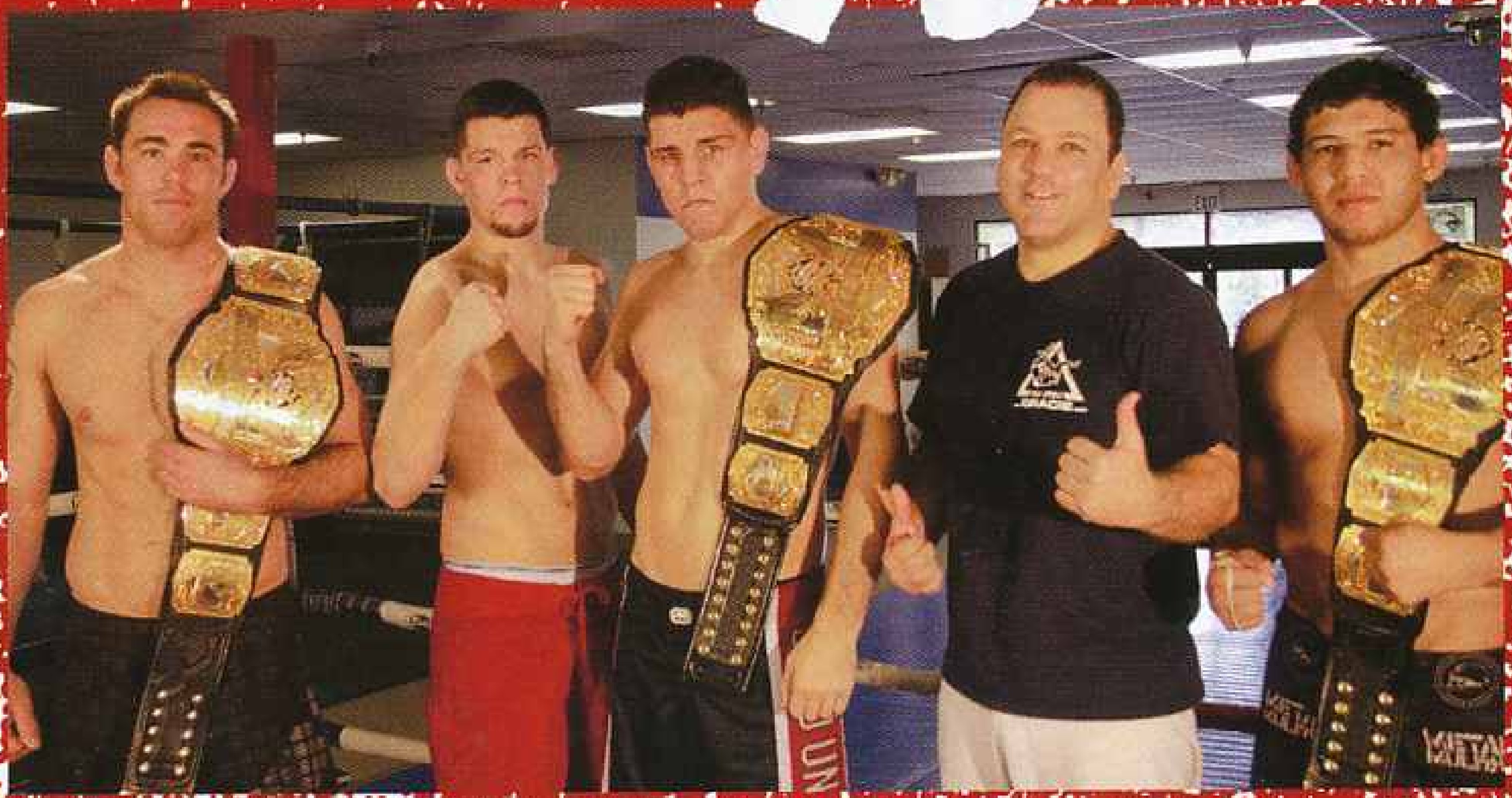
暴力柔術王の予言が見事に的中！　本誌No.145で青木の敗北を予想したメレンデスの兄貴分、ニック・ディアス。今回の一戦の技術解析、そして全米生中継で巻き起こったメイヘムとの大乱闘の真相、さらには5.29『DREAM.14』での桜井“マッハ”速人戦までおおいに語ってもらった！この男、こう見えてじつはクレバーなんです！

聞き手／堀江ガンツ　通訳／石井史彦
試合写真／Esther Lin（STRIKEFORCE）、Dave Mandel

マッハ戦を控えたワルのサイエンティストが

青木真也の敗因を徹底解析!!

「なぜアオキが俺たちに勝てないのか教えてやろう」



——青木真也vsギルバート・メレンデス戦についてうかがいたいのですが、先日『kamipro』のインタビューであなたが言っていた「アオキがギルバートに勝つことは不可能。テイクダウンすらできない」という予言どおりの試合展開になって驚いているんですよ。

ニック　確かに言ったとおりになったな。もう、こうなることはやるまえからわかっていたんだ。

——具体的にはなぜ青木選手はギルバートに勝てなかったのでしょう？

ニック　アオキが勝つためには、ギルバート以上にパンチを出す必要があったんだ。それも手数だけでなく、有効打となるパンチを出して、ギルバートにテイクダウンにこさせるようにする。そのカウンターを利用してアオキの持っているテクニックを活かさなければいけなかった。

——最初からテイクダウンを奪いにいくのではなく、メレンデスが寝技にいかざるをえない状況を作らなければいけなかった、と。

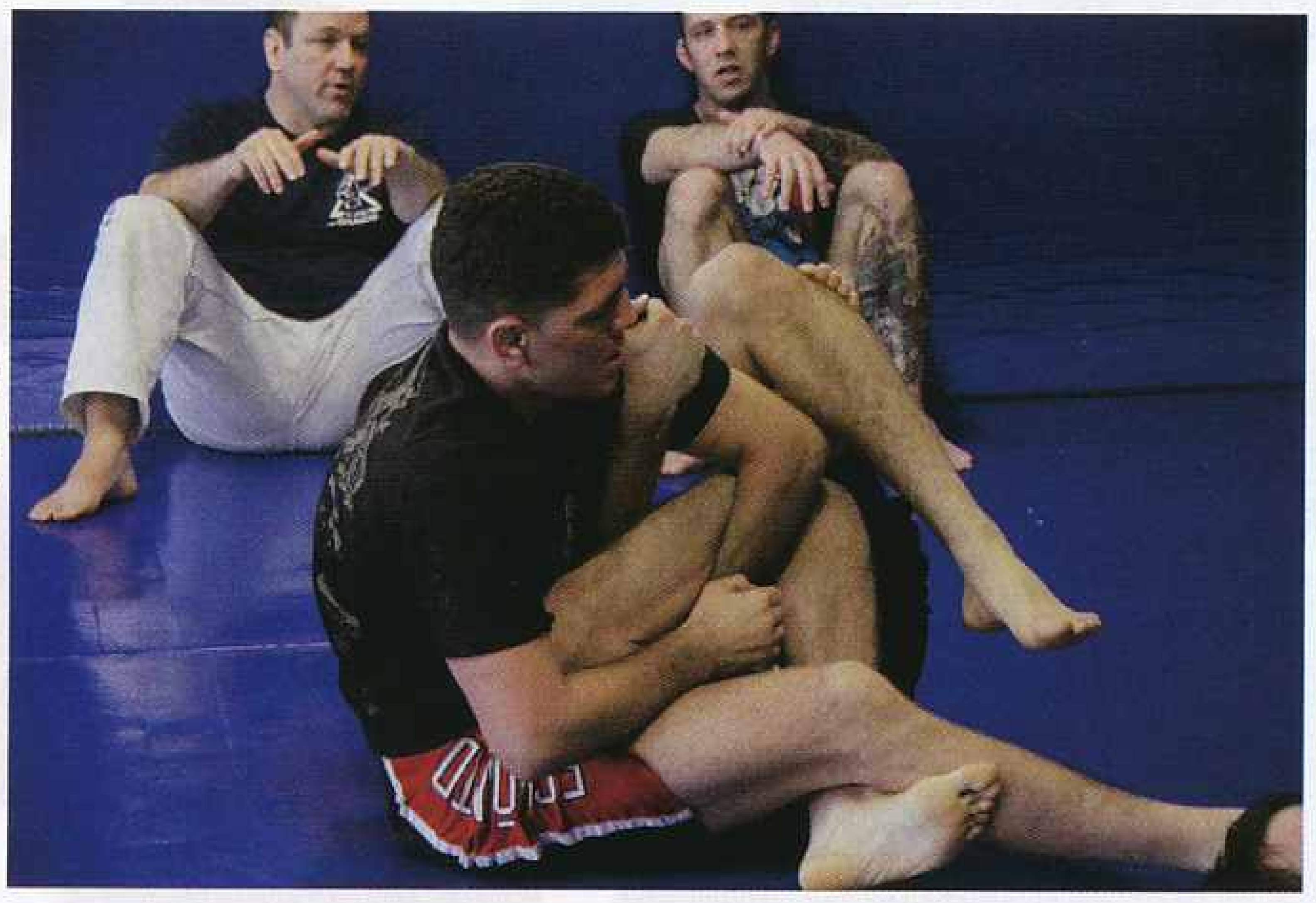
ニック　アオキが使おうとしているテクニックは、〝ディフェンシブ・テクニック〟なんだよ。たとえば武器となるガードゲーム（ガードポジションからの仕掛け）を使うためには、まず相手がガードに入ってこなければならない。でも、ギルバートはテイクダウンを取りにいかなかっただろう？　その一つの理由は、アオキがギルバートの顔にパンチを出さなかったからなんだ。俺もギルバートと一緒にトレーニングするとき、パンチを出さずにボディクリンチや、シングルレッグ（片足タックル）を狙いにいっても、テイクダウンはきわめて難しい。ギルバートをアオキの得意なボディクリンチでコントロールして、テイクダウンを奪うためには、自らパンチを出してボディロックしてからケージに押しつけて倒すか、スプロール（タックルを切って）からトップを取っていくことがカギになるんだよ。

——とにかく、打撃で上回らないと、テイクダウンを警戒する相手に組みつくことはきわめて困難だ、と。

ニック　パンチで有効打を打てなければ、トップレベルのファイターからテイクダウンを奪うのは困難だし、ストライクフォースのルールでは、グラウンドで座ったポジションからの攻めは、ブレイクの対象になってしまうからね。俺自身は座った状態からの組みつきも立派なテクニックだと思っているし、とくにアオキのそれは素晴らしいんだけど、残念ながらここアメリカではそういうルールになっているんだよ。そういうことも理解してゲームプランを立てないと、自分のテクニックが活きてこないんだ。

——あなた自身は、そういうルールも含めて戦術を立てているわけですか？

ニック　そうだね。俺はリングでもケージでも、ルールの違いも含めて理解している。いまはケージの試合が主戦場になったので、どちらのルールでも問題ないけど、対戦相手によってケージのほうが闘いやすい相手、リングのほうが闘いやすい相手がいることは確かだよ。たとえば俺がシンヤ・アオキとの対戦をオファーされて、リングかケージかを選ぶ選択肢があるのであれば、間違いなくこのストライクフォースのケージを選ぶよ。もちろん、どちらの試合でも受けるけど、アオキとだったら間違いなくケージのほうが自分に優位になるのは見えているからね。それはギルバートだって同じはずさ。



今回の青木戦に向けて、ディアス兄弟は揃って"仮想青木真也"となりメレンデスと徹底スパー！　ジム一丸となったこの対策が今回の勝利を導き出したのは間違いないだろう。

Nick Diaz

アオキと俺の試合を見比べれば俺の言っていることがわかるよ

——やはり今回は「ケージでの青木真也」だからこそ、攻略しやすかった部分もあったわけですね。

ニック　だからアオキがインタビューなどで「ケージもリングも関係ありません」って言っているのは何度も聞いているけど、俺はそのコメントが理解できないし、凄く引っかかっているんだ。アオキはテクニカルファイターであると同時にMMAのサイエンティストでもあり、研究熱心で常に新しい技を生み出していることも知っている。でも、なぜケージとリングの違いを認めて、同じようにケージでの闘いについて研究しようとしないんだい？　ケージとリングではテイクダウンディフェンスも違ってくるし、いくらガードワークが得意でも、ケージに押し込まれたら立ち上がって、ケージから離れなければいけないんだよ。

——やはり今回の青木選手のケージでの闘い方は、よくありませんでしたか？

ニック　アオキはケージのスペースをうまく使ってはいたけど、それは攻めるためというより、生き残るためという感じになってしまったよね。とにかくケージで闘うときは、ケージを背にしてはいけないし、常に中央で試合をするようにしないと危険なんだよ。アオキがラバーガードに入ったときもそうだろう？　ギルバートはすぐにケージに押し込んで動きを止めてしまった。この一連の流れは、何度も何度も繰り返し練習してきたからね。

——まさにリングではありえない、ケージのテクニックなわけですね。

ニック　アオキと俺の試合を見比べてくれれば、俺の言っていることがわかるよ。アオキと俺はガードゲームを多用したり、使うテクニックは似通っているけど、決定的な違いは、スタンドアップで対戦相手のパンチを恐れずにパンチを出せることなんだよ。だから俺は、ケージでも自分のグラップリングの技術を使うことができて、アオキは使うことができなかったんだ。

——では、青木選手がアメリカでトップに立つには、何よりもまずパンチの技術習得が不可欠だ、と。

ニック　いまのアオキにはスタンドアップのスタンスと、もっとパンチを出せる練習を積むこと、またボクシングのスパーリングをやることが重要になってくると思うね。アオキにはスタンドアップの練習



1.31ストライクフォースではDREAMウェルター級王者のマリウス・ザロムスキーからKO勝利を収めているニック・ディアス。過去には『DREAM.3』に参戦、井上克也を下している。

自分の弱点を指摘してくれる練習パートナーがアオキにはいるのかい？

のパートナーがいるのかい？　自分の弱点を指摘してくれる練習パートナーや友だちはいるのかい？　練習パートナーたちはアオキをどう思っているんだい？　ほかのジムへの出稽古はやっているのかい？　アオキが本気でグラップリングをやったら、パートナーをケガさせてしまうから、受け入れてもらえないんじゃないか？　俺はアオキとそのパートナーたちが、自分の足りない部分を助け合ってレベルを高めていっているようには思えないんだ。もちろん俺は日本語が理解できないから、すべて想像だけどね。

——それに対して、あなたやギルバートの練習環境はどうなんでしょうか？

ニック　俺たちには最高のチームがある。またトレーニングパートナー、コーチたちみんなが家族のように助け合っているんだ。ボクシングは18歳の頃からチームで練習しているけど、そのほかにもアンドレ・ウォード、クリスティン・クルーズ、マイク・シムズらトップレベルのボクサーとも出稽古でスパーを繰り返して、ボクシング技術を磨いているんだ。ボクシングのテクニックはパンチだけじゃない。そのフットワークはケージの中でスペースを有効に使い、ケージを背負わない動きの練習にも活かされるんだよ。

——青木選手がケージで勝つには、しばらくリングでの試合から離れて、ケージに専念したほうがいいでしょうかね？

ニック　そんなことはないよ。リングでも、ケージでも両方で練習するべきだよ。アオキは今回の試合のために、ケージで練習を積んできたのかい？　ケージでなくても、壁を使って、押し込まれたときにどうやって起き上がるかっていう練習だってもっと積む必要があるんだよ。さっきも言ったとおり、ケージに押し込まれたときの技術があってはじめて、ラバーガードなど彼のテクニックも金網に押し込まれたときにも活きてくるんだ。もちろん、金網際の攻防は簡単なことではないけどね。

——では、ケージでの闘い方とボクシング技術を向上させれば、青木選手はアメリカでもトップに立てると思いますか？

ニック　アオキは現時点でも世界のトップクラスなんだよ。でも、そのトップの技術を使えない状況にさせられてしまったことも事実なんだ。だから、アオキのグラップリングをケージで使えるようにする技術が伴なったら、もちろんとんでもなく危険なファイターになることは間違いないね。

——では、青木選手の話はこれぐらいにして、今夜のメインであるジェイク・シールズvsダン・ヘンダーソンの試合後の大乱闘について聞きたいのですが、いったい何があったんですか？

ニック　ジェイクがタフなファイトを5ラウンド闘い抜いた直後に、まったく関係ないクソ野郎（メイヘム）が突然ケージの中に入ってきたんだ。そして俺のパートナーの勝利者インタビューをジャマして、「リマッチだ！」なんて吠えながらプッシュしようとしたんだよ。ハードな試合を









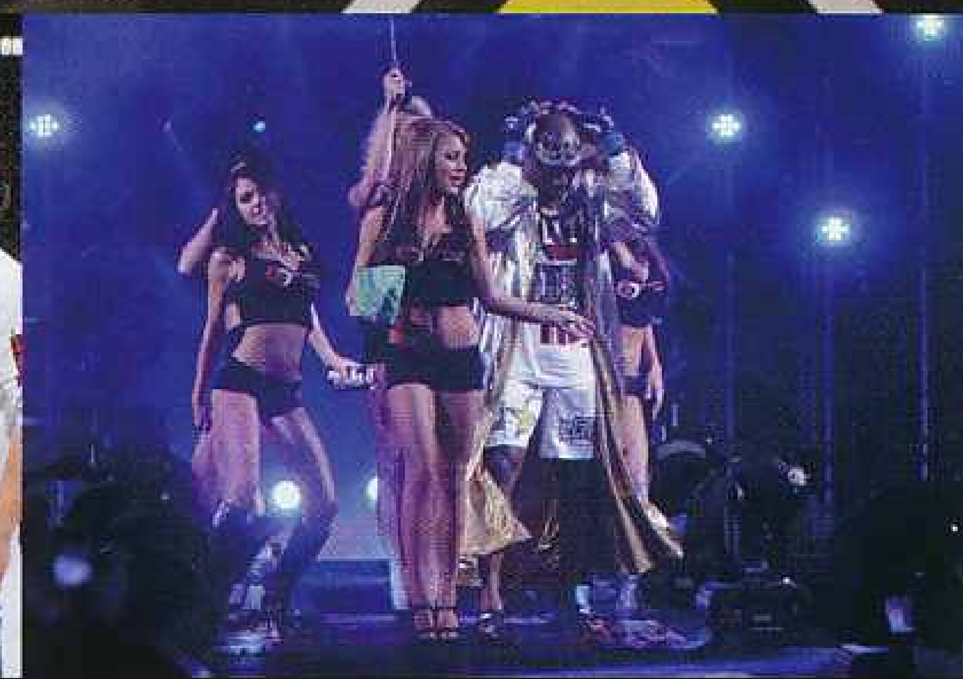
[10.4.17 STRIKEFORCE -NASHVILLE-]
米国テネシー州ナッシュビル、ブリヂストンアリーナ
[ミドル級タイトルマッチ]

○ジェイク・シールズ vs ダン・ヘンダーソン×

（5R終了 判定3-0）

2ラウンド以降はシールズがオリンピックレスラーであるダンヘンをタックルで転がし、世界一とも称されるグラウンド技術で再三マウントポジションを奪って試合を支配。大物ダンヘンを下して級王座防衛をはたした。試合後にはメイヘムが乱入。それにニックが襲いかかり、両軍入り乱れての大乱闘に!





[10.4.17 STRIKEFORCE -NASHVILLE-]
米国テネシー州ナッシュビル、ブリヂストンアリーナ
【ライトヘビー級タイトルマッチ】

○キング・モー vs ゲガール・ムサシ×

（5R終了 判定3-0）

日本になじみの深いファイター同士のタイトルマッチ。日本と同じようにモーは7人のモーガールズとともに踊りながら入場。そのパフォーマンスに観客は総立ち! 試合はモーが再三タックルでテイクダウンを奪い、ムサシに判定勝ちで王座奪取。モーはデビュー以来、負けなしで世界王座までたどり着いた。

終えたばかりのジェイクにだぜ？　信じられるかい？　だから何も起こらないように、俺がクソ野郎を抑えたんだよ。

――やっぱりあなたがメイヘムを組み伏せていましたか（笑）。

ニック　あいつはジョークのつもりかもしれないけど、あんなことをやったら誰でも怒るだろう。

――やはり仲間を守るのもあなたの使命なんですか？

ニック　ダチや兄弟、家族はどんなことがあっても守るさ。俺のパートナーたちも同じことをしてくれるし、お互いさまなんだよ。みんなでどこにいても全員が無事であるように、お互いを気にかけているからね。

――メイヘムにはチャンピオンであるジェイクへの挑戦権はあると思いますか？

ニック　あるわけないだろ！　あの野郎はジェイクにこのあいだ完敗したばかりだぜ？　しかも今夜の試合だって、勝ったといっても対戦相手は誰なんだよ。あんたメイヘムの対戦相手のことを知ってるか？

――いや、初めて観た選手ですね。

ニック　あんな名前も知らないヤツに勝っただけの男が、ケージに乗り込んできてリマッチを要求するなんて、頭がイカれてるんだよ。もちろん、メイヘムの馬鹿な行動に対して、俺たちが過剰反応してしまった点については、みんなに謝らなくてはいけないけどね。

――そんなメイヘムを試合でお仕置きする気はありませんか？

ニック　俺はこのMMAというスポーツを尊重しているからね、そういう馬鹿なマッチアップはやりたくない。ただ、リングの外だったらいつでもあの野郎を反省させてやるさ。



2年ぶりにDREAM参戦をはたす暴力柔術王を迎え撃つマッハ。ザロムスキー、郷野聡寛と連敗中だけに、3連敗となるのはまぬがれたいところだ。

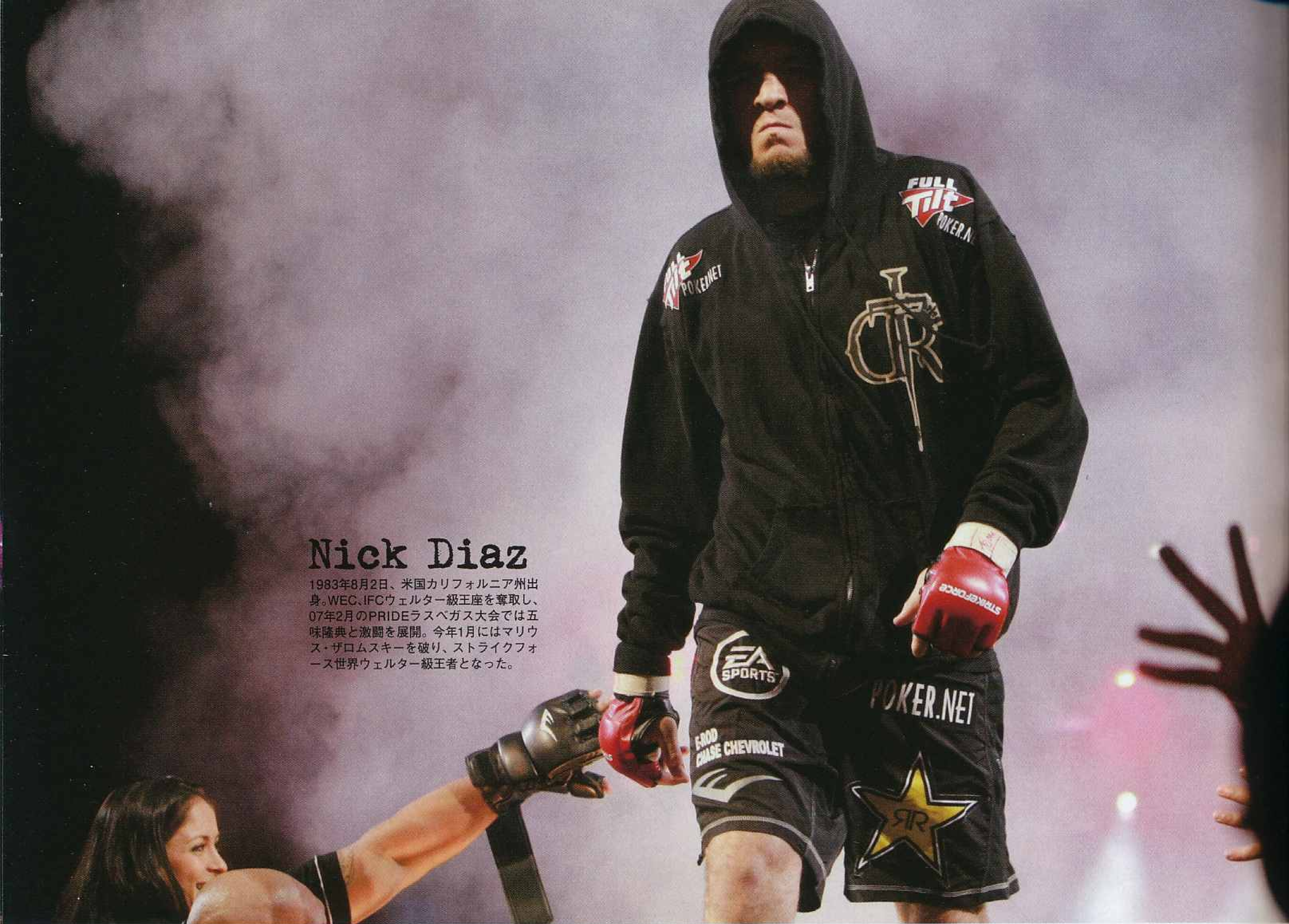
――喧嘩上等ですか（笑）。

ニック　でも、俺はこう見えてもトラブルは好きじゃない。だから自分から境界線を越えるようなことはしないよ。相手をぶん殴るのは、あくまで自分や仲間を守るためのことだし、相手が境界線を越えてきたからやっただけのことだからね。

――わかりました。では、5・29『DREAM・14』で桜井“マッハ”速人戦が決まりましたが、感想を聞かせてください。

ニック　日本での試合が決まって最高の気分だよ。それもサクライという素晴らしいファイターと対戦できるんだからね。サクライは柔道をベースにしたハードパンチャーであり、素晴らしいレッグキックという武器も持っている。間違いなくハードな試合になるけど、俺はサクライよりも多くのパンチを出して、最後はグラウンドで極めて勝つつもりだ。年末にゴーノ（郷野聡寛）がサクライをアームバーで極めたけど、俺はゴーノとサクライ、どちらも極められる自信を持っているからね。とにかくタップさせて勝利を奪うよ。

――マッハ選手はこのところ、青木選手をKOした以外はあまりいい結果を残していませんが、ここ数年のマッハ選手をどう評価していますか？



Nick Diaz

1983年8月2日、米国カリフォルニア州出身。WEC、IFCウェルター級王座を奪取し、07年2月のPRIDEラスベガス大会では五味隆典と激闘を展開。今年1月にはマリウス・ザロムスキーを破り、ストライクフォース世界ウェルター級王者となった。

メイヘムにジェイクへの挑戦権？あのクソ野郎にあるわけないだろ！

ニック　サクライは基本的な実力が非常に高く、また勝負勘みたいなものも優れているから、それゆえに戦略や研究が少し足りないと思うんだ。

——感覚で闘うタイプという気はします。

ニック　たとえば、ゴミ（五味隆典）との試合、俺はサクライが勝つと思っていたし、サクライが勝つべき試合だった。あの敗戦はサクライにとって最悪のものだったと思う。サクライがあの試合をどう思っていたり、周りに何を言っていたのかは、やはり日本語がわからないから想像するしかないけど、おそらくサクライはあの試合で「勝てる」という自信を持ちすぎていたんじゃないか？

——確かに、五味選手はマッハ選手の後輩ですから「俺から見たら（五味は）赤ちゃんだよ」と試合前に言ってました。

ニック　だから戦略も何も考えずに試合に挑んだんじゃないのかい？　サクライが真剣に相手を研究して戦略を立てて挑んでいたら、正直言って、あの時点のゴミでも相手じゃなかったと思う。ゴミはとんでもないハードパンチャーだけど、言ってみればそれ以外に武器を持っていない選手だ。でも、サクライはパンチもキックもサブミッションも強い。非常に危険な相手だから、俺もきちんとした戦略を立て、慎重に闘うつもりだよ。まあ、スタンドでもグランドでも、どの局面でも勝つ自信を持って挑むつもりだから、どんなんな試合展開になるのか楽しみにしててくれるとうれしいよ。そのためにもジェイク、ギルバート、ネイト（・ディアス）、そのほか柔道の選手たちと試合に向けたトレーニングをする予定なんだ。

——メレンデスvs青木、ジェイクvsダンヘン同様、シーザー・グレイシー軍団がチームとして挑んでくるわけですね。マッハ選手もこの一戦には並々ならぬ決意を持って挑むらしく、「負けたら引退する」ぐらいの気持ちでいるようです。


ニック　サクライが自分自身にプレッシャーをかけることはいいことだよ。そのほうが本来のサクライを見せてくれると思う。俺は強いサクライに勝ちたいからね。それにサクライは長いこと試合を積んできたオールドタイマーでありレジェンドだからね。引退を考えるのもいい時期なんじゃないかい？　サクライがそこまでの気持ちをもって俺に挑んできてくれることは光栄だし、誇りにも思う。また、この試合を組んでくれたDREAMにも感謝しているよ。

——では、桜井〝マッハ〟速人というビッグネームに引導を渡す覚悟だ、と。

ニック　もちろん俺はサクライを引退させるために勝利を狙うわけじゃないけど、俺だってプロのファイターとして生活がかかっているんだよ。だから周りのヤツらに悪口を言われたって、それがプロの収入につながればいいと思っている。日本のファンは俺のことを嫌うかもしれないけど、サクライを叩き潰させてもらうよ。

【10年4月17日／米国テネシー州ナッシュビル、ブリヂストンアリーナにて収録】

ありがとう吉田秀彦
さらば、ゼロゼロ年代





2002年の真夏に行なわれた
伝説のイベント
国立競技場『Dynamite!』は
彼のために用意された舞台だった。
2000年代の格闘技ブームを
牽引してきた吉田秀彦が
マット界を去る。
魔裟斗に続く〝格闘技界の顔〟ともいえる
大衆ファイターの引退劇。
ゼロゼロ年代はいま
完全に幕が下りたと言えるのだ。

[10.4.25 吉田秀彦引退興行～ASTRA～]
東京・日本武道館
○中村和裕 vs 吉田秀彦×
(3R終了 判定3-0)









現実に向き合い続けた吉田秀彦

文／橋本宗洋　撮影／丸山剛史

2月8日に行なわれた記者会見で、吉田秀彦は引退を決意した理由をこう語っている。

「柔道のときは、これ以上やっても世界で勝てないと思って辞めましたし、格闘技でもこれ以上やってても、いいパフォーマンスをお客さんに見せられないなっていうのがあったんで。気持ちの部分でそういうふうに自分で思うっていうことは、そこまでだなってことですから」

重い言葉だ。もう、かつての自分ではない。このままやっても、トップを目指すことはできない。だから引退する。そう決めるのは、これまで自分を信じて闘ってきた人間にとって、どれだけ勇気のいることだろう。

「まだできる」

「やり方次第では勝てる」

そう思いたくなるのが格闘家という存在のはずなのに、吉田はその思いを断ち切ったのだ。

つまり吉田は、「自分はもうトップにはなれない」という現実と向き合ったのだ。そして、4月25日に行なわれた中村和裕との引退試合では、その〝現実〟が残酷なくらいむき出しになった。

113キロという前日計量の結果を聞いて、僕は嫌な予感がした。吉田にとって過去最重量。数年前は93キロリミットのPRIDEミドル級GPにも出場した選手としては、重すぎるウェートだ。

この数値が示すのは、吉田が引退試合に向けて充分な練習ができていなかったということだ。

その理由は、僕にはわからない。ケガをしていたのかもしれない。自分が絶対的主役の引退興行だからこそ、スポンサーとの交渉など、あらゆる局面で自分が動く必要があり、それが練習不足につながったのかもしれない。あるいは、単に無差別級で行なわれる試合だということで、体重調整には無頓着だったのかもしれない。

いずれにしても、吉田のコンディションは決して万全ではなかった。そして万全のコンディションでない選手は、充分なパフォーマンスを見せることはできない。それが現実だ。

1ラウンドから吉田の動きは重かった。中村のジャブやボディへのストレートに先手を取られてしまう。ときおり見せる右クロス（石井慧のデビュー戦で〝プロの洗礼〟を浴びせた、あの右クロスだ）はいかにも威力がありそうなのだが、どうしても後手に回ってしまう。

パンチから組みついてきた中村に対し、テイクダウンを防ぐことはできていたのだが、といってそこから自分が展開を作れるわけでもなかっ











ありがとう吉田秀彦 さらばゼロゼロ年代



た。2ラウンドが終わった瞬間、ビジョンに映し出された吉田の表情は、いかにも苦しそうに歪んでいた。インターバル中には柔道着を脱ぎ、上半身裸で3ラウンドを迎える。

といっても、これは〝MMA仕様〟にチェンジしたというわけではないだろう。吉田は道着の下も脱いでトランクスやスパッツ姿になったわけではなかった。とにかく暑い。柔道着が重い。動きにくい。だから脱いだ。それだけではないかと思う。あの場面にも、吉田の苦しさ、しんどさが表われていた。

最終ラウンドは、パンチの打ち合いから始まった。お互い悔いを残さないため、完全決着こそプロの闘いと思い定めての、兄弟分同士の殴り合いだ。しかし、それも長くは続かなかった。吉田が組みつき、中村が左の大内刈りでテイクダウン。いったんは立ち上がった吉田だが再びグラウンドに持ち込まれ、今度はマウントポジションを許してしまう。

腕十字をしのぐ。立ち上がる。中村が右ストレート、左フック、ボディブローとたたみかける。さらにタックルでテイクダウンし、マウントを奪ったことで残り試合時間は1分になった。中村としては、きっちり一本を取って引導を渡したい。

再び十字へ。ラスト30秒。もはや吉田に攻め手は残されていなかった。ただただクラッチを離さず、必死で耐える。それだけだった。その体勢のまま試合は終了。吉田はあまりの疲労から、中村は万感の思いにかられ、しばらくその場から立ち上がることができなかった。

判定は3—0。現実をさらけ出したかたちで中村は勝ち、吉田は負けた。ピークをすぎた選手は、若い選手に勝つことができない。充分な練習をしていない選手は、観客を満足させる動きができない。そういう現実が、ここにはあった。

試合終了間際、吉田が腕十字を必死で耐える場面も、ドラマチックというより現実的なものに見えた。もし、あそこで中村が吉田の腕を極め、タップを奪って一本勝ちしていたら、ドラマチックなエンディングになっていただろう。しかし、吉田はそれを許すまいと最後まで粘ったのだ。

どんな状況であろうと勝ちにいく。負けを目前にして気を緩めるようなことは絶対にしない。ドロドロの消耗戦の中で「楽になりたい」という誘惑に打ち勝つことが、吉田というファイターの根幹をなすスタンスなのだろうと思う。〝劇的〟という言葉に惑わされない勝負師ぶりが吉田の真骨頂であり、それはこの試合でも感じることができた。

吉田は、常に現実と向き合ってきた選手なのだ。柔道はもちろん、結果がすべての世界。彼はそこで世界の頂点をきわめた。プロ入り後も、打撃ができない自分、若くない自分と向き合いながら、スター選手としての責任を果たしてきた。

そしてこの引退試合でも、吉田はいま現在の自分、ピークをすぎ、不完全なコンディションの自分をさらけ出し、その現実をそのまま観客に見せた。決して名勝負とは言えないかもしれないが、吉田らしい最後の姿だったのは間違いない。



“DREAMの刺客”ミカ・ミラーに完勝！
完全覚醒した柔の餓狼が見据える先とは？

クソッタレ劇場 近日世界公開

日本フェザー級最強の男 小見川道大

昨年、『戦極』フェザー級トーナメントで準優勝、そして「クソッタレ」という代名詞も定着し、一躍ファンの注目を集める存在となった小見川道大。そんな吉田道場の柔道狼の過去・現在・未来に迫る。

文／中村拓己　構成／鈴木佑　試合写真／丸山剛史

少し古い話になってしまうが、僕は年頭に「2009年の私的MVPは小見川道大だ」というコラムを書いたことがある。09年を振り返ったとき、総合やキックでいろいろな試合を観てきたなかで、印象に残った選手を考えると、最初に頭に浮かんできたのが小見川の名前だったのだ。

09年は小見川にとって大躍進の1年だった。この1年で小見川は7戦をこなし、5勝1敗1分という成績を残した。この数字だけでも充分に驚異的なものなのだが、その5勝が持っている意味と価値がとてつもなく大きい。小見川が『戦極』フェザー級グランプリで撃破した相手はLCデイビス、ナム・ファン、マルロン・サンドロという、トーナメントに参戦した外国人選手トップ3。トーナメント後は日沖発との日本人対決を制し、そして大晦日にはDREAMフェザー級グランプリ準優勝の高谷裕之を完全にKOした。サンドロ戦や日沖戦はスプリット判定にまでもつれる接戦ではあったが、それを差し引いても、これだけの結果を残せる日本人がほかにいるだろうか。「自分は日本のフェザー級で一番強い自信がある」という小見川の言葉に異論を唱えるものはいないはず。たった1年で小見川はフェザー級日本最強を宣言できる位置にまで登り詰めたのである。

オリンピック出場こそかなわなかったものの、世界トップレベルの柔道家として活躍し、総合格闘技に転向を果たした小見川だが、ここまでの道のりは決して順調ではなかった。総合転向から3週間という準備期間でいきなりPRIDE武士道でプロデビュー、続くプロ2戦目ではイギリスの金網でジェシアス・カバウカンチ＝JZカルバンと対戦した。

DEEPに主戦場を移して3連勝を遂げたあとはUFCに挑戦。1勝も挙げることなくUFCをリリースされ、再び日本のリングに戻ってくることになる。昨年までの戦績は4勝7敗というもので、はっきり言って、08年までの小見川は“並の選手”にすぎなかったと思う。

しかしフェザー級への転向を決めたことが小見川を覚醒させる。通常体重が70キロ前半の小見川はライト級（70キロ以下）では小柄な部類に入るが、フェザー級（65キロ以下）となれば、体格的なハンデはない。むしろ柔道でトップクラスにまで登り詰めた身体能力とフィジカルの強さは大きな武器となった。そして“ネオ柔道”というコンセプトを自ら打ち出したことで、柔道で培った組み力・そして腰の強さ＋ボクシングをベースにした打撃・柔道時代から定評のあった寝技という、自分にしかできないワン＆オンリーのファイトスタイルを完成させた。階級変更・ネオ柔道というキーワードによって、それまでバ



［10.4.25 吉田秀彦引退興行〜ASTRA〜］
東京・日本武道館
○小見川道大 vs ミカ・ミラー×
（3R終了 判定3-0）
リーチの差をものともせず、細かいウィービングからパンチをミラーにヒットしていく小見川が、終始動き続けて試合のペースを握る。小見川はフルマークの判定勝ちを収めるも、試合後に「小見川道大クソッタレ!」と怒りの咆哮! そして「吉田先輩、最後気合い入れてカズと打ち合ってください!」と、メッセージを贈った。

「クソッタレ」と叫び相手を潰すことで小見川は己のストーリーを作り上げた

ラバラだったパーツが一つにつながったのである。またキャリアや戦績がないまま、大舞台が用意され、ビッグネームとの試合が立て続けに組まれるなど、小見川にはどこか"特別扱い"感があり、ファン目線では小見川の闘いへの感情移入が難しい部分もあった。しかしデイビス戦後に飛び出した「俺が負けると思ったやつら、クソッタレ!」というマイクによって、小見川の反骨的・肉食獣的なキャラクターは定着。小見川本人は「自然と出た言葉」と、あまり意識してはいなかったようだが、「クソッタレ!」と叫びながら目の前の敵を叩き潰していくことで、小見川は自分のプロとしての見られ方、ストーリーを作り上げていったのだ。

　今年の初戦となる『ＡＳＴＲＡ』への参戦が決まり、小見川は「今年は完璧を目指して世界のてっぺんを目指したい。リアルに世界一になりたいんで、それが今年の目標です」と話していたが、小見川が次に見据えるストーリーは、ずばり"世界への挑戦"だ。小見川は吉田秀彦の引退興行という特別な大会にもかかわらず、ミカ・ミラーという勝負論のある相手と対戦し、そして苦しみながらも勝利をもぎ取った。フェザー級では規格外の１８３センチという長身を誇り、その長い手足を駆使した打撃とガードポジションからの寝技を得意とするミラーは、実力もさることながら、その体格を活かしたファイトスタイルで相手の光を消してしまうタイプ。勝ち負けの勝負論という部分では興味深いが、吉田の引退興行で闘うには、はっきり言っておいしくない相手だ。しかしそういった相手との対戦を受け、そして結果を残すということがいまの小見川が望む道なのだろう。

　そんな小見川が次に闘う舞台はどこになるのか? 昨年まで主戦場となった『戦極』はＳＲＣと名称を変えて、現在は吉田道場とは絶縁状態であり、国内での活動を考えればもう一つのビッグプロモーションであるＤＲＥＡＭへの参戦という選択肢もある。また吉田の引退興行として行なわれた『ＡＳＴＲＡ』が今後も定期開催されることになれば、そこで試合を続けることも考えられる。しかし小見川が「世界のてっぺん」を目指しているのであれば、次なる舞台がＷＥＣという可能性も出てくるだろう。

　試合後のインタビュースペースで小見川は「世界の一番強いリングに上がりたいです。とりあえず世界で強いのを叩かないといけない」と話し、具体的にＷＥＣで闘いたいという言葉は口にしなかったが、自ら「（ＷＥＣで）ジョゼ・アルドとユライヤ・フェイバーがやったんですよね。どっちが勝ったんですか?」と記者に質問するなど、その視線の先にＷＥＣを見ていることはあきらかだ。

　もはや日本に小見川が噛みつく相手も、そして「クソッタレ!」と吼えるような舞台はそう簡単には見当たらないのかもしれない。クソッタレ劇場の続きをアメリカ、そしてオクタゴンの中で見たいと思っているのは僕だけではないはずだ。

[引退記念企画]

いつの間にやら恒例(?)会場徹底レポート!

秀彦最高! YAH YAH YAH!!

飾らず豪快なキャラでみんなに愛された秀兄ぃがついに引退! その最後を見届けようと日本武道館には多くの人々が詰めかけた。大会前から大物芸能人登場の噂など話題を呼んだ今大会、いったい会場はどんな雰囲気だったのか徹底調査! VIVA JUDO!!

文／高崎計三　構成／鈴木佑　試合写真／丸山剛史



格闘技取材で訪れたのはひさしぶりな気がする日本武道館。もしかして「魔裟斗vs川尻」のK−1 MAX以来か？　あのときは「魔裟斗女」と「DREAM男」たちのせめぎ合いがおもしろかったが、今回はなんつっても『吉田秀彦引退興行』。実際に柔道もやってそうな恰幅のいい男たちが涙ナミダ……的な場内を想像していたのだが、場内の様相はちょっと違った。

　まず第一に目についたのは、柔道着に身を包んだ子どもたち。もちろん、胸には「吉田道場」の刺繍がバッチリ。入場式で選手たちの国旗を掲げたり、引退セレモニーの最後に登場したりと演出の一端を担っていた子どもたちだけでなく、スタンド席にもたくさん陣取っていて、吉田道場の選手が出場すると「○○先生、ガンバレ〜」と大声援を送っていた。

　もちろん、格闘技ファンとおぼしき客層も普通にいたし、ゲスト関連の絡みだろう、モデル業界ふうなオネエチャンたち（魔裟斗女とも微妙に違う）も意外にいたし、「ザ・柔道部！」と言いたくなるような屈強な方々もやっぱりいたのだが、MMAイベントの会場でこんなに子どもがいるというのはあまり記憶にない。この興行ならではの光景だろう。

　メイン前に腹が下って（笑）トイレに行ったんだが、外から子どもたちのこんな会話が聞こえてきた（作りナシ）。

「吉田先生に勝ってほしいよね〜。最後だからね」

「魔裟斗みたいにね。ずっと負けてた相手に勝ったんだよ。カッコいいよね〜！」

　そこに「ほら、吉田先生の試合に遅れるぞ！」という大人の声がかぶさって会話は終了。個室の中だったので彼らの姿は見えなかったが、柔道着姿だったに違いない。そう、この日の特徴は「魔裟斗女」ならぬ「吉田キッズ」だったのである！

　これはじつにいいことだ。小・中学生がMMAに触れることでファン層の掘り起こしができるし、集客的に見てもメリット大。グループやカップルで来る女性ファンがありがたいのと同様、キッズたちは親、引率者と一緒じゃないと来られないからだ。おそるべし、吉田道場！

　さて、この日の大会。オープニングファイトが終了するとまず、ビジョンでスポンサーであるHIS、DHCのCMが流される。スポンサー企業のCMはもう珍しいことではないが、誰もが知ってる有名企業が続くのはメジャー感があってデカい。そして吉田の業績を紹介するオープニ

ングVが流されると、いきなりステージで生ライブが始まった。

これがなんのアナウンスもなく始まって終わったので呆気にとられてたんだが、元SIAM SHADEのボーカル、栄喜（ひでき）のバンドによる吉田のテーマ曲だったとわかって納得。うーん、吉田のテーマ曲ってもう一つ強い印象を残せなかった気がする……。

このオープニングの時点で30分ほど押していたのでどうなることかと思っていたんだが、このあとの進行はほぼ問題なかったように思う。まあよく考えてみれば、『戦極』2年間のノウハウの積み重ねもあるわけだし、音楽など他ジャンルのイベントも手がけてるわけだから、そこは心配などよけいなお世話だったわけだ。逆に引退セレモニーまで含めて多種多彩なゲストが次々に登場するのを、うまくさばけていたようにすら思う。〝ズンドコ〟イベント好きには期待はずれだったか（笑）。

そのゲストだが、ウワサに違わぬラインナップ！　入場式で一番声援を集めていたのはもちろん吉田秀彦だったが、ゲストが映像やリアルで登場すると、そのたびにそれに劣らぬほどの盛り上がりがあった。

何しろ、映像メッセージが桜庭和志（のちに本人も登場）、石井慧、鈴木亜久里、北島康介、ヴァンダレイ・シウバ。このラインナップだけでもバラエティ、知名度ともにスゲエ！

「船木誠勝引退興行」と比べると今回のイベントがいかに幸せか

さらに休憩明けにサプライズ予告されていた「海外からの超大物格闘家」、エメリヤーエンコ・ヒョードルがリングに上がると、割れんばかりの大歓声が起きた。

そうそう、この日の演出の〝裏テーマ〟は「PRIDE」だった。大会開始を告げたのは村上ショージだったし（アナウンスされないところまで踏襲）、煽りVの中では吉田のPRIDEでの試合映像も流された（権利関係はどうなっているのか？）。桜庭、シウバ、ヒョードルという顔触れもPRIDEファンにはたまらなかったことだろう。それこそどこかで「ダン！ダン！ダダン！」が聞こえてくるのではないかとまで思ってしまった。「総合格闘家・吉田秀彦」がPRIDEで育ったことは間違いなく、それをさりげなく押さえた演出だった。


吉田は最後のセレモニーで吉田道場の子どもたちと並んで挨拶。吉田道場の数は現在7つ、競技人口の普及に大きく貢献しているのだ。「おまえは子どもたちを裏切った!」と言われる誰かさんとは大違い?

さらに豪華ゲストは続く！　メインの吉田引退興行ではリングアナをつんく♂が務め（なぜか彼もアナウンスされなかったが……）、国歌独唱はASKA。「チャゲアス登場か」と報じた某サイト（not小田美代）は半分あたってたわけだ。さらにJ−ROCKつながりで登場がウワサされていた「美人すぎる市議」藤川ゆりに、ネプチューン名倉潤が花束贈呈。リングには上がらなかったものの、試合中には吉田の先輩にあたる古賀稔彦もビジョンに映されていた。

試合後の引退セレモニーでは〝あのテーマ曲〟に乗って桜庭和志が現われ、さらに藤田和之、田村潔司、ミノワマン、光岡映二がリングへ。出場選手たち、そして最後に招かれた吉田の両親とともに記念撮影に収まった。ゲストも含めたラインナップという点では、過去最高のボリュームを誇る引退イベントだったと言っても過言ではないのではないか？

記念撮影を終えてリングをあとにし、入場ゲートのステージに立った吉田は、あらためて最後の挨拶。そしてその口から最後に放たれたのは、「國保尊弘最高！」の言葉だった。

ま、なぜ柔道家が「○○最高！」と言いたがるのかはべつとして（そういや柔道家じゃないけど、「魔裟斗最高！」ってのもありましたな。これは引退つながりか）、確かに今回のイベントはすべてが「國保尊弘ワールド」だったように思う。前述のように『戦極』そのほかのイベントのノウハウを結集し、有名企業が集まったスポンサーへの営業にも國保氏と吉田本人の築き上げてきた人脈がフルに生かされたことだろう。

さらに今大会の出場選手たちとマッチメイク、映像を含めた格闘家ゲストたちは、ほかの多くのイベントが協力したからこそ実現したものだし、有名人が多数集まった芸能関係のゲストも國保氏の強みが発揮されたものだった。こう考えていくと、このイベントにどれだけ「総力」が結集されていたかがわかろうというものだ。

そもそも柔道金メダリストで総合でも大車輪の活躍を見せた吉田の引退というだけで充分、話題性はありそうなものだが、それを「最高」のものにするために、「これでもか〜！これでもか〜！」と髙田総統ばりのダメ押しを重ねていったあたりに、國保氏の執念を見た気がする。

あ、ここまで書いて唐突に2000年12月、ところも同じ日本武道館で行なわれた「船木誠勝引退興行」を思い出した。もちろん主催はパンクラスだったが、あのときは「船木のためにもうちょっと客を入れる努力をしろよ！」と思わず憤ってしまうほど、悲しい入りだった……。そこから考えても、今回の引退イベントがいかに幸せなものだったかがわかるというもの。

挨拶のなかで「これからもこの『ASTRA』を応援していってください」と、イベント継続を匂わせる発言をした吉田。國保氏は「今後は白紙」としたようだが、吉田キッズ、運営ノウハウ、各方面へのルートという「國保コンボ」を考えると、どう考えても〝次〟はありそうな気がする。そう、可能性はゼロではないのである！（お約束）。

ようこそ！イッツ・ア・國保ワールドへ!!


その幅広い交友録を物語るように会場には多くの花束が!　木梨憲武、華原朋美、大黒摩季と芸能関係が多いのも目についた。もちろん「GACKT〜!」でおなじみのGACKTさんからも!


オープニングに登場したのは『1/3の純情な感情』が有名な元SIAM SHADEの栄喜。しかしあまりに唐突な登場だったため、いったい誰なのか場内にいた人たちの3分の1にも伝わらなかったかもしれない。


出た!　國保代表が政治以外でのサポートを発表していた"美人すぎる市議"藤川ゆり女史!　その名前がアナウンスされると場内は重低音ストンピングに包まれたのだった（やや誇張）。



最後の吉田の言葉に対して「個人的には非常にうれしいんですが、複雑な心境ですね」と語った國保代表。その表情はまるでDHCの化粧品を使用しているかのように、晴れ晴れとしたものであった。

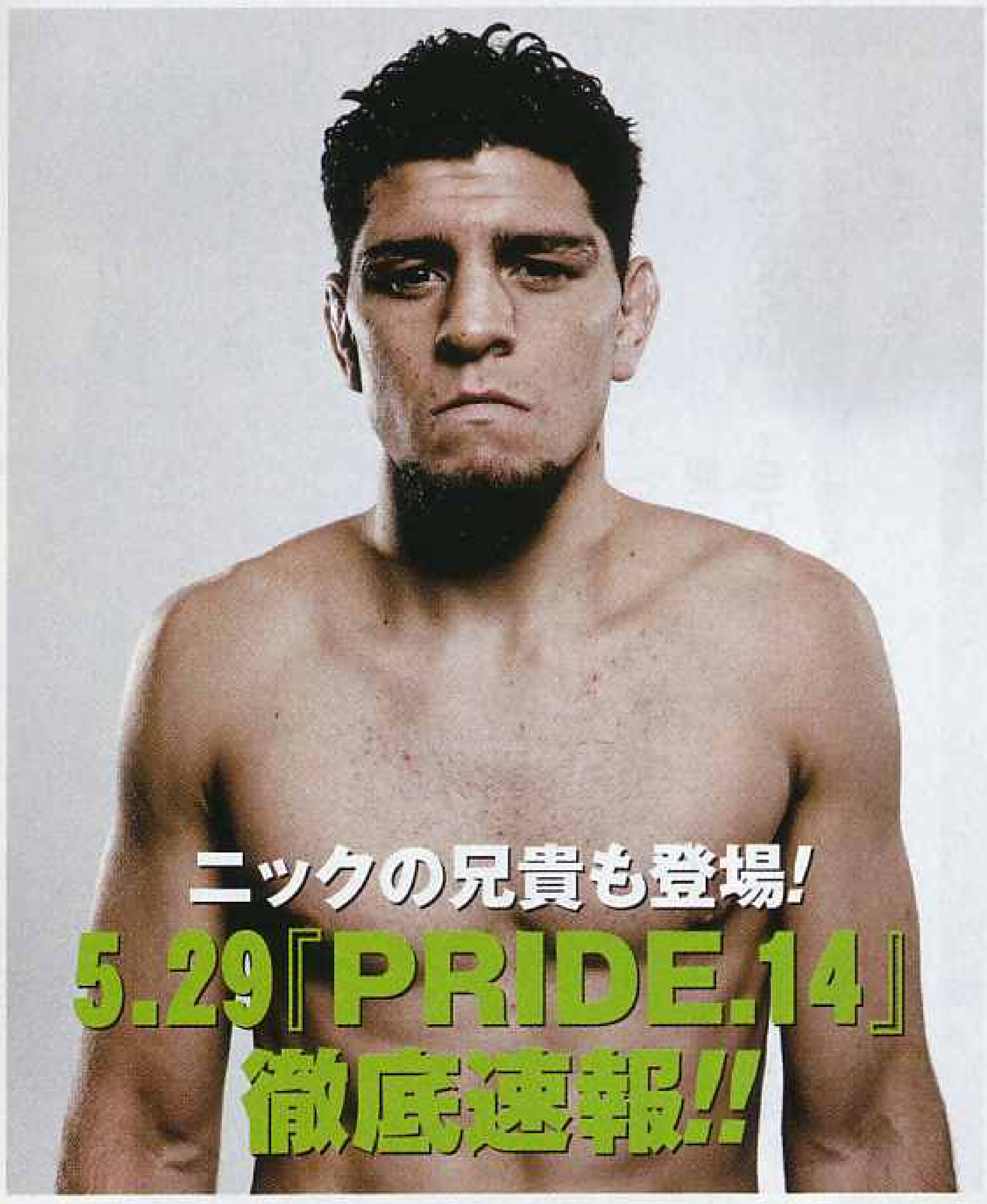
kamipro Move カミプロムーブ

サービス利用料　月額315円(税込)

アクセス方法

iモード	iメニュー	メニューリスト	スポーツ	格闘技/大相撲
EZweb	EZトップメニュー	スポーツ・レジャー	格闘技	
Yahoo!ケータイ	メニューリスト	スポーツ	格闘技	

主要3キャリア全端末対応(※端末により一部非対応コンテンツあり)



今春から大幅リニューアル!!

月 高崎計三の『kamiのワイドショー』
その週に話題になった人物や事件を追う格闘ワイドショー。ライターは個人情報流出事件の被害に遭った高崎計三だ!!

火 金沢"GK"克彦の『こちらプロレス村役場』
『kamiproドットコム』大人気連載が携帯サイトに帰ってきた!! その週のプロレス界を元『週刊ゴング』編集長が斬る!!

水 橋本宗洋の『格闘裏グルメ』
ツイッターでも絶賛つぶやき中の重量級ライター・橋本宗洋がその週の格闘技界の見どころを鋭くえぐってズバリ解説!!

木 高橋ターヤンの『This Week MMA』
最先端と言われる北米MMAを中心に、日本の目線で読み解きます!! 海の向こうの気になる話題を掘り下げてます!!

金 柳澤健の『1993年の女子プロレス外伝』
『kamipro』本誌と連動する柳澤健の女子プロレス連続インタビュー企画で、誌面には掲載されなかった話をお蔵出し!!

土 大川義之の『韓流MMAニュース』
日本のお隣でMMAの強豪選手を多く輩出している韓国の最新情報や話題になった記事などをいち早くご紹介してます!!

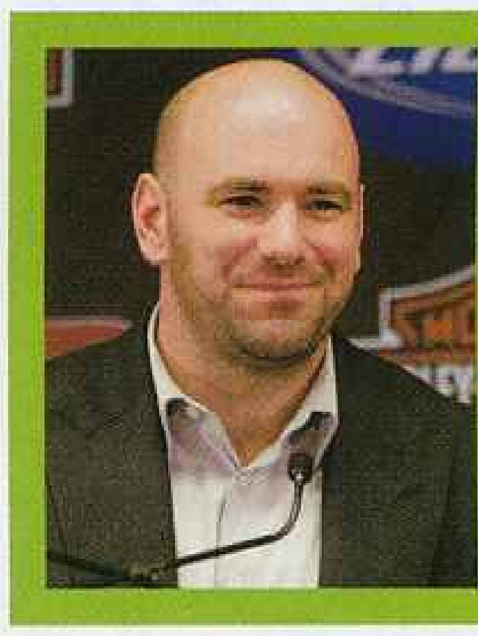
日 ニュース特選『kamiの一週間』
その週に起こった出来事をヨタ話で振り返るいろんな意味で反響が大きい爆弾企画。これを読まずにマット界は語れない!?



バカサバイバーが気まぐれに更新!
『週刊!? ワオ木真也』
"DREAMの大黒柱"青木真也が最低でも週1回、勝手気ままに書きまくる不定期更新コラム。常に反響がデカいです!!



"足関十段"の静かなる日々
『今成正和 足関な日々』
何を食べ、誰と練習し、何をしたのか。ただそれだけなのに、子育て中の親御さんを中心に静かな感動を呼び続けている日刊ブログ!



北米MMAの最新情報を毎日お届け!
『日刊ワールド MMA』
世界は常に動いている! というわけで、北米MMAの最新情報を、大人気ブロガー・ジーニアスさんに毎日届けてもらってます!

eb! enterbrain

おかげさまで10周年 エンターブレイン　ANNIVERSARY 10th

株式会社エンターブレイン
〒102-8431 東京都千代田区三番町6-1 TEL.0570-060-555(代表)
[エンターブレイン総合サイト] http://www.enterbrain.co.jp/

プロレス&MMAの総合WEBサイト
kamipro.com カミプロドットコム
MMA & PRO-WRESTLING MAGAZINE

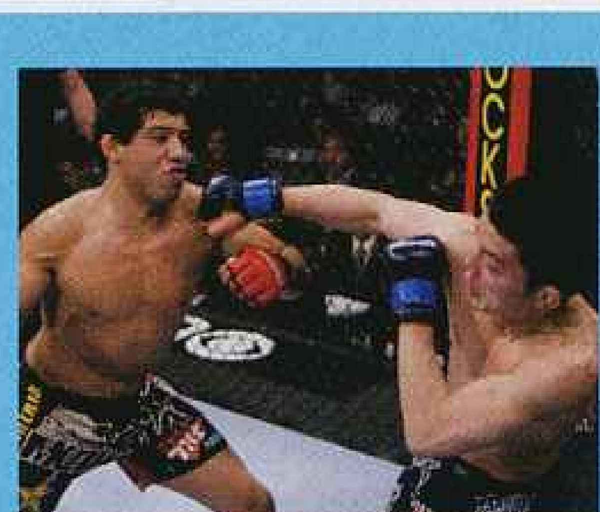
レッツ毎日アクセス
http://www.kamipro.com/

無料です!





ニュース
カード発表や重大発表など、規模の大小にかかわらず記者会見の模様を素早くお伝えします。最新情報はここで読もう!!



試合速報
注目の試合の内容をいち早く速報します。試合の写真はもちろん、試合後のコメントなども細かくレポート!! 生観戦後も必読ですよ。



最新号情報
次号の表紙は? 内容は? そんな疑問にいち早くお答えします。雑誌『kamipro』およびkamipro booksシリーズの発売情報はこちらで!!

「リングは足がつるから無理」な読者プレゼント

kamipro PRESENTS

応募要項

ハガキに応募券を貼り、①〜⑧の質問の答えをご明記のうえ、下記の宛先まで郵送してください。応募多数の場合はそれぞれ抽選で決定いたします。ただし、雑誌公正競争規約の定めにより、懸賞に当選された方は、この号の他の懸賞に当選できない場合がありますのでご了承ください。なお、当選者の発表は発送をもって代えさせていただきます（商品は2010年6月26日（土）頃発送予定です）。

【質問事項】①郵便番号・住所・電話番号②氏名③年齢・職業④希望賞品⑤おもしろかった記事&その理由⑥つまらなかった記事&その理由⑦DREAMvsストライクフォースで観たいカードは?⑧あなたがkamiproに望むことは?

【宛先】〒162-0805
東京都新宿区矢来町41-1 ザ・フタガミハウスNo.1
（株）ツー・スリー内『kamipro』編集部
「罰ッスル罰ッスル!」係まで

※応募締切は2010年6月12日（土）当日消印有効

PRESENT*01

1名様



ポスター UWFインターナショナル「格闘技世界一決定戦」

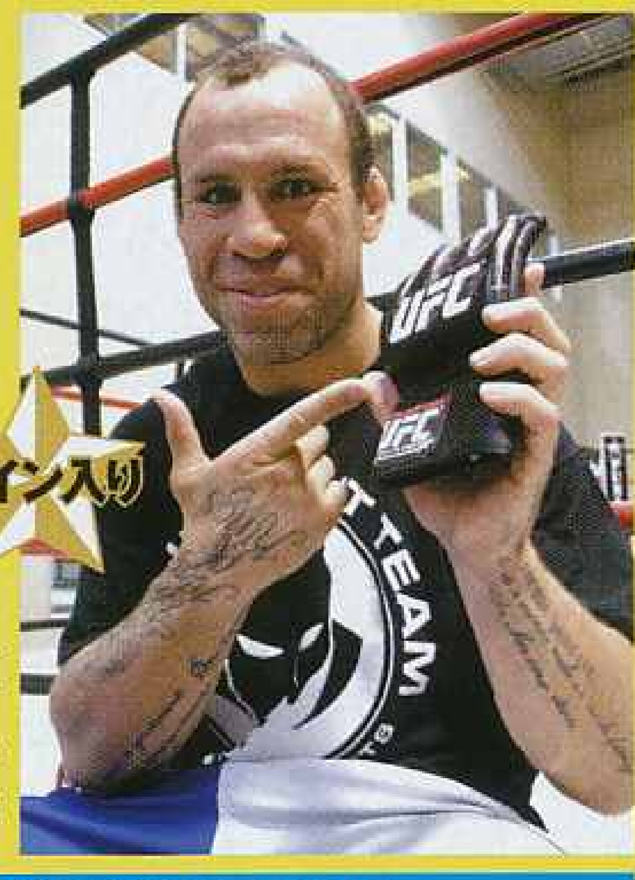
［闘道館］

プロレスグッズでおなじみの闘道館が今回提供してくれたのは、高田のキャッチフレーズが「最強」になったきっかけともいえる一戦、vsバービック戦のポスター!

闘道館■http://www.toudoukan.com/

PRESENT*02

1名様



ヴァンダレイ・シウバ サイン入り UFC グローブ

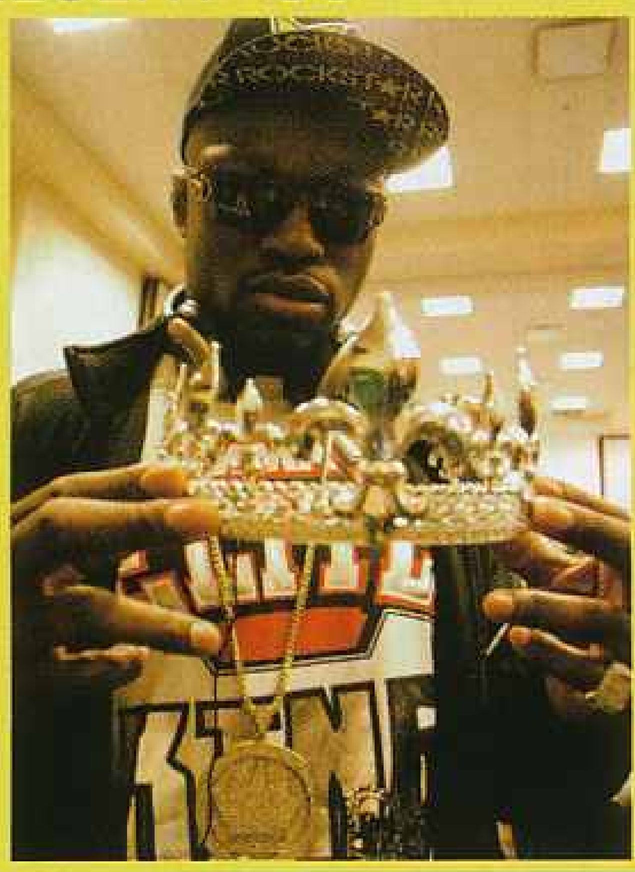
［非売品］

これは超レア!　UFCのオフィシャルグローブだけでも凄いのに、な、な、な〜んとあのヴァンダレイのサイン入り!　これは北米野郎には家宝ものだ!

UFC■http://www.ufcjapan.jp/

PRESENT*03

1名様



キング・モーの王冠

［非売品］

これまた超レア!　キング・モーが4.17ストライクフォースの入場で実際に身に着けていた王冠を気前よく提供してくれちゃいました!

PRESENT*04

1名様



ストライクフォース・ナッシュビル大会Tシャツ

［ストライクフォース］

青木真也の出場で注目を集めた4.17ストライクフォースの記念Tシャツ。バックには3大タイトルマッチの試合カードをプリント!　サイズはM。

ストライクフォース■http://www.strikeforce.com/

PRESENT*05

1名様



MIKU引退記念Tシャツ WHITE

［リバーサル／¥5,040（税込）］

4.17 DEEPで惜しまれながら引退した女子格闘家、MIKUの記念Tシャツ。バックにはその歴戦の軌跡をプリント!　サイズはM。

リバーサル■http://www.rvddw.com/

PRESENT*06

1名様



日菜太直筆サイン色紙

［非売品］

サダハルンバも「今後のMAXを担う存在」とお墨つきの日菜太のサイン色紙!　その好青年な風貌にお母様方の人気も急上昇中!?

湘南格闘クラブ■http://skc.cool.ne.jp/

PRESENT*07

1名様



中島弘貴サイン入り K-1 MAX パンフレット

［非売品］

K-1 MAX日本トーナメント準優勝の"和製ヴァンダレイ"こと中島の直筆サイン入り!　なんとも初々しいサインがこれからのポテンシャルを感じさせます!

バンゲリングベイ■http://www.bungelingbay.com/

PRESENT*08

1名様



BEST WRESTLERS FOREVER ラグランシャツ

［ハードコアチョコレート／¥4,725（税込）］

バックランドにテーズにゴディなど総勢17名!　古きよきアメリカンプロレスを彩った名レスラーたちがインパクト大なラグランシャツ!　サイズはM。

ハードコアチョコレート■http://blog.core-choco.com/

PRESENT*09

1名様



スーパータイガーTシャツ WHITE

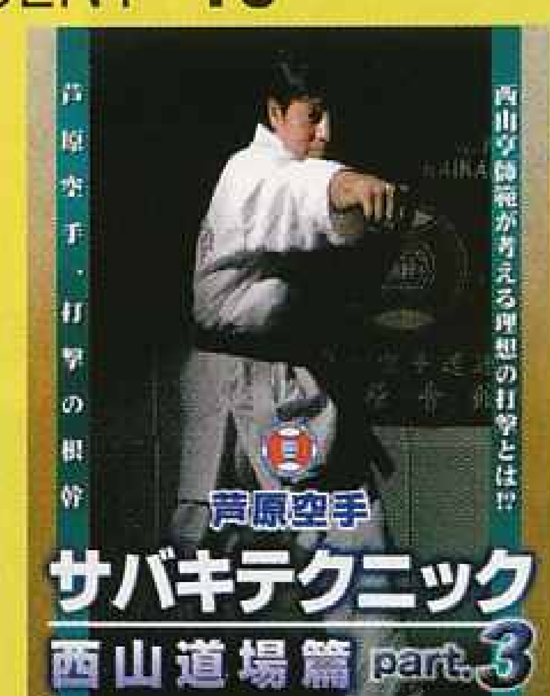
［NO NEED NEW／¥3,675（税込）］

リアルジャパンプロレスで活躍中のスーパータイガーとのコラボT!　右袖にリアルジャパン、左袖と背中にNNNのロゴをプリント。サイズはL。

NO NEED NEW■http://www.no-need-new.com/

PRESENT*10

1名様



DVD 芦原空手『サバキテクニック西山道場篇part.3』

［クエスト／¥5,880（税込）］

理想的な打撃を徹底追求!　積極的な試合出場で、数々の実績を残してきた芦原會館西山道場の強さの秘密があきらかになる1本!

PRESENT*11

1名様



DVD プロレス・スーパースター列伝『ワフー・マクダニエル&ロニー・ガービン』

［クエスト／¥5,040（税込）］

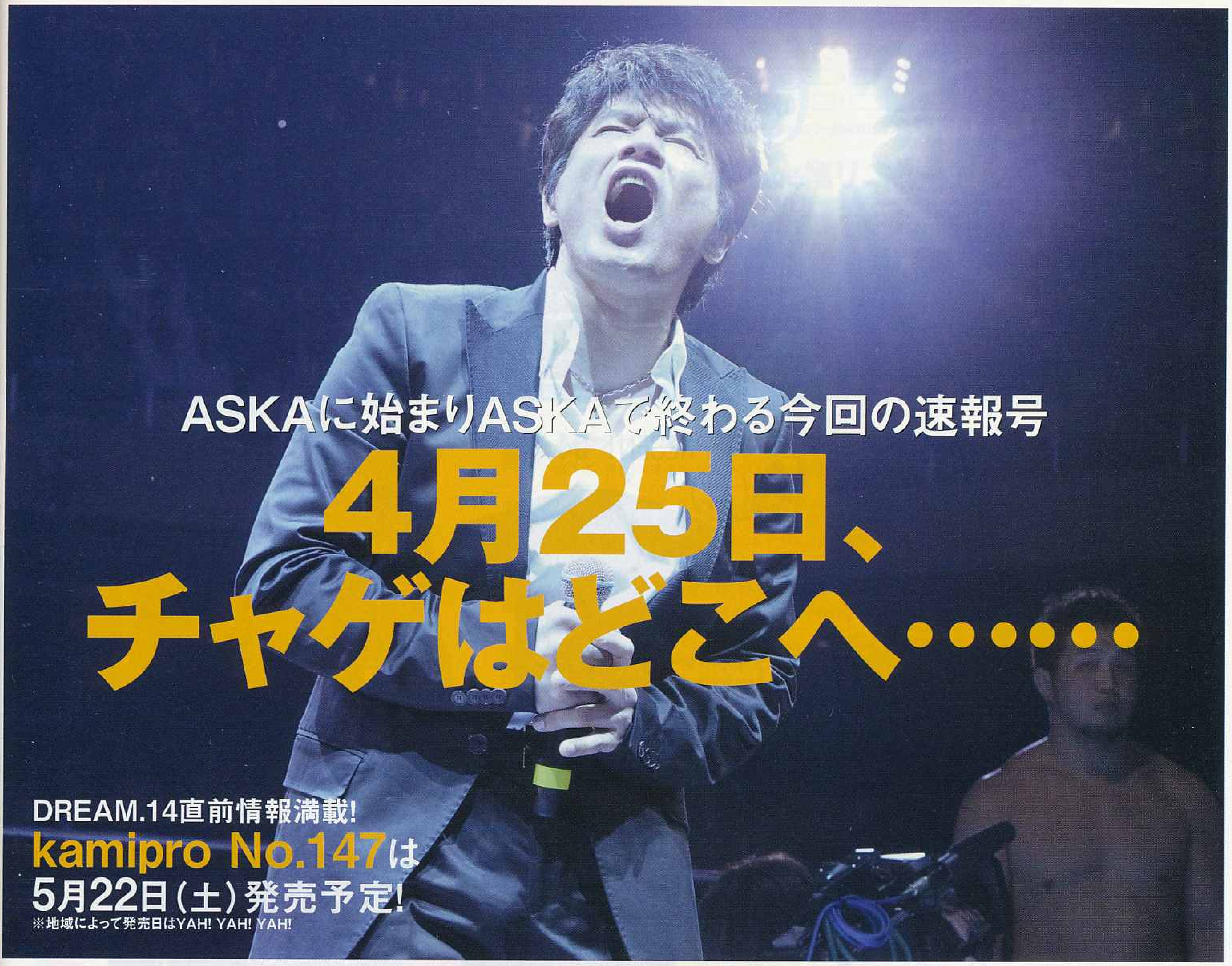
往年の名レスラーの名勝負やインタビューなどで構成されたファン感涙のドキュメント。第7弾はワフー・マクダニエルとロニー・ガービンだ!　激シブ!

クエスト■http://www.queststation.com/

kamipro SP 応募券 國保最高!

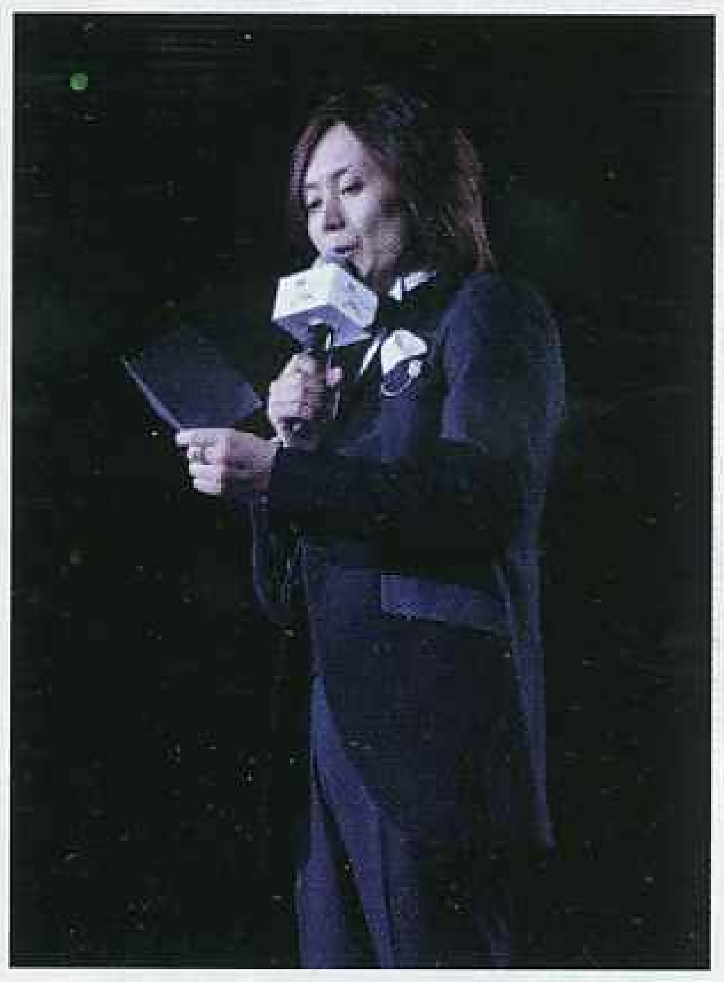
ちぎって持ってっちゃダメだぞ!!

こちらでも毎週プレゼント実施中!!　http://kamipro.com/



MMA & PRO-WRESTLING MAGAZINE
kamipro Special
2010 JUNE
2010年5月21日 発行

バイバイありがと〜、さようなら〜♪



発行人
浜村弘一

編集人
斉藤慎一
青柳昌行

編集統括本部長
ジャン斉藤

編集スタッフ
堀江ガンツ
松下ミワ
スズキィ
八木賢太郎(タケノコ掘りのため非番)

終身名誉バイザー
吉田 豪

助っ人
ジャイ子

編集次長(ダイワバーバリアン!?)
松林 貴

■広告掲載のお問い合わせは下記まで
株式会社エンターブレイン
スポーツ企画編集部
☎03-3265-7166

デザインGM
出田さん(TwoThree)

デザイニングマネージャー
金井ヒサくん(TwoThree)

デザイン
松坂マツくん
廣田ブンちゃん
野口ノグッチー
鐘田やっちゃん(以上、TwoThree)

カメラマン
乾 晋也
菊池茂夫
平工幸雄
山口比佐夫
吉場正和
平 専英
戸成嘉則
タイコウクニヨシ
梅木麗子
丸山剛史
金山フヒト

屋根より低い
入江のぼり(TwoThree)

雑誌営業
堂前秀隆
中村宣忠

業務部
樽本"単価交渉"義之

編集庶務
原 正典
山内ユリコ

編集チアガール
金川"ナツコ"奈津子
安部"クリン"悠子

ツツジ山マダム
廣橋久美子

発行所
株式会社エンターブレイン
〒102-8431 東京都千代田区三番町6-1
☎0570-060-555(代表)

発売元
株式会社角川グループパブリッシング
〒102-8177東京都千代田区富士見2-13-3

印刷
大日本印刷株式会社

協力
BUSHIDO KOVOTOJO KELIAS
FightSport

本書の内容、不良品交換等についてのお問い合わせは下記の窓口までお願いいたします。なお、内容につきましては記載以上の詳細につきましてはお答えできませんので、あらかじめご了承ください。

[カスタマーサポート]☎0570-060-555(受付時間/土日祝祭日を除く 12:00〜17:00)　メールアドレス support@ml.enterbrain.co.jp

●個人情報の取り扱いについて
本書にお寄せいただいたハガキ、各種のお問い合わせに関連してご提供いただいた個人情報につきましては株式会社ダブルクロス、および株式会社エンターブレイン(URL:http://www.enterbrain.co.jp/)、それぞれのプライバシー・ポリシーの定めるところにより、取り扱わせていただきます。

kamipro Special 2010 JUNE

日本格闘技界はどこへ行く……!?
それでも生きろ!!

2010年5月21日
発行人／浜村弘一　編集人／斉藤慎一、青柳昌行
発行所／株式会社エンターブレイン　〒102-8431 東京都千代田区三番町6-1 ☎0570-060-555(代表)
発売元／株式会社角川グループパブリッシング　〒102-8177 東京都千代田区富士見2-13-3

9784047266063

定価: 本体838円 +税
雑誌61971-88 Ⓗ2011.06

ISBN978-4-04-726606-3
C9476 ¥838E

1929476008381

Printed in Japan 大日本印刷株式会社

enterbrain